山岳

第二十七年
第三號

岳山

第二十七年
第三號

目次

（第二十七年第三號　昭和七年十二月）

扉（クロユリ）　石崎光瑤

本欄

秩父の山村と山路と山小屋と　大島亮吉　一頁
秀姑巒山脈　――紀行と覺え書――　鹿野忠雄　四五
八雲ヶ原水蘚濕原に就て　山崎次男　一二六
北海道の山の動物　犬飼哲夫　一三九

雜錄

シュクサン峰に登る　東良三　一五〇
冬の笠ヶ岳　島田武時　一五九
北海道の熊の話　伊藤秀五郎　一六四
谷川岳東南山腹に於ける岩面削痕に就て　額田敏　一七二
北米大陸の高峰　東良三　一七五

一九三二年版「山日記」編輯報告　角田吉夫　一七七

遭難顚末概報

常念岳遭難報告　一八一
會津朝日岳遭難報告　一八三

新刊圖書紹介

山岳形に關する二三の問題（岡山俊雄）　伊藤秀五郎　一九五
アルプス傳說集（山上雷鳥譯著）　藤島敏男　一九七

會報

會務報告（一九八）第五十六回小集會記事（二〇一）新入會員紹介其他會員動靜（二〇二）圖書基金報告（二〇三）
日本山岳會々則（二〇四）前號正誤（二〇七）『山岳』投稿規定（二〇九）

圖版

大水窟より見たる新高山彙　鹿野忠雄　對頁八四
マボラスと秀姑巒山　同　一〇四
秀姑巒山脈東郡大山塊憶測圖　同　一二四

北部濕原中の池の景　山崎次男　一二八
濕原中を流れる小溪流とスギ　同　一二八
池のジュンサイ　武田久吉　一二九
池のチヒルムシロ　山崎次男　一二九
ススキの根元を埋没せるミヅゴケ　同　一三二
アカマツの根元を埋没せるミヅゴケ　同　一三二
濕原の緣に近く生へた大きなスギ　武田久吉　一三三
濕原の邊緣に於てミヅゴケによつて埋沒せられたるスギの伏條枝　山崎次男　一三三
濕原に生育するスギ　同　一三六
スギの根元に堆く盛り上つたミヅゴケ　同　一三六
濕原に生へたイヌツゲ　武田久吉　一三七
同　（背面）　同　一三七
捕獲された鼈（春）　一四二
同　（夏）　一四三
シュクサン峰遠景　Bert Huntoon　一五〇
レーキ・アンに於ける吾等のキャンプ　東良三　一五四
ヘーザー・メドウより眺めたるシュクサン峰　Ben Thompson　一五八
谷川岳への西黑澤よりの登路に於ける岩面削痕　額田敏　一七四

挿圖

秀姑巒山脈に於ける四社氏族狩獵區域分布圖（一二三）
八雲ヶ原水蘚濕原の位置（一二八）
クッドラート調査二（一三五）
熊に掘り起された草原（一四二）
ナキウサギ（一四六）
岩の間のナキウサギの食物貯藏所（一四八）
町田氏遭難地附近略圖（一九二）
花崗岩地に自生せるスギと崩壞せる山腹の一部（一二七）
クッドラート調査一（一三二）
雪の上に印された熊の足跡（一四一）
ナナカマドの實を食つた熊の糞（一四三）
ナキウサギの糞（一四七）
町田氏捜索隊通過路略圖（一四八）

附錄

「山岳」第二十七年總目次　佐々保雄編
千島列島關係文獻表　坂本直行
カット

秩父の山村と山路と山小屋と

――この「善き日本の山」のために――

大島亮吉

本遺稿に就て

（木暮理太郎）

大正十四年の春であつたと思ふ、郡村誌の多摩郡の山川の記事を抄出して置いたものが發見されたので、之を附録として秩父號第二を發行することを計畫したものゝ、相變らずの原稿難に惱んでゐると、槇君から話があつて、塾の大島君はよく秩父方面に出懸けてゐるから、何か書くやうに頼みませうとのことであつた。其頃私は大島君とは、いつか皆香園での小集會の歸り際に「私は大島です」と挨拶されて暫く立ち話をしたことがあつたのみ、未だ知り合ひといふ程ではなかつたので、喜んで槇君にお願ひして置いた。

其後十日程も過ぎた或日の夕方日比谷公園附近を散歩中、軍服姿の人に擧手の禮をされたので、吃驚してよく視ると夫は大島君であつた。早速寄稿の承諾を得たお禮を述べて、秩父號の話をしてゐるうち、つい山の方に話がそれて、立つた儘一時間近く喋つてしまつた。其時秩父の山から受ける感じは、何といつても女性的で且情緒的であるといふことに意見が一致したので、特に話が彈んだのであつた。

かくて一ケ月ばかり經つて、約束の如く大島君から原稿が屆いた、卽ち本號所載のものがそれである。これには手紙が添えてあつた。入營中のことで、手元に地圖も參考書もないから、記錄的のものは書けない、こんな抽象的のものでも、よろしかつたら載せて頂きたいといふ意味のものであつたと記憶してゐる。勿論私は結構であるから掲載する旨を返事し

た。すると一週間ばかり過ぎて又、實際先生はあれを山岳に掲載する價値のあるものと思つてゐますかといふやうな手紙を受取つた。それに對して私は、山岳に掲載する記文だからとて、地圖を離れたものであつてはいけないといふ譯のものではないし、地圖と首引せずとも能く山を解し山を味ひ山を樂しむことを敎へるやうなものは、自分には書けないが、最も自分の好む所であるといふやうな、大島君が百も承知してゐる返事を出したやうに覺えてゐる。

最初の豫定では秩父號第二はその年の十一月に發行することになつてゐたが、まだ原稿が不足なので、其月になつても發行の運びに至らなかつた。すると大島君から又手紙で、あの原稿は絕對に廢棄して頂きたい、其代りとして小倉山のことを書いて送りますと申越された。これは恐らく後半の感想の記事の中に意に滿たぬ個所があつた爲か、或は筆を驅り過ぎたと自ら思意する個所があつた爲ではなかつたかとも竊に想ふたのである。私としても亦前半を讀んで何となく面ほてりのする不安な心地がせぬでもなかつたので、惜しいけれども大島君の意に從つて掲載せぬことに決したが、其原稿は紀念の意味で私が貰ひ受けて、筐底に什襲してゐたのであつた。此時の手紙は一括して原稿と共に保存して置いた筈であつたのに、移轉の際などに紛失したものであらう、幾度か探しても終に見當らないので、この顚末を覺束ない記憶を辿つて記述するより外に方法がないのを甚だ遺憾に思ふ。

小倉山の記文を得たことはしかし嬉しかつた。此山に始めて目をつけたのは、私の知つてゐる限りでは友人中村清太郎君で茂來山と共に早くから所謂狙つてゐた山であつた。私達は秩父へ足を入れる毎にいつも想ひ起すのであつたが、他に登る可き多くの山があつた爲に、積年の望を容易に果せなかつた憾も、この記文を得て一掃された感があつた。最近發行の十石峠圖幅に、小倉山は御座山（オグラ）と正しく改訂されてゐるのも、大島君のこの記事が與つて力あるものと信ぜざるを得ない。

秩父號第二で初めて本誌上に發表されたものになほ瑞牆山がある、その原稿には次の手紙が添えてあつた。

前略。先頃は甚だ御手數を煩はした事を謝します。先生の御話では長く書けとのことでありましたが、下らぬ事を無理に長く書く事も出來ませんので、「小倉山」はあれだけで失禮しました。其後秩父へ參りました。瑞牆山へ行きました。それで今日簡單に書きました。餘計な事もあります。まだ二度しか行かないのに書くのも變ですが、餘り秩父號、

の稿のない樣な御言葉なので、自らを知らざる樣ですが、又載せてもいゝ樣な氣になつて書きました。若し他のお方の同山に對する稿あらば絶對に御棄ての程を願ひます。又間に合はぬとも豫想して居ります。間に合はなくば御棄て下さい。私はたゞ『秩父號』のためにのみ書きましたのでございますから。十年前の『第一秩父號』を讀んで私の受けた抽象的に見たる「文獻」なるものゝ恩惠への小なる奉仕の考へで書きましたのでございますから。恐らく間に合はぬ事と思ひましたが、急いでお送り致す次第でございます。六月二日破風へ粉雪三寸を踏んで登りました。六月二日秩父で二〇〇〇m以上は雪が降りました。雷雨性の特殊な氣象現象らしいのです。でも意外で驚きました。右用件のみ。

（稿は若し掲載される際は勿論雜錄欄へお願致します）。

大島君の原稿には、若し他に同樣の記事があれば同君の稿は絶對に廢棄すること、又掲載する際には後欄に願ひたい、と必ず指定してある。二十一年一號所載の「本邦に於ける雪崩の方言」の如きも、私は本欄に載せたいものと思つたのであつたが、雜錄欄と筆太に記されてゐるのを見ては、力なく之に從はざるを得なかつた。

昭和三年の三月十日に溜池の三會堂で開催した小集會は、私が大島君と面晤した最後であつた。此時の話は奥上州の山を主としたもので、私が第二の奥上州號を秩父號第二と同樣に、纔に燒け殘つた郡村誌から利根吾妻二郡の山川に關する簡略なる記事を抄出し、之を附錄として發行したい希望があると述べた所、大島君は仲間の原稿を纏めてお送りしませうと約束された。そして別れ際に莞爾やかな笑顔を一層嬉しさうに輝かして、自分は當分學校に留るやうになつた、それで山岳會に入會したいから申込用紙を送つて頂き度いと言はれた。私は喜んで歸ると直に申込用紙を送ると同時に、次の幹事會の日を通知したのであつた。夫に對する同君の返書を次に掲げる。

入會申込書御送り下さいまして有難く存じました、矢張り先輩友人の紹介を以て入會致し度いと存じ居りますが横さんは臺灣より今月末歸られますので其上にしたいと存じます、其故四月八日の幹事會迄間に合ふと思ひますが、小生は丁度其頃迄旅行すると存じますから、或はもつと遲くなるかも知れません。何れにしても先生の御指導を蒙り度いと存じます。原稿の儀は第二奥上州號へは後に何か少しばかり載せて頂くかも存じませんが、何分今年よりは少し時

間がなくなりましたので、どうなるかわかりません、簡單な記録だけにして頂くつもりです。

追伸。北大林學部在學中の友人山井基福君と協力して、北南兩會津郡に於る木地師のことを資料だけ集めにかゝりましたが古いことは兩人共不得意なので、たゞあの一族の御緣記と稱するものだけは寫しを獅兵四郎村で採集し、又現在に於ける經濟生活の二三を知りましたが、到底兩人の手ではものにならぬので、若し先生の手にて御利用下さるれば結構に存じます、山井君は林學の方の必要上調べられたのですが、小生は全然好奇心だけです。小生は主として南會津郡の方を受持つて、一昨夏と昨夏の二回同郡を旅行しましたが、あまり良い結果なく、現在では放棄して居ますが、御見聞廣き先生の御指導に依つて少し先が開ければ尙續けたいと思ひます、フォクロア的の惡趣味ですが。

奥上州での記錄として最近の記錄に見當らぬものらしいのは左の通りですが、見聞狹き小生のこと故或はそうでないかも知れませぬ。武尊藤原側（十月）、谷川岳一ノ倉岳間東側登路（五月、七月）、惠比壽大黑を笹穴川上流より（九月）で、谷川の例の岩崖は二筋ばかり谷は登れましたが、あとはあまり急で途中でホントウに下を見て恐しくなり、這々の態で下りましたあんな所を登つては亂暴でせうか。

これは三月十五日に受取つたものであるが、同君は恐らく出發の準備で今は忙しいであらう、歸京した頃を見計らつて木地師に關する資料を一見したいものだと思つてゐた。が神ならで誰か知らう、十日の後には君は既に白玉樓中の人であらうとは。

其後四年の歲月は過ぎた。よせばいゝのに、默つてゐればいゝのに、ふとすべらした私の一言は「あの原稿」をして本誌上に掲載されるの餘儀なきに至らしめたのみか、累を私信にまで及ぼす羽目に陷らしめた。それが今も尙ほ君の意に背いてゐるならば、私が故人に負ふ罪は輕くない。唯しかし、私は「心ならずも」と自ら言ひ譯しつゝこの文を草してゐる私を、憐むやうに見下ろしてゐる君の笑顔をちらと見たやうな氣がしてならないのである。

1

わたくしはいまこの古い山脈とその地形のことをはっきりとおもひだしてゐる。そしてまたそこの山風（やまかぜ）が、苔

むした樹々をふきゆするやうな深林のなかのさまよひ歩きのことや、そこの風と雲、そこの春と夏と秋とのふしぎな、うつくしい季節のうつりかはりをおもひふけってゐる。するとそれだけでも、もうどこか、わたくしのなかにはふだんよりももっとのろい時計があり、そこの風やら深山の樹々の匂ひやら、または谿の流れの音やらがこの身にしみついてゐるらしいやうに感じられる。それほどこの日本の古いひとつの山脈はわたくし自身にとっても親しまれやすく、またそれだけになつかしいものである。これは敢へてわたくしのみではなく、わたくし以外の誰れでもこの大都に常に居をもつ山を愛するひとびとにとっても、たしかにこの古い山脈はひとつの立派な、ねうちのあるハイマートベルゲたるを失はないであらう。

わたくしにはオログラフィックにみての厳正なこの古い山脈の範圍はたしかに知らないが、この大都からもっとも距離に於て近く、かつ比較的に高度のおほきい、ふかい山の奥深さの感じをもつものはおそらくこの秩父山脈であらう。それがためわたくしらはこの古い山脈に親しむ機會はしたがってかなり多い。わづかの時間とわづかの費用とを以ってして、この古い山脈はわたくしらにたのしい、きまゝな山歩きをたのしませてくれる。

粗服、古靴の貧しい登山者にまで、なんとそこでは、清淨な、清淨な森の家屋と、こくのある大氣の食物と、日光のあたゝかい衣服とが與へられてあるのだらう。

この山脈を全體的にみてのわたくしが享けるその山の感じは、いちじるしく女性的なもの、月光的なもの、陰影的なもの、あるひは甚だしく純日本的なものである。これはなんといっても、おのづから信濃、飛驒、越中などの、あるひは東北のある部分の山脈などのわたくしにあたへる、すこぶる男性的なもの、日光的なもの、光彩的なもの、あるひはすこしく外國模倣的なものが、わたくしの山登りの他の方面をつよくおさへてゐるからであ

る。これには季節による山の異なった感じが、多分に影響をあたへてゐることはどうしてもつけ加へてをかねばならない。

そのやうに全體的の感じに於て、この古い山脈は、わたくしのそこに於ての經驗の範圍では、きはめて情緒風に感覺的である。わたくし自らとしては陽光的なものをこのむからして、この全體的に陰影的であるこの山脈のうちで、わたくしはそこから輕く、美しくて、明るい、抒情風に線のきはめて淡く、ほそぼそしいペエイザアジュを特にこのみ求めてゐる。またこれと同時に、稍〻矛盾的に、この古い、いちじるしく日本的な風物にとんだ山のうちに、特にまた純日本的なものを、しめやかさとうるほひにみちたものを求めてゐる。秩父の美はしさはその深林と谿谷との美はしさであるといはれてゐる。その深林と溪谷との美はしさこそ、深林のなかのさまよひ歩き、溪川に沿ふての澤歩きこそ、すなはちもっとも日本的な山歩きのひとつの特色ではないか。わたくしらはそこに巖のあかるい高根も、萬年雪のまばゆい耀きも、高い花野のあざやかな魅美も、また岩根をわたる颯々たる高層の風をも求めることはできないが、そのかはりわたくしらは、そこに樹の匂ひみちみちた深林や、あかるい峠の草場や、うるほいみちた谷あひなどに、季節それぞれのいろやかな日光、青ぞら、雲、樹、草花、水流、微風をともどもにして、もっとものびやかな、きまゝな山々のなかでのさまよひ歩きをたのしむことができる。そしてまたわたくしらはそこに、あかるい谷沿ひの、ゆるやかな曲線をたくさんに持った、古い、善い、日本的な風致の路をえらんで、のびのびとおのが影をたのしみつゝ歩いてゆける。ことに古い、おちついた影のある、靜かな路をわたくしらはまだまだたくさんにそこにみいだし得る。そのいたるところの谿々で水と樹の葉の匂ひをたのしむことができる。いちがいにいってみれば、この秩父といふひとつの古い中部日本の山脈は、わたくし

にとってその空氣の刺繡、色と光との影おもしろい背景で、そこの地形、植物、人間生活のありさまをもってして、いかにもしづかな、あだやかな、あたゝかい植物的な友情をかんじさせてくれたものだ。山友達の溫かい、燈火のかゞやくやうな友情のなかに包まれながら、しかも實に屢〻わたくしの魂のひとりあこがれていつもとびかへりたがる、もっとも手近かのふるさとはこゝである。このやうな意味でもって、わたくしはこゝにこの秩父といふ、わが「善き日本の山」のために、そのわづかのわたくしの氣まぐれな好尙にもとづいた二つ三つのことがらについて、すこしばかり書きしるしてみようとおもひたったのである。

2

この古い山脈について、まづわたくしはそこの季節のうつりかはりに最もきはだった、微妙なうるはしさをかんじてゐる。

すでにこの古い山脈の山歩きに理想的な季節としては、春と秋、ことに五月と十月の山歩きだといはれてゐる。わたくしはそこに二三の季節をちがへた山歩きをしてみて、ほんとにその眞實なことを知つた。あゝ、なんとわたくしらの尊敬すべき、この古山脈先蹤者、秩父の山歩きの父らは、わたくしらのためにこのうつくしいわが日本の山の暦のうちから、このまた殊更に美しい魅力にとんだ、よい季節をみいだしてくれたのだらう。齊々と割りふられた、つゆ誤りのないわが日本の山の暦。その暦をゆたかに盛り飾る、その季節、季節の山々のよそほひ樹々のすがた、鳥々のうたなどのなんとわたくしらに一層この山脈を愛せしめることとなったであらうか。

そこの五月には、山々は青々とみづみづしいわか葉の葉むらと日の光りに色づけられて石楠花のうら寂しい花

ざかり。そして谿にはやまつゝじのべにいろ。落葉松はすゞやかな、こまかな枝と葉の線をもって青空にうす青く、やはらかく、まっすぐ立つ箒木のやうに。また白樺はさかんな、みづみづしい扇をひらいたやうな谷あひの草原に、すっきりとした美人の立姿のやうに。そして郭公は森の隱者のやうに深林のなかで奥ぶかく啼き、山鳩はよい、ながい春の日永をひとり森の奥でほろ、ほろと咽びないてゐる。駒鳥は春の淡彩のなかから生れた小娘のやうに、落葉松林の細緻な網狀交叉のなかでたのしく歌ひ、山がらはその谿をゆく歩行者にとっての春の日のよい歌ひ友達だ。

五月の晝間のながさは登山者にとってのおほいなる恩惠。日中のほどよいあたゝかさ。高い深林帶のなかに抱かれた殘んの斑ら雪は、尾根歩きをするときの大切なのみ水の泉。わか葉でうすみどりいろに烟ってゐる、あかるい谿間の草原へ下りてくれば、小川はうら若い女のほそい腕のやうにぐるぐるとうねっては日に白々ときらめきながら悅ばしく流れ、空をゆく白い片雲はまるで南歐の騎士のやうに、輕やかに、そうしてかゞやかにひんがしにと驅けてゆく。あゝ、その五月に於てのこの山脈の山歩き。それはわたくしには、十月のそれにくらべて、いな、あらゆる日本の山登りの季節のうちでもっともこのましくおもはれるものである。

さて、つぎにそこの十月には名もない低い山々の木々でさへもの燃ゆるやうな黃葉、紅葉の織りいだすうるはしい錦繡の粧ひ。季節のかけぎぬ。その秋のよい日には、そこでは春と秋とそして冬との三つの季節にわたっての大氣の天然圖が感覺される。

谷の斜面の落葉松林はこれからやつてくるいちばん簡素で枯淡な季節を越すべく、その小枝、小枝の葉をふるつては、ほぞをかためての健氣な腕組をし、そして谷の日影には空いろの龍膽の天然咲きの花ざかり。その落葉

と枯草の谷のみちを歩くわたくしらの足は、澄みきった、ふかい青空と枯れた山々とにとっての美しい箒木。栂のくらい林になくほととぎすの悲壯的な情熱曲。そしてその山上の焚火をまもる夜半にきこえるのは鹿の哀情歌。

そしてまた、そこの平和な、平和な十一月の日のレエテ・ド・ラ・サン・マルタンといはれてゐるやうな日の、あたたかい眞晝の山は、なんと明るい、なんとさびしい、なんと老ひたる姿をしてゐるのだらうか。季節はいまや美しい祝祭的なひかりをもつて、その日を飾り、その峯からふきおりてくる夕風は季節の情愛の終りとして、一歩のところで冷たい次ぎの「黑き季節」へとわたくしらから別れてゆく。そのとき、わたくしらは午後の山脈の中から平野へ向つてそのうしろから吹き下す西風といっしょにかへってゆく淋しみをつくづくとかんじる。

この山脈の十月の風景には、すべてその基調色として淡紫色がある。すきとほった透明な自然色がある。そしていひつくせぬ萬象のもの深い寂びをかんじる。その十月の山歩き。それは五月のそれにつぐものである。春に行つてよかつた山へは、秋にもまた行かうとわたくしの深くかんじてゐる山のうち、この秩父はまさにそのひとつである。

けれどもこの古い山脈には、この五月と十月以外の季節に於ても、よい山歩きや小さな谷歩き、峠越えに適した好い季節がある。

すなはちそこの三月では、わたくしらのために谷には春の水っぽい雪はむら消えに消えかゝり、日ごと雪解霧が日にあたゝかくなびいて、樹々や草は芽ぐみざかり。淡々しい、まだこぬ春のいろが谷々をながれたゞよひ、その道ばたの枯草の黄いろのなかからは草の芽は綠いろの爪を伸ばしてゐ、樹も草も、水も畑も村もみなやってくるたのしい、よい季節にあかるい希望をかゞやかせてゐる。そんなころには、そこの前山あたりではわたくし

らがこゝろしづかに、身みづからの影ゆるやかな興趣にひたって、おのが感情と夢とをおもふがまゝにあそばせて歩きまわり得る、よい路がたくさんにあるのである。

そして、そこの十一月には、そのよいアリエル・セーゾンの日中にそこの古い、小さな峠路や谷々の路を村から村へのさまよひ歩きは、これほどのんびりとし深閑とした、氣輕で、地味な、人のよい落葉と路との音樂はない。その落葉の路のうへをゆく、かそかな足音ほど、心にひゞく音はない。そして名もない低い村をとりまく山の木々の紅葉は、飾り氣のない田舍女が黄と紅との肩掛けをしたやうだ。

なほこのほかの季節に、わたくしは秋もまぢかな八月も晩くに暑い都會をのがれて、まるで病める老鶯のやうに久しぶりで、その綠こい谷々に青い食物を戀しがってさまよひ歩いたことがある。そのときちょうど季節の翼は夏と秋とのあひだを蔽ふてゐて、わたくしはそこの峠をこえ谿をつたひ村をめぐって、夏とほのかな秋の喜びを充分に食べた。

この「善き日本の山」のうつくしい山暦のうちで、わたくしはまだこれだけのものしか知らないのである。そこの雪にあをあをとかがやいてゐる嶽の頂から鋼鐵のやうな西風のふきおろす、こほりきつた、寒冷な冬の季節や、そのほか季節と季節とのあはいの、興味ふかいうつりかはりのときの多くもまだ知らない。もっとくはしくそしてしたしくわたくしはこの古い山脈のうちに、季節、季節の微妙な宇宙的な波打ちが描くところの、光、影風、雲、樹、草、花の模様を是非とも鑑賞したいとおもってゐる。

3

秩父の美しい特色は、その深林と溪川にあるといふことがすでにいはれてゐることは前にも言った。それはたしかにさうである。わたくしにもそのことは微かながら感じられる。けれどわたくしはこゝでは、わたくし自らの氣まぐれな、ひとつのかたよった好尙から、この山脈に於てはそれらのものとともに、またもっとほかのものにもふかい好愛をかんじてゐる。それはなにかといへば、この古い山脈のいたるところに、るいるいとつけられてある、古い、日本的な特有の風致をもってゐる山村と、谿にそひ、峠をこえ、山腹をめぐって、曲りくねりながらそれらの村から村をつないでまるで花の蔓のやうにたくさん捲きついてゐる、その古い、善い、もの深さにとんだ、しづかな山路、林道、廢道、舊道、村道、里道、縣道、國道と、それらのあひだにあって、わたくしらに一夜のやどりの詩情をそゝる、かずかずの簡素な山小屋、炭燒小屋、伐木小屋などである。

秩父の山村。——なんとこれだけの文字なり、言葉なりにしても、それがわたくしにまでこゝろよく、いろいろのこれまで見たり、歩いたり、または親しくそこにとまったりした、この古山脈のかず多くの山村の印象がよみがへりうかびくることだらうか。みしらぬ、小さな山のなかの村々を歩きまわったり、または親しくとまったりなどして、そこの現實の村落風景なり、または旅人の眼でみたそこの生活風景なりをみてあるくことは、わたくしにとっては山歩きといふこととともに、ひとつの離しがたい好ましいことがらなのである。

そのやうな點で、この古い山脈は實に他の日本の多くの諸山脈にくらべても決して劣らないほどに、わたくしにとって好ましい多くの山村をもってゐる。その山ふところ、山ふもと、谷あひのいたるところに、わたくしの

好きな山村はそれ自らの日本的な特有の風致をもって、あるものはゆたかな、平和な、古い古い昔ながらの生活の風景をうちひろげ、またあるものはただただ孤獨な、まったくうち棄てられたかのやうな、荒れさびれた、寂寥な生活のともしびをかすかにともしつゝ、村々は配置よくちりしかれてあるのである。多摩川上流には青梅街道に沿ふての丹波、奥秋、落合、御屋敷の村々、その側谷にはいつては雲取山への登りみちの小袖の村、大菩薩の山ふもとの川久保や池之尻の村、ずつと奥ふかくは一ノ瀬、二ノ瀬、三ノ瀬、高橋などのまったくの山ふところの村々。ほんとに秩父といふこの山脈の名をもってゐる土地の、すなはち荒川の上流には栃本、三峰などその他かずかずの村。信濃側の千曲川の上流では梓山、川端下のうつくしい山村。甲斐の山村としてい黒平、金山、廣瀬などの山奥の村々。その他なほかず多くの山村がまだまだわたくしの眼にはふれずに、このわたくしをだまって待ってゐることだらう。これらの山村を、峠をこえ、谿をわたって、山々をさまよひ歩くかたはら、そこを訪ね、そこに泊りあるくことはわたくしにとっては秘めやかな、言ひつくせぬたのしみである。

たとへば、かぼそい、たゞ足痕の印象のみの山徑はだんだんとひとびとの足に踏みならされた、歩きよい路となり、手の入れられた林や籔があらはれ、薪の積み重ねが道ばたに置かれたりして、わたくしらはそれらの村へと山のなかから近づいてゆくときの心のなんとかろやかに、またたのしみであることだらうか。つひにそれは傾斜面の山畠となり、白い障子の農家が日向むきに山を背負って、ゆるやかな山側にちらばってゐるやうな、のびのびとした村の眺めとなる。ひとつの峠をこすと、次ぎの山村の趣きがどんなにか、わたくしにとっておもしろく、たのしく、よろこばしいものであることか。

村にはいっては、その裏にいり、横に曲つて、ひとつの村のもっとも深いあたりをぬけるとき、わたくしらは

ほんとにそこの人々の生活の風景をまのあたりにみ、そこに一夜の宿を乞ふては、いまではこれらの山のなかの村のひとびとだけしか持ちあはせてゐないやうにおもはれる古い、純雅な感情を粗(あら)い生地のまゝにうけいれ、それらの村々の古今のうつりかはりや、人間の生活と自然との密接な暗示の働きをよろこび眺めることができる。

ちょっと思ひだしても、わたくしの眼には、ゐいるいと盡きずこの古い山脈のあひだにちりしかれた、好ましいそれらの山村の風景がちらつくやうに浮んでくるではないか。

ほんとに秩父と名のつく土地のもっとも奥にあって、あの日當りのよい山の傾斜地に、だんだんに點在して、平和な、平和な、ゆたかな生活の山村をかたちづくってゐる古い秩父の山村——栃本。「五月の若葉のやうに深い眼の乙女の多い栃本」の村。そこのあの人情うるはしい、氣やすく、こゝろよく旅人をとめ、もてなしてくれるなつかしい旅舍のやうな村の家の印象。すっかりと磨りへった石ころが、ほどよい凹凸をもってぎっちりと敷きつめられたそこのかたい村道をゆくと、石垣で高くきづいた階段地のうへに、きれいに行列したエメロードの野菜の畑となつてゐる前庭をへだてゝ、しっかりした、古い、大きなその農家がファサードをみせ、その傍らの靜かなかけ樋のたゝずまひから、流し場、軒に乾しつらねてある大根や柿。黒光りのする椽側に于した唐傘や襁褓やが、すっかり自然劇の舞臺裝置のやう。またその朝夕に谿から山側にまつはる、あの青い炊(かし)ぎの煙の平和な姿、そして村の下の谷影にある杉のくらい密林は黒い薫香を匂はせてゐるやう。この栃本の村ほど、秩父のがずかずの山村のうちで、うるほひと人情にとんだ、ゆたかな、平和な、山村らしい山村はない。わたくしはそこを、そのうへに日本的な特有な村落の風致を配して愛してゐる。

栃本とはあの大きな、古い十文字峠をへだてて、まつたく國の名もちがい、氣候もちがい、ことばもちがひ、

その村の色彩と風景とをはなはだしくことにしてゐて、栃本とともにこの秩父を歩くものにとっては、是非ともひとたびは訪れなければならない山村は、南佐久の最奥の村、その名もうるはしい聯想をよぶところの梓山の村であらう。

むかし、わたくしらにとってはこの山脈の山歩きの父とも言ひ得べき先蹤者らがはじめてこの山村に訪れた時分に、それらの人たちにまで惑溺的に美しかったこの白樺と、落葉松との谷あひ、ほととぎすと、山鳩と、雉子のなく山里、石をのせた屋根の低い百姓家の、自然にうづもれた牧歌の村へも、その人たちが訪れる度毎にその美しさをこはす文明のさわがしい樂隊が練りこんで來た。いかに愛惜の情をその人たちは感じつゝこの谷、この村を通りすぎたことだらうか。樹は伐られ、村道はトロ道とかはって、小鳥は久戀の地をみすてゝしまったかのやうだつた。ちょうどその頃にわたくしははじめてこの村におとづれたのであった。けれどなほそのときに於てもこの村、この谷はわたくしをしてこよなくも愛さしめたのである。ことにその秋の、十月の梓山をわたくしはこのましく思ふのである。

肅殺として、いつもうら寂しい、うすらさむい、くすんだ、低い石屋根の村の家々が、谷あひの狹い平原にぢたごたとかたまりあって、それでゐてまた一種のあかるい感じをもつその村の十月のペエイヂアジュ。そこはたしかに他の山村とは季節に於てちがひがある。そこの十月は冬の飛脚である。秋なかば、栃本の村からそこへ越してきても、また甲斐の山村、黒平（くろべら）から國師、金峯の高嶺（たかね）をつたひこえてきても、もうそこでの秋はいまや冬にゆづらうとしてゐる。朝には、空氣は氷のやうに燃えながら、窓にみち、家をつゝみ、厚く霜のおりる、さむい冬のさきぶれがやってきてゐる。

葉をふるった落葉松は炎いろの枯葉と薄きいろの下生えとの絨氈から鐵色の線の素描。そしてそこの紅葉は、黄、金色、赤、ヴィオレットとどこか金屬的な色彩で、淡く明るいもの、濃い燃えるやうなものが、季節の最後の衣裳を飾ってゐる。村のかたはらを流れる千曲川の水も脊せ涸れて、しろじろと磧の背骨をあらはし、北風が凶しい霜を播かぬうちにと冬に備ふるために、村の家々は堆たかくその軒下、納屋のかたはら、中庭に薪を積み、藁がこひをしてゐる。すでに十月のなかばにきて、そこには晩秋の感じがふかい。わたくしにはこの季節のもつこまやかなニュアンスを認めるの力のたらないにしても、この梓山の村の秋にはかぎりないふかさをかんじる。ことに秋の黄昏時、十月の最後の光りが佗しげにやがて滅えてゆくころに、峯からこの村へ下りてきたものゝ眼には、そこにもの寂しい、この蕭條とした山奥の村落の薄暮が、嶽から吹き下すうそさむい夕風と、葉を落しつくしてまはだかな、白い樹肌を、うす闇にさらして白樺の立つ牧場と、低い石屋根の村の家々の障子にちらちらとうつる焚火とによって描かれ映ってくる。村のなかにはいると、家々の軒に吊された大根は白く、廐からは馬が顔をだし、山仕事の一日の汗に疲れた山人らは家の戸口で手足を洗つてゐ、村の往還に犬と子供等がさわがしく叫聲をあげてたはむれさわいでゐる。そうしてわたくしらはその村のさゝやかな旅舍の灯へと惹きつけられるやうにわたくしらの足をこゝろよくはこんでゆくのである。

そのやうなとき、この梓山の村は、どこかわたくしの感覺にはいちぢるしく日本的でないところがある。それとなくいつか讀みふけった山の本のなかの、あの瑞西のサン・ジャンといふ小さな、荒れさびれた山村の夕景をおもひださせる。その白樺のたった、荒れた牧場といひ、落葉松の林といひ、それから村の燻んだ、くろっぽい家のつくりのどこかシャレェに似通つてゐるあたりといひ、それらの、この日本の、信濃の、南佐久の谷あひの山

村の風景がもつものは、みなそのとき親しんだサン・ジャンの村の風景とあてはまるやうな氣がする。栃本の村の純日本的な山村の型のあるのに對して、この梓山の村はこれらの點でいちぢるしくわたくしにまでは異邦的なものにかんじられるのである。

こゝにまったくぐるりを山にかこまれた、美しい山ふところに、もっとも世とへだたった、孤獨な人間生活の一點景をわづかにひろげてゐる廢村にちかい小村が、この古い山脈のうちにかなりかぞへられる。そのうちで特にわたくしは三ノ瀨と金山のこのふたつについて深い感興を持つことができた。

秋ちかい晩夏の晴れやかなまひるどき、わたくしはひとりの山友達とともに、ちょうど將監峠から雁峠へと高低なく山腹を卷いてつけられた、あのよい、影おもしろい林道のなかほどにあるテラッスの草原に腰をおろして、はるか遠い麓の山裾に、うす綠りをした山あひの、可愛らしいほど小さな平地のなかに、灰色にぽっつり見える小村を見下してゐた。それが三ノ瀨の村である。なんと人はよくも自分の住む地をこんな、うつくしい、可愛らしい山ふところに見出したのだらうと、わたくしらは感嘆した。

また犬切峠のいたゞきから見ると、青い谷あひにぽつぽつと家々が見えるこの村と一ノ瀨、二ノ瀨など一群の村里の遠景のなんと山ふところの村らしいすがたなのだらうか。それほどこの三ノ瀨は遠望のうつくしい小村である。そしてわたくしらのその谷に降りると、ふしぎのやうに山中に、その村は幻の人生を示してしづまってゐる。やがて村に近づき、村の深いなかを通ってゆくときの靜けさ。しんかんとして人聲さへしない。人の住まないで、屋根に靑草が生えて、ぴったりと戸の閉められた廢屋に近かい空家もある。けれど突然わたくしらが村の家のかたはらを過ぎようとするとき、村の犬の二三匹が火のやうにわたくしらに跳びよってきてほえつくのを、

わたくしらはみたのである。そしてもっとわたくしらの驚いたことには、とほくで村の子供らがわたくしらにそれをけしかけてゐることだった。わたくしは氣づいた。この村が、この山ふところの村が、ある忌はしい病氣をもった人々のみの集りで、まったく近隣の村からは行き交ひもされずにしてゐることを。そこの村人はそれ故、ひがんでかたくなである。それ故にこそ、こんな山ふところの、荒れさびれた平地に彼れらは住んでゐるのである。わたくしら通りがゝりの旅行者にはたゞそれらの人々を哀れふかい運命の人々とおもひはすれ、決して惡感情はもてない。その子供らの心も、みなその父母兄姉らの心にわづか染っての行ひにすぎないのだらう。

そうしてわたくしらのその村の靜かな路が山畠へとつゞくではづれにまで行ったとき、わたくしらは樹々のしげみにかこまれて村の小さい墓地が、平和に、ひっそりと、すこし悲しげに、つゝましやかな姿をしてゐるのをみつけた。そしてそのうちには、新らしいひとつの名もない墓標があった。其れを見て、わたくしら空想濃い若者らの勝手な想ひはあのボオル・フォオルの「バラッド・フランセーズ」のなかにうたはれた Ballades au hameau にも似たやうな、あはれな、小さい葬式のもの深い情景が、この山ふところにかくれた小村にもあったことであらうなどと語りあひつゝ、そこを通り過ぎていった。

この三ノ瀬はその山村の風景としては甚だ美しいものである。白樺の粗らに立ったり、大きな石塊の轉がってゐる、荒れた、なだらかな谷あひの廣土のなかに、痞せたわづかの山畠とながい春秋の風雨につれて灰に寂びた小さな村の家すこしとをもって、廢村に近い、ひっそりとして、物音のない、哀傷的な風景を擴げてゐる。わたくしはこのやうな哀情的なこの三ノ瀬村の風景に、嘗ってわたくしの通った時に感じた前述のやうなひとつのもの深い情懷をこめて愛してゐるのである。

金山の村も小さな、わづか四軒の家のはなればなれに寄ってつくられてゐる山あひの小村である。金峯の尾根を半日も下りつゞけて、もう地圖のうへで望んでゐたその村の灯のともる時分に、その村へと山徑をたどって近づいてゆくと、わづかに山腹にうち開いた、もの寂びて瘠せた山畠で、まるでひつそりとふしぎのやうにその村の年老ひた女がたったひとりしきりと小さな粒のやうな馬鈴薯を掘ってゐた。そしてそのまはりにはその山村の疲れた夕ぐれの心がしづかに下りて來てゐた。ふりかへれば淡い夕靄が金峯つゞきの黑い尾根をかくしてしまってゐる。もうすぐかすみ暮れる秋の夜のこの谷にひろがりこむるであらうのに、あゝ、なんといふこの寂しい地の林檎の收穫ぞ！おそらく日は沈み、宵のうす月の光りがほのかに彼女をてらす頃までも、寂しい彼女ひとりのこの薯掘りの勞働はつゞけられるのであらう。そしてそのながい勞働のあとの、ぬれわたる和ぎの心と血のやうな生活の苦しみを抱いては彼女は、肩に彼女の收穫物を運びながら畑路を家にかへるのだらう。そこを歩み過ぎたものゝ眼には、やがて金山の村があらはれる。小さな、みすぼらしい家の三つで一村をなしてゐるその村のすがたが。あゝ、なんとそれは小さな、貧しげな村だらう。そしてこのかくれた山あひの小村のまづしい收穫の一點景がそこを通り過ぎるものゝ胸を打つその不思議な力は一體どこからひゞいてくるのだらうか。この村人はいかにこれまでこの小さな山あひの平地の貧しい大地の愛をたよりにして、そこに起き、眠り、勞働し、休息して來たことであらう。小川を渡ってからやがてその村里を見返りつゝ、深い山中にかくれた人生のことを考へながら、これから都會人の湯治になどやって來てゐる谷の溫泉宿へと急ぐものゝ心には、なんといちぢるしい人々の生活の點景をそこと、そしてこゝとに見ることだらうか。そして更にまたすゞしい谿の夕風に吹かれて空をあふいだとき、夕空にはほの白い月がこの谿間の山村を涙ぐましいほどやさしく覗いてゐるのがみられた。

このほかこの山脈のもつ山村について、前にあげたやうな村々だけについて書いてゐてはきりはない。それでもわたくしはなにかそれらの、わたくしにふかい心の印象を與へてくれた村々についてわづかでも言ひたいとおもふ。

多摩の上流では丹波山はおちついた、しめりふかい村である。そこの旅籠屋もしつとりとしてよかった。落合はこの青梅街道を甲州に通ふ駄馬の宿場だが、そこの雜貨を賣る旅宿の山旅の歸途の秋の一夜も、こゝろしづかなものだった。それから街道沿ひではなくて、少し側道になってゐるのでは、雲取への登山路の中途にひっそりと寂莫の谿にかくれてゐる小袖の村にも、嘗ってわたくしはわたくしのこの山脈の山歩きのはじめてのときに、そのとある村の家に泊めて貰ったことがあったが、小さいが、よい、かなりゆたかな村であった。そこは一千年も往昔のロマネスクな傳説のある村であるさうだが、小袖川にのぞんだ山腹に黑ずんだ杉の匂ひにしめってゐる森のあひだにこじんまりとかたまってしっとりとした藁屋根をみせてゐるのは、平和な、山村らしい山村のすがたである。この村のことをおもひだすとわたくしの心はかるい愛情にぬれる。

三峰の村は、却ってすぐそばに三峯神社のあるのにもかゝはらず思ったよりも、しづかな感じの村である。そこはこの山脈ではまれな、高い山腹の村である。霧のふかい秋の雨の日などのそこでの霧のひっそりとした、ほそい幽かな歩きやう。村の家々も木立もすっかりほのかな霧のなかに幽かな形に古びた壁畫のやうに浮ぶ。けれど、幸ひな十月の天氣に、晴れた秋の午後のその村はまはりの山々とともにふしぎなほどひっそりとしてゐて、ときどき、そのしづかな畫さがりの山に、戛々と云ふ木を伐る音がこだましてくる。神社に泊ったひとでさへも散歩の路を村の方へと求めて、村道のかたわらの枯草や落葉のうへに日のあたるあたゝかい座席をもとめるがよ

い。

川端下の村は梓山とよく感じに於て似てゐる。そこは流れと白樺の村だ。金峯から下りてきてみると、そこの谷の草原と流れと白樺の樹々のやはらかい、あかるい感じはこの山脈ではあまり他に求められないとおもふ。わたくしはそこのあかるい谿間の風がすきだ。わたくしはそれを愛しながら、いちにち飽きる事もなく喜んでゐた。廣瀬は、そのバラック建ての家のまばらに建ってゐて、村道の不釣合にひろく、荷馬車の轍の跡のいりみだれてついてゐるあたりは北海道の邊土の村みたいだ。村の生活にはおちつきがないやうだ。

黒平はよい山村である。下黒平の村は猫坂のうえからのぞむと、ほどよく木立にかこまれたあひだから日を浴びた藁葺きの村の家や社がみえて、午後の村はよい音のするきれいな小川のかたはらに、山腹のわづかな緩傾斜地によって、しづかに、おだやかないとなみをつゞけてゐる。家中の家族みんなが畠へ、山へ働きにでかけて無人な、ひっそりとした古い農家の黒い椽側や開け放された薄暗い家のなかを横にみて、もの寂しい村道を通り、うねうねと斜丘をひとめぐりすると、また上黒平の村が小さく荒川の流れ沿ひに靜安な姿をあらはす。もうそこに立ってはふかい山の尾根はしが村をかこんで、黒い尾根はたかだかと靜かな旅行者の眉の上に畫のやうに懸かってくる。これが甲斐の最後の山奥の村であるとおもひつゝ、しめり深い村々の眺めにひたり、そこを通りすぎてわたくしらは山のなかへ、ひとに會はない山徑をたどってゆくと、平和な山村は遠ざかりゆくわたくしらを見送ってゐる。

4

つぎはこの古い山脈のもってゐる、かすかずの古い美い路についてである。

わづかの切り拂ひ鉈目、標木のやうなものをめあてにして歩けるくらゐのきりあけみち。ふたりとは並んで歩けない、かぼそい山路。永い間の足痕の印象によって知られる岩道のうねり曲り。茅、いばらの雜草をわけ、澤をつたひなどしてさがしあるくやうな、荒れさびした廢路。うねうねと曲りくねりながら、一座の山をめぐりめぐって、長い帶でも卷きつけたやうな林道。古い、ものさびた、路としての一種の風韻にとんだ峠路。村から村をつなぐ、おちついた、閑かな里道。古い、むかしの影をこくやどした街道。ひろい裾野の原をしろじろと幅びろく、みえるかぎりつゞいて、となりの國と交融してゐる、陸の航路たる往還。それらのいろいろな道路が、この山脈にはまたいたるところに、ぐるぐるとつけられてあるのである。

奥秩父のおもな尾根すぢ、尾根すぢにはみなきりあけみちがつけられてある。それは徑ともなんともつかず、かすかに尾根すぢのうへに、どこまでもどこまでもたゞひとすぢに通ってゐる。あるところはわづかに登山者のときたま歩いた足痕の印象にとゞまるのである。うすら赤い秩父特有の、よい匂ひのする石楠花の花に引っかゝったり、つよい、枝を張った茂みや偃松をわけ、岩根をつたい、倒木のためにまぎれ消え、あるひは栂の苔むした暗い深林帶のなかをそのきりあけみちはつゞいてゐる。しかしこのきりあけみちは路としての部類にははいりにくいだらう。たゞ登山者が尾根歩きのときに通るばかりだ。

山路としては木樵が斧をかついでとほる徑、炭燒が炭俵をかつぎおろす路、山人らが山仕事のかへりにとほる

路などが、この山脈のうちには、その主な峠路や林道からまるで木の枝のやうにわかれてゐる。このやうな山路はきはめて面白い、風趣にとんだものであるが、たゞよく地理にあかるくないと、それらの路は地圖にものってゐないし、またどこをどう通って、どこの路に通じてゐるのかもわかりにくいことが多いから、いたって路にまぎれやすい。けれどたゞその路々の風致を愛しながら、またはその日その日の風と雲と日の光りとを思ふまゝに受用する風の吹きぐあい、日のあたり加減、季節季節のいろやかな明暗を觀察しながら、あるひはたゞおもひのまゝにみしらぬ山路のあちこちをいそいそとわけてさまよふ好奇心だけをもってゐる、思想もない、愁ひもない、明るい山中のロマンティストなどにとっては、地圖にあらはれた地形と磁石ではかった方位をめあてに、きまゝに行程などは定めず、どこでもねとまりするつもりで、この山路をさまよひ歩くならば、それはいかにたのしいことであらうか。いよいよほそく、いよいよさびしく、すぐ路をまちがへさうな、かぼそい山みちを、われ知らず魅惑でもない魅惑に釣られてはあるき、奥へ奥へと踏みまよってゆく、このふしぎな、あるひは痴かしい興會はわたくしのやうなきまぐれもののみがかんじてゐる愉情ではあるかも知れないが。

けれどもほんとにこの山脈の山路の特色とも言ひ得べきものは林道である。秩父は林道に於ては實に豐富であるとおもふ。たいがいの谿から尾根へ、この林道は谿川について、高みから低いところへ水の落ちる理をとらずに、かへって山腹を曲りくねりながら、うねうねとながく、氣ながに峯へとのぼってゐる。またそこに林道の山路にくらべてのおもしろさがあるのである。たゞ尾根尾根のきりあけみちをつたひ歩いたり、峠をこえ歩いただけでは到底みられない山の中腹や巖壁をめぐって、谿川を見おろし、棧道をつくっては、一座の山を堂々めぐりして次ぎの山腹にとからみ、ゆるいヂッグザッグをしては、氣ながく山の姿にならひ、谿にしたがってつくられて

ある。それ故林道を歩いてみるとまったく同じ山の他の山路や峠路を通っていったのではみられないやうな、異なった他の一面からその山々の姿をたやすく、氣樂にながめられる。

これはこゝで言ふまでもなく、山路と林道とは、その道としての發生の原因を異にし、建設の道程を異にしてゐるからだ。山路や峠などは必要によって、人々が古くから長い春秋の歴史を經て、踏みならし踏みならしては出來あがった、すなはち自然的にこしらへあげられたものであるのに反して、林道はまったくそれらのものからはなれて、人々がきはめてこと新しく、まったく特殊なひとつの目的のために多くの工費をかけてつくりあげたものである。自然の山路にしても、またこの林道にしても、それらのものの發生の原因はきはめて功利的な人間生活の必要によってつくりあげられたもので、決してわたくしらのやうな山歩きをするもののための好い散歩道にでもなるやうに心がけたのでもなければ、また登山路でもない、この點でははなはだプロザイックな理由からである。

けれどそんなことは實際には、わたくしらのためにはどうでもいゝことであらう。なぜならばわたくしらにとって路はたゞその路々の風致風韻をよろこんで、歩いてゆければいゝのであると思ふからである。たゞこゝにすこしくわたくしは、たゞわたくしの山歩きのうへからの、この山路と林道とについての、とてもへんな、そうして幼稚な、ひとりよがりの美學(?)をとくとでも言ってみようならば、まづ路といふものの自然的發達を經てきて出來あがった山路や峠路は、きはめてその地形と事情にしたがって、自然的に、すこしの無理もなく出來あがってゐる。これはすなはち、人々がわづかの手をほどこしただけで、もっとも容易に、勞をすくなく歩けるといふことである。このやうな路は、言ってみれば、すこしも自然に逆らうことなく、やさしく、たのしく出來あがってゐる。水がおのずと地形にしたがって、高きから低きへぐるぐるとうねり流れて川の流路ができあがったの

と同じやうに、そのやうな自然の路は地形にしたがって、山の尾根、山腹、丘、谷について、その地形から押されて、よどみもなく、潺々と流れてゐるともいへようとおもふ。そこに、自然にできあがってゐるといふそこに、路としての美のひとつの要素があるとわたくしはおもふ。

自然にできあがった、古い山路、峠路は、その點でいちぢるしく林道よりは、大きい、ふかい美の要素をもってゐる。それにひきくらべて、林道はその點ではきはめて不自然である。林道は地形にしたがって出來てゐない。自然の路のやうに流れてゐない。堀割のやうによどんで、生々としてゐない。それはまったく路としてはひとつの異なった目的に終始してゐる。林道がきはめて自然にできてゐると觀察するのは、たゞ小林區署の役人の頭に於てでだけであらう。たしかにそれはその目的のためには、おそらくきはめて從順につけられてあるであらう。いたづらに橋をかけ、岩を裂き、木を伐り、ながい棧道をつくったりしてつくられた林道は、自然の路とくらべては恐ろしく無理な、冗長な路である。また實際に路を歩くわたくしらのやうなものの眼にも、時には林道のあまり山腹を高低なく、ぐるぐると卷いてゆく單調さや、危うげに巖壁に沿ふてかけた棧道などは決してよい、美しい路であるとはおもはせない。

この點の比較は、秩父に於ては最もたやすく、だれにもかんじられるところであらう。秩父ほど古い、よい山路や峠路と林道の多くとが、ほとんど並行してつけられてあるところは、他の山地にはあまりみあたらないからである。以上のことからして、まづ路の美のひとつは、それが自然の地形と一致して成り立ってゐるものでなければならないとおもふ。

次ぎに路の美の第二の要素としては、その路が古いといふことである。このことはあまり言ふの必要もないこ

とであらう。こゝろみに、古い、古い、いろいろの人々に往昔から踏み慣らされて來た、その鄕土の歷史と傳說とのいろこまやかな峠路と、掘り裂いた土の匂ひもなまなましく、新しい樹の伐り口のいたるところ眼につくやうな新しい林道とを歩きくらべてみれば、たちどころにわたくしらは古い路のもつその匂ひふかい品格と風韻とを感覺することができよう。おのづと多くの人々のながいあひだの必要と忍耐とによってその生命をつゞけて來た古路の歷史を考へ、その生命をおもひつゝ、路それみづからの自然の寂びをよろこんで歩くことの、いかに美しい感懷をわたくしらにあたへてくれることであらうか。まったく美しい、古い路の影はなににたとへよう。うねうねと村から村へ、國から國へとつなぐ、この陸の航路のもの深い寂びようはなんと說明しよう。全く路は古いほどよく自然の情愛がしみでてゐる。そうしてことに、その古い路が、むかしは多くの旅人のさかんにこえ歩いた街道なのに、いまはまったく通行たえて、荒れさび、たゞ歷史と傳說と丈け高い草ばかりにふかく埋もれて、それが影さびしい廢路にちかいとき、それのいかばかりわたくしら路を愛するものにとって、さらにさらに哀情、情韻の松明をわたくしらの胸に燃やしつくすことであらうか。

路のもつ第三の美的要素としては、それがその路の兩側の風致と一致してゐるといふことであるやうにおもへる。この點では、古い山路、峠路などのその風致と自然的に一致し、うるはしい諧調をたもってゐるといふことには、まったく前にのべた第一の要素と同じ理である。ところが林道に於ては功罪相半ばしてゐる。このこともすでに林道をわづかでも歩けば、よくとくと了解せられる明らかな事實である。林道によくあるトロ道や岩を穿ってのトンネルのごときは、いかなる場合も、その路としての風致を高めはしない。またよく林道のもつ、あのあまりに幾何學圖的な、整正なヂッグザッグの路の線や、山腹を高低なく切斷しつくす一直線のごときも、多くは

風致にそぐはないものである。けれどいつも林道はそのぐるりの風景をみだす、はなはだ無益有害な地の線であるとはいへない。ひとつの林道にしても、よいところやつまらないところもある。ゆるやかに、のぼるともなく谿から山腹にうねりうねりして、いつとなく高まってゆくやうな林道、谷に沿ひつゝ、森にいり、草原を通ってゆく、ほどよい幅廣さの、歩きよい林道などは、古い路を愛するものにとってもはなはだこゝろよいときがある。

いちがいに言へば、古い山路や峠路からくらべてみて、林道はその美的要素に於て缺けるところは多い。けれど前にも言ったやうに、林道には林道としてのよい特色がある。ことに秩父にはよい林道がたくさんにある。

將監峠を中心にして四方に分れてゐる大瀧林道のごときは、そのどれもみな、よい林道であらう。三ノ瀨の村のはづれから、ゆるやかに將監峠の頂上までのぼってゆく林道。將監峠から雁峠を通って柳澤峠まで、まったくの高低もなく山腹を卷いて、多摩の水源をぐるりとひとまはりするやうにつけられた林道も、やゝモノトーヌではあるが、路の展望、風致にはすぐれてゐる。それから將監峠から暗い瀧川谷へ下りて栃本へと通じてゐる瀧川林道。將監峠から三峰へゆく惣小屋林道。甲武信の頂上直下からでてゐる眞ノ澤林道などはいづれもよい林道であるとおもふ。これらの林道のできたために、どれだけわたくしらの山歩きがよりひろく、たやすくなったかわからない。

峠路としては、この山脈は他の山地にもないやうな、よい、古い峠路のかずかずをもってゐる。そしてまた日本ではかず多くない二千米突以上の高さをもった峠がある。それらのうちでもっともわたくしの好んでゐるのはまづあのなだらかな笹原のひろびろとした頂上をもってゐる將監峠である。その頂のゆるい、青い凹みの美しい線をながめながら三ノ瀨からの林道をのぼってゆくと、あゝ、どうだらう、その峠のうへの笹原のひろがりは、心にしみいるやうな青蒲團をきらきらと敷いてくれて、このわたくしを待ってゐてくれるではないか。雁峠も將

監峠と同じやうに短かい笹原が、將監峠よりももっとひろびろとつゞいてゐるが、なんだか、そこは將監峠ほど陰影が深くない。栂の立ちがれた枯木もすくなければ、くらい栂の深林帶もそば近くにはない。けれどこのふたつは峠としてはよけれ、峠路としては十文字峠のそれには及ばない。十文字峠——この古い、むかしは中仙道の裏道として峠をこす旅人のゆきかひもはげしかった峠路。その古びたもののみのもつ雅韻を帶びた、影ふかい峠路。その七里にわたる里程から、その峠の高さから、その古さから、そのうつくしいふたつの山村のあひだをつなぐところからみて、十文字峠はこの山脈のうちで、どうしてもわたくしらからはなれがたいものである。五月にそこをこえれば、谿々のどこもわか葉の層がむら〳〵と、それをゆする青い山風のかほりもほのかに、人の匂ひもない、しんかんとした深山の峠路を飾る、わびしくも、きよい石楠花と山つゝじの花の祭を見ては、山を越える旅者の胸もその花の精神に染められてしまふだらう。

これらの大きな峠のほかに、まだ小さい、寂しい峠としては、かずかずあげたいものがある。黒平の村から增富の谿へとこす木賊峠。金山から黒森へとつなぐ峠路。その他わたくしらが奥秩父の尾根尾根にこゝろざすときにこえる前山の多くの峠はみな、よい峠路である。けれど前にあげたふたつの峠こそ、わたくしの愛してやまない峠路である。木賊峠、これはおそらくどんな山歩きをする人々も、よほど氣まぐれでないかぎりは、わざわざこえようとはしないわきみちとなってゐる峠路だ。勿論その徑は細く、草ぶかい。みどりもこい熾んなる夏日にそこをこえると、そこには身のたけほどなはなひりのきのまっしろな花の壺が枝々をさげて、ほのかな青い山風にゆれ、峠をのぼればひろびろとした、うつくしい中くぼみの、白雲も近い高原の草原が、ほどよく山毛欅の樹々によい木蔭の休み場所をつくってはればれとあらはれて、そのうへにつゞく誰れに路をたづねるともないほそ

ぼそしい山徑を、身ひとりで辿ってゆくと、あをあをとした風の扇がひらひらとうごいて、炎天のもとの人氣もない草野をたったひとりうごく點景である自分を意識しては、生きてゐる悅ばしい自分を今更にかんじる。そして木蔭にときどきねころび休んでは、自然についての食慾のつよい若者は、充分に雲と風とを食べて、涼しい嘘をはいては、ひとり忘夏の清興によひしれる。

金山と黑森とのあひだの峠路もよい山路だ。それも峠のいただきは木賊峠よりももっとひろい高原で、夏は馬の放牧するところとなってゐる。路はほそくとも、よくふまれてゐるが、牧場にはいるとわかりにくいほど、馬の蹄の痕で消されてゐる。草原のまんなかにはうへの平らな石塊がたくさんにころがってゐる。それは馬が鹽をなめるテーブルだ。そのうへにわたくしはちょうど馬に鹽をやりにそこへきた馬飼ひとならんで腰かけながら、まるで十年の知己のやうに親しく、おたがひの生活のことや馬のこと、山のことなど無慾な話を聲高にしゃべりあふ。馬はそのぐるりをとりまいてぴちゃぴちゃと石のうへの鹽をおとなしく甜めてゐる。すぐうへは金峯へつゞく黑い尾根のはしっこで、すこし峠の原を黑森へ歩いてゆけば、まるで中世紀の古城のやうに、ドロミテンの岩塔のやうな瑞牆のすがたが聳へてゐる。こんなにきまゝな路をえらんでは、こゝ四五日も前からわたくしはこの山脈のなかの村々を歷訪し、峠をこえこえしてきたのだったが、いままたわたくしは馬飼ひとの親しい會話と別れて、慾氣のない行商人かのやうに、つぎの村へと歩いてゆくと、頭上の太陽の祭禮がまるでわたくしの身のまはりを放燄のやうに飾って、漂浪者の光榮的な正午を祝ってくれるやうだ。

村と村とをつなぐ里道で、まだその路上にゴム底足袋の痕もない、紙卷煙草の吸殼のおちてゐない、自轉車のタイヤのあともない、古い、村々の道が、その影と匂ひとをもってこの山脈のやゝ奥まった谷々の多くの村々を

つないでゐる。笹藪のレース模様で縁どった村道をゆくと、村のではづれの道傍に暗然と立ってゐる素朴な石塔の正午の日光に心安げに照らされたすがたはまったく日本のアタヂオ・ドロロオサ。そして竹林のなか、木立のあひだに、日を浴びてゐる平和な藁屋根がそれを縫ってつゞいてゐる。都會の雜踏からは遠くかけはなれた村路のいたるところに、ぐるりの風景と飽和しておなじよい日和を悅んで働いてゐる村人をみながら、わたくしの歩いてゆくとき、どんなにかわたくしは、それらの人々の確かな、健康な、ゆるぎのない生活の根柢のつよさとうつくしさとを感じることだらう。

これらの山にまでつゞく里道やまたはそれをすこしく大きくした街道を歩いてゆくと、樹の枝になった果實のやうに村々がるいるいと次ぎから次ぎにその黑い木立、かゞやく白壁の遠景をみせて、やがて近づきあらはれて、またうしろへ消え去る。そして村々は次第に小さく、路も次第に狹まり、いつしか荷馬車も通らなくなって、濃い山の陰影が眼のほとりに迫ってくる。山へと向ふときにも、また山からかへってくるときにも、そんなときにはわたくしの脚はまるで昔の飛脚の脚よりも、馬の足よりも速くなり、强くなって、街道にかるいほこりをあげてわき眼もふらず歩いていってしまふ。けれどわたくしも、いまではこのやうな街道、里道から峠路、山路と、路のみを歩いて、ろくろく頂も踏まずにしてしまふやうな、のびやかな山歩きをすることがある。ことにそのはじめてのこゝろみをわたくしはこの秩父でやった。ふかい澤歩きや尾根あるきに於ても、すこしも他の山脈に劣るところのないこの山脈にも、またそれらにくらべてはいちぢるしく微溫的な山歩きである、峠越え、路歩きの山旅のために實にふさはしい、多くのよい峠、山路、里道、街道のあることをわたくしは特に感じ、みとめてゐる。多摩川に沿ふての青梅街道とか、笛吹川について雁坂峠をこえてゆく秩父往還とか、あるひはすこしこの山脈と

ははなれてはゐるが八ヶ岳の裾野とこの山脈とのあひだをとほる佐久往還のやうな、多くは登山者には足ばやに通りすごされてしまうやうな街道も、またみようによっては趣きふかい道路である。

ことに、佐久往還、それは粗い線によつて空に描きだされた八ヶ岳の古い火山體のくろい頂線から、ひた押しにながれてくるその裾野高原の大傾斜の明るい、ひろびろとしたうへをひとすじに通ってゆく、わが日本にもまれな、高原の淋しい街道である。そこには海ノ口と長澤とのあひだの四里あまりのなかに、ほんとの高原の街道の趣きが存してゐる。そしてこの山脈の山歩きの歸途を千曲川上流にもとめた人々で、急いで、すぐさま都會の混雜のうちにまぢりに走ることをしなくてもよい幸福な人は、おそらくこの高原の街道を歩かれることだらう。そのとき、人々はその淋しい街道に沿ふて、くろっぽい色のたったふたつの村のそのなかに、愁ひにでも沈んでゐるかのやうに横はってゐるのをみるだらう。そのひとつは平和な、裾野の村、板橋と、あとのひとつはわづか二三軒の家でできてゐる國界と云ふ高原の宿場である。おそらくこの街道を歩くどんな旅行者にしても、その多くはこんな荒れ果てて、見る影もない野原の夕ぐれどきの、曇りがちな、不吉な惡夢のやうな空あひとその下にひろがる暮景のなかに、さびしく憂鬱な小村の荷馬車ひきのみの泊る木賃宿にとまることはしないで、夜をこめても急ぎそこを通りすごされることであらう。けれどもしも氣まぐれに、このふたつの村のいづれの旅宿にでも、一夜を留まった人は、そこを通りすごしてしまったひとよりは、おそらく幸福であったとわたくしはおもふ。なぜならば、そこの村はおもったよりも快活な、そしてその旅宿はきはめて親切な、情のあたゝかい、よい宿であるからである。秋のある、そのやうな憂はしげな日ぐれどき、暗い、暗いその野路をたどってわたくしはそれらの村の旅宿の灯をもとめて歩いていったことがあった。そして村へと入ればそこの旅宿の窓は赤い光

りをわづかに戸外の暗闇に放って、慈愛深さうにこの夜をゆく旅人をひきよせてゐた。そこは外部の見かけによらず、その内部は快活でにこにこしてゐて親切である。宿の主人は極めて愛想よく圍爐裡の側にこの夜晩くついた旅人のために座席を作って呉れて、宿のお神さんがこの晩くついた泊り客の夜食の用意をするために忙しさうに勝手で働いてゐる間を、旅人のために何かたわいもない土地の話などをしてきかせ、一層火をもやしては夜道歩きで冷えきった足を溫めてくれる。やがて夜食もできて、それも濟むと、早速疲れた旅人は寢るために部屋へ圍爐裡の側からひきとる。そして狹い客部屋の寢床の、草の臭ひのする敷布の間にもぐり込み、つひに降り出だした屋根を打つ雨の音と、呻りを立てる野をわたる風の音とをきいてゐると、このみすぼらしい旅宿にとゞまったことも、却ってしみじみと幸福にかんじられる。そして昨夜の一晩ぢうあれた風雨もあとかたなく去って、すらりと明けたその高原の朝のなんといふ途方もない上天氣さ。老い朽ちた八ヶ岳の頂線は朝紅に淡薔薇色に、裾野はいきいきとかゞやいて、その高原の霜に光った朝の寒氣を押しわけるやうにして、この村のこのきもちよい旅宿にとまった旅人は、元氣よく、快よい、きよらかな想ひ出をのこしてでかける。

5

この山脈にはまたよい山小屋がたくさんにある。そこの深林のなか、峠の草原のうへ、谿あひ、澤のかたはら、まったくの山腹の斜面などに、數多くのひと夜の雨露をしのぐにいゝ、あるひは二三日をそこに泊りくらすにふさはしい、いろいろの種類の小屋があることである。それらの小屋には、まったく山人らが山仕事のために時たまにはねとまりもする、土塊と編枝ごしらへの、小さい、純然たる山小屋があり、木樵らが簡素な生活をする伐

木小屋があり、いつもゆるゆると炭を燒くけむりをあげてゐる炭燒小屋があり、そしてまた山まうでの敬虔な登山者のためにつくられた、古い山室さへある。樹の皮をむいてきて、わづかに屋根がはりとし、立った樹そのまゝが柱であつて、ぐるりにはなんの風よけもないほどに、粗造な、小屋ともいへないほどに簡素な、プリミチーフなものから、床は板張りの、硝子戸のはまったほどとゝのった伐木小屋まで、その構造の程度まで實にいろいろと好ましいものが多いのには、いつも秩父をあるくたびにわたくしはひとりよろこんでゐるのである。小屋にとまることのたのしみは、おのづからたゞ深林のなかや、澤のふち、洞穴のなかにねるのとはちがってゐる。

小屋どまりのたのしさ！まったく小屋にねることのたのしみはなんといはうか。小屋から小屋へととまりあるくことや、一日二日の小屋住ひのおもしろさはどう言ひあらはさうか。そのたれひとりゐない小屋のなんといふすゞやかな心易さ、のんびりとし深閑とした愉しさ、遠慮もない、人眼もない、あぢきないくらゐの伸々しさ。深林のあひだ、洞穴のなか、澤のふちにけもののやうにごろりと土にねて、大空を、星座を、樹々の奥ぶかいしづかな姿を觀るときの、自然と生地のまゝ肌をすりあはせるやうな親しさをかんずる、いひしれぬ感興にひきかへて、この小屋どまりに於てわたくしらはまさに、きまゝな、なんの煩はしさのないシンプル・ライフに於て、たのしい夢想と懶惰の賓人となるのである。

かうしたわたくしのこの古い山脈のもってゐる山小屋のかずかずに對しての並はづれてゐる愛は、まづあの將監峠の頂上のうへにある仙波の小屋にそゝがれる。

峠の青い笹原のなかにつゞく峠道が、やうやく牛王院のくろい尾根からつゞく暗い栂の深林帶のなかにはいりこんでからわづか、その落葉に柔かい足あたりのする、かぼそい路ぎはに、その小屋はさゝやかにつくられてあ

る。あの屋根はたゞの笹の粗葺きで、柱は栂のふとい樹枝、壁としてはおなじやうに栂のほそい編枝の參差してあんだ網目、枯れた細枝を敷いての寢床、自在鍵は針金を曲げただけの粗末さの、いともさゝやかな寄りかけ小屋。それは決して美しい形式の小屋ではないけれど、その小屋はその位置と小屋のぐるりのよいことが、またそこでのきまゝな小屋住ひの時が、わたくしを好きにした點である。

わたくしはそこの五月と八月と十月とを知ってゐる。

五月にそこをはじめて訪れたときには、わたくしはその前の三日間を溪流や深林のなかを歩き廻って、心も身もまるで山犬よりも疲れてゐる夕ぐれだった。わたくしは安んじてそのあたたかい小屋に、氣やすく、こゝろよく眠った。その夜はおそらく樹よりも堅く眠ったかもしれない。非常な親しみをわたくしはそのときにこの小屋に對してかんじた。そしてまたそのつぎの夜をそこにおくることなく、わたくしはそのあくる朝はやくそこをでだして、再び山歩きをつゞけてしまった。けれどその小屋のあたたかさ、心易さは忘れられなかった。

そのつぎにわたくしは三年ほど隔てて、夏も晩く、八月の終りから九月のはじめにかけて、ちょうど夏と秋とのあはひのときに、ひとりの親しい友だちとたったふたりで、あついあつい都會をでかけて、そこを訪れた。

そのはじめての小屋の夕べに、もうわたくしらは身に秋風をかんじた。はるかの大洞の谿のながれの音、笹の葉が初秋らしい夜の音をたてて、風をうけてゐるのも心しづかな風情だった。

小屋の夜はたゞにおもひふかい、しづかな世界だった。なにもかも忘れて、うっとりと星座のひかりや笹の葉をふく谿からの風をおもふまゝにたのしんだ。そしてそんなときは焚火をほそくして、夢みたり、空想したりするのである。

そのあくる日の朝は栂のくらい樹のあひだを洩れる日のひかりと小鳥の聲で眼がさめた。焚火のさかんな火に焦げついた飯盒の飯の香ばしい、健康な匂ひは、こゝろと身體の健康と飽和して、この小屋住ひの朝の飯仕度をこのうへなく快活にしてくれた。

それからの仕事はただ焚木あつめと散歩とだけだ。まづわたくしらの朝のあかるい散歩の路は、小屋と森とから離れて、峠のひろやかな笹原のなかにはいりこむ。しんかんとしたその峠の朝の眺望。森のなかの小鳥の歌は次第に遠のいて、そのかはりにあらはれるのは、なだらかにうねる青い笹原の弓なり。尾根が尾根へとつゞく、そののびやかな線のうねり。まっしろな、骨骼のやうに立ち枯れた栂のむなしく空をさす枝のあひだから海の波のやうに、果てから果てへと裏返へるその一面の笹原の葉。ほそぼそとながくそのうへにつゞいてゐる一すじの山徑。この峠のうへの笹原の高原はまったくうつくしい。こんなにも明るい、すき透った、高い風景はわたくしはほかにあまりみない。

散歩の路はとほく峠のもっとも低いところ、龍ばみの尾根つゞきの草の斜面、峠の原の果てまでもかぎりなくのびる。そしてほどよい路のかたはらの笹のなかに、わたくしらふたりはどつかりからだのなかばを埋めるやうに腰を下して、あかずひっそりと青い、露にうるんだ、しめやかな朝の山の姿などをうち眺めたり、またはひとり斜面に倚りかゝりながら、身みづからのこの現在の生きてゐる、よろこばしい感覺の繪圖を客觀する。そうしてまたわたくしらは、散歩の足さきを森のなかの小屋にと向けて、かへりには焚木を拾ひあつめながらかへりの路につく。

小屋にかへれば、また飯の仕度に、ひとりは米をといだり、味噌をといたりする。まるで山の流した、うつく

しい涙のやうにきよく、眞澄みに澄んだ、甘味のある、いかにも生命を潤ほすやうな清水が、すぐ小屋の下の凹みからとろとろと湧き出てゐる。他のひとりは火をもやして、飯盒の飯加減におこたりない。そうして手づからつくった飯と汁だけの簡素な晝餐を食へば、食べたまゝの食器もそのまゝにして、ごろりとふわふわする樹の枝のスプリングがはりの寢床のうへにうすい煙草の煙りを小屋のなかにこめながらねそべってゐる。そしてまたあるときは友だちの頭にうかぶつれづれの歌などを書き誌してゐるのに、わたくしはたゞ歌の譜などをひとり無心に口笛にうつしてゐた。

かうしてたゞ散歩と空想とを日課として、ほかになにひとつ目的も持たず、ぶらりとやって來てみると、このさゝやかな笹小屋の一日二日のなんとたのしいことだらう。どこか清雅でゆっとりとしてゐるし、無爲をたのしむものには殊更に、ただ焚火をしてゐること、あるひは笹原のうへからあかず靑い朝夕の夏の山のすがたをたのしんだりしてゐることがうれしい。

小屋にゐてはそのきまゝに時をすごすことに、深山の樹々の匂ひに、小屋のうしろの森になくやまうぐひすの聲を聽くことに、ぱちぱち跳ねる焚火の音に、この小屋のもつ一切のものに滿腹するのだ。そして小屋を出でては、峠のあかるい展景。靑い夏の山々のすがた。あのむくむくとしてふかい、靜かな、黑みのある靑ふかさ。そのひだとそのとがりと勾配と傾斜の朝晝夕のうつりかはり。雲と日光との面白い屏風のうへのあそび。わたくしたちは眉にむらさきいろのほのかな山風をつけて、そのぐるりの靑い夏の山と湧く雲のすがたをどんなにか愛したらう。わたくしたちはしづかになれた。なにもかも忘れて空をながめることが出來た。都會のことも仕事のこともちっとも氣にはかゝらなく、かうしてとうとうわたくしらはその小屋にまる三日を暮してしまったのだった。

そうして三日前にやってきたのか、それともその朝やってきたのかもわからないといった調子にそこを去っていった。友だちは愉しかったが寂しかったと言った。わたくしはたゞ愉しかったと言った。白い雲のたゝづまひ、そしてはれぱれとした峠のうへを吹く微風。秋になったらまたわたくしはひとりでこゝを歩きに來ようと思ひながら、うとうとと遠く平原のうへに浮くあつい雲をながめながら、峠のほそみちを歩いていったのだった。

十月の、太陽も遠のいて、風の溫度も減じたころに、わたくしの三度目にそこへ行ったのは、なかのよい多くの山友達と一緒にだった。そしておなじくそこにふた晩をたのしく過ごした。

そこへついた峠の夕ぐれは美しいものだった。峠への林道をしづかに歩いてゆくほどに、秋の金茶の太陽は、めづらしく朗らかな一日の、親しみのある、またおごそかな歩みを思はぬまに早めて、西に傾き、右手の、東の空の淡桃いろの雲の下には、むらさき色の夕富士の麗姿が匂ふばかり。どうしてあんなに火山系の古い山體はやさしく美はしいのかと感嘆しながらゆけば、ゆくての龍ばみの斜面も夕映えてあかあかと、峠の空線には金粉が播きちらされて、そのうえの枯れた樹々はまっくろに突ったち、はるかの龍ばみ谷からはやはらかな、匂ひふかい夕暮れの陰影がしづかに谿の底より湧き出てくる。

峠のうへにつくと、太陽はいま西に沈んだところで、遠い枯れた立木の林のあひだに落日の幕はたれかかり、西空一面は鮭の肉色のやうな、まっかな鱗雲。くろぐろとした、冷たい夕風が森のなかからやってきてほのかな冷感は身にしみ、吐く息もほの白い。友だちみんなも昨夜からの睡眠不足の疲れで、足がすゝまない。右手の大洞谷には谿をすっかり埋めつくして、ひとうごきもしない、しづかなネーベルメーヤ。笹原のなかの小徑に腰を下して、この峠のうへの素晴しい暮色をながめてゐると、しっとりと藍いろの夕闇はあたりをこめてくる。青黒

い深林帯のなかの徑にはいると全く足元のみえないくらひの暗さ。そのほうほうたる夕闇のなかに、漸くわたくしらはなつかしい仙波の小屋をみいだした。

そうしてそれから二日間の小屋住ひがはじめられたのだった。このときは夏にきたときとはちがって、いかにもおもしろ、をかしい、愉快なものだつた。なにひとつの氣がねもなく、遠慮もなく、わたくしらはおもふまゝに歌をうたひ、談笑して、そのあひだをひと時のやうに過ごしてしまった。

この仙波の小屋は去年の冬にこゝにとまったものが焚火から燒いてしまったのを、三ノ瀬の村人がこの夏わたくしらのゆくすぐ前に新しくつくりかへたのである。わたくしらはそのときその新しい小屋の匂ひをよろこんだのだった。

つぎにはこの山脈に比較的多い炭燒小屋についてである。これらの炭燒小屋は、多くは山腹、谷あひにあって、わたくしら山を歩くものには、わきみちをしないかぎりはあまりそこに一夜をとまるやうな機會もないが、よく途中で日をくらしたり、雨にふられたときなど、そこに偶然の一夜を送るのも一種の趣ふかさがある。ことにふかい谷あひにある、廢棄された炭燒小屋のわびしいすがた。くずれかゝった石の炭燒竈の下の凹地の羊齒や雜草の生ひ茂った中にある炭燒きのねとまりしたらしい小屋がけのあと。屋根も壁も古藁でつくったのもあれば、樹の皮でこしらへたのもあって、それらはほんとに朽廢した小屋の印象だ。山の中では人間的なものこそ、かへって一種の無氣味さを誘ふものだが、それにしてもそれらの小屋は樹木の伐採とともに移りゆく假小屋のみすぼらしさであるのか、それとも、春より秋までの一時のねとまりの場所なのか、とにかく炭を燒いてゐるものなどの簡素な生活がそれによってもうかがへる。またときには、こんなやうな人ざととほい山中の古い炭燒小屋は、ま

るで死をまつ老翁の座ってでもゐるやうに谷かげの路傍にわびしく殘されてあることがある。

日の暮れまぢかに人寰すでに遠い山路を、ひとりほとほと歩くとき、朽葉のかさなる路のうへになんとあはい夕日の影が散るのだらう。雲の影のまなかひにあって、仙情もほのかな深山のどこかに今宵のやどりを求めなくてはならないと考へなどしてゐるとき、ふとみると、眼のしたの夕闇にせばめられた谷陰から立ち上るほの白い炭を焼く煙りの靄。やがて細い小徑が自分の歩む山路から分れて、その方角へと谿へ下りてゐる。瀬の音は近い。こゝろのうちに今宵はこの谿の炭焼小屋にとひとりきめながら、それを辿ってゆくと、そこには白い煙りをしづかにあげてゐる炭焼竈とそのそばに炭焼のゐる小屋がある。そこには大がいあのバローハの書いたピレネーの山あひにゐるやうな、親切で、氣のやさしい、まっ正直な炭焼男がゐる。山のなかの、今時の文化に染まない、樹やなんかとおなじやうに、すくすくと素直に身も心も育ってゐる、古い日本の典型的な山人がゐる。炭屑の燠のまっかにおこった爐を圍んで、ひと晩をいろいろとそれらの山に住む人々のものめづらしい仕事について、その生活の日常についてきくのも興味ふかいことだ。

不伐の深林のなかや谷奥につくられた伐木小屋、木樵小屋、柚小屋といったやうなものもこの山脈には多い。太い樹幹をたどうち割った厚い木片で屋根を葺き、柱は自然のまゝ、床板は粗雜に厚く、山人らの稚拙な勞作でなった小屋の作りやう。太い焚木の火はいつも晝も夜もそのなかに燃えて、たのしい休息にすゝる茶が沸かされてある。谿の奥ふかいなかに、ぽっつりと置かれたやうな伐木者の氣取らない、純眞な、字そのまゝのシンプル・ライフ。眞ノ澤の柳小屋などはその點で忘れられないものだった。登山者のためをおもってわざわざつくって呉れた、多くの登山小屋などよりも、こんな小屋などにねとまりして、辛うじて山が歩けるときの方が矢張り

嬉しかった。ねがはくば、このわたくしらに與へられた、蒼古な、美しい山脈のなかにだけは、役人の設計したトタン葺きの登山小屋や、ヨーロッパ風に敎化を受けたバタ臭い小屋の建てられないことだ。これらの山小屋、炭燒小屋、木樵小屋よ、いつまでもわたくしらをその場所にゐてむかへてくれ。

6

『山岳』の秩父號が、このわが國の古い山脈の峯々、尾根すじ、谿々について、またその、山歩きについてのもっともゆたかな文獻に充たされていでてから七八年近くの年月は經た。そうしてそれによっても、わたくしらはこの山脈の山歩きの父として、木暮、田部兩氏の名を決して忘れることはないだらう。それらのひとたちが全身にすっかり熱と風とをつけて、めぐりくる、たのしい五月と十月とのこの山脈のもっともよい山歩きの季節ごとに、この山脈のうちにはじめてその足痕をつけていったその當時の紀行を、この秩父號に於て讀むと、わたくしにはそれらのひとびとのそのときの山歩きの態度や心胸内にもってゐたものに對して一種のなつかしい、そしておだやかな美情を感じずにはゐられない。この古い、苔深い山脈のもつあたゝかみのある情愛がまったくそれらのひとたちのこゝろをしっかりと捉へていった。ほとんど十年以上もかゝってそれらのひとびとの辿り歩かれた足痕のいかにわたくしら後進のものにとって貴重であったかは勿論こゝで云ふまでもないことである。ひとつの尾根、ひとつの谿をきはめるまでそれらのひとびとのとった態度の愼重さ、そしてひとつづつ尾根なり、谿なりを自らにまでひらいてゆくのたのしさは決してわたくしらの想像するをゆるさないものだ。ことに最後にあの深谷、笛吹川のみなかみをきわめて、甲武信の頂（いたゞき）にぢかにたどりつくあの記錄あたりは、どうみてもこの山脈に

於ける永く忘れることの出來ない、立派な、そして興味ふかい山登りのうへの文献である。そして特に後者田部氏に於てはこの秩父なる日本の一山脈の懷抱するものがいかに氏の心底をあるときは力づよくゆり動かしたかは（現在でもなほさうであるかも知れないが）氏の秩父號に書かれたものに依っても、また氏のある時の講演會に語られたところのものに依っても明らかに知れることだ。そしてわたくしがまたいかに深い共鳴をもってそれらの山についての文献を當時耽讀し、そうしてこの山脈に對しての未知のつよいあこがれと深い愛着を感じたかは實にわたくしのこゝに明白に言って置きたいことである。そしてわたくしの少しばかりこの山脈に對してなした山歩きの與へた今日までの感銘が、甚だくらべるもおこがましいことゝは思ふけれど、それはまさしくこのわたくしらが先蹤者たちのこの山脈についてもつ感銘とほゞ同じ中心點に重ねられた、何らかの圖形であるやうに、わたくしは自らにさう思ってゐるのである。だが、まだかなしむべきことには、わたくしのこの圖形は、氏等のがまったくの滯りのない全圓であるのに對しては、若い現代日本の登山界の極く邊端にある一部分を象徴してゐるかのやうに、多角形に歪んだ、小さな圖形であることである。勿論この兩つの圖形の相違は、その量と時との間の大なる相違であるとともに、もっと形をはなれて分解の出來るものなら、わたくしの一の成形體はある點では氏等には餘っぽど意外な、ある意味では小生意氣な現在日本の登山界を形づくる一成分を提出することになりはしないかと、わたくしはおそれてゐるし、また恥かしくも思ってゐる。けれどこれは結局は登山のうへの態度なんかの問題ではなくて、一層わかりよい點まで極言していへば、わたくしら現代日本の登山界に於てのヤング・ヂェネレーションを構成させてゐる、一種の時代的特色を現示するの問題であると思ふ。そして依然として氏等及びもっとさかのぼつた日本山岳會のわたくしらが尊敬すべき先蹤者等の生んだ舊代日本の登山界は、今なほわ

たくしらの周圍につよく存在し、わたくしらの行くてを導いてゐてくれるのである。しかし現在のわたくしらを產んだ時代的事情は、一層直接にわたくしらの周圍に、新しい特質をそなへてわたくしらの周圍に存在する。この特質はなにかと言へば、外形的にも內容的にも山登りの發達に伴ふ、いろいろなる登山法、登山形式の變遷である。十九世紀末から今世紀にかけての歐洲アルプス登山界の眞の影響は、この現代日本の登山界のうへにもあたらしい山岳と人間との觸媒作用をし、登山の實質をある點では改造した。(大きく言へば、若き日本の登山界は歐洲アルプス登山界にある點では大いに感謝すべきであらう。たゞし現代の混亂はその過渡時代の峠であるといふことに盡きてゐる。明瞭な正當な方向はすでにやって來てゐる。) しかるにわたくしらは舊代日本の登山界にそれ以上に多くを無意識的に敎へられてゐるのを忘れてゐる。いや、忘れてゐるのではなくて、氣がつかなかったのだ。わたくしと同じく若き山の友らよ、わたくしらの例へばこの山脈での先蹤者らはいかに舊代日本の山登りに嘆賞すべき山登りのうへの外形的追求とともに深い靜觀的、內省的努力によってのみ觸接なし得るこの無邊な山岳の內在世界の根源をつきとめられてゐられるかをおもへ。

ことにこの秩父のやうないろいろな純日本的な特質をそなへた鄕土的な香氣のゆたかな山脈に於ては、特にわたくしらはそれをもっとも日本的に味ははねばならない。たゞにひと通りこの山脈を尾根すじや谷沿ひに步いたとて、決してこの山脈に對してわたくしらは田部氏のやうな、木暮氏のやうな、あのふかい內面的な愛はもてるものではないだらう。わたくしらにはこの深き山嶽よりの情をあのやうに感得はできないだらう。それはいろいろの要素の不足から來ることだらう。單にこの山脈の地理的、地形的の知識に於てはそれらのひとびとに現在に於ては及ぶといふも、この山脈のもつ特殊な、あのひき入れるやうな山のもつ深みとか、おだやかなあたゝかな

情愛のごときをわたくしらは決してそれらのひとほどに感得してゐるとはどうして云へようか。またこの山脈のなかのかずかずの村のもつ特殊な風習、民謡、民話、歴史、傳説等は、從來、少數のわたくしらのなかの研究者によって蒐集され研究されては來たとはいへ、尙多くのものはそれらに對してはそれを享け入れるべき餘地はなかったといふことは否まれないだらう。

近年に到ってこれら、眞に善き純日本の山登りの最もふかいエスプリをもって居られるひとびとが漸く表面的な登山界からやゝしりぞかれてゆかれたのに當って、若い日本の將來の登山界を形づくるものがあらはれて來た。それらは例へば新しい登山法として、スキー登山や岩登りをまぢへた山登りなどをとり入れての、やゝ動的分子の多いものであった。それとともに多少は西歐の山登りについてのエスプリも移植せられたと、わたくしはみとめる。そのやうな、スキー登山とか、冬季登山とか、岩登りのやうな登山形式のもとに山に登るのには、このわが日本に於ては甚だしくそれに適したよい山はない。いちがいに云へばアルプスのやうな高山性の、岩山的の山體のものはない。スキー登山に於てその眞髓の味はれるやうな氷河の滑降も出來なければ、岩登りに於てはとても彼地の眞似事さへ漸くの有樣であらう。それでも、それらの新しい形式の山登りは多少なりとも、皮相的に全然模倣的に行はれずに、それらはそれらとともにその山登りのエスプリを以ってなされたやうである。

けれども、顧ってみるにこれ等の西歐風の登山法に從ふべき山は日本には甚だすくないのである。日本の登山術にはアイスクラフトよりはむしろブッシュクラフトの方がより多く必要なのだ。それに反して、この秩父のやうに、日本アルプスのある部分のやうに、日本的な山に於てはまたこれをのぼるに、これを歩くに、これを味はうには日本的な山登りのエスプリを以ってせねばならないのは當然であらう。而してその日本的な山登りのエス

ブリとは、眞に善き日本の山登りの最もふかいエスプリとは、とりもなほさずこの秩父のやうに「善い日本の山」をほんとに歩かれ、わたくしらにまでひらいてくれた先蹤者等のもっておられたエスプリなのである。わたくしにはそれらの人々のもつエスプリそのものについては何も言ふべきではない。わたくしはそれらの人々に依ってはじめて、ふるいこの山脈の深林のなかにきて、あのしろい石楠花の花をながめるなら、その霧のある日にあるかねばならないことをおしへられ、そこのふかい樹林のなかで、梢の風に幽かな風鐸をきゝ、濃いむらさきいろのやうな、よい樹の匂ひのまじった深林のなかを吹きあるく山風とともに、ひつそりとこの山脈のなかの樹々のあひだをくゞって歩くことをおしへられたのだ。そこのあかるく、美はしい谿あひ、老ひ古びた、ふかい山體のなかから湧きでるやうな溪流、さてはその山あひ、谷々の古い村々や路の多くが、その歴史、民話、傳說、民謠などに色こまやかに彩づけられ、古さの風韻を帶びて、限りのない深みを以ってわたくしのまへに置かれる、日本の首都より平野をかぎって西方にいつものぞまれるこの中部日本の古めかしき藍色の山すがたよ！　わたくしはこの「古い、善き日本の山」をたゝへると同時に、これらの山々をわたくしまでにひらいてくれたそれらの人々にまでどんなにか感謝をすべきだらうか。

しかして、わたくしはまた『山岳』が第二の秩父號をいだすといふことをよんで、この「善き日本の山」についてまた以前とは異なった、或ひはよりふかい、いろいろな文献の集錄せらるゝことを、ひとりよろこぶのである。そして嘗ってあのやうにわたくしをこの山脈にみちびいてくれた『秩父號』のことをおもふと、自分もなにかそれに酬いるやうなことをしたいとおもふが、その後の自分のこの山脈での山歩きに於ては、なんら新しい行程のものもなければ、異なった山旅もしてゐない。たゞこゝにわたくしはまったくこの山脈について、わたくし

のかたよった好尚による、くだらない二三の事がらについて書いた。けれども、この山脈の山歩きに於ては以上のそれらの人々のエスプリによって殆んどみちびかれ歩いたのである。そしていま、それに對するわたくしのいさゝかの謝念が、わたくしをしてこのはしたなる文をなさしめたのである。

（一九二五・六・七）

秀姑巒山脈（紀行と覺え書）

鹿野忠雄

本篇は一九三一年の夏に行つた此の山系への二つの山旅の日記を發表し、且從來の考證觀察の結果を一先づ記錄する。文中に現れる僕に好意と助力を寄せられた諸氏に、此の機會を利用して深謝したい。

紀行　秀姑巒、マボラス、大水窟山の縱走――マリガナン山より再びマボラス山へ

覺え書　秀姑巒山脈の領域――地質地形學的觀察――動植物の觀察――附近蕃人との關係――山名其の他の地名――登路

秀姑巒、マボラス、大水窟山の縱走

一九三一年七月廿七日臺北を後にして、其の夏の第二次計畫である新高山地方の山行へ。八月四日、ハイラロ社のブヌン族蕃人四人を連れて無双（ムサウ）駐在所を出發、サヽルベの稜線を廻り三日を費して、ウマボンゴ山（一〇三一六尺）、マボラス山（一二五六〇尺）、秀姑巒山（一二六五〇尺）、大水窟山（一二〇二八尺）の四峯を經て、玉里横斷道路南（ミナミ）駐在所に拔けた。本篇は其の紀行である。

一、まへがき

新高山彙から眼近く東北の方に當つて、秀姑巒、マボラス、大水窟山と、一万二千尺級の雄峯三座並立する秀

姑巒山脈は、かねてから探つて見たいと絶えず心惹かれて居た山群であつた。それは單に一万二千尺を超へると云ふ著しい高距に誘はれる爲めばかりではない。今から六年前、初めて新高主山の絶巓に立つて好奇と讃嘆の眼を四周の素晴らしい山波に急がしく配つた時に、何れの山にも勝つて此の山群が僕の魂を囚へたからである。心を躍らせる見事な堅岩の哨壁や、原始の夢を秘める特別廣大な密林の稜羅こそないが、此の奥深い蕃地に漂茫として聳え立つ其の姿は、如何にも台灣の山らしく荒削りで、雄大であつたし、其のあくまで大柄な山體の中に、何か知ら他と區別される幽暗と奥深さを藏する樣に思はれたからである。今迄訪れた者殆んどないと云はれたこれ等の山々を前にしては、直ぐにでも取りついて見たい誘惑に驅られたが、山腹の秀姑巒の松林に、アリマンシケン、ラホアレ一味が首狩りに出ると聞いては、其の當時の僕として、大掛りな搜索隊を編成して、此の山に踏み込む事は思ひもよらなかつた。

爾來日は流れて、此の三、四年の間に、幾組かの登山隊は此の領域に足を入れ、玉里横斷道路から程遠くない大水窟山、秀姑巒山の二山は登頂せられたが、之れから隔つたマボラス山は獨り尊嚴を持して登山者を斥けた。台灣に於て多人數登山の嚇々たる業蹟を持つN大尉の一行は、鞍部手前に於て退却を余儀なくされ、他の少くとも三組や、近くはウォルトン氏の一行も同樣の運命に遭遇した。そして之等の組に先んじて登攀を企てた山林課のI技師一行も、天候不良のため頂上より僅かの處で引返されたと傳へられた。

其の大きな山の容積を考慮の外に置いては、別に困難な岩壁も密林もありさうには見えなかつたが！新高山頂上での此の山に對する印象は、登山隊の敗報を耳にする毎に、僕の胸を訝からせた。天候不良と日數不足、之れが登山隊の答であつた。それにしても上記の結果を齎らすからには、山は何か別な險惡さを具へて居るのではあ

るまいか？　それには充分な準備と日程が必要と思はれた。

少くとも日本領土内に於て、最後まで取殘された一万二千尺級の高峯と、それへの登攀。僕はそれをやり甲斐のある仕事に思つた。今迄の様子では險難と想像される峻峯への登頂。僕はそれを貴い試金石と考へた。

二、新　高　へ

秘かに待ちあぐんだ機會は、一九三一年の夏に來た。七月廿五日、三週間の次高山の山旅から一旦歸北すると、新高連峯や東郡大山塊と共に、秀姑巒山脈を試みようと急がしい準備に追はれた。

廿七日午後十時三十分の急行で、僕は第二次の計畫を遂行す可く台北驛を後にした。同行は駒場林科の稲垣龍一君、驛頭には台灣山岳會の木田、井上兩幹事の御見送りを受けた。たまらない晝間の酷暑の余燼は夜汽車の窓風にも紛れず、思ひは早くも凉しかる可き新高の山懷に飛ぶ。四時半二水着、新高の表口の道を取る僕は未だ夜の明けない驛頭に獨り淋しく下りる。稲垣君は阿里山より入り裏道を取つて新高を越え、八通關にて僕に落ち合ひマボラス山行きに加はらうと云ふのである。車中計らずも五年振りに面會した大阪外語の淺井教授と、夜通し蕃人の話に話が彈んだので眠くて可けない。トロ〳〵とする間に、六時半發、外車堤行きの列車が鋭い氣笛を擧げる。集々から乘車された新高郡守中島與一氏に面談し、今後の計畫に就き諒解を得、且打合せが出來たのは幸であつた。窓外に送る濁水溪の廣い流路、其の奥に新高連峯の淡青を望んで水裡坑の驛に下り立つたのは十時過ぎであつた。驛前の支那料理屋でビーフンに腹を作り、台車を一台買ひ切つて、眞晝の强光に眩暈する様な赤煉瓦の街を見拾てる。今日は蕃界の入口内茅埔まで行けば可いのだ。頂嵌を過ぎ、龍神橋の鐵線橋を渡つて、何時も

ながら濁水の岸を嚙む濁水溪の本流に分れ、車は陳有蘭溪に沿ふて、或は飛ぶ樣に走り或はガタコトと氣だるい響を轟かせながら狹い軌道を辿る。熱帶の眼も綾な蝶の數々が眼前を掠め過ぎ、蓊鬱たる常綠樹の蔭からは紺靑の雲を貫く新高の尖峯が絕えず此方を覗いて居る。北回歸線の下に照りつける眞夏の陽光、渡台早々深山に起臥した僕には可なりに應へる。內茅埔に着いたのは三時近かつた。流行り出した山の登山口にはよく見掛ける粗末な宿屋稼業。此の二、三年の間に新高も變つたなと云ふ感が深い。直ぐ前の駐在所に出掛けて打合せを濟ませ、昨夜來の睡眠不足を恢復す可く午睡を貪る。晝間は暑くても夜は流石に涼しい。折から現れ出た十四夜の月は何となく秋の思ひがする。月光の中に遠い山が夢の樣に霞み、蛙の聲が蟬しぐれの樣に聞える。同じ大きさの此の月を二度眺められるであらう之れからの山旅。行く先きの旅を想ふて山戀しさに胸がつまる。

明くる廿九日、東埔へと向ふ。僕の知らない間に台車が東埔まで通じたが、昨年の山暴れに郡坑溪が氾濫し山崩れが台車線路を埋めたので、途中まで步かねばならない。台灣人の苦力を雇ふて荷物を先きに出し、獨り陳有蘭溪に沿ふて行くと、廣い河原の石が夏の陽を眩ゆく照り返し、其の兩岸に見事な段丘が古城の樣に其の側壁を際立たして居る。山崩れの地點は間もなく過ぎた。物の三丁程右岸から岩屑が押し出して、河原の上に堆く積り抱え切れない程大きな岩塊が、一直線の線路條を邪魔して居る。之れを元通りにしようと云ふのか、苦力が群つて土砂を運び、ハッパをかけた碎岩をワイワイ云ひ乍ら取り除いて居る。鐵線橋を渡つて左岸に越え、筆石から再び台車に乘つて東埔へと目指す。暑苦しい茅原を拔け、楠仔脚萬を何時しか過ぎて、懷しい雲懸橋の鐵線橋を渡つて再び右岸に移れば、漸く新高北山が中天に聳り立つ近影を見せ初める。深くなり勝さる溪底を眼下に賞し乍ら行くほどに、山と谷の趣は次第に新高らしい氣分を帶びて來た。又も左から崩れ落ちたガレの手前で台車を

捨て、迎へに來た蕃人に荷を負はせて、東埔への坂路を登る。

新高を訪れる歡びの前に、一抹の憂愁がハタと僕の心を掠める。以前は斯うではなかつたが！此の道を通るのは五年振りである。然し沿道の風景は明かに荒廢した。それは過去の思出を美しくする旅行者に有り勝ちな感情に因るのでは斷じてない。台車一本の敷設は斯くも自然の美觀を破壞するものか？台車を通ずる事、それは單に幅一間の坦路を山腹に刻む事でない。例を擧げて記憶を辿れば、雲懸橋の袂に涼風に翠葉をそよがせて居たタイワンフウの蔭涼しい立木は跡方もなく伐り拂はれた。楠仔脚萬（ナマカバン）手前の原始的な綠林は影を消して唯植民地の夫れのみが持つ頽廢的な小屋の幾棟が之れに置き換へられた。其他新高の沿道を潤色する多くの木立は、何時しか薪に代へられて空漠とした茅原が、我物顏に生ひ茂つて居る。新高山の自然と其の保存。それは山頂近くの地域をのみ保護する事でない。山麓より山頂へ、心ある山岳觀賞者は、其の山岳を綜合的な審美眼を以て味得する、或は日本一と稱し、或は國立公園の候補地と叫んで、新高山を宣傳する計畫が何んだ！僕の六年前に見た自然、夫れは夫れより以前の夫れに比して遙に損はれたものであらう。然し益々荒れ盡さんとする此の現狀を見て、僕は義憤の唇を嚙まないわけにいかない。台車は秋田木材會社が、沙涅仙溪の森林伐採を企業し、且新高登山者を當て込んで敷設したものださうであるが、伐つて呉れと云はんばかりのカナダの森林などとは異り、急峻で雜木の多い此の谷からは木材は思ふ樣に出ず、登山者は余りなく、今では三割引の山の警官專用と云つた樣なわけ、加ふるに沿道の崩壞常ない粘板岩の地質構成は、一雨毎に土砂を押し流して、台車線をアメの樣に曲げて終ふ。先きも實見した內茅埔、筆石間の山崩れの如きも、容易には復舊出來ないであらう。秋木（アキボタ）の如きも初めは充分の豫算を以てかゝつたのであらう。然し此の有樣はどうだ。新高の自然は實用的には出來て居らない。自然を破壞し且

何の利益もない。新高の自然はあくまで峻烈である。自然を蔑にするものは罰せられる。之を見て僕には可なりに痛快である。然し省みて僕の胸は再び拂ひ切れない憂愁に閉ざされる。破壞されて又と還らぬ自然を如何しよう！

十町近くの坂路を登つて東埔へと着いたのは二時であつた。直ぐにクラブへと落着く。海拔約四千尺、陳有蘭溪に臨んだ段丘上にあり、後は郡大山を背負ひ、溫泉としての東埔は已に名高い。熱帶の暑熱から稍々遠ざかつた此處では暑さも左程でなく、ダリヤとカンナの花が派手やかに咲き亂れて居る。新高郡蕃地一圓を統轄する靑砥(岩次郎)警部に面會し、マボラス山共の他山行の計畫を協議する。氏も亦最近秀姑巒山からマボラスに到る途中止むなく引返された一人であつた。多くの有益な踏査談を聞き、且種々の便宜を受けた。そして擊退せられた數組の登山隊の模樣をも聞かせられた。繰返された失敗を前にして勇み立つのは人情である。僕の登高慾は人知れずいやが上にも湧き上つた。

三、無双出發まで

翌三十日東埔社の蕃人二人を案内として、日歸りで郡大山(一〇八六五尺)に登行した。其の目的は一方、秀姑巒山脈の地理地勢を見て登攀の日の準備としたいからであつた。山頂に着いたのは正午頃であつたが、マボラスから大水窟に續く連脈は、危く雲霧に隱れようとする合間から辛うじて望見する事が出來た。マボラスは別に之れと云ふ嶮峻さを見せて居なかつたが、其の風貌は堂々として其の地位を裏切らず、西面の驚く許り大きく崩落した斷崖が無氣味に赭く光つて居た。目的の山を仰いで覺えず急ぐ歸路を辿り東埔に着く早々、マボラス行きの

準備をする。

僕の最初の計畫は今迄の登山隊同樣、八通關から玉里横斷道路の南駐在所に到り、其處を出發點として、大水窟、秀姑巒山を經てマボラス山に登頂し、同じコースを引返すと云ふのであつた。稻垣君には卅一日八通關で落合ふ手筈なので、明日は八通關、其の翌日は南まで行つて樂な行程に英氣を養ひ、三日を費して其處から往復しようと云ふのである。處で荷物を携行す可き蕃人であるが、一万尺を越える横斷道路附近には全く蕃社はなく、何れも七千尺以下の溪間に限られるので、蕃人は下から上げて貰かねばならない。尙考ふ可きは狩獵區域の問題で、蕃人なら何處の蕃社でも構はないと云ふわけに行かない。之れが爲めポーターには、此の山の裏に當る郡大溪のブヌン族の中、無双駐在所管内の蕃人を使役する事となつた。明日東埔を出發して新高登山路を辿り、觀高(カンカク)に正午頃着く頃には、前記の蕃人も亦其處に來られるであらう。そして其の夕刻には稻垣君を加へて同勢全部、八通關に揃ふ事になる。荷物も整ひ蕃人の狩集めも濟んで、初めてゆっくりパイプをふかす事が出來た。此度は台灣の山行には先づ附き物の警察官の護衛なく、蕃人丈と自由に山を歩き廻る事が出來ると思ふと、常の山行よりも氣樂さを禁ずる事が出來なかつた。

翌くる三十一日、明けて見ると暗い雲が低く垂れ下り遂には太い雨まで降りて來る。遠近の山々が霏々として雨に煙る。今に止まないものかと十時過ぎまで待つて見たが、晴れるどころか一層惡くなつた。無双の蕃人も出發したと云ふので、雨を冒かして八通關へと向ふ。大變な濃霧である。進むに連れて益々深くなる溪谷の底も一面の灰色だ。雨滴も太くなり風さへ加つて、斷崖の縁を開鑿した道を傳ふのは稍々危險である。樂々(ラクラク)を過ぎる頃、對岸に天地を轟す大音響が擧る。雲に隱れて見えないが、余程大きな山崩れが起きたと見え、其の火花を散らして岩

の打ち合ふ物凄い響を聞いて居ると、新高の自然の殘忍性を思はないわけにいかない。そして不可抗力な山のアクシデントを考へる。對觀（タイカン）に近づく頃又しても凄じい大地の裂ける音を聽いた。

全く暴風雨氣味になつた豪雨を衝いて、觀高まで來て見ると、無双（ムサウ）の蕃人五人は、已に着いて、駐在所の暗い土間に集り、ストーヴを圍んで居る。之れでは山登りどころの騒ぎではない。文字通り沛然とした大雨が四圍をも見分かぬ程に大地を叩き、其の間を猛烈な疾風が縱横に荒れる。身動きも出來ない斯んな模樣に、八通關行きを中止して、若狹寶作氏の宅に御厄介になる。八月に入つた天候は何時も惡い。年に仍つては夏のまる二月山暴れの永引く事もあると云ふ。今年は果して如何であらう？此の夜は暗い前途を思ひながら、遲くまで風の音を聽いて居た。

今日は八月の一日である。雨は幾分小降りになつたが、風は依然として衰へようともしない。未だ電話線の切れないのを幸に、新高下駐在所に到着した稻垣君を呼び出して、道は良いのだから、兎に角、新高主山を越えて此處まで來ないかと云ふと、一万一千尺の同所では風當りは特に甚く、外に出るのは思ひも寄らない。其の上主山と新高駐在所間の道路が崩壞したので、又元來た阿里山に引返すより他ないと云ふ。此處に於て互に聲は聞き合ひ、二里足らずの距離にまで近寄つて、二人は遂に相合ふ機會を得なかつた。

雨が何時止むとも見えぬ氣配に、僕は此の蕃人と共に、郡大溪の谷に下りる事に決心した。そして其處に點在する蕃社でも訪れながら、氣長に天候の恢復を待つ事にした。可なり余裕を作つて來た此度の旅の間には、何時かは山が晴れ上る事もあるだらう。僕は斯う定めるより他途がなかつた。

未だ降り止まない雨の中を、合羽にくるまり乍ら僕は觀高を後にし無双への坂路を下りる。後には折角の狩獵

の門出を挫かれた蕃人がガッカリして從いて來る。今度こそは一緒に行けると思つたマボラス行の山旅にも、山友は故障が起きて、又しても何時もの獨り旅だ。

風表を除けて谷間に下りたせいか、風當りは弱くなつて、やがて何時ともなく靜まつた。柔い觸感を以てソッとかき抱く樣なベニヒとニヒタカゴヱウの麗しい針葉。森の木下道は人の心を優しくする。梢を通して漏れて來る雨滴の音に聞き入り、無邪氣な小鳥の聲に耳澄まし、果ては森を離れた白雲の動きに見とれては、僕の心は間もなく全き平靜の故鄕へと還る。あの風を憎むまい。此の雨を怨むまい。人は自然の與へるものを素直に受け入れて最善を盡してさへ居れば可いのだ。森を靜かに濡らして行く雨が僕の魂へも滲み透る。悔ひのない氣分が僕を澄み渡つた水の樣に支配する。

蕃人がとても神寂びた蕃歌を歌ふ。それが森の中に不可思議な反響を以て籠もる。此の原始な人間の唇から漏れる韻律は、此の場合西歐の如何なる偉大な作曲家の創造にもまして、僕の魂に徹する。新高裏の太古乍らの森林、我々と遙かな時代を隔てる此の古代人。此の二者の織りなす幽幻な階調。僕の血潮に忘れられて居た或るものが、時ならず眼覺める。台灣の自然の中に我々の求める一つのものは、確かに此の原始ではなかつた？微笑まずには居られない樣な歡びの火が、僕の胸の中に燈される。

長かつた森もやがて終つて、我々はもう可なり低く下つた。丈高いスヽキの間にタカサゴユリが高く花梗を拔いて、甘い芳香を雨後の大氣に漂はし、間近く迫つた溪谷を奔下する濁流が聲高らかに鳴る。ボクラウ駐在所を過ぎて、郡大溪の縱谷が視界に入り、薄陽を受けた山襞が華やかに照る。ブヌン族郡蕃の蕃人が古來の傳說を培ふ山奥に秘められた谷。攪き亂されない山鄕の靜けさが此處にもあつた。

銃を擔いで出迎へられた三島(秋三郎)氏に出會つて、尙も無双駐在所へと急ぐ。マボラス山へ續くサヽルベの尾根はあれだと指さゝれる方角には、頭を雲に覆はれた太い尾根が、覆さる樣に溪谷に落ちて居る。そして其の對岸山腹の平坦地にトタン屋根がキラリと光る。無双駐在所だ。その平坦地は明かに段丘だ。山が大きいとは云へ、その六千五百尺の高距には全く驚かされる。

溪底近く下りて鐵線橋を二つ渡り、曲つた坂道を登りつめて赤榛の林を拔け無双駐在所に着いたのは二時であつた。昭和三年郡大社脫出蕃事件によつて設置された此の駐在所は、嚴めしい木柵をめぐらして木の香も未だ新らしい。後は直ぐにハイラロ社の蕃社である。折よく空いて居た一室を借りて根據を定める。(此處はそれ以來圖らずも新高地方五十日の山旅に根城となつた)。此の淋しい山奥の駐在所を與る二人の巡査の人は、僕の旅を犒つて未だ晝間と云ふのに酒盃を奬めて呉れた。

天候は明かに恢復した。擴つた雲間から青空が滲み出る。若しや稻垣君がやつて來はしないかと二日を待つて見たが、矢張り便りがない。遂に頼りになるのは自分丈だ。明四日には愈々マボラス行と決心する。

明日からの蕃人丈との山旅に蕃語が出來なくては話にならない。マシタルンの野中(勝藏)氏を先生として、殆んど忘れて終つたブヌン語の會話を勉强、蕃人に山の樣子を尋ね且目的の山の蕃名を聞き質す。マボラス山はマホラス、秀姑巒山はウシタイガン、大水窟山はウパクボらしい。次にコースを蕃人に徹底させる事だ。サヽルベの稜線を辿つて、ウマボンゴ山を經、最初の計畫より慾張つてウラモンと呼ぶらしい地圖上一一七七〇尺の高峯を極め、豫定の三峯を縱走して南へと拔ける。之れが果して成功するものか?眼の前に毛皮を着た蕃人の黑い顏を凝視めて明日からの旅を思ふ。平常五發の彈丸をしか貸して貰へない處を、僕の護衛をも含むと云ふわけで、十

發づゝの彈丸を分け與へられた蕃人四人は、雀躍しながら蕃社へと歸つて行つた。

其の夜は明日の門出を祝ふ樣な快晴であつた。周圍の眞黑い山に劃られた狹い紺黑の天井に、梨地を振り撒いた樣な星屑が凄慘な光を投げかける。塵界を離れた此の神秘な美しさに、思はず「すごい」と獨り語ると、未だ此の駐在所に來て間もない海老根(子郎)氏が、直ぐ之を受けて「とても淋しいです」と云ふ。

四、サヽルベの尾根

八月四日、今日は愈々待ちに待つたマボラス行である。奧山行の興奮に昨夜の夢はともすれば破れ勝ちであつたが、隣室の眠覺時計の鳴るのを聞くと直ぐに床を蹴る。空を仰ぐと滿天の星で、靑玉を縷ばめた樣な星の一つ一つが純らかな光を投げる。其の光に、此の山行に幸あれと思はずも祈る。夜の蕃社に喧しい蕃犬の叫聲が聞えた。今日の山行の蕃人が起き出したのであらう。間もなく蕃人がやつて來る。手に〳〵重い銃を擔へながら。荷物を分けて駐在所を出る時には、漸く色づき出した淡靑の大空に薔薇色の色彩が薰る。かなり蕃社で暇取つて、異樣な眼を見張る蕃人の群に見送られ、蕃社を後にしたのは五時十五分であつた。

蕃社の直ぐ裏手からハイラロ溪本流の右岸を傳ひ、間もなく溪底に下り、蕃人の危い假橋を渡つて左岸に還り、ウマボンゴに續くサヽルベの尾根をグン〳〵登る。僕も話しかけず蕃人も物云はず、ひた走りに登る。登りにかけては蕃人にそんなに敗(ヒ)けを取らない。然し急な山腹を眞直に行くのは仲々樂でない。未だ早朝と云ふのに輓馬の樣に汗を流して終ふ。徑は多く丈高い茅原で處々に雜木が茂つて居る。

一時間餘も夢中で足を急がせて居る中に、粟畑が現れた。此處は已に八千尺を超して居る。ブヌンの畑は隨分

高くまである。時計を見ると六時半、出發以來初めて腰を下して、互ひにゆっくり顏を見合ふ。シマカショ（汝は何と云ふか）？　ワンリック・タケシギヤナン、ハイスル・タケシタハヤン、アトル・タケシモラン、アスラン・タケシタハヤンの四人である。羚羊の陣羽織を着たワンリックはユーモラスな親爺だ。仲々狡るさうなところがある一方、何處か人の良ささうなところがある。アトルは見るからに獰猛な蕃人だが可なりに無邪氣だ。鹿の皮の狩獵着に身を固めたハイスルは丈が高く如何にも敏捷さうだ。山の眠は頭から覺める。山の端を離れた太陽がもう眩しい光を浴びせかけ、ハイラロ溪右岸の山は逆光線に霞む。未だ青い粟の葉尖に光る朝露も、直ぐに乾いて終ひさうな上天氣である。ウマボンゴの圓い頭が左程遠くない。

尙も茅原の中を汗を流し乍らズン〳〵登る。今日は實に素晴らしい天氣である。こないだ登つた郡大山が見え近くは東郡大山の山連から鵬大山までが明るい空の下に榮え、今や全く昇つた朝陽に、對岸山腹の高所にまで作られた蕃人の畠が、色鮮かな斑紋となつて現れる。靜かな然し鮮やかしい朝の情景である。足元にはタカネヒカゲノカヅラやサクマリンドウが出て來た。アベマキの大木の林に少し休んでから又出掛ける。（七時二十分）

ウマボンゴ頂上直下の森林が頭上近くなつた。叢に咲くアリサンシモツケの花を見送りながら、相當深い藪を踏み分けて行く中に、苦しい急坂もやがて樂になり、前に打ち仰いだ森林の入口に着いた。岩角に腰を下して初めて朝食にする。時に八時五分（此處をオウ、アンと云ふ）僕は先づ一服とポケットにパイプを手探り、蕃人は辨當箱（トタバ）を開いて粟飯を食ふ。東郡大山が栂の森林帶を拔いて青空に榮える。今日の天氣は全く安心して良い。八時二十分には此處を出て深い森林の中へと歩を運ぶ。樹種は多くタイワンコメツガで、ニヒタカヤダケの下生えをこいで行くとイワヤマヒカゲが驚いて逃れ飛ぶ。タイワンオホアカゲラや何だか分からない鳥が居たので、彼奴を捕

れと命じて藪の中に座つた。追ひ廻すのに隨分時間をつぶしたが、逃げる鳥は皆逃げて終つたので、又も藪を分けて頂上へと志す。

五、ウマボンゴ

徑は間もなく深林を終えて綏い尾根條へと出た。下地は急にカラリと開けたタカネスヽキの短生に變り、ニヒタカアカマツの老木が何本も典雅な枝振りを見せて居る。綠の床にはタカサゴユリが珍らしくも賑やかに群落し、赤い松葉の間からサクマリンドウの清楚な花が覗いて居る。袖を引き止める樣な此の場の情景に、蕃人を誘つて又も一休みだ(九時半)。松籟の幽かに鳴る下の休息は樂しい。

枝振り面白い松の間から僅かに開いた南の空を顧みた時に、僕は此の世ならぬ美しさに思はず嘆聲を擧げた。親しい新高の連峯が見違へる樣な粧を凝らして浮き出て居るではないか！東山と主山が中央に、其の兩側に北山は近く南山は左の端に小さく現れて居るではないか！神々しい平和なセルリアンブリューの地に、東山主山の赤裸々な懸崖が虹の樣なピンクに光る。そして深い山皺は濃いコバルトブリューだ。眩ゆい眼を射る光でない。平和なそして見れば見る程其の深みのある色彩に囚へられる美しさだ。怪しいまで五官の奥に訴へる官能的な麗しさだ。それは天國の夢幻的な夕暮に咲く一輪しかない花の樣にさえ見える。

何と淺薄な人間の言葉よ！之れが汝の讃へ且再現しようとする言葉の總てなのかと、もどかしさと淋しさに叫び出したい樣な其の時の氣持は永久に忘れられない。熱帶の大氣の秘める不可思議な光の幻術。それは常の男性的な感じを裏切つて、優しい女性をさへ思はせた。ふとあの上に人間が登る事を考へて理窟なしに醜い事に思つ

た。

ウマボンゴの頂上が近いので、九時四十五分には此處を惜くも離れた。新高の美しい粧にあくまで後髪を惹かれながら。幾らか緩い坂を登る中に、ニヒタカアカマツの木立がなくなつて唯短いタカネスヽキを踏む。ウマボンゴは和かな弧線を引いて右手に見える。我々を導く狩獵路の踏み跡は、頂上を通らずに直にマボラスの方に續くので、蕃人を先きへ遣つて、僕獨りウマボンゴの登頂へと足を伸ばす。緩い滑かな茅戸だ。ニヒタカマツムシサウが一面に咲き亂れ、其の淡紫の色彩に更にニヒタカリンドウ、ニヒタカセキチクの黄と紅が入り混る。モンキテフが活潑に飛び廻る。十分位で頂上へと着いた。(十時十五分)

一〇三一六尺の高距も、大柄な秀姑巒山脈の中では、其の前哨を承る平夷な小山に過ぎない。唯タカネスヽキのみに敷き詰められたなだらかな築山、最高點は南部にあり、其の西面に乾上つた水溜りの跡が凹んで居る。あくまで氣の寛ぐ此の頂上は好い展望臺となつて、更に高き山へと近寄る歡びを倍加する。新高連峯、東郡大山塊、巒大山、これから眼指す秀姑巒山脈の主稜、郡大山と八通關山との鞍部に認められる觀高駐在所、それから無双へと下る警備線。我々は已に人煙を去つて全き山懐へと抱かれて居るのだ。

頂上を去つて蕃人の見えなくなつた方角に足を急がせて茅戸を下つて行くと、蕃人達はニヒタカアカマツの木蔭に荷を下して呑氣に煙草を喫つて居る。實に好い天氣だ。青空と草地と松樹の間に交はされる朝の晴れやかな應答。ほんとうに時機を待つて見て好かつた。人間の貧弱な先見力で現在を託つのは當らないとしみ〴〵顧みられる。

紫色に繰り擴げられた秀姑巒山脈の屏風の中に、三つの頭を有つマホラスが眼の前だ。そしてウラモンが屋根

形をして其の左に續いて居る。蕃人の呼ぶ之等の山名は全く地圖に合はない。蕃人が間違つて居るのか、或は地圖が誤なのか、全く以て頼りにならない。實地踏査を缺く臺灣蕃地の暗黑を思ふ。かなり休んだが十時三十五分此の休場に別れを告げる。

之れからは暫く緩い下りだ。相變らず短い茅戸で鹿の足跡が其處此處にある。蕃人は鼻をクン〳〵云はせながら眼を輝かす。下るに連れてマホラスは、ウラモンの西北尾根に隱れた。然しウラモンは未だ雄壯な山體を前山の上に載せて居る。ウマボンゴから略々同一水準を上下した徑は、急轉して千尺近くの急坂を登り出す。萬尺を越ゆる高所と云つても、眞晝の陽光は燃える樣だ。汗は瀧と流れ、暑さを知らぬ氣に呑氣に飛ぶナガサハジャノメが憎らしい。坂の途中で十一時半、尙も三十分許り忍苦を續けると、ウラモンから西北に伸びた尾根が頭上近く見え出した。

蕃人は此處で晝飯を食べようと云ひ出す。時正に正午なので、荷物を投げ出して休む(此の地點をトンタナーマンと呼ぶ)。左手の斜面二町も下れば水溜りがあつて、蕃人は此の水を汲んで來て、ゆっくり晝飯の支度を初め出す。草原には同じくニヒタカセキチク、マツムシサウ、ニヒタカリンドウが咲きこぼれ、水溜りにはマメゲンゴロウが泳いで居る。此の水の水素イオン濃度を測つたら、六・一あつた。

六、オブナビオンの小屋

眞鍮の鍋に水を汲んで火を起し、粟飯とサグサヴのスープでのんびり腹を作り、食後の一服を加へて一時間と二十分。少し伸び過ぎたので蕃人を追ひ立てゝ早々出發。先きの尾根條へと左斜めに登る。相變らず短い茅戸、

マツムシサウ、ナガサハジャノメと、同じ情景である。ウラモンがいよ〳〵近く、東郡大山塊の未知の山々や、ハイラロ溪上流の荒削りな大地の彫刻が見渡される。高きに登るに連れてニヒタカアザミやニヒタカヘビノボラズが現れた。露岩が次第に多くなり、岩角にニヒタカビャクシンの雅かな枝が黒綠を湛へ出す。ホシガラスやチメドリを追ひ廻したが、仲々思ふ樣に中らない。今日の上天氣も午後になつては次第に惡くなる。陽が影つて雲が出ると、急に四邊は淋しくなつた。ニヒタカハンメウが足元をノロ〳〵匍つて居る。

やがてやうやく先きの尾根條へと出た。暗い雲がいよ〳〵陰鬱だ。ニヒタカビャクシンの見事な群落を拔けて廣い凹凸のある山のうねりを過ぎると、一寸した頭へと出た。時に二時二十分（蕃人は此處をオプナビオンと呼んだ）。冷えた岩に腰を下して一服やる。ニヒタカシャクナゲとビャクシン、それにニヒタカトドマツ、樹としては今では此の三種丈になつた山のたゞずまひが、高山の氣分を强調する。南側の斷崖に雲が渦卷き、ウラモンが時折ノシかゝる樣に現れる。

寒い雲に追はれて間もなく出發。懷しい小屋と暖い焚火を思ひ乍ら先きを急ぐ。徑はニヒタカヤダケを分けながらトドマツの純林中を傳ひ、ウラモンとの鞍部に下りる。それからウラモンの西面を南（右）へと搦む。雲が益々深い。先頭に立つハイスルが「之れから斷崖だから氣をつけて呉れ」と云ふ。傾斜は急であるが、初めの中は大した事もない。ヤダケに掴まつて行けばよい。濃い霧の中にタカサゴマシゴの聲が聞える。ソロ〳〵高山植物の可憐な花が現れ出した。無心に進んで行くと、ミカドキジの雌が突然けたたましく飛び出してヤダケの蔭に隱れた。八方搜したが遂に逃す。ハイスルが仔を連れて居る筈だと、附近の藪をかき分けると雛が二匹見付かつた。未だほんとに小さい。今度は雄の聲が聞える。直ぐに蕃人は藪の中に見えなくなる。尙も進む中にいよ〳〵險し

い斷崖が近づいた。其の詳細は濃霧で分らないが、下方から聞えて來る溪流の響や岩壁の樣子から判斷して、直下何千尺の斷崖の中途をへづつて居る事丈は確である。いくら必要に迫られたからと云つて斯んな惡場に徑をつけるのは、流石山慣れた蕃人だ。雨天ならば先づ不可能、多人數ならば恐らく悲しい椿事が起るであらう。蕃人四人に僕一人、都合五人の人數は、此の樣な奧山の旅には極めて好條件である。

手をかける岩角には澤山の高山植物が咲き誇つて居る。異邦人の訪れたのは勿論今日を以て最初とする。あくまで淨い香を損はれずに、狹い岩場にいっぱいの花だ。カハカミウスユキサウ、コダマギク、ニヒタカハタザヲ、ニヒタカクリン、タイワンアカバナ、グンダイモジズリ、ニヒタカセキチク、ニヒタカアザミ、珍らしい白花のスミレや赤いカウゾリナも初めて見つかつた。危い岩角につかまつて、へつる途中にも余りの美しさに秘かに其の二、三を手折つてポケットへと忍ばせる。新高山地方では此處が最も豐富の樣に思はれた。

徑は少しの上下があつても先づ水平である。然し物凄いガレなどにぶつかると可なりの昇降を余儀なくされる。雲が一時引いて附近の地形を窺ふと、想像に違はず、我々は身の固くなる樣な崩れ易い斷崖の途中を、辛うじてへつゝて居るのだ。赤裸々な崖の面には褶曲の弧線が無氣味に描かれて居る。二、三度急な瀧とも溪ともつかない流を越えた。ガレを横切つた。又ビャクシンに縋つて、崩れさうな足場を危く踏んだ。そして最後に最も急な岩のゴロ〳〵した斜面を斜にズリ落ちると、一寸息のつける處がある。其處は大きなガレの一部に樹木に依つて作られた狹い安全地帶である。此處に小屋を發見して喜んで近寄る。時正に四時半。

椴松の皮で屋根を葺かれた一坪足らずの、さゝやかな小屋。然し安心して今夜の宿を乞へる小屋。蕃人も久しく來ないせいか、附近に生ひ茂つたイラクサが座敷の中をまで占領して居る。

アトルに水を汲ませ、他の蕃人を鹿狩りに遣る。僕は採集品の整理をする。植物には珍らしいものがある。ミカドキジの雛が傍でピョ〳〵鳴いて居る。

雲が押し寄せて來て寒い。リンネに貫つた筍と鮭鑵を叩き切つて味噌汁を作る。飯盒で飯を炊いた。簡單な晩飯を認めて居ると谷の底で銃聲が轟く。

雲は頻りに動いてやまない。先程迄雷が下で鳴つて居たがもう止んだ。下界は恐らく平和な夕方が訪れて居る事であらう。今日の最後の光が雲を明るく染めて、其の晴れ間からマホラスの前山の斷崖が覗かれた。泉の樣に噴き出でた小瀑が白い垂線を引く。

蠟燭が最後の息を引き取る時に一際明るくなる樣に、今の雲の輝きは夫れであつたのか？急に闇が近づいた。今夜の寒さを思ふ。雲が絶えず動いて、其の上にひろがる天は未だコバルトだ。そして明日の天氣を約束するピンクの香がコバルトの中に一しきりはためく。明日は天氣なのだ。そしてマボラスの登攀である。僕は躍る血潮を全身に感じた。

四邊は全く夜の帳に閉ざされた。明日は早朝立つために、飯を二食分用意してから、マドロスを相手に、靜かに闇の深まるのを凝視めて居る。蕃人がやうやく歸つて來て、もう一寸の處で大きな鹿を逃したと殘念がる。曇つた空が又晴れて星が鋭く光り出した。小屋の前に伸び上つた椴松の立枯れが、すっくと闇を壓して黑く立つ。

七、ウラモン山登頂

夜中には二、三度起きた。蕃人が火を絶えず燃して居るためか割合に暖かだつた。最低寒暖計は七度を示して

居る。心配なためか、寒いためか眠覺めては空を仰ぐと、星は穩かに瞬いて居る。山の露營地に於て、我々は最も天と地との高貴な對象を感ずる事が出來る。算へられない程澤山な星の中で、何れが僕の守り星か？

最後に起きた時は未だ夜明前の暗さであつた。今起き出てもガレをへつるのは、全く明るくならなければ危險だと思つて、そのまゝ横になつたが、再び眠を開いて見ると、もう血を流した樣な今日の陽光が、前のガレの頭を眞紅に染めて居た。今日は八月五日、ウラモン、マホラスの登攀だ。余程余裕を持たなければならないと、蕃人を督してそのまゝ出發する。此の小屋にも御別れだ(五時半)。

又してもガレの中途をへつる。危さは前にも增して甚しい。そしてニヒタカシラヤマギク、ニヒタカキンポウゲ、カハカミウスユキと、一面の花である。下にはウラモン溪の源頭が險惡な巨口を開く。やうやく安全地帶へと着いたのは時正に六時。顧れば又と再び通りたくないガレと懷しい昨夜の狩小屋が眼に留まる。此處はウラモンとマホラスを繋ぐ鞍部で、蕃名は矢張りオブナビオン。荷物を全部後に遺してウラモン山の登頂へ。磊々たる巨岩を飛び胸をつく急坂を登る。ビャクシンの枝を分け叢をくぐる。其の下の綠の床にはアザミとニヒタカフウロが桃色の花を點ずる。枯れた倒木の點在する茅戸にはニヒタカセキチクとフウロが一面だ。左手には昨日へつつた大斷崖が落ちる。今度は其の緣の砂場を傳つて行くと、生新しい羚羊の足跡が無數にある。人訪れない處女地に群れる獸よ！愕いた事にはタイリンアカバナが見つかつた。今を盛りと咲いて居るのも、長い夾果を結んで居るのもある。次高、南湖、中央尖山と北部の三山より他知られない、此の珍種の發見はウラモンの登頂に先立つて先づ歡びを與へる。頂上で合ふ事を約した蕃人は鹿を追ひながら右手に搦んで見えなくなつた。僕は靜かな足取りで尙ほも登る。見事なビャクシンの樹海である。風が下から吹き上げる爲めか、枝は皆上方へと匍つて居

る。ミソサヾィが音もなく枝を渡る。清淨な山頂は次第に近づいた。やがて頂上に達する。時正に六時五十分。

西側は大斷崖であるが、頂上は思つたより平凡な茅戸で、其の最高點より北に續く稜線は太いビャクシンの密林で北方の眺望を遮る。之がウラモン山の頂上であらうか？　未だ高い處がありはしまいかと、東に延びた茅戸の尾根をかなり下つて見たが、北部に見える頭は遙に低い樣だ。それは間違ひなくウラモンの頂上に違ひない。

余り廣くない絶巔には人間の足跡をとどめる何物もない。唯淸淨な神域に太古ながらの太陽が輝く。斯くして蕃人以外には辿り着いた事のない無名峯ウラモンも、遂に僕の登頂のリストに上るのか？秘やかな歡びと臺灣蕃地の未開を思ふ。

早朝の高山の大氣は爽かで且あくまで透明である。そして其の中に臺灣南半の山地が淡靑に踞る。先づ第一に眼を囚へるものは新高連峯の偉觀である。今迄主山、東山、北山を相接して見た者には、夫れは全く初めての山の樣に見える。誇りやかに兩翼を張つて天空に挑戰する樣に聳え立つた山塊、それは阿里山祝山から望見するよりは、觀望する地點が高い丈一層壯觀である。主山を中央にして北山と南山を左右に從へた姿は、山岳の王者そのものとさへ見える。實に此處よりは新高山の寬いだ姿を見る事が出來る樣に思つた。新高の右(北)には、阿里山塔山の一連が低いが岩石稜々とした岩の屛風を擴げ、其の彼方に霞む西海岸の廣い平野を劃して居る。

辛うじて我に還つて、之から目指すマホラスはと見れば、それは手の達きさうな程眼近く、然し實際は遼遠な空間を隔てゝ、尨大な山體を怒らせて居る。殆んど頂上附近まで下はトドマツ、上はビャクシンの暗綠の衣を纏つた其の姿は、其のマッシーヴな肢節と磊落な劃空線(スカイライン)と相待つて、臺灣蕃地の中央に蹶起する山に相應しい幽暗さと、侵し難い威嚴を感ぜしめる。我々の荷物を殘して來た鞍部から急昇し二、三の瘤を經て頂上に至るコースは

手に取る如く見えた。そして其の山稜線を境として、今や斜に射す陽光に、其の東の斜面は朱と輝き、西は未だ暗青色の支配する山の眠りだ。此處から望む處女峯としての感銘。それは永遠への拜跪以外の何物をも感ぜしめない。

マホラスから東の方タルナスに落ちる長大な山稜の上に、威風四邊を拂つて此方を睥睨するシンカン山(一一一五七尺)は、又此處からの展望中での白眉だ。其の帝冠に似た山形は次高山から望んだ中央尖山に髣髴とし、其の連脈上に急聳する樣子は古い歴史を語るモナドノックを思はせる。忽然として湧いた一片の斷雲に山の姿はより潑溂とする。

ウラモンの頂上から低下した一の尾根は東に續き、其の奥にウラカバン(マリガナン)が富士形をして聳え、スレートのガレが殘雪と見紛ふほど朝陽に眩ゆく光つてゐる。其の右(南)に波打つカシパナン山一族の摑み處のないヌッとした山體よ。又其の左手(北)に展開するハイラロ溪上流の山々よ。無名峯簇立する東郡大山塊の複雜さよ。之等の山と谷を隈なく巡るには何十年を要するであらう。何時もながら感ずる悠久感がひた〳〵と胸に迫る。

頂上は南北に長い。タカネスヽキの茅戸にはビャクシンとヘビノボラズが生え、ニヒタカフウロ、ニヒタカアヅマギク、ニヒタカアザミが花咲く。可なり大きな結晶の水晶が見つかつた。

一わたりの展望も濟み、地圖を出して如何しても合はない四圍の地形に首をひねるのにも厭きて、快い山頂の靜寂にボンヤリして居ると、鞍部から鹿を追ひつゝ南を廻つた蕃人達が、東の尾根から聲高らかに登つて來た。話は今しがたの狩の失敗談だ。山頂は急に賑やかになつた。シンチンラヽザウラモン(ウラモンの頂上は此處か)?と、念のため尋ねるとオーン(然うだ)と云ふ。

長く居たいのは山々だが、マホラスの頂上が雲に隠れない中に行きたいので、やがて惜しくも別れを告げる(七時五十分)。見事な快晴ではあるが、もう遠くの山には白雲がチラホラ湧き出した。ビャクシンの藪を泳ぎながら下りを急ぐ。カヽラ(タイワンホシガラス)が軋しる様な聲で鳴き、タカサゴマシコの雄がビャクシンの頂邊に止つて紅色の羽色が朝陽に鮮かだ。鞍部に著いたのは八時十分。此處で初めて朝飯を食べる。暖い陽光に日向ぼつこしながら。

アスランが、止せと云ふのに獵銃でミソサヾイを打つて首が飛んで終つたり、ハイスルが太いビャクシンの立木の穴洞から蘚で作られた深い椀狀の巣(地上一間位の所にあり、中にミソサヾイの雛が三羽居た)を捜して來たりして思はずも時間をつぶした。尙もユックリ煙草を喫したがる蕃人をすかして、雲が出ない中にマホラスを極め、それから鹿でも獵らうと論して八時三十分此處を出發する。

急な尾根に取りつく。丈低い茅戸だ。好い加減登つて少憩を取り更に登る。ウラモンは登れば登る程、壯大な斷崖を擴げ出す。ニヒタカヘビノボラズの群落を過ぎ、マホラス西北面の山腹に見事な純林をなすビャクシンの長い森林を拔けて、再び茅戸に出た時には、ウラモンはあくまで壯嚴な斷崖、大崩壞地を前にして聳え立つた。大きな山だ。今まで之れに名が與へられて居ないとは！僕は半ば呆れる氣持で、其の巨大な山體をつく〴〵見守つた。茅戸には白骨の樣なビャクシンの殘骸が轉つて居る。鳥を追ひ乍ら尙も高きを目指せば、マホラスがいよ〳〵近くなる。其の左に圓い前山を侍らして。已に一萬二千尺を越える高距である。其處此處の茅戸には、郡大山以來何處にも見なかつたミヤマコケリンドウの深紫の花を探し出す事が出來た。

圓い前山に續く尾根から一寸右に外れると、ビャクシンの太い立木が森林を成して居る。ハイスルが急に此處

に水があるから泊らうと云ひ出す。今日の行程としては餘りに近過ぎると思つたが、明日充分南駐在所まで行けると云ふので、今日はマホラスの登頂に費し、午後はユックリ鹿でも獲る事にする。森林の下には蕃人の野宿した事があると見えて、焚火の跡が黑く殘つて居る(十時)。

八、マホラス山登頂

今夜此處で寢る事にしたので、荷物を全部置いて直にマホラスの登頂へと出發。但し銃丈は持つて行く。頂上(實は最高點から出張つた前の頭)は右手に寛いで我々を壓く。久繼の山の待遠しさに僕の足は自ら早まつた。此處からはニヒタカビャクシンの樹海である。立木となつて丈餘の丈に直立するものもあり、高さ二、三尺に地を匍ふものもある。其の枝振りの面白さ、その綠葉の純潔さ。高山に生存を許される樹木は自ら氣品がある。臺灣の山岳に蕃人の居住がなかつたら、其の跋涉は實際容易でないであらう。此の縱横錯綜するビャクシンの海にも太古以來の狩の徑は通じて居るので、夫れを傳へば割合に捗る。餘り枝とも戰はずに濟んで頂上前の頭に着く事が出來た。マホラスの絕頂は此處から少しの低みを隔てゝ早くも眼前に迫つた。

熱い思ひで頂上を見た。そして驚いた事には其處には何があつたか？　高く積まれたケールンがあるではないか？　蕃人は山の頂上に斯んなものは作らない。それは確に蕃人以外の山岳人の積んだものでなければならない。今迄マボラス山に登頂した者はないと聞いては居た。然し更に聞き質して見ると、或る蕃人はマホラスに日本人と同行して山中に露營した事があるとか云つた。僕は此處に到る途中、それは或は眞實ではないかと思つても見たが、何はともあれ山頂には下界人の足跡がある。

或は此の二、三日の中に、僕より一足先きに大きな困難を冒して、蕃人を除いての此の處女峯を極めた者があるのであらうか？　然しそんな噂は確に聞かなかつた。心急いて一時も早く此の登攀者の正體を見たいものと、僕は九分の敬意と一分の美しさを以て足早に近づき、頂上に着くや否や其のケールンを檢べて見ると愕いた事には、昭和二年に登頂した新沼大尉一行の殘したものではないか？

僕は餘りの意外さに暫時氣を失ふ程であつた。然らば此處は秀姑巒山の頂ではないか？　果してマボラスは存在するものであらうか？僕はマボラスを登らずに來て終つたのだ。或はマボラスとは有名無實の山であらうか。

蕃人に質せば此の頂上は間違ひなくマホラスだと云ふ。何が何だか全く分らなくなつて終つた。今迄の地形圖の不完全さと云ひ、全く未知な此の地方は分らないと思つた。然し青空の下に連々と空に嘯く山波を辿り、今來た方を顧ると、今しがた登つたウラモン山は郡大山から眺めたマボラスと同じ姿態を以て此方を凝視めて居るではないか？　僕は再び驚かないわけにいかなかつた。蕃人のウラモンこそ地圖上のマボラス山であつたのだ。

あの西面に崩落した大斷崖、夫れはマボラスの性格を如實に示すものだ。それにしても地圖には此の逃す事の出來ない斷崖の記號が全然拔けて居る。領臺當時の困難な時代に作られた地圖、それも兎に角其の完成に我々は今以て驚いて居るのであるが、此の樣な間違を犯すのも實地踏査に據らないものである事を思へば無理もない事であらう。惟ふに之れ等の誤は遠望により、而して蕃人による指名の過失に原因するものであらう。僕は次に來る登山者の參考にもと、名刺の裏に次の如く認め、廣口の標本瓶に入れてケールンの割れ目に挾んだ。

「從來秀姑巒山頂上と思惟せられたるは蕃稱マホラスと云ひ、地圖上のマボラスは蕃稱ウラモンと云ふ。惟ふにマボラスはマホラス（ブヌン語にて老人の意）の誤にして、遠望により此の誤を生ぜしもの、故に此の山の

頂上を秀姑巒山とすれば眞のマボラスはウラモン山とする可きか?」

此處に於てウラモンがマボラス山である事は最早疑ふ餘地がない。頂上には何も無かつた。(山頂に人間の足跡を示す事物が認められないから未踏と考へるのは甚だ以て沙汰の限りであるが前述の云ひ傳へもあるので斯く考へた)。さすれば日本に於て一萬二千尺級の最後に取り殘された高峯に初登頂する歡びは僕に與へられた事になる。僕は仰いでコバルトの空に、伏して山頂の岩に感謝した。今までの困難が一層有意義になつたと思ふと、眼頭が熱くさへなつた。そう云へば地圖が怪しい〳〵と思つて來たが、今までの疑問は此處に於て全く氷解した。小さい誤はあつても此の大きな山を見逃す樣な事がない事が明となつた。僕は山歩きを初めてから此處に十五年、之れ程茫然自失呆氣に取られた事はない。

蕃人は又も鹿を見つけて谷間のビャクシンの藪に見えなくなつた。僕は獨り頂上に座つて、一種云ふに云はれぬ氣分に永い事囚へられて居た。陽の當つた頂上は一萬二千尺と云つても、暖かだつた。燒けた岩の上に寒暖計を置くと、四十度に達きさうになつた。

頂上は略々南北に長く割合に狹い。東に急に傾いた粘板岩が風化し、植物とては殆んどビャクシンで石楠も僅かだ。其の下にコダマギクとタカサゴキンシバイが淋しく花を着けて居る。ゆっくり辨當を使つて四圍に展開する山と谷、空と雲に心ゆく許り見入る。新高が近い。マボラス山が此方を向いて居る。今迄の登山隊は皆、あの鞍部で擊退されて終つたのだ。恐ろしい山容のマボラスも僕には特に親しいものに思へた。

遠くの山に遊んで居た白い斷雲も秀姑巒山の頂上指してやつて來る。その中に頂はやがて雲の帳に閉ざされた。

眺望は全く視界から去る。然し雲が立ち罩めると鹿狩りには好いのである。一時半になつて蕃人がやうやく歸つて來た。ズッと下まで追つて行つたが結局逃したと云ひ乍ら、空いた腹に粟飯を食ひ初める。獵の下手な蕃人と來たのが因果だ。又鹿狩りに行きたいと云ふ三人を後に殘し、ワンリックの親爺を連れて露營地に歸り着いたのは二時であつた。秀姑巒山の北面に當る此處では、ビャクシンは立木となり、一抱えもある樣な太い幹が林を成して居る。綠の草地の上に寢床を作り、アルパインテントを枝に引っ懸けて屋根にした。狩に行かないワンリックが仲間の留守に火を作り、薪を運んで夕飯の支度をする。僕は昨日捕れた鳥を剝製したり、觀察をノートに書き綴る。山での行ひは靜かだ。蕃人と僕は默り込んで山の靜けさに醉つた樣になつて自分の仕事を續ける。待遠しい三人の歸り。鹿は獵れたか知ら？

曇つた空からは小雨が落ちて來た。一時は一寸心配したが、結局それは霧小便に終つた。間もなく止んで穩かな靑空が覗き出す。やがて此の綠に飾られた自然の住ひにも夕暮がやつて來た。音もなくひた〳〵と押し寄せる夕闇に僕も飯の支度をする。剝製した殘りのミカドキジの雛二匹で味噌汁を作る。

夕飯は靜かに終つた。下の方に鳴つて居た遠雷も彼方に去り、ビャクシンの枝の上には雨雲が割れて淡靑の空が滲み出る。相當寒くなつたので重着をして附近を逍遙ふ。雨後の薄暮にねつとりした灰色の雲が山に粘り着き今日の山を照らした太陽が西の空に隱れようとして居る。四邊はもう暗くならうとして居るのに、空は未だ眼覺めて居る。陽は茜色、山は淡いランプブラック。新高から郡大、さては東郡大にかけての山波が、今日一日の最後を華やかに飾つて居る。

蕃人が歸つて來た。鹿を擔いで來ると思つたら荷物が少いので、オッカパナホンハノヴァン？　マッハボン！（鹿

は獲れないのか？駄目ぢやないか！）と云ふと、いや獲れたと云ふ。成程ラバル（網袋）には肉が一パイ入つて居る皆持つて來るのは重いので、明日通る地點に置いて來たのだと云ふ。

夕飯は又やり直しだ。厚い切味を燒いてまる嚙りだ。たらふく食ふ。血の塊もやつて見たし、膽も食つた。腦味噌も試みに啜つて見た。僕は蕃人になれる自信がある。蕃人の生活は一見獰猛に見えるが、實際は極めて合理的である。蕃人達は賑かに難かしい蕃語をシャベリ乍ら、血の滴る肉を頰張り、鍋に血を煮つめ、或は剝いだ皮を火に焙る。焚火に山男の髭面を輝かし、血に塗れた鹿肉を食ひちぎる野蕃な情景を想像して、讀者よ顏を顰めては不可ない。

此の鹿を一發の下に射留めたと云ふ其の夜のハイスルは元氣であつた。明日南駐在所まで出る豫定であるが、更に一日延ばしたら必ず鹿が獲れるから、又一日延ばして呉れと云ひ出す。僕としては山歩きは何日かゝつても可い。然し六日中に南駐在所に出ると云つて來たものが、斷りなく延ばしたのでは、下で心配するだらう。僕の手紙を四人の中誰か南駐在所まで達けて呉れゝば、許してやると云ふと、彼等は尙も一層元氣付いた。

九、大水窟山を經て南駐在所へ

八月六日、昨日の疲勞で夜中二、三度眼覺めた後は正體なく寢入つて終つた。ハイルスにカノサン〳〵と搖り起されて飛び起きると、今日も素晴らしい天氣だ。水色の空にビャクシンの葉尖が白金に微笑んで居る。昨日獲れた鹿を早く見たいので、急いで飯を濟ませてウシタイガンに向ふ事にする。絲の床を起き出でゝ山を見廻せば、今日の色彩は昨夕と又打つて變り、極めて地味な色に落着いて居る。茅戸はネープルスイエロー、森林はテ

レベルト。

出發は六時になつた。昨日と同じコースを經て再び秀姑巒山の頂上に着いたのは六時四十分。今日は未だ時刻も早いため、雲も谷間に靜止して動かず、昨日隱れて居た山も皆見える。早朝の冷氣の中に近い山が燻んだ色に落着き、遠い山が淡靑に榮える。黑ずんだ然しあくまで明るい臺灣山岳獨特の不思議なコバルトの山色よ！新高は相變らず大きい。北山の裾に富士形の八通關山が直ぐ其處だ。大水窟山は秀姑巒山の幾つかの前瘤の向ふに、圓い輪廓と東面のガレを見せて蟠る。マボラスは北西の方に長い尾根を延ばし、其の端にウマボンゴが覗いて居る。郡大、巒大、マボラスの彼方に見える東郡大、東巒大の諸峯。マリガナンとカシパナンの廣い頭。頂上から東に落ちる尾根に抱かれたミヤサン溪、マホラス溪の壯大な谷。而してシンカン山の勇姿。夫れ等は手に取る如く眺められた。東の空遠い山の彼方に東海岸の海が金色の夜會服の樣に燦然と輝き、其の上に鈍い銀色の亂雲が綴られて一線に棚引く。山奥から一歩も出た事のないブヌンの蕃人には、あれが海だと說明しても到底分らない。シカヴァイベブヌル（大きな池）、マリアーラヌム（澤山の水）等と形容しても唯怪訝な顏をする許りだ。

頂上に腰を据えて十五分許り眺めてから出發。大水窟山に連る尾根の左（東）側を傳ふ。ガラ〳〵の岩の堆積を踏み、ビャクシンの藪を分けて行く。岩角にはカハカミウスユキ、コダマギク、フクトメキンバイが早朝の冷氣にかたくなつて居る。此の邊一帶は又見事なビャクシンの樹海である。そして鹿の巢窟である。突然數十間先きを二頭の鹿が長い角を伏せ乍ら駈け過ぎる。

昨日鹿を獲た地點は秀姑巒山の前山の東面だ。枝を分けて近寄れば、其處にはビャクシンの藪が二坪許り伐り開かれ、太い一本の幹の上を刈り取り枝を敷き詰めて棧敷の樣に臺を作り、其の上に小牛程もある牡鹿の屍體を

栽せて、虫がついたり他の獸や鳥に荒されない様にビャクシンの枝葉が覆せてある。昨夕此處で解剖して始末しその一部を露營地に持ち歸つたのだ。直ちに其の料理が初まる。蕃刀を閃めかして大きな體をバラ〳〵にする。僕は完全な頭骨を得たいものと横から色々口を出す。一人は毛皮や腿の肉を網袋に詰める。火を起して血を固める。他の者は糞袋の中の青い若芽（ビャクシンの若葉許りを食べて居た）を摑み出して其の汁を鍋に絞り取り、又夫れを糞袋に詰めかへる。僕はタイヤル族の大きな蕃刀に黑い血を塗つた。

此處では可なり時間をつぶした。分擔を終つて各自の荷に加へる。鹿一頭が獲れると其の荷は一層重くなつた。結局再び出發と立ち上つた時には、前にも倍した荷物のカサである。重いだらうと心配してやると、ハイスルは顏を顰めて左程でもないと云ふ。

再び尾根の左側をからむ。荷物が重いためか蕃人が獸の様な聲を揃へて原始的な歌をうなる。其の神寂びたメロディーが異國的な情調を漂はして高山の大氣の中に吸ひ込まれる。それはブヌン族蕃人通有の荷物運搬の歌だ。陽は嚴しく照りつける。大水窟山がいよ〳〵近い。蕃人は余程疲れるのか時々腰を下しては煙草を喫む。尾根を飛び廻るナガサハジャノメが獨り元氣だ。

やうやく秀姑巒山と大水窟山の間の鞍部に下らうとする頭まで來た時に（八時四十五分）、蕃人達は可なり參つて居た。四人は何れも岩の上にドッカと平べつたく尻を下して云ふ事に、之からとても大水窟山を越えて南までは行かれない、直ぐにバナイコに拔けて無双に歸りたいと弱音を吹く。余程へバッタらしい。昨夕の元氣は何處へか飛んで終つた。此處に於て僕は彼等を怒鳴りつけたり、すかしたり、おだてたり、百方手を盡さなければならなかつた。山に入つたら蕃人樣々である。蕃人が動かなかつたら夫れ切りである。

「まだ陽は高い。休み〳〵行けば大水窟山の上りも大した事はない。ブヌンは約束を守り勇敢だからニッポンは鐵砲を貸すのだ。約束を違へるとは怪しからん。何と云ふ御前達は弱蟲なのか！」

十五分許り僕が一生懸命彼等を說得した甲斐あつて、ハイスルがぢゃあ行くと云ひ出した。同じ蕃人でも北部のタイヤルと此のブヌンとは確に違ふ。タイヤルはあくまで勇敢であるが、ブヌンは何處か底力に欠けて居る。

蕃人はやうやく動いた。九時には腰を持上げて鞍部へと下り出す。今迄はタカネスヽキの茅戸であつたが、此處に下りて見ると(九時二十分)、短いオヒワケメダケのそれに變つて、暫時影を消して居たニヒタカマツムシサウが優しく花を開いて居る。直ぐに大水窟山指して茅戸の坂を登り出したが、空腹を覺えて來たので坂の途中で第一回の晝を攝る(九時四十分)。辨當を作る煩しさにそのまゝ出掛けて來たので蕃人のを御馳走になる。厚い鹿の燒肉を二個、粟飯に血を煮つめたのをマヨネーズの樣にかけて飯を濟ます。

陽は未だ照つて居るが、何時ともなくモク〳〵と湧いた白雲が、高い天に動いて、やがて夏の陽を遮り出す。天氣は何だか變りさうだ。秀姑巒山の南の頭が赭い岩壁を際立し、其の左手に西北の空に割れた雲間から郡大山が此處では立派に見える。其の他の山はもう山頂を雲に隱して、山腹の複雜な山皺が奥山の幽玄な感じを倍加する。

蕃人を勵まして間もなく出發、尙も坂路を登る。蕃人の足は遲々として進まない。今では荷厄介な重い鐵砲を肩に擔いでのろ〳〵と歩を運ぶ。坂もやがて盡きて勾配の緩い尾根條へ出た。ニヒタカリンドウ、ニヒタカセキチク、ニヒタカアヅマギク、それに戯れるナガサハジャノメと、同じ茅戸の景物を眼底に映じながら、可なり廣い平を横切つて行けば、之れから狹くなつた尾根を隔てゝウシタイガン(大水窟山)が漸く大きく近まり、東北面

の大きなガレを赭黒く見せ初める。

今では空一面に蔓つた白雲は次第に暗くなり、やがて低く垂れ下つて雲行は益々怪しくなつて來た。そして其の中に谷間の方からも氣のつかない中に雲が何時ともなく生れ出てトドマツの梢に綿片の樣に絡み着く。ホシガラスのしやがれた聲が身に滲みて雲を呼ぶ樣に聞える。蕃人をすかし乍らも懶い歩みを運んで狹くなつた尾根も渡り、ウシタイガンの位置を指し示すガレの際も左手に見送つて十時四十分には、大水窟山への最後の登り口まで辿り着いた。此處で少憩を取る。此處まで蕃人を引っぱつて來れば、南駐在所へ出るのが一番樂な筈だ。折角の豫定を覆す樣な無理も云はないだらう。而して未だ正午前の時刻である。此の縱走の計畫も九分までは達せられたと見て可いと思ふと、何となく氣が弛む樣に感じた。

大水窟山は直ぐ頭上に大らかな弧線を描いて隆まり、其の頂はもう險しい雲が渦卷き出した。未だ正午にもならないのに、雲の跳梁に任せた高山の表情は淋しい。煙草入を擴げ出したばかりの蕃人を又追ひ立てゝ、此の縱走を完成す可く、最後の坂を登り出す。全くの茅戸だ。短いタカネスゝキの間には風化した土砂が露れ、コダマギクが寒さうに處々に團つて居る。枯れたハヒビャクシンが白骨を曝して居る。此の坂の登りは五十分近くもかゝつたらうか、十一時三十分には遂に大水窟山の頂上に立つ事が出來た。

雲が押し寄せて來て四圍の眺望を封じられたウシタイガンの頂上は茫漠として南北に長い。なだらかな東北地方の山にでもありさうな悠長な尾根。夫れを被ふメダケとスゝキの茅戸の上には、低いビャクシンの株が庭木の樣に枝を張つて居る。此處まで來れば下る丈である。ゆっくりして行かうと云ふ事になつて、蕃人を思ひ〳〵に鳥撃ちに遣る。

此處が明に大水窟山の頂上である。然し廣い此の頭は何處と云つて際立つた最高點なく、此の山へは相當の登山者があるにも拘らず何等登山標らしいものがない。一通り歩き廻つても見當らない。不思議な事に思つてふと東を顧ると、此處から一度低下した尾根の向ふに略三角形をした一峯が見渡せた。高點は明に此方に劣ると見られたが、念のため其の峯を目指して進んだ。左手のガレの線を傳ひ短い茅戸を急げば、十分位經て其の峯に立つ事が出來た。頂上にはケールンが積まれ、標木が立つて居た。そして酒の空瓶の中には登山者の名刺が見えた。

前の廣い頭に比べては此處は頭も狹く山頂らしい氣分で、東に落ちる尾根には形相面白い岩が頭を擡げて居る。東南は頂上直下の岩場の下に緩い茅戸が見下された。山頂の砂岩には雪の樣に白い石英が入り混つて居た。此處から振り返ると、秀姑巒山から直接に續いた最初の頭は、此の峯より明に高い。一般の登山者は其の山頂らしい風貌に何れも、此の峯を大水窟山の頂上と思惟して居る樣であるが、之れは如何なものであらうか？　我々の持つ蕃地地形圖は此の問題を論じるに充分な精確さを有しないが、其の位置と云ひ高距と云ひ、我々が諸地方の山峯から大水窟山として望見して居るものは、間違ひなく最初の峯である。一般の登山者に從つて、此の東峯を大水窟山とすれば、他の峯は奥大水窟山（余りに近距離ではあるが）と新稱す可きものかも知れない。

他日の思出にもと眞白い石英の小片を打ちかいたり、何となく淋しくなつた人懷しさに瓶の中の名刺に知人の名を求めたりして、此の山頂の上には十五分も座つて居たらうか？　その中にも雲の色は益々濃くなり、折から加つた東風の劇しさに白雲が潮の樣に流れ出す。濕つた山の氣が寒むざむと身に應へる。無意識にも今夜の暖い宿を思つてか、雲に洗はれて水底の樣な南方の山腹を見下して居ると、突然雲の切れ目から、汚黄色の茅戸の斜面を蜿蜒長蛇の樣に褐色の紐帶が横切つて居るのが眼に映つた。横斷道路だ！　此の瞬間の驚きと懷しさは其後

も永く忘れる事が出來ない。

僕は山と原始に憧れ、人里から離別する快さを樂しんで此の奥山へと分け入つたのだつた。そして山が僕の前に時々刻々擴げ示す美と崇高に魅せられて、憑かれた樣な歩みを續けたのだつた。然し僅か三日しか經たないのに、此の人工的な道路に云ひ知れぬ暖かさを感ずる。僕はその中に明かな矛盾を見、且それがどうにもならぬ僕の山への不徹底さ加減を實證するものである事を思ふと、僕の一つの心は淋しかつた。然し他の心は此の道路を見下して唯喜んで居る。見よ！眼下には中央山脈を横斷する幅二間の道路が、ラホアレ一味の跳梁を遮斷し、悠揚に波打つて東に走つて居るではないか？　僕は尙も茫然と佇んで居た。そして間もなく南駐在所の嚴重な構へをも、眼下に認める事が出來た。

再び荷物を殘して置いた頂上に歸つて見ると、アトルとハイスルが人待ち顏に煙草を喫つて居た。横には大きな鉛彈で腹を射拔かれたタカサゴカケスが投げ出されて居る。未だ歸らないアスランとワンリックを大聲で喚び戻して晝食にする。南駐在所に拔けるまではと秘かに念じた天候も遂に持たなくなつて、もう我慢ならなくなつた暗い空からは太い雨が落ちて來た。然し我々が計畫した大望？は完全に果す事が出來たのだ。今となつては何を怨まう。大水窟山の登頂の終るのを待つて居たかの樣な此の雨を、偶然以上のものとして喜んだ。食事半ばにして火を起し、ビャクシンの枯枝を集めて焚火を作り、雨降る中に我々は暖まつた。さらば大水窟山の山頂よ！そして秀姑巒、マボラスの諸峯よと、北の空を仰げば、それ等の姿は已に雨雲の中にかき消されて見えなかつた。一時には山頂を辭す。

東峯に獨り居た時雲間から南駐在所の位置を見定めて置いたので、僕が先頭になつて降り募る雨を衝いて、南

斜面をひた走りに下りる。茅戸を馳け下り、トドマツの茂みを突き拔ける。五年來の宿望、それは完全に達せられた。暖い今夜の宿。僕の山行を氣づかつて居るであらう南駐在所。此の成功を聞いて喜んで呉れるであらう人達。沸かされて居るであらう風呂。僕は山の中の素朴からは凡そ落ちて終ふ之れ等の人間的な思ひに囚へられて機械的に足を運ばせた。時には迷惑な事もある蕃界駐在所の酒、それも今夜は必ず奬められるであらう。然し今夜丈は強いて辭退はしまい、奬められるまゝに過さうと、そんな事までを考へた。

一時間後には懐しかつた横斷道路の廣い道幅に出た。そして間もなく我々の行手に、堅固な石垣をめぐらした南駐在所が、雨のそぼ降る中に、恰も疲れた我々を待ちもうける樣に迎へ立つて居るのを見た時に、僕は殘り惜しくも此の山旅が最早終つたのを知つた。(一九三二、七、三)

マリガナン山より再びマボラス山へ

一九三一年九月五日、ハイラロ社のブヌン族蕃人ワンリックタケシギアナン、ティヤンタケシタハヤン、スバリタケシタハヤンの三人を連れて無双駐在所を出發、ハイラロ溪を溯り、マリガナン山(一一七七〇尺)に登頂し、次いでマボラス山(一二五六〇尺)を極め、九月九日無双に歸着した。本篇は其の紀行である。

一、まへがき

新高山地方の山行を志して塵界を去り、無双駐在所に圖らずも腰を据えてから此處に四十日、秀姑巒山脈の縱走にも成功し、新高連峯、南玉山、郡大山、尖山の登攀も濟み、東郡大山塊の踏破も終つた今では、虎の子の樣

に大事にして居た休暇も殘り少くなつて、樂しみにして居た山行も全く終りに近づいたのを知つた。もう東京へ歸らねばならぬのか！一年も離れて居た樣にも感ずる都會へ歸る淡い喜びを、何だ御前はと、山を去る殘り惜しさが責めつける。もう一遍此の旅の最後を飾る山行がして見たい！今空は晴れて居るが、二百十日に近い天候は確かに惡くなつた。恐らくは意地惡い雨が降る事であらう。然し荒れても濡れても構はない。もう一度深い山懷に抱かれて見れば、僕の氣は濟むであらう。何處へ行つたら可いか？僕は切りにあれこれと物色した。

若し出來たならばと秘に計畫して置いた、丹大（タンダイ）、大石公（ダイキコウ）、關門山（クワンモン）の三山掛けは、折惡しく突發した丹大社蕃人の暴動によつて綺麗さっぱり諦めたが、此處に於て頭に浮んだのはマリガナン山から尾根を辿つて東からマボラスへ取り付く事であつた。マリガナンとはハイラロ溪最上流に位し高距一一七七〇尺を有する地圖上無名の山の名で、其の姿はマボラス山頂から遠く東の空に望んで、如何にも孤煙漂茫とした寂しさが其の四周を取り卷いて居るのに遊志を唆られたからである。マボラスの山頂に立つてさへ「人手にかゝらない」山の威力がひし〳〵と身に應へるのに、更に奥へと入り込んだ其處にあつては、如何ばかり寂寥の感の切なるものがあらう。斯く考へると、僕の計畫は立ち所に定つて終つた。其の上、東郡大山塊からの展望によつて、ハイラロ溪から此の山系に食ひ入る大きな谷が地圖上に一本拔けて居るのを發見した事や、何だか氣にかゝるマボラスの山頂を再踏査する必要を思ふと、尙更此の計畫は動かないものとなつた。

ところで此の領域を案内する蕃人の問題である。台灣山岳何處でも蕃人を案内とする山行に於ては同じ事であるが、一地方を歩くのに其處を狩獵區域とする蕃人を使役する必要があるのは、單に其の蕃人が地形を知悉するによる許りでなく、其の地を踏むものは狩獵有權者に限ると云ふ蕃人間の嚴しい掟があるからである。此の場合

に於ても、夫れが第一に惱みの種となつた。その上、タイヤルやセーダッカ族に於ては、一の狩獵區域は一の蕃社の者全體によつて占有せられるが、此の地方のブヌン族蕃人に於ては少しく趣を異にし、一の蕃社は數個の氏族を異にする蕃人の集團より成り、且各氏族は又別々の狩獵區域を有するためである。而して其の中の一氏族も一の蕃社に包含せらるゝとは限らず、往々にして二つ以上の蕃社に分住して居る事があるからである。曾てマシタルンの野中氏の助力を得て、此の地方ブヌン族郡蕃の狩獵區域を調べた時、マリガナン山方面は、タケシギアナン、タケルヽン二氏族の有となつて居たのを思ひ出し、其の蕃社への所屬を見ると、タケルヽン姓はマシタルン管内のイバタン社に限り、タケシギアナン姓はハイラロ、イバタン兩蕃社に跨つて居るのを知つた。直にイバタン社に使をやつて、山行に行く可き蕃人を求めた。然し折惡しく祭祀の後の酒宴があつて此處二、三日は駄目だと云ふ。

出發の前日、是非なくハイラロ社に同行の蕃人を誘つた。結局夕方になつて駐在所の事務室にやつて來たのは五十を過ぎても狩好きなワンリックの親爺だけ。一人では仕樣がないので、タケシタハヤン姓から尙も二人の若者ティヤンとスバリを連れて來る。然し此の二人は貸し與へられた銃をいぢくつては何か物思ひに沈んで居る。之れに反してワンリックは一向に晴れやかだ。僕は直ぐにそれが狩獵區域の問題に起因するものである事を知つた。ワンリックはタケシギアナン姓で當然の權利があるが、他の二人には之れがない。イバタン社のタケルヽン姓の者に云ひ掛りをつけられるのを恐れて居るのだと分つた。然し今更之れを解決しなければ山行を放棄するばかりだ。余りの苛立たしさに、そんならイバタン社の者と行くから可いと突き放すと、ワンリックが之れはと驚いて百方同行を勸誘する。他蕃社の者とは行きたくないらしい樣子に力を得て、傍から僕が口を入れる。ニッポ

ンと一緒に行くのだから大丈夫さ！と。ぢれつたい一時間、遂に彼等蕃人は僕の意に從ふ事になつた。

狂的な鄉土主義ならずとも、一地方の山岳を味ふに、其の山民と同じ生活樣式によつて行動するのは最も理想的なことではあるまいか？都會を山に持つて行かないために、而して最後の山行を思出多くするために、僕は此の山行に於て、其の食糧を全部蕃人のもの丈に限る事にした。慣れない粗野な蕃人の食物を僕の胃腸は拒んで、體力は衰へるであらう。然しそれがどの程度まで耐へられるものか？どうせ最後の山旅である。少し位痩せて歸つても美味いものを食へば恢復する。而してそれは今後の良い經驗となるであらう。何はともあれ炊事一切を蕃人に委せて終へば、呑氣な山の夕を更に呑氣に過せるであらう。歸りかける蕃人に、僕の分も整へて置けと注文する。

二、二度目の秀姑巒山脈へ

心配して居た天候も幸にして今日は晴天だ。もう明るくなつた室には淡青の色彩が湛へられて居る。ワンリックを先きにしてどや〳〵と事務室に入つて來た三人は、流石狩の門出だけあつて元氣に充ち滿ちて居る。すっかり狩裝束に身を固め、昨夜賴んで置いた弓矢と食糧を肩に、鐵砲を手に握り締めて居る樣子は、何度見ても微笑ましずには居られない勇ましい姿だ。彈丸三十發を分け與へて六時出發。先日の豪雨でハイラロ溪に架けられた假橋が流されて居るので、ボクラウに至る鐵線橋を渡つて溪の左岸に遡り、綠濃いハンノキ林を拔けながら急坂を登り、頻繁に分れる蕃路を左へ左へと取る。熱帶の台灣でも高山の秋の訪れは早い。キュー〳〵と奇妙な聲で鳴くカレイゼミの聲は未だうら淋しく聞えて來るが、靑空の色は秋らしい落着き。粟畑に鳥を追ふハウルタ（鳥追ひ木）

の音が確かに澄んで來た。赤榛林から蕃人の畠に出で、又も赤榛林にかゝる。タケシタハヤンの畠があると見えてティヤンが玉蜀黍を十本余り折つて來て荷に加へる。

小溪ウシマラサン溪を渡り、ハイラロ溪の支流に沿ふて山腹をからんで行く。小暗い深林の中には丈高い夏草が生ひ茂り、暗綠の幕には小鳥の影が動く。ヤブドリが幽寂な聲を一鳴き木魂させると、ティヤンが弓に矢をつがへてヘウと放つ。狙ひ違はず落ちて來た鳥を拾ひ上げて、三人の蕃人は其の羽毛の一片を毟り取り、火を點じて一息吹く(之れはブヌンの呪術で最初に得た鳥によつて斯くすれば獲物があると云ふ)。シビンサップは行はれた。最後の此の山行には果して獲物が與へられるであらうか?もう歸京するのも直きである。鹿でも獲れたら味噌漬にでもして持ち歸り、山友に食はしてやらうと、獲らぬ狸ならぬ鹿の皮算用に慾張つた胸を膨らませる。

蕃人の氣儘な足取りに委せて急ぐともなく歩を運ばせて居る中に、出發以來約二時間、又も粟畑が現はれた。第一回のマボラス行に休んだ場所で、あの時は青かつた粟も一ヶ月を過ぎた今では、穗は全く實り黃金の波を波打たせて居る。荷物を下して暖い陽の下に煙草を喫ふ。其の暇に蕃人は素早く焚火を作つて、先きに取つて來た玉蜀黍を燒いて呉れる。之れが蕃人から貰つた食料の最初だ。

前の山行には此處から直ぐ上へと登つたが、今度は其の道から外れて尙も山腹を迂る。之からは上り氣味だ。今まで眼の前を遮切つて居た側尾根を越したので、ハイラロ溪の上流が初めて窺はれた。マショゾカン山が次第に眼前に近づいて來た。然しマリガナン山の屯する處、それは靉靆する雲に覆はれて未だ〳〵遠い。

ハイラロ溪の左岸には險惡な斷崖が多く崩落して居り、其の度に上方へと遠廻りを强ひられるので、道は次第に困難になつて來た。密林を離れたと思ふと茅戸に出で、それが盡きたと思ふとニヒタカアカマツの疎林にかゝ

る。タカサゴユリが已に遲い花を開いて居る。今日は晴れだと見えた天候も何時ともなく曇つてどんよりした空になつた。木々の綠葉は重さうに垂れ下り、草は氣だるさうに靜止する。それ等の減入つた情景に感化せられて我々は無意識にハイラロ溪を奥へ奥へと溯る。珍らしい花も咲かず鳥も鳴かず、我々の感情を喚び起す何物もない。然し懶い此の單調の中に未知なハイラロを取り卷く領域の獨特な姿相を見る樣にも思つた。

もう一つの側尾根を越して一寸した突角に出ると蕃人は荷物を下して休む。未だ十一時ながら晝食とする。蕃人の山行に於て休む場所は定まつて居るらしい。ワンリックのラバル(網袋)から燒芋の太いのが等分に配られるそして其の次は粟飯だ。眼下には出發以來初めて見る大きな谷が右手からハイラロ溪の本流に合流して居る。それは前の山行に於てウマボンゴからオブナビオンに至る途中左手に見下したチバウン(マスブル)溪であつた。對岸のリパンホル山から右へと視界を轉じて、谷の奥を窺ひ其處に幽立する大きな山に眼覺されて之れはと見直せば、それは目的の山マボラス山であつた。灰色の空を背景として高く〳〵天に聳え立つ幅廣い山、その名をマボラスと知つても、その姿はほんとうに「世に知られない高峰」の感極めて深いものであつた。東からの此の山への登攀、仰ぎつゝ前途の旅を想へば、其處には何か知ら思ひ懸けないものが待ち受けて居る樣に感ぜられた。東郡大山塊は背後にある。顧れば今迄行手に望んだマショゾカン山(一〇七二二尺)は漸く近く、その山頂の亂杭齒が數日前の齒應へある登攀を想起させ、その右手に一のだるみを經てワハシパン山(一一〇七三尺)が鷹揚に聳えて居る(此の地點をマトホロワンと呼ぶ)。

三、マスブルの小屋

今まで薄陽が射して居たと思つたが、變り易い秋の空は何時ともなく時雨れて、マボラスの方に當つて驟雨らしい雲が頻りに動く。それに促されて四十分の休息から離れ、十一時四十分此處を出發。マスブル溪の左岸をへつゝて奥へと急いだ。道は下り氣味だ。新綠の候ならばさこそと思はれる濶葉樹の森林。その梢を分けて細々と通ずる一本の狩獵路。夫れを覆ふ樹はムシヤダモが多く、それに混つてイトマキシマモミヂが眼につく。カケスらしい鳥が茂みから鳴く。老木の幹を輕やかに傳ふタカサゴリスが少くない。やうやく其の一頭を物にし、蕃人の導ぐまゝに無心に足を運ばせる。

谷のせゝらぎが漸く近く、我々はやがてマスブル溪の溪底に下りた。時正に十二時二十分。あくまで清い溪水に喉を潤ほして河原の岩に少憩。汗ばんだ身體を冷い溪風に吹かせる。之れと云つて別に眼を奪ふ新奇こそないが、人の心を落ち着かせる樣な幽寂な谷の趣。砂岩の岩塊が狹い河床に配置巧に轉つて、それを滑つて流れ下る淙々の響が、兩岸の濕林を輕くゆする。浮世を離れた陶醉の境に引き入れられて、はるかな思ひに逍遙する幾時其の間靜かな谷には一羽の山鳩（タイワンジュズカケバト）が音もなく枝から飛び去り、二匹のアケボノアゲハが幻の樣に梢から浮び下りて來た許りであつた。

小半時も休んで尙も上流へと向ふ。谷岸にはフキノトウが心臟形の葉を揃えて見事に群落して居る。溯るに連れて谷の傾斜は次第に增して、水勢は急に聲は高らかに鳴り響いて、谷涉りも容易でなくなつた。然し左岸をへづり岩を飛び移つたりして行けば、どうにか足をぬらさないで行ける。斯くして澤傳ひを續け、溪身が少しく曲り出す頃奔流に横たはる太い流木を渡つて右岸に移つた。之れから溪底を離れて尾根にかゝるのかと思つて居ると、先きに立つた蕃人が突然タロハンと指さす。驚いて眼を注げば其處にはヤダケの藪に隱れて仲々立派な小屋

主山↓

大水窟より見たる新高山彙

鹿野忠雄

がある。時正に二時半、少憩してから一時間半の行程であつた。

小屋はタケシタハヤン姓の所有で、廣さ略々三疊足らず、蕃人の小屋に普通見られる破風式であるが、太い木材を惜氣もなく使ひ、屋根は檜の皮で葺いてある。そして鍋から水汲みの瓢(シヤ)まで用意されて居る。それを見てもハイラロ社の蕃人が屢々此の附近に獵に來る事は明である。直ぐに荷物を下して此の小屋の主(アルジ)となり、ティヤンを殘して他の二人を獵にやる。未だ時刻は早いので溪を散歩して居ると雨がポツリ〳〵落ちて來たので早速小屋へと潜り込む。

ティヤンがまめに夕食の支度をする。僕は先刻獲つた栗鼠の剝製を濟ませて横になる。雨がやがて甚くなつて遂には對岸の樹も見えない程沛然たるどしゃ降りになつた。之れを見ては今度の山行に雨は免れないと秘に決心する。可愛さうに彼の二人はぬれ鼠だ。雨が漏りはしないかと心配したが幸にして大丈夫らしい。

小屋の中は薄暗い。高い瀬の響に豪雨の音が加はつて、大聲でなければ聞えない程の喧しさだ。二組のバニン(石を三個地上に立てたもの)の上に懸けられたグルラ(鐵鍋)がフツ〳〵と沸つて、待遠しい晩食が次第に整へられる。片方の鍋にはマロッホ(粟)とタウタウ(糠)を混ぜた飯、他方のそれにはマハヴ(唐辛)とハシラ(鹽)で味を添えた闇汁見たいなもの。オール形のハイラソで粟飯を焦げ付かない樣にかき混ぜたり、空腹に待ち切れなくなつて汁の中味に知らず〳〵手が出る。

大分時が遷つて五時も過ぎたと思ふ頃、やつとの事で二人が歸つて來た。狩獵着の裾からぽた〳〵雨滴をたらしながら、途中で集めて來た薪をどっかと下す。ラバルを覗き込んだが悲しいかな何もない。

待ち構へた樣に晩飯にする。二つの鍋を圍んで四人は同じ鍋から、空いた各自の腹にせっせと詰める。粟飯に

は焚火の灰が一パイ混つて終つた。プサヴァト（蕃人の豆）に栗鼠の丸身（剝製の殘り）と茸を入れた汁は、茸が幅を利かして終つたのか、アヲミドロ見たいな色にどろ〳〵になつて終つた。然し飯は暖い。そして汁には味がある。栗鼠は仲良く四等分して食べた。大きな鍋に溢れて居た粟飯もやがて全く空になつた。

献立は貧しくとも山の夕食は樂しかつた。そして好奇に滿ちた蕃食に滿足して、暗い小屋に煙草をふかす。雨はやんだが川の瀨に近いため、ごう〳〵と流れ下る水音が四邊の谷を聾して遠い思ひに我々を運ぶ。スレンの寢袋に匍ひ込んで健康な眠に入つたのは、それから間もなくだつた。

四、マボラス山の北尾根

九月六日、未だ暗い小屋から起き出でて時計を見ると五時半だ。晴天ならば淡紅の光彩が朝空に匂ふ時分であるが、今日は天候險惡と見えて暗灰色の密雲が一面に垂れ罩め、雨が降らないのがせめてもの幸ひ、足元を見るのもやうやくの薄暗さだ。唯瀨の音が高く不斷の響を奏でる。今日はいよ〳〵マリガナン近く迫る日だ。天氣は惡くとも出來る丈やつて見ようと、我れと我が淋しい氣分の中に强ひて希望の火を點ずる。

五時四十五分、蕃人を促して起きぬけの身體をそのまゝ前途を急ぐ。踏跡は小屋から直ぐ頭上へと上り、ベニヒの大木の混る針濶混淆の深林を分けて露しげき中を行く。約二十分も登つて汗が滲み出る頃急崖に突き當つて左にからむ。其の頃には小暗い森林から解放されて茅戸に出で、我々は初めて曇り空ながら早朝の冷氣にすが〳〵しさを覺えた。露にぬれたニヒタカマンネングサを足元に見送りながら更に歩を運ばせる中、やがて尾根上へと出た。時正に六時半。露の乾かぬ草の上に腰を下して朝食を攝る（蕃人は此處をバカツハイセンと呼んだ）。

時の遷るに連れて心持明るくなつた南の空には、マボラスが濕つた大氣の中に默然と浮び上つて居る。その大空に拔き出でた山岳の巨人、それは今や今日の最初に當つて雨雲を呼ばうか、深碧の空を擴げようかと思案して居る樣にも見えた。降つても晴れても我々は行かねばならない。マボラスの面に青空の恩惠を希ひながら、時ならずして腰を上げて、その胸元へと續く尾根を一圖に辿る。尾根は間もなく漸く高く、踏跡は幽かに、我々は導かれてニヒタカアカマツの參差たる森林に入る。その中にはニヒタカゴヱウの太い幹も稀ならず見られた。尾根通しを除けて右側の急な斜面をからむ徑は歩き惡く、厚く積つた松葉にともすれば足を掬はれる。マスブル溪の足下に鳴り響く溪底まで、一かきに薙ぎ下ろした斜面に林立する松樹の直幹は、綠の葉も搖るがせずに音もなく唯靜まり返つて居る。長い山旅に稍々倦み果てたか、山の寂寞さに同化したのか、或は暗い四邊の氣分に減入つたのか、僕の足は放心した樣に運ばれる。蕃人の眼は獸の足跡を探すのに熱心であるが、僕は唯前途に現はれる雄景をのみ胸に描いて足を伸ばす。

蕃人が突然現れ出た羚羊を遂ひまはすのに興じながら行く中に、マボラスは僕を憐れんでか、張りつめた灰雲を次第にほぐし初めた。そして遂には薄陽さへもれて來たのに元氣づいて進む中にも、我々の踏む地點は一歩が一歩高まつた。頭上近く仰がれる尾根上には大岩が頭を擡げ、ニヒタカトドマツが漸く現れて高山の色彩を添景する。後を顧れば東郡大山塊のワハシパン山(一一〇七三尺)からマショゾカン山に連る尾根の鞍部から、今まで隱れて居た巒大山(一一四三六尺)が三角形の頭を次第に高く浮かせて來た。眼覺めるばかり靜かに喚き出でたアキノキリンサウに戯れる蝶の中に、臺灣には珍らしいミドリヘウモンが居た。有難い事には今日の天氣はどうやら大丈夫らしい。マボラスから西北に走つた尾根の上に、今度は一週間前に別れたばかりの新高連峯が現れて、何時

ともなく雲が除いた水色の空に華やかに匂つて居る。其の人を魅惑する様な色調は、忘れもせぬ第一回のマボラス行の途上、ウマボンゴから拜跪した神秘的なそれだ。丁度一月を過ぎて秋に入つたためか、それは一層淡色に薄れ、優しい微光の中にたゆたつて居る。思ひ起す過ぎし山旅、時の流れの徒に早き事よ！

森林に遮切られて見えなかつたマスブル溪の溪身が稍々急角度に左(東)に折れると、樹木は拂はれて前景は豁然とうち展いて、其處には朝食を攝つた場所を離れて以來、尾根の彼方に見失つたマボラスが再び一層眼近かに近寄つて來た。我々の登るに連れて谷も亦追ひすがつて高さを增し、耳をすませば眼下千尺足らずの底を流れ下る溪谷の囁きが涼しく耳朶に響いて來る。其處から視界を移して上方マボラスの頂に眼を馳せれば、此のすつくと立つた大入道見たいな巨軀を彩るものは、唯一刷毛の筆になすられたフッカースグリーンの單色である。谷間を除いては頂上近くまで滑らかに擴つた茅戸は、此の方角から仰いだマボラスを全く常の情感とは別個な山に見せた。前の山行に於て汗を流したサヽルベ尾根が右手に長々と裾を落して居る。

徑は次第に美しくなりまさる溪谷を右手に見下しながら、松の疎林の梢を分けて更に奥へと續いて行く。その中にも松の枝振りが變つて、今ではニヒタカゴヱウの大木がのび〳〵と幹を交へ、枝を張つて居る。青空がひろがり陽光さへ金色に射して來て、今までの幽寂は松の梢から去り急に夜が明けた様な晴れやかな情景になつた。

樂しい前途への期待に松が投げる涼しい木蔭に身を横たへて暫時の休息を取る。空はドン〳〵晴れて來るし、陽の光は若木の様に水々しい。腰を動かすのもいやになつて陶醉の境に彷徨する。眼を閉ぢて居ると、夢に聽く音樂の様に谷のせゝらぎが子守歌を歌ふ。あたりを憚らぬワンリックの無邪氣な大聲に驚かされて眼を覺すと、蕃人が三人掛りでシマリスを追ひまはして居る。小さな體をちょこ〳〵と松の幹を馳けまはり、枝から枝へする

〳〵と渡つて逃れ去る敏捷さには、弓も鐵砲も利かず、三人は少々持て余し氣味である。臺灣に從來知られたTamiops 屬のシマリスは、僅かタイワンシマリス一種丈で、それも此の樣な一萬尺の高距には上つて來ない。或は新らしい別な種ではないかと胸躍らしながら、傍から盛に僕が聲援する。いよ〳〵やり切れなくなつてスバリが太い幹を攀ぢ出した。結局大の男を三人へと〳〵に惱ました擧句の果て、やつとの思ひで手の平に入つて終ふ樣な小さな獸は、細い小枝の一擊に脆くも死んで僕の手許に來た。見れば體は前記の種類より遙かに小形で、恰もアルビニズムを受けた樣に體色が白つぽく一見して從來未知の珍種である。刧初以來探險者の探索の及ばない此の奥地に未知の種の發見せられるは敢て不思議ではないが、此の豫想外な獲物に僕は思はず欣喜して、歸つたら酒手をはずむぞと約束した。

意外な余興に暇をつぶしたが、漸く立上つて更に奥へと志す。優美なニヒタカゴヱウの枝越しには、絶えずマボラスが美しく望まれる。足下の谷は次第に水音を弱めて來た。その中にも東郡大山塊縱走以來、此の附近地形に就ての疑問を解決す可き時は次第に近づいた。その疑問とはマボラスからマリガナンに至る山系の北面に食ひ入る溪谷が、蕃地地形圖には二本しか記入されてないが、東郡大山塊のワハシパン山から此の方面を遠望した時には確に三本を認めた事である。廣い谷一本を拔かすと云ふ余りに大きな地圖の誤に、まさかとは思ひ直したが、此の附近の暗黑を思ひ合すと、先きの展望の記憶は誤ない樣に思はれた。未探險の奥地を探る一種獨特な氣分を胸に感じながら、細い踏跡を東へ〳〵と辿る中に、マボラスは其の北面から東面にかけての山容を、やがて双眸の中に運んで來る。僕の觀察力を試す可き此の課題如何にと、谷の行末を凝視すれば、やはり僕の眼は正しかつた。地圖上に於て途中から折れて長く東に食ひ入るマスブル溪は意外にも短くして終り、夫れを隔てる分水嶺は

正しくマボラスの山頂から急落した北尾根である事が知られた。そして其の背後に此方を覗き見るマボラスの一支脈との間には、地圖に脱漏した無名の谷が入り込んで居る事も明かとなつた。まさかと思ひ直した從來未知の地形を更に詳細に一時も早く見たいものと、心急いで先きを急ぐ。

尾根の右手の急斜をからむ歩き悪い徑は、その中に平坦な茅戸を踏む徑に更つて、我々はやがて大きな瘤と凹地の縱横にうねる廣い尾根通しに出た。其處はマボラスの山頂から略々北に落ちた山稜が、方向を西に轉じてパカソハイセンに續かうと云ふ接續地點と想像され、ニヒタカトドマツの小松が盆栽の樣に點在して綠の斑點を撒き散らして居る。附近の觀察に少しく後れた僕を殘して蕃人は尾根の瘤の彼方に見えなくなつたが、少時にして山と谷を轟かす銃聲が一發、之れはと思ふ間に續いて二發三發。大方鹿でも飛び出したのだらうと思つて馳け寄ると、夢中になつて追ひ迫る三人の蕃人の十間位先に、略三十頭ほどの野猿の群が算を亂して谷間へと散つて行く。其の周章てふためいて逃れ去る樣子は、笑止と云ふよりも寧ろ見物であつた。あれ丈澤山居たのに其の一頭をも物の見事に外して終つた蕃人が、頻りに殘念がる間に、早くも猿群は谷を越えて對岸の岩に集り、此方を嘲る樣にカッ〳〵と啼いて居る。臺灣山岳に於ける哺乳類の高度分布を通觀するに、猿は全く濶葉喬木帶以下に限られるが、一萬尺以上の此の地帶に其の姿を見たのは、珍らしい事に思つた。

折角現れ出た猿を打ち損じたのに氣を落して、草地の上に腰を下して終つたのを其の儘、可なり腹が減つたので第一回の晝食を攝る。時正に九時四十五分。頭上には已に天候を恢復して純碧に澄んだ大空と、それに應對するマボラスの快活な表情、その下に擴がる草地にはニヒタカリンドウ、ニヒタカセキチク、ニヒタカマツムシサウの賑やかな花宴。快い陽光に皮膚を溫ませて、蒼空を航する悠揚な白雲の行方を凝視めて居ると、唯此の一瞬

を味ふために今迄の苦難も決して無駄でなかつたとさへ感ぜられた。

問題の分水嶺は直ぐ近く眼の下にあつた。マスブル溪の水と地圖上に拔けて居るウリパンホル溪の水を分つ尾根は、其の狹い處幅僅かに二、三間に過ぎず、其處は側面より見て著るしい鞍部を成して居る。此處に於て東郡大山塊の山旅以來の疑念は消失し、蕃地地形圖を訂正す可き資料は完全に得られた事となつたが、此の發見が重要なものである事を考へると、僕は最後の此の山行に秘かに或る意義を認めないわけにいかなかつた。

五、オシトマバン

奥深い東の方角には、僕にとつては未知な、蕃人以外には全く世の知識からは緣遠い山のうねりが見渡された。足元に臨む谷の向ふに、マボラスの肩から出でゝハイラロの構造谷に突き當るまで、屛風の樣に谷壁を切り立たす壯大な山稜は一瞥してマボラスの主稜の樣にも思はれたが、それは熟慮の結果、マボラスからマリガナン山に至る主稜の側尾根である事が知られた。そして其の上に、遙か東の空を劃つて遠く雲煙の境に起立する孤峯こそは、正しく我々の目指すマリガナンに違ひなかつた。それに近寄るには、二つの險谷と幅廣い山稜を之れから横斷しなければならない。マリガナンの遠い事は初めから覺悟はして來たものの之れを眼のあたりに見ては稍々氣の遠くなる樣な思ひがした。

三十分ばかりの休息から離れて、ウリパンホルの谷へと下り出す。ワンリックの導くまゝに急斜に印せられた踏跡を賴つて行くと、それは益々幽かになつて、谷間に茂るニヒタカアカマツの森林中に隱れ、遂には茨の藪に見失つて終つた。ウリパンホルの本谷の位置は先きの尾根の眞下である事が明かなので、好い加減に見當をつけて躊

躇なく足を伸ばす。その中に小さな流れにぶつかつたので、其の冷たい水に足をジャブ〳〵やり乍ら夫れに從つて下る。小さな流れは下に行くに連れて次第に水量を增して傾斜も急になり、清冷な水が玉を飛ばして落走する美しい溪流となつた。眞清水に洗はれる岩も深山らしい寂びに落着き、低く下つたためか濶葉樹が出て來て、その綠葉をもれる陽光が頭上を掠めて泡立つ溪水に喜戯する。しばらく水を離れて居た僕は身に滲み入る樣な嬉しい溪谷の感觸に侵りながら、ひたすら歩を運んだ。

想像して居た樣に、此の小溪は時經てウリパンホルの本谷に注ぐ時が來て、我々はやがて白い河原のまぶしく眼を刺す大きな谷へと吐き出された。此處はその兩岸を尾根の急斜に抱かれては居るが、かなりの空地が開け、左岸に小規模乍ら段丘らしい平があつて茨の藪に被はれ、それに埋れる樣に茅葺きの相當大きな小屋が、朽ちかゝつた屋根を傾けて居る。中を覗いて見ると、蕃人が山で使ふ炊事道具一切、水壺までが數個並べられて居る。マボラスの奥に當つて、イバタン社のタケルヽン姓の小屋があると聞いて居たので、若しや然うではないかとワンリックに尋ねると、案の通りであつた。臺中州ブヌン族郡蕃最奥の此の狩小屋に起臥して、タケルヽン姓の蕃人は、之れから奥の廣大な獵場を殆んど獨占して、豐富な獵獲物を狩り暮すのである。

汚い小屋から眞晝の陽の燃え盛る水際に出で、ゴロ〳〵と轉る岩の上に腰を下して第二回の晝食にする。時正に十一時四十五分。碧く透き通つた水が勢よく河床を奔流して、汗ばんだ身體を谷風が氣持よく愛撫する。飯が終ると皆んなで附近の藪に轉るキンバネホイビイを追ひ馳けた。幼い頃の日の樣に自由な山の中の氣樂さと朗かさ。

然し前途に目的を懷く我々は、何時まで斯うしても居られない。マリガナンの事を思ひ出して、之れから先き

のコースを考へる。怪しくなつた踏跡は、もう探す事は難しい。三人の蕃人は獵がしたくなつたらしく、今夜此處に泊らうと提議する。その上、之れから先きは水がないと云ふ。然うかと云つて彼等の云ふ通りになつては、未だ遠いマリガナンに登るのは何時になるか分りはしない。日數が延びては駐在所で心配するであらう。未だ早いのだから一歩でも彼の山に近寄つて置かねば後が苦しいと考へ直して、無理に前進する事にする。

三人の中でも殊にワンリックが强硬に、此處に泊る事を主張したわけは後で分つた。此の附近から奥がワンリックの屬するタケシギアナンとタケルヽンの所有ではあるが、遠く隔つた此の獵場は、稀にタケルヽン姓の蕃人が來るのみで、タケシギアナン姓は長い間此の地を放棄して居り、ワンリックも彼が未だ若い時分一度來た許りで、全く地理不案内によるためであつた。後で彼が白狀する事には、此の小屋に僕を殘して自分獨りで先きの地勢を見極め、昔の記憶を喚び起して僕を案内したかつたからだと云ふ。

之れを知らない、而して又日數の延びるのを懼れた僕は斷乎として彼等の忠言を斥けた。そして此處に小屋があるからには、更に奥に進む可き狩獵路がなければならないと、四人して徑を求める可く諸方に分れて偵察を續ける。暫時にして谷を登つて行つたティアンが、徑は此方らしいと呼ぶ聲に、荷物をまとめて河上に二、三町溯ると、兩岸には徑らしいものもなく、突然谷奥に當つて此の山系の主稜が見渡され、其の前面には突兀たる露岩の哨壁が二千尺許りの斷崖を切り落して居る。一見して崩れ易いと知つた臺灣山岳通有の斷崖は攀ぢる事も不可能である。あっさり諦めて今來た徑を取つて返す。今度は溪を涉つて右岸に立つたスバリが、眼前に合流する小澤を指して確信に滿ちて叫ぶ。シンチンアイダラーン(此處に徑がある)！　何んだ斯んな眼の前にあつたのか！時正に一時。之れから水がないとの豫想に水筒を重くし、直ぐに深さ腰を沒する溪水のしびれる樣な冷さに戰きな

がら右岸に越え、前の小溪と同じやうな小澤を登る。

初めから水量の乏しかつた流れは、狹い谷道を行く中に、生ひ茂る茨と蘚苔に吸ひ込まれて、やがて唯ジメ〳〵した濕地になると、踏跡は急に左に折れて、雜木の茂り合ふ谷筋から茅戸にかゝり、急坂を登り出す。それは小屋から行手に見上げた尾根へと續くらしい。一寸汗を流して五百尺も登ると、ニヒタカアカマツの幽林に入り、そのうちに尾根通しに出た。踏跡は右寄りに進む。後を顧るとウリパンホルの溪と小屋がもう可なり小さくなつた。松の小枝にチュツ〳〵と鳴くチメドリの聲を耳にしては、立止つて弓に矢をつがへる。二次林の下に生える乾生群落に入つては、踏跡は益々判然として來た。其の代りに午後の山雲が次第に大きさを增して來る。

登りは大分樂になつたが、此の森林は尙も盡きず、踏跡を被ひ隱すモリシャクナゲとコゴメツヽジのうるさい枝を押し分けて行かねばならない。羚羊の足跡が盛んに見つかるが皆古いものばかり。僕も蕃人も物言ふのも面倒になつて、枝の擦れ合ふ音を無心に聽き乍ら、何時しか今夜の宿を考へて居た。松の木立は漸く低く、まばらになつた其の上には、其の峯の高きことを表す樣な綠の茅戸が大きく波打つて眼に迫つて來た。そして左手には其のたゞずまひから急な崖を有つらしい谷が深く入り込んで來る。二時三十分、密藪から逃れて廣い茅戸へと放たれた。

其處は秀姑巒山脈の主稜から派出した尨大な側尾根が、北から食ひ入つたマリガナン溪の二つの源流によつて、侵蝕される事から殘された可なり廣い台地で、火山の熔岩流の樣に盛り上つた山皺が圓味を帶びた起伏を示して居る。滑かな草地に眼をやり、腰を下して暫時休む。南の方は隆まる尾根のうねり、マボラスからマリガナンに續く分水嶺は前瘤に遮切られて窺へない。唯北の方が開けてハイラロ溪を圍む奥山が青黑く蟠り、それを邪魔す

る様に此の尾根から起きた一峯が、岩と黒木を共の圓い山頂に按配して聳える。時刻は未だ三時を少ししか過ぎて居ないが、午後の曇りを約する古綿の様な灰雲が徐々と空に並べられ、南から西へと沈んで行く太陽が、東西に走るマボラスの幹尾根から以北に當る此方側を陽の裏にして、暗い蔭は次第に擴つた。

勝手のわからぬ之れからの山徑。もうそろ〳〵水を求めて露營地を定めねばならぬが、此の尾根の様子では當てにならない。少しく心配になつて、水を探しながら前進する。溪から遠ざかつた此の尾根條には、案の條一滴の水もない。やうやく望みを嘱した深い雪窪の様な凹地にも、日照りのためか水溜りは干上つてから〳〵だ。高嶺の花はもう散つたり、果を結んだりして盛りを過ぎて終つたが、柔い草地を踏むのは快い。程よく勞れた身體を、涼しくなつた山の氣に曝しながら歩くのは滿足だが、唯水の事が氣に懸かる。いよ〳〵となれば、無理にも下の谷に降れば可いと相談すると、蕃人は飛んでもないと眼を圓くする。

だゞっ廣い尾根を横切つて東側へと出た頃には、マリガナンの谷は早くも青く煙り、陽は漸く陰つて黒い隈が徐々に擴り出し、山上にも薄暮はやがて訪れると見えた。唯マリガナン山が唯さへ赭く禿げた山頂を、雲間を洩れる夕陽に火の様に赤く燃やして居る。谷間を見下すと下から吹き上げる夕風がひやりと身體を包む。右手を望むと此處に來て初めて、秀姑巒山脈の主稜を窺ふ事が出來た。それは今越えた太い尾根とは、全く趣を異にした露岩の色恐しい瘦尾根に變り、之れから先きの前進に意外な時間を要求しはしないかと危ぶまれた。尾根の中でも殊に其の北面は、觸れゝば直ぐずり落ちる様な斷崖である。

日は暮れかゝるし水はなし。それに此の惡場、すっかり緊張して終つて、恐る〳〵近寄つて見れば、案ずるより産むが易く、さしたる事もない。それでも瘦尾根へと取り付く急崖をへつる時には、何の摑み處もないまゝに

ニヒタカアザミの痛い棘をギュツと握つて辛うじて越えた。

徑は再び稍々樂になつた。狹い尾根の上は岩が重つたり、風化して眞砂になつたりして危險は全くない。ニヒタカビャクシンが急に多くなる。左側の遙か下方の谷底からは耳新らしい溪聲が傳つて來た。それはマホラス溪の一源頭で、その水は台灣島中央山脈の東斜面を流れて太平洋に注ぐのだと思ふと、今までの長い道程も當然だと思はせられた。

容赦なく山と谷は、蒼茫たる夕色の中に溶け込んで行く。最早之れ以上進む事は出來ない。尾根から少し右手に下つた處に、不完全乍ら一寸した階段地があつたのを幸ひ、先づ其處に荷を下して今夜の宿と定めた（五時）。水は下から汲み上げなければならないかと思つたが、スバリが細いガリーを探し出して專心水を集める。ポタ〳〵と滴の樣に垂れる僅かな水も馬鹿にならない。飯盒の蓋に一杯二杯と、今夜の分丈は心配がなくなつた。夕霧の渦卷く中に僕が鹿が居ると叫んだのが災の元、ワンリックは銃を掴んで飛んで行く。仕方がないので三人で暗い中に薪を集める。鹿を逃して歸つて來たワンリックの働き振りは、見て居ても胸がすく。大きなトドマツの立木を兩肩に擔いで來たり、それを斷ち割る蕃刀の鮮さ。天幕を張るのにも不充分な狹さなので、蕃人の狩小屋其のまゝ、立木を伐つて支柱を作り、上に天幕を張る。兩側はビャクシンの枝を密にして風を防いだ。

廣さ何方里と擴る闇の中に、山神を驚かす樣な焚火を作つて暖まる。襲つて來る寒さはまぎれたが、飯は未だ出來ない。思ひ切つて下界の食料をなまじ遣いて來た爲め、皮肉にも空いた腹をさすらねばならない。今日はほんとうに疲れた。頻りに動搖する雲の中に星がキラ〳〵光り出した。とっぷり暮れた夜の帳に、カホジロムサヽビの妖怪みたいな影が突然黑く飛んだ。

飯が濟んでから、驟雨氣味な雨がハタ〳〵と天幕を打つ。谷から吹き上げる夜嵐が吹き通しの前面から毆り付ける。其の度に龜の子の樣に寢袋の中に首を引つ込める。襲つて來る寒さに火を燃やし續けようと思つたが、無情な風は之れを吹き消して眞の闇。雨に濡れた薪は仲々點かない。夜が更けるに連れて、風と雨は募つた。此の晩はほんとうにつれない山の仕打ちだつた。

六、マリガナン山登頂

寢られないまゝに、寢袋から頭を擡げては天を仰ぐ。凄い闇空を頻りに徂徠する雲の切れ目から、星がチラ〳〵覗いたと思ふと、夫れを裏切る樣にザアッ〳〵と雨が叩く。潛り込んではトロ〳〵して又眠覺めると、頭上には利鎌の樣に鋭い三日月があつた。どんなに夜の終るのを待ちくたびれたものか！そして吹きさらしの此の小屋が、やうやく早朝の薄明に浮び上ると、其の前には雲を吹き拂つたシンカン山の颯爽たる姿があつた。それはマボラスの頂上で眺めたよりも、一層高らかに、一層大きく聳え立つて居る。

此の山晴れも永くは期待出來ないが、今日は雨と悲觀した昨夜の思ひに比べれば、全く儲け物と云ふより他ない。又天氣の變らない中にマリガナンをやつて終はうと、昨夜の宿をそのまゝにして、急遽出發の用意をする。時正に五時十分。

荷物を全部後に殘して輕裝した我々の足は輕く、新らしい山に向ふ氣持は朝の樣に朗らかだ。マリガナン山へと連る尾根上を元氣よく辿る。立ち所に現れた面倒な岩尾根を右にからんで、再び尾根上へと攀ぢ登ると、マリガナンは漸く近く、尾根の起伏して連なる其の向うに卒然として其の岩頭を突き上げて居る。そして夫れを形作

る岩が薄赭く、薄陽に光る。我々は遂にマリガナン山の胸元まで來たのだ。全く其の山頂までは之れから幾らもない。一寸したニヒタカトドマツの幽林を、ミカドキジの牡が鳴くのを耳にして通り抜ければ、夫れは一層近まつた。

ツンラフラ・ラ、ザ・マリガナン（彼の山頂まで尾根を傳つて行くんだ）！僕は大聲に喚びかけた。そして蕃人を促して我々はまつしぐらに進む。突き進む尾根上には、右から左から、大きな鹿の足跡が木葉の樣に横切つて居る。マリガナンの頂は幸ひにして雲から解放されて居るが、其の續きの山には灰色の色彩が屯する。今は鹿などを追つて居る場合でない。

ビャクシンの茂みから、一匹の大鹿が跳び出したのを蕃人が追ひ驅けて行かうとするので、先きに行つて居るから後から來いと云ひ殘して、獨り先きへと志す。顧れば姿をくらましたらしい鹿の跡を逐つて、彼等蕃人はズッと谷間に消えて終つた。尾根は概してガラ〳〵した碎岩の堆積だ。早朝のあくまで森閑とした空氣の中に、ゴト〳〵云ふ岩を踏む響が足元に鳴る。さして苦もないと思つた此の尾根も案外に時間を食ふ。急に峙つ隆りや、直下深く崩れ落ちる急壁や、それに獨りでは止めた方が可い一枚岩。單獨で間違ひがあつては困ると思つて愼重に進んで行つた。

尾根が少しく平になり背幅を增して、タカネスゝキが絨氈の樣に敷き詰められた草原のうねりを越すと、又しても碎岩の積る峯條に出た。マリガナンは尾根の接合點に開けた稍々平坦な台地を拔いて、ツイ眼の先きに急聳する。マリガナンの登頂も先づ確實だ。冷えた岩の上に座つて休む。全く原始の曙の樣な靜寂、その中に魂を自由に泳がせて、後も前もない夢の樣な瞬間に、しばし身を委せた。其の中に耳をすますと、大地の吐息の樣な谷

底で鳴る風、何處かの茂みで囁くチメドリ。その二つが此の沈默を裏切る全てだつた。はるけくも來つるかな！僕は何とはなしに眼頭を潤ました。ヒタ〳〵と風に乘る旅愁。いや然うではない。夫れは都を永く離れた戀しさではない。山の崇高と原始に固く抱擁された自分を見出す歡びなのだ。眼の前に咲き殘つた、ニヒタカシホガマの總狀花を綴る一つ〳〵の花が、皆違つた表情を以つて僕を優しく見る。此の時の休息は樂しかつた。醒め難い夢の孕む原始への交感と、夫れが奏でる玄妙なる無音の音樂。

息せき切つて僕の眼の前を馳け過ぎる蕃人がある。手には鐵砲を握り、足は堆積する岩片を蹶つて。見ればワンリックだ。逃げのびる鹿を包圍して打ち獲る彼は追手らしい。僕にも氣づかずに走り去つたワンリックが、岩蔭に息を彈ませて銃を構へて居るのを、ポンと肩叩くと、彼は驚いて振り向きながら、シカバイベハノバン(大鹿)！〳〵と小聲に連呼する。そして此處に居て呉れと夢中に呼んで、彼は又しても姿を消した。鹿が出ると此の始末だ。山行に銃を持つて來るのは考へ物だと、ブツ〳〵云ひ乍ら、それでも大きな鹿が獲れるのは惡くないので、云はれた通りにガン張つて、現れたら追ひ戻してやらうと、棒きれを持つて今か〳〵と待ち受ける。左を見周すとマリガナンの頂上は鼻の先否頭上にあつた。そして其の裾から僕の立つて居る瘤に連る半球形の尾根の眼下前面に、東から深い空澤が入り込んで、其の周圍は露岩の現れた斷崖だ。マリガナンの方にはスバリが居る。向ふの瘤にはワンリックが見える。ティヤンは見えないが、遙か遠くから追つて來て、此の空澤に追ひ詰める積りらしい。鹿は仲々出て來ない。待つても〳〵現れない。好い加減しびれを切らして、起きぬけ早々飯も食はずに彷徨ひ出た空腹を、秘に蕃人の嚢から掠めて來た南京豆でまぎらせる。陽光の直射しない高山の冷氣は、動かないでヂッとして居ると寒い位だ。

谷の彼方が何となく騒がしいので、いよ〳〵初まつたなと胸をワク〳〵させて居ると、狹い谷の靜けさを破つて銃聲が轟然と一發。長く尾を引いて木魂するきな臭い煙硝の中から、一匹の大鹿が走り出た。直ぐ其の後に續くティヤンの懸聲と、戛々と馳る蹄の音。追ひ詰められて逃場を失つた鹿は、人間の踏む事の出來ない樣なザレの急斜を猪突の勢に委せて驅け上る。さうはさせじと上から浴びせる待ち構への二發。其の中の一彈はどうやら當つたらしく、鹿は急斜半ばにしてドーとずり落ちた。期せずして三人が占めたと思つたのも束の間、突如として起き上つた鹿は後腿から鮮血を滴らし乍ら別な急斜を飛んで姿を消した。其の驚く可き敏活さと死から逃れる眞劍さには感心したが、此の失敗は全く之を包圍した追手の足りなかつたのに依るのであつた。全く大きな鹿だつた。夫れは釣り損じた魚は大きいの譬ではなく、確かに小牛程もある大鹿だつた。後には生臭い血と煙硝の香が何時までも殘つて居た。

實に惜しい事をしたが、兎に角狩は終つたのだ。マリガナンの登頂を忘れてはならない。口惜しさに茫然と座り込んだ蕃人を其の儘にして、最後の登攀に取りかゝる。此處から屏風の樣に急聳する頂上までは、約五百尺の高さだ。ガラ〳〵の岩片を積み上げた大きなケールンの樣な山腹の西面の斜面を、恐る〳〵登り出す。絶頂も仰げない程の急斜に、上から岩なだれが落ちて來はしないかと心配したが、割合に岩は安定だ。角張つて割れた硬砂岩片の急坂、それは頂上から熱帶高山の劇烈な風化破壞力によつて供給された崖錐である事は明かだ。頂上近くなつて初めて露岩が顏を出す。危い岩の堆積を乘り切つて絶頂に立つたのは、時正に七時四十五分であつた。

初登攀と信じて登つた絶頂には意外にも、三等水準點が埋められ三角台があつた。そして夫れには「文武第拾四號(マボラス山)、森林主三角點、昭和五年拾壹月、殖産局」と書かれた札が打つてある。之を以て見ると、我々

一行の今日の登攀は別に初踏の榮を擔ふものでない。之れは後で聞いた話であるが、我々の登行に先立つ事九ケ月前に、台灣總督府殖產局は此の地方奥地の森林調査を企劃し其の際立てたものであると云ふ。そして此の山に至つた經路は東郡大山奥のハイラロ方面からであつたと云ふ事である。

此處は海拔一一七七〇尺(三五六九米)、其の高距のみから云つても日本領土内有數の高峯であり、其の西の一万二千尺級の三山には一位を讓るが、其の東端を飾つて突如として聳え立つ偉容は、秀姑巒山脈の一峯として決して愧ぢるものではない。頂上の尾根は略々南北に走り、其の上に最高點は南に偏つて一段階段をなして急立する西側はガレ、東側はなだらかな茅戸、南は鹿を追ひ込んだ空谷に臨む壯大な斷崖だ。粘板岩の細片が積る中から頭を擡げる山頂の岩の層理面は、意義深くも西に急斜して居る。

山頂の展望と其の感銘は想像を裏切らなかつた。其處には我々を立ち所に夢の世界に融け込ます悠遠と寂漠の情が四邊を取り卷いて居た。先づ群山の中に此の山脈の巨峯マボラスが僕の眼を奪ふ。そして其の左に秀姑巒、大水窟山の二山が大きく波打つ。常に東の空にのみ仰いだ之等の諸峯を、僕は今や東から西の空に望んで居るのだ。東郡大山塊の山々は其の山脈を淡碧に粧ひ、東郡大山(一一八九五尺)とワハシパン山は固く、マショゾカン山は鋸齒の樣に、其の山頂を浮かせて居る。そして馬蹄形に彎曲した此の山塊に食ひ込んだマガインソ溪は、此處からは丁度眞向ひに當り、其の急斜した溪身が白く廣く走つて、雪溪の樣に見える。視野は北から東に廻轉されて、ハイラロ最奥の群峯が双眸に迫つて來た。僕にとつて異國の樣に珍らしい之等の山皺にも、西の空に雄飛する樣な大岳巨峯はなくて、皆マリガナンに劣る山許り、夫れは全く前者に比べては物淋しい氣分を起させる。然し夫れは我々が、台灣中でも最も廣く且山波の紛糾した中部山群の奥深くまで、分け入つた事を示すものだ。台

灣島の水を東西に分つ分水嶺、其の中でも最も東に片寄つた中央山脈の脊梁は、ツイ其處に見えて居る。山頂の三角台に立つて居ると、如何にも奥地深く山懐に抱かれたと云ふ感じは、僕の胸を切々たる哀情を以て一パイにした。東に面して座つて居ると、中央山脈を越えて、黒潮の響と香が傳つて來る樣にも思はれた。

今まで三角錐に尖立して居たシンカン山も湧き立つ層雲に隱れて見えなくなつた。そして其の右手に續くラホアレの領域も其の上部を雲に覆はれて窺へない。雲は頻りに動いて居る。マボラスの中腹に漂つて居た一片の斷雲は、何時ともなく友を呼んで、山頂を包んで終つた。東郡大山塊に千切飛んで居た雲が、知らぬ間に綴られて一面の灰幕と化した。然しマリガナンの頂上は未だ大丈夫である。たゞ肌にしみる濕氣が東から寄せて來る。

音の世界から緣を切つて終つた樣な山頂の靜けさに、悠久な或るものを感じながら、僕は默つて居つた。蕃人が登つて來てからも、無言の中に山を眺めて居た。朝飯にと蕃人が呉れた燒芋を無心にムシャ〳〵嚙みながら。其の中にも天候は尙惡くなつて行く。今や雲の包圍から逃れて居るものは、唯秀姑巒山の東面のみとなつた。

七、ウリバンホルの小屋

もう少し居たいと思つたが、斯んな事情では仕方がない。惜しくも此の山頂を辭す可き時が來た。僕が再び此處にやつて來るのは何時の事か知ら！或は永い間來られないかも知れない。もはや親しい友の如き情に繫がれた山頂に心からの別れを告げ、いざ歸途へと東面のガレを走り降りる。時正に八時五十五分。

露營地から往路に取つた路は尾根上で割合に面倒だつたので、歸路は右手に可なり降りて横にへつる事にする。茅戸の平を横切り、ワンリックの後に從つて同じ茅戸の斜面を急ぐ。其の中にニヒタカトドマツの森林が現れた

が、下草は左程甚くなくて過ぎた。相變らず鹿や羚羊の足跡が澤山ある。蕃人が眼をキョト〳〵させ乍ら見付けようとあせるが、斯んな急ぎの途中では物になるものでない。雲が灰白色に濛々と湧いて谷間から上昇し、トドマツの森や茅戸を一樣に包む。天氣は又惡い方に向ふのか？稍々憂鬱になつて面白くない足を運ばせる。一旦下つた徑は漸く登り出して、今度は文字通り起伏する山皺の落ちて來るのに曲折しながら、略々同一平面上を行く。之れは確かに蕃人の古い踏跡に違ひない。歩いても〳〵仲々野營地に着かない。之れでは前の通り尾根を行つた方が好かつたと後悔したが、右手から落ちて來る太い山皺を起すと、やつと懷しい昨夜の小屋が滑かな茅戸の急斜にこびり着いて居るのが見えた。其處に着いたのは十時四十分であつた。

濕つぽい霧を拂ふために焚火をする。食ひ殘りの粟飯を平げる。そして夫れが濟むと天幕を外して出掛けねばならない。最初の豫定では之れから直に山稜を縱走してマボラス山へと迫り、何處か尾根近くに野營地を求めて今夜を過し、夜の明けると同時にマボラスの登頂を果したいと希つて居たのであつたが、此の樣に天候惡變し雲蔓り雷鳴轟き、其の上小雨まで落ちて來ては、此の計畫は諦めねばならないであらう。全く地理不案内の之からの尾根條、雲霧の中に徑を求めるのは困難な許りでなく、一萬一千尺の高距に荒れる風雨は甚いものであらうし、若しもの場合尾根の北側に除けたくとも、前に眺めた樣に斷崖では其の實行は危ぶまれる。僕は蕃人の不贊成を待つまでもなく、此處から最も近い安全な小屋ウリパンホルの狩小屋へと避難する事にした。雲の色を見守つて熟慮に耽る僕の顏色を窺ひ、其の實行如何に就て心配して居た蕃人も、之れを聞いてホッと安堵した樣であつた。降りしきる雨の中にやうやく荷物をくゝり、マントをかぶつて思出多いオシトマバンの地を後にしたのは十一時を少しまはつて居た。

昨日通つて來た徑なので其の徑路に就ては少しも頭が要らない。皆首うなだれて雨に濡れた山路を默々として引返す。荒れ易い二百十日後の天候、それも覺悟はして來たものの、遂に降られて終つたのか！もう一遍調べて見たいマボラスの山頂、それも斯んな樣子では先づ望みがない。今年の山旅の最後も遂に雨に見舞はれて終つたのか。此の雨が長く降り續いたら、マスブル溪は增水して、とても谷沿ひに下る事は不可能である。食糧も充分でない心細さ、永く山に滯在せねばならぬとしたら如何すれば可いか？　心は常に山と天候の間を淋しくも往來する。

數間先きの見えない濃霧の中に唯雨と風のみが暴れる。吹き上げる突風にマントの裾を抑へ、雨に叩かれて我々の歩みは續けられた。雲に視界を奪はれて、側眼もふらず一圖に足伸ばす其の彼方には、灰色の雲が何處までも續いて居る。知らぬ間に時が移つた。廣い尾根の接合點を過ぎて、ウリパンホル溪に臨む尾根にかゝつてからも、もう大分經つた。膝から下は露にしとり、むれる濕氣に胸は汗ばんで蒸し暑い。低く下るに連れて少しく雲は割れた。そして何事かをたくらむ樣に奔走する雲の運動が見渡された。山と谷を大きな背景として描かれる斷雲の豪快な筆觸（タッチ）、夫れは其の結果が齎す惡業を度外視しては、全く雄大で滿更捨てたものでもない。

雨にともすれば滑り勝ちな坂路を降り、水量を增したウリパンホル溪を思ひ切つて涉り、茨の叢を分けて、ひつそりした小屋を訪れた時は、時計は丁度二時を示して居た。急ぎ走り寄つて雨を除けようと思つたが待て暫し。或る過去の經驗に氣がついたので入口に佇んで中を窺ふ。案の條勢よく最初に飛び込んだワンリックが、急に足をじたばたさせて、マッハボン（畜生）！マッハボン！と周章て出した。そして後に續いたスバリとティヤン又同樣である。見ればむき出しの程よく肥えた蕃人の腿から脛まで、米粒大の蚤で一パイだ。身體を振るつても逃げる

マボラス(左)と秀姑巒山(右)　　鹿野忠雄

處か、益々跳びついて來る大蚤が夢中になつて生血を啜る有様には、僕は思はずゾッとしないわけにいかなかつた。狩小屋に蚤は附き物である。斯んなに澤山居るのも珍らしいが、蕃犬を狩に使ふ小屋には殊に多い。何ケ月間生血に餓えた蚤群が、待つてましたと云はん許りに跳びかゝる。周章てふためいて焚火を作り、マッハボンを繰返しながら、掴んでは燻べ捕へては燻べる笑止千萬な様子に、僕は腹を抱へて笑つた。淋しい山の中にも一片の愉快はある。僕は稍々朗らかになれた。

蚤も稍々片づいたので、眞裸體になつて濡れた衣服を火に乾かす。外は一層ドシャ降りになり雨音は喧しい位で、天候はいよ〳〵唯ならぬ氣色だ。ほんとうに縱走を斷念して良かつたと思ふ。未だ二時過ぎと云ふのに小屋の中は夜の様な暗さだ。誰か鹿でも獲つて來ないかと云つても、斯んな様子では動かうと云ふ者がない。何か獲物がなくては又してもあの貧弱な獄立か！斯んな時には何か美味いものでも食はなければ余りにも淋し過ぎる。

然し赤い焚火は母の様な慈愛を以て僕を慰めて呉れる。憾めしい雨の音を絶えず耳にしても、溫い火に寄り添つて居ると、僕は何を思ひ煩らふ事もなく幸福だつた。時には我々から一つしかない生命を召し上げる山、幾ら苦い目に遭はされても離れられない山。此の憐れな破れ小屋に乞食の様にみすぼらしい生活を續けても、微笑ましい愉悦を覺えるのは山なればこそかも知れない。

時は移つて夕方になつた。僕は氣が進まなくても、明日への原動力を養ふためには、蕃人と食を共にしなければならない。めい〳〵のタコ（木匙）を取つて同じ鍋から掬つて食べる。粟飯は鹽を儉約して居るので、唐辛を鹽に漬けたのを一口嚙んでは、又粟飯を頰張る。同じく共の唐辛も極めて大切にしなければならないので、蕃人の一度口にしたのを汚いのを忘れて僕の口にしなければならない。ワンリックがハトヴ（鼠罠）を十數個も掛けて、や

うやく捕へた一匹のサシビナル（ニヒタカネズミ）をまるごと焚火に放り込んで、四人で分けて食ふ。それでも蕃人は一番肉のある胴の部分を親切にも僕に呉れた。鼠は案外上等だつた。鼠の天婦羅は昔から美味いと聞いて居たが、聞きしに勝さる珍味である。本當のフライにでもしたら東京で食べても感心するに違ひない、ニヒタカネズミは臺灣高山特産の鼠で、其の標本は從來二、三頭しか得られて居ない珍種だ。此の鼠の味を知つたのは僕丈だらうと、淋しくも變な所に誇りを感じる其の時の僕だつた。

ゆらぐ焚火の火に、二、三の物覺えを手帳に記すと、もう寢るばかりだ。此の樣子では明日も雨だらう。まあせいぜい睡眠でも攝つて體力を恢復しようと、淋しい眠りに就いたのは七時頃でもあつたらうか。

八、再びマボラス山頂へ

狩小屋の夜はほのぼのと明けた。どうせ今日はマボラスへは登れまい。歸路に就くなら急ぐには當らない。ゆつくり寢てから起きてやらうと眼を閉ぢて居たが、余りに小屋の周圍が靜かなので、若しやと思つてそつと起き出で、上を見上げると、雨が止んだどころか、空は洗はれた樣に雲一つない。未だ色づかない天井に、二、三の星が淡い光を瞬いて居る。天氣だ！天氣だ！急に周章て出したが、夫れには張ち切れる樣な希望がある。蕃人を搖り起して、「出發、出發」と騷ぎ立てる。然しながら、此處で考へねばならないのは、之れからの日程だ、此の分ではマボラスの登頂は出來るであらうが、今日一日の內に豫定を果して無双に歸着する事は思ひも寄らない。早くとも明日になるであらう。駐在所には四日の後に歸ると云ひ殘して來たし、此の儘三人で山行を續けては第一食糧が不足する。此の難關を切り拔けるには、如何しても蕃人の一人を歸さねばならない。其の人選に就ては可

なり頭を使つたが、結局スバリを無双に歸す事にした。殘る二人では重い荷物に堪え切れないので、省ける丈の品物をスバリの荷に振り分ける。寒い夜の露營もスレンの寢袋丈で我慢する事として、量張る毛布も割愛する事とした。

五時五十分、昨夕とは打つて變つた希望に滿ちて我々は小屋を後にした。昨日通つて來たと同じ經路を取つて鞍部へと目指す。再度のマボラス山頂へ、先日の榮ある歡びを與へて呉れた彼の山への訪れを思ふと、僕の胸は子供の樣に波打つた。昨夜の雨に微細な塵の分子までも拭はれて清淨化された空は、淡い純碧から次第に藍碧へと遷り、木々の葉末に宿る朝露は金玉の樣に綺羅びやかに光る。今日の天氣を祝福する樣な鳴禽の囀り、夫れに浮かれてか、谷川の岩を涉るセキレイが、其の輕快な尾を嬉しげに振る。高きに登るに連れて、モク〳〵と盛り上つて來る靑い山の群像の中に、東郡大山塊の盟主、東郡大山が衆目を聚めて聳え立つて居る。

晴れやかな氣分の中に足を運び、やがてマボラス北尾根の鞍部に荷を下して休んだのは、六時四十五分であつた。マボラスへ志す我々三人は、此處でスバリに別れねばならないので、一日二日無双への歸りが後れる旨を紙片に書いてスバリに托し、後日の思出にもと、狩裝束の三人を立たせてカメラに收めた。重い荷を脊負ひ皆に別れて獨りトボ〳〵歸路を辿らねばならぬスバリは淋しいであらう。ほんとうに氣の毒ではあるが仕方がない。彼を犒ふつもりで、唯一つ持つて來た都會の煙草クレーヴンミキスチャーを一摑みやると、危い日本詰で「アリガト」と云つた。我々が二日で來た行路を一日で歸る彼は急がねばならない。十五分の後には早々として出で立つ彼を見送つた。さあ我々も出發だ。足元に咲き亂れる花を見捨てゝ三人は立上つた。

巍然として天空を壓して隆まる巨大な大地の隆起。尾根一本を間違へても其の苦勞は數倍する。加ふるに登路

未知なマボラスの北斜面。之れから其の山頂へと志す我々のコースは、愼重に考へられた。北尾根を取るのは其の長い道程からして得策でない。然うかと云つて直ぐ前面の山腹を登るのは、夫れが甚だしく急な斜面を有つ事によつて不利である。山頂から東北に派出する側尾根は、此處から見たところ最も手近かでもあり、且其の尾根條を一すぢに辿れば登頂も可能と思はれたので、斷然夫れに定めて、眞直に足を向けた。

下地は踏み易い茅戸である。然し此の長い急坂が終つて懷しい絶頂が眼前に現れるのは、何時間後であらうか？　それまでには如何程の汗を流さねばならないであらうか？　マボラスの絶頂はコニーデ型の火山の様な山腹線を落して、約六十度とも覺える仰角に聳え立つ。此の様な登りは甚だしく腿の筋肉を疲勞させる。夫れに加へて太陽が頭上から照りつける。我々の歩みは遲々として續けられた。重い荷に惱む蕃人が又しても獸の様な蕃聲を張り上げる。夫れが明るい寂漠を破つて、其の原始さに相應しい周圍の山に吸はれて行く。

全く苦しい登りだが腰を下して後を振り返ると、眠の中の夢たちの様に青い山が霞む。夫れを見ると又足を運ぶ氣になつて立上る。絶えず我々を見下すマボラスを打ち仰いでは、心勵まされ三十分おき位に休み又登行を續けた。その途々にはニヒタカセキチクが散りそうな花を着け、高山性のフキバッタがパタ〳〵と飛ぶ。二時間位して愈々どうしても通らねばならぬニヒタカトドマツの純林にかゝつた。然し心配して居たニヒタカヤダケの下生えは左程甚くなくて、反つて射陽を遮切る綠の天幕に感謝したい位。葉や枝をガサ〳〵分ける三人は何時からともなく元氣づいて居た。此の原生林は見事だつた。幹には青い蘚苔がフックリと絹綿の様に柔く、枝にはサルヲガセが仙人の様に淋しい。全く太古以來斧鉞を入れた事のないのは云ふまでもないが、夫れは其のあくまで豐な清淨さに、一歩でも足を入れた訪問者をして森林の處女性を感ぜさせずには置かないであらう。そして此の森の

中にマボラスの山神在すと、心から襟を正し、此の神域を今一度見直すに違ひない。山神の慈悲に縋つて生を永らへる野獸にとつて、此處は正しく安全地帶と見えた。羚羊、鹿、それに熊達の自由な生活の記錄は、下地に刻印せられた夫れ〴〵別な足跡に仍つて判ぜられる。我々は又トドマツのほの暗く枝差し交す下に、六坪大の水溜りを發見した。薄濁りに濁り、何かで揑ねた樣な水際の泥土や、動物園の柵から匂つて來る樣な獸臭さから、其處は上記の野獸達の行水場と見たのは間違ひでないと思ふ。此處に身體を潛ませて野獸を待てば、必ず彼等の野生のまゝの姿を觀察する事が出來るであらう。然し嗅覺に鋭敏な野獸は、我々人間の襲來を早くも察して、姿一つ見せず、森の中は寂として黑い蔭が身にヒヤリと迫る。

その中にも時は過ぎ高距は上つた。時計の針は十時に近く、バロメーターの針は三四〇〇米に屆いた。トドマツの下蔭に遠慮勝ちに丈を伸して居たニヒタカビャクシンが、昇るに連れて勢力を增して、次第に前種に混淆する。夫等の立枯れの幹の地上一丈位の處には、直徑三寸位の孔が時々眼に留まる。夫れは注意すると高山地帶に多いカホジロムサヽビ（*Petaurista lena* THOMAS）の巢である事が間もなく知れた。顏面と腹面が雪の樣に純白で、背面が赤褐のエレガントな臺灣特產種。是非とも之れを追ひ出して捕へようと、皆で棒切れを盛んに投げつけるが、不在なのか幾ら脅しても一向に出て來ない。山登り等は少し忘れて、夢中になつて棒を投げたり幹を叩いたりして居ると、孔の中でキューと云ふ叫び聲。居る！居る！そんなら根元から伐り倒して終へと命じると、蕃人は腰の蕃刀を引き拔いて、丁々とやり出した。ムサヽビの膽は美味かつたなどと昔の思出を手繰つて居ると、何だか獸糞臭いのでフト足元を見た。すると其處には生新しい鹿の糞が一塊。オヤと思つた瞬間には、近くから跳び出した牝鹿が、もう數間先に逃れて行く。ハノヴァン！ハノヴァン！其の聲に蕃刀を放り出して、鐵砲片手に

後を追つたが、斯んなに周章てたのでは彈は決して中るものでない。間もなく蕃人は二發の彈丸を無駄にしてスゴ〳〵歸つて來た。あの鹿が獲れたら今夜の夕飯は樂しいのに！三人は一樣にガッカリした。もうムサヽビを獲るのもいやになつた。それでもやりかけでは惜しいので、やつとの事で木を伐り倒して孔の中を調べたが、我々が鹿に氣を取られて居る中に逃れ去つたのか、影も見えず藻脫けの殼だ。虻蜂獲らずと云ふのは斯んなのを云ふのか、散々な目に遭はされて三人は全く腐つて終つた。

氣を取り直して先きを急ぐ。何處からともなくトドマツはビャクシンに席を讓つて、其の雅趣に富んだ純林の美しさは、高きに登るに連れて其の度を增して行く。そしてバロメーターの針が三五〇〇米を示す頃、今迄天井を向いて生え揃つた直幹が、風に傷められて次第に身を屈め出し、遂には蓆の樣に大地を匍匐する。夫れと同時に綠の天幕は漸く破れて、靑い天井と白い陽光が頭上に再び輝き出した。

時は已に十一時に近い。然し之れから先きの登りは約三百米。張り切つた氣を弛めずに汗を流して高きを目指せば、バロメーターの針は徐々に左へと動いて行く。其の中にもビャクシンの茂みが途切れて赤裸な大地が現れ出す。ニヒタカシャクナゲがツヤ〳〵した堅い葉を差し伸べる。マボラスの絕頂がもう遠くない事は附近の氣配に仍つても判ぜられた。其處此處の岩角には、高山の象徵（シンボル）の樣なエーデルワイス（カハカミウスユキサウ）が、崇高な花を着けて居る。夫れに伍してコダマギク、ニヒタカシラヤマギク、ニヒタカシヤジン等の高嶺の花。盛りを過ぎても未だ艶麗さを失はない燎亂の花園は、マボラスの山頂を踏む前に、先づ登行者を優しく迎へて呉れる。

之れに勵まされて、頂上は直きだぞと馬力を掛ける。硬砂岩の岩塊の磊々たる堆積を乘り越へると、其の上には我々の攻擊を擊退す可く構へた樣なガレが大きく口を開いて居る。一歩は一歩とずり落ちる急な斜面も、二十

分も經つ中に過ぎて、鞍部を出發してから五時間の力闘は、間もなく三人を尾根通しへと運び上げて呉れた。稍一息ついて周圍を見渡すと、漂々と飛ぶ雲の切れ目から、俄に山の數が増して、身は空高く雲界に昇天した事が感ぜられた。

馬の背の様な尾根通しは雲霧の中を眞南に延びる。我々の立つ主稜は右手に低下して北尾根となるので、此處は其の北端である事が知れた。では最高點は南になければならぬ。一時も早く山頂に立ちたいと、心急いで僕は眞直な尾根を辿つた。前の山行に於てマボラスの絶頂と思惟した地點は、果して最高點であらうか？蕃人は彼處をラヽザ(絶頂)とは云つたが！夫れとは別に峯があつて其處が最高點かも分らない。僕は夫れに就て一沫の不安を胸に感じながら、進んだ。尾根は略々平坦で著るしい上下なく、露岩を埋めようとビャクシンとシャクナゲが摑みかゝる様に枝を伸ばして居る。

十分位にして僕は一の突起に立つた(十二時十分)。更に南方を望むと、一旦たるんだ主稜は又盛り上つて別の突起を成し、夫れは確かに一月前に極めた地點と見えた。僕は岩塊の累々と積る此の突起に何か先登者の紀念物はないかと四邊を探し求めると、秘かに懼れて居た事（恥を省みず率直に白狀しよう）には下界の物品である事は云はずと明かな一升壜は、直ぐに僕の眼に留まつた。初登攀の誇は僕から去つた！然らば夫れは何人の手に！急ぎ中に入れられた名刺を取り出して見れば、夫れはマボラス山頂附近から惜しくも引返されたと傳へられた伊藤太衛門氏である。山林調査の用務を帶びて登山された氏は完全に此の高峯を極めて居られたのだ！　大正十五年十月四日。氏の登頂は今から五年も前だ！横に鉛筆で書かれた同行者、吉井隆成、森下常吉、本杉清治氏の氏名が危く消えんとして居る。此處に於て最早云ふ可き事はない。秘かに僕だと信じ切つて居た初登の榮は氏等に歸

す可きは勿論である。それにしても一方の峯にのみ登つて喜んで居た僕の愚さが憐れまれた。僕も此の山頂に立つまでには苦難もした。然し五年前に嘗めた氏等の困難は之れに勝るものがあらう。僕は心から先踏者の努力に敬意を捧げ、其の名刺に書き添へられた、山頂雲霧深しの字句に仍つて、更めて其の當時の情景を眼に浮べて見た。

それにしても、僕自身を初登者と信じた歡喜から、突き落された僕の落膽は打ち消す事が出來なかつた。其の歡びが深いものであつた丈に、僕の心は滅入らざるを得なかつた。臺灣に於て一萬尺級の處女峯は未だ決して稀でない。然し一萬二千尺級の夫れは、もう探してもない。自ら最初の登頂者と信じて山と雲に感謝し、山日記にも大書した其の思出が、砂上の樓閣の樣に崩れ去つたのを見て僕は樂しまなくなつた。最初にして最後なる其の山への眞心凝めた事業！　初登攀！　夫れは其の山を愛する山岳家に取つて何物にも代へ難い日頃の夢ではなからうか？　夫れに仍つて山と自分との全き融合を實現する神聖なる壯擧。夫れは凡そ世の野心と呼ぶには余りにも敬虔な一生涯の願ひではないだらうか！　然し今は自分の輕卒な愚さを愧ぢるより外はない。僕は默々として山頂の冷えた岩上を動かなかつた。

此の聖なる頂に人が訪れゝば必ず其の面を隱すのが例なのか、山神の使徒とも覺える白雲が潮の樣に流動して渦卷いた。そしてサッと引いた雲の向ふには、我々の曾て踏んだ南峯が頭を擡げて現れる。そして夫れを見ては又しても僕の心は女々しくも先きの憂鬱に逆戻りする。南峯と此處と何れが高いか？夫れは今問ふ可き問題でない。それにしても何故僕は最初の行に於て、此處を檢べて見なかつたのか？　さすれば彼の樣な無駄な歡びも感じなかつたらうし、此の樣な失望も經驗しないで濟んだであらうに！　南峯の北面がビャクシンの立木に覆はれて展望が利かなかつたのも一の原因だつたし、蕃人の言を過信したのも確かに惡かつた。然し今日此の山頂を極

め得た事を以て滿足とせねばならないであらう。此の北峯を知つて僕は知識を增したのだ。そして自分の過失を知つたのだ！　彼の行を以て止めて終へば、初登者の何人なるかを氣づかずして、飛んだ恥を曝さねばならなかつたらう。斯く思ひ及ぶと僕の心は、稍々諦めに似た平靜に落着いて行つた。

其の間にも雲は尙も動搖して山頂を覆ひ隱す事を止めなかつた。そして其の間から僅かに許さるゝ展望は、東面に崩落した驚く可き程大きなガレと、マリガナンに續く山稜の一部のみであつた。湯氣の樣に立昇る白雲と、夫れに蒸される樣な山頂の岩の寂寥とした情景に威服せられて、僕は歸路を思ひ出した。蕃人は待ちくたびれてさつきから、訝かし氣に僕を見守つて居る。淋しい心を抱いて一時少し過ぎ、忘れられぬ山頂を後にした。

九、ババハの小屋

此の山行の主要な部分は過ぎた。そして僕の爲す可き事は略々成し遂げた。今は無双に歸る丈である。此處しばらく僕の指揮に仍つて決定したコースを、今度は蕃人に委せて、彼等の云ふがまゝに從つた。マボラス山頂からの降路は西北に取られた。相變らず白雲の立ち罩めた中を衝いて下りを急ぐ。主峯よりは明かに高距の劣る二、三の側峯の間を拔けて、か弱い踏跡は下へと〳〵我々を導く。蔓る一面の雲に詳しい地形は分らないが、其の途中には明かな階段地がある樣に思はれた。四邊の水々しい處女地には、ビャクシンとシャクナゲの蓆が潤澤な綠を溢れさせて居る。そして風を除けた木の茂みには遠慮深いチメドリやミソサヾイの細い聲が聽える。

蕃社を出で立つてから四日、家を思ひ出して一時も早く歸りたい彼等蕃人の足取りは、追ひ着けない程迅い。下るに連れて次第に立上るビャクシンの木立を拔け、ニヒタカヤダケの藪を突き切つて尙も下ると、左手には灰

色のガレが眼に映る。ワンリックが振り返つて、前の山行には此處から左へ斷崖をへつゝたのだと注意して呉れる。早くも過ぎた一月、然うだ此處から我々五人はオブナビオンの小屋へと下りたのだつた(二時)。

之れから先きは、前の山行に於て採つたコースと全く同樣である。低く下つた爲めか雲霧からは解放されたが、早くもたそがれの色は四邊を包んで居る。短いタカネスゝキの草地は歩き易く、疲れた身體に物思ふには都合が好い。徑は捗つて、やがて晝食を認めたトンタナーマンに來た。水汲んだ淺い小池は如何かと眼をやれば、靜かに澄んで悲哀を罩めた夕暮れの色を寫して居る。

ババハの小屋は夫れから間もなくだつた。ほの暗いトドマツの森林中を通ずる蕃路は、ヤダケの密藪に迷ひ勝ちであつたが、幸くも徑を求めて、我々は其の中に一坪に足りない哀れな狩小屋を發見した(三時半)。之れはワンリックの屬するタケシギアナンの所有である。そして其の位置は、マボラスからウマボンゴに至る西北尾根から西南に派出した側尾根上、ウラモン、オヌシプロン兩溪に挾まれた地點と推測される。

永らく手も加へないと見えて、柱は傾き松皮で葺かれた屋根は朽ち、蜘蛛の巣は部屋一面に遠慮なく網を張つて、全く荒い小屋だ。然し贅澤は云へない。外に天幕を張るより遙かにましなので中を掃除にかゝる。煙に燻されて黑光りする中に、此の邊に多いのであらう、何時捨てられたのか、ミカドキジの雄の白黑ダンダラの尾羽が散亂して居る。二人の蕃人を水と薪を取りに遣る。

夕霧は暗い森の中を一層暗くして、濕風のそよがすヤダケの葉擦れの音が物淋しく傳つて來る。もう歸る丈の今では、僕の張り詰めた氣持は何時ともなく凋んで居た。全く荒涼とした情景に、日頃待ち焦れる淋しさは、此の場合逃れたい程胸に應へる。斯んな時には煙草を喫さう！　パイプを啣へ乍ら、數奇に充ちた此の山旅の思出

を嚙む。ほんとうに蕃人は好く云ふ事を聞いて呉れた。時には首狩りに血刀を揮はないとは云ひ切れない奥蕃の彼等。然し此の山旅に示された從順と親切。ほんとうに蕃人は可愛いゝ者だと考へる。

同じ献立の夕飯は終つた。そしてそれから赤い焚火の火。薪は豐富なのでジャン〳〵燃やして暖まる。戸外の森林にはムサヽビが澤山群れて居るのであらう。寢就くまで喧しい程の鳴き聲が聞えた。

十、歸　途

今日は九月九日、山を下りて無双へ歸る日である。正體ない眠りから覺めて、いそ〳〵と出發の準備をする。林立するトドマツの木立を夢の様にぼかす朝霧は未だ去らないが、今日の平和を暗示する明光は隈なく充ち渡つて、早くも小鳥の囀りが樂しげに陽の昇天を告げる。やがて六時、我々三人は此の森の小屋を出發した。

朝は、一日の初めは何故此の様に麗しく、生氣に充ち滿ちて居るのであらう。森を出でゝ草原に來て見ると、昨夕の暗冥とは信ぜられぬ様な陽の公明と明朗さは、已にマボラスの山谷を支配して居る。滑かな茅戸は何處までも巨大な爬蟲の様にのた打ち、後を顧ると逆光線に藍碧に彩られたマボラスの連嶺が、高貴な衝立てを立てまはす。

心ゆくばかり鮮かな朝の色彩を分けて、歸路を辿る我々の歩みは進められた。さん〳〵と降り注ぐ朝陽の絹布の様な柔かさは、山旅の終幕を一層忘れ難いものにする爲めに存在するとさへ思はれる。長い様で短かゝつた今夏七十日の山旅、降り續く雨に粟を煮やし、荒れる天候に不安の祈を籠めた思出、險難寒暑に惱んだ經驗も今では過去となつた。然し其の報酬として廿數座の万尺を拔く高峯は、僕の胸奥に收められて、僕は今欣喜して居る。

それにしても、今僕を優しくかき抱く美と平和は、何と玲瓏たるものであらう！今迄の山行は余りに足を動かし過ぎて、夫れ等を充分に味へなかつた憾なしとしない。一歩毎に此の山旅の殘り少くなるのを考へて、僕は愛曲の終曲に近づく瞬間と同じ様な、云ひ様のない物のあはれを禁ずる事が出來なかつた。

夢うつゝの歩みは知らぬ間に僕をウマボンゴの上に立たして、之れから急落する蕃路と共に見えなくなる、遠くの青い山を之れを最後と振り返らせた。東那大山塊、秀姑巒連嶺、新高連峯、那大山。すると夫れ等各峯の絶頂は、皆それぞれ登攀の日を僕の胸に蘇らせる。あはたゞしい送迎よ！僕は丁度歸路に當る巒大山（一〇一五〇尺）に是非とも登攀して、之等の峯々にもう一遍最後の訣別を交さうと、心祕かに計畫した。其の絶頂に立てば一望の中に之等の山々を收める事が出來る筈である。

茫然と立つ足元には毛氈の様な草原がのび〳〵と擴つて居る。そして其處には、秋の訪れに他の花がどし〳〵凋んで行くのとは反對に、ニヒタカマツムシサウが獨り爛漫と咲き亂れて居た。其の淡青の花瓣は、同じく淡青に薄れて行く秋空との間に何かの默約があるのか、一月前に過ぎた僕を其の豐富さに仍つて驚かす。僕は思ふともなく都の友達を思ひ出した。そして此の瞬間を紀念して贈らうと、可憐な花を其の數丈け五つ摘んだ。

夫れからの下りは、前の山行とは少しくコースを更へて西北尾根をひた走りに降りる。ウマボンゴを發つてから一時間、やうやく粟畑が現れた。黄金色に實つて低く頭を垂れる穗、夫れを刈り集める蕃人を、我々三人は見當違ひの所から現れて驚かした。其處からはハイラロの本谷を隔てゝ、駐在所の屋根がもう見える。此處から又一時間。十時には無双に着く事が出來るであらう。彼處に着けば、殘り惜しくも山を離れる支度をしなければならない。そして下界とは紙一重の近さだ。僕は何物かを恐れる様に、其處を去り難く感じた。（一九三二、八、二〇）

秀姑巒山脈に關する覺え書

筆者が實際此の尨大な山脈に關して知る處のものは、僅かに昨夏試みた二つの山行に仍つて得たものに過ぎない。此の乏しい經驗に仍つて得られた知識は極く貧弱なものである事は明かであるが、筆者は一先づ此の山系に關しての從來の知見を纒めにして置かうと思ふ。何故ならば他の山脈を巡るに急がしい筆者は、此處しばらく他の山登りに追はれて、尙も充分に此の山脈に就て調べる機會がない事と豫想されるからである。記すところは地質地形、生物、蕃人、其他總てに亘るが、今回は冗長を恐れ、其の中でも最も重要にして注意す可き事項に就てのみ可及的簡單に記錄して置きたいと思ふ。斯くする所以は、動植物にしても其の全部を列擧すれば、何れの山系にも共產する種類を含み、リストは甚だ浩瀚なものとなる事を懼れるからである。

一、秀姑巒山脈の領域

秀姑巒山脈は此處に筆者の初めて用ひる處の名である。此の山脈は臺灣島を略々南北に縱走する中央山脈（脊梁山脈）の一部に屬する事は明かであるが、筆者は次に記す領域に特に此の稱呼を與へたい。夫れは一に中央山脈と稱しても、南北の延長百里に及び、其の幅員も廣く、其の肢節も複雜で、到底此の大山脈を單一の總稱に仍つて呼ぶのは、種々の場合に於て不便至極であり、是非とも夫れを幾つかの支脈に分ける事を絕對に必要と信ずるからである。

處で此の山脈の領域の問題であるが、北は濁水溪の上流なる郡大溪の支流ハイラロ溪に劃られて東郡大山塊（新稱）に對し、西の境界は郡大溪と新高南山の東に略々南北の流路を取つて南流する老濃溪の一支流とを結ぶ線に

仍つて表はされ、其の北半は郡大山脈（新稱）に、南半は新高山彙に對峙する。南は前記の荖濃溪より南駐在所の足元に食ひ入る一支流を延長したる線を以て、尖山、南双頭山を連亙する中央山脈の主稜と絶緣せられ、東はマリガナン山の東に聳立する一一一四五尺の無名峯の直ぐ東の部分に於て、南北の一線により切斷せられてカシパナン山塊へと續く。以上の線に仍り圍まれた略々正方形の地帶。其の主稜は其の弧の突面を西北に向ける半月狀の山脈を以て、秀姑巒山脈と呼んでは如何と思ふ。

筆者は台灣山地に地形學的精確さと、山岳家に對する便宜とにより行はれる、山地區分を企てゝ居る。其の第一手段としての切峯面(Gipfelflur)の作成は來だ完了しないので、此處に確言する事は出來ないが、完成の曉も前記せる秀姑巒山脈の領域に對しては、著るしい變改を見ないであらう。

二、地質地形學的觀察

台灣山岳生成に關して未だ之れと云ふ議論の現れない現在の地質學的暗黑時代に於て、此の山脈に關して參考になる記述を試みる事は可なり困難と云ふ可きである。不滿足乍ら筆者の瞥見を記すに止めなければならない。此の山脈中には隨所に準平原遺物とも云ふ可きかなり廣い平坦地が遺されて居る。マリガナン山の如きは、夫れ等平坦面上に急聳し、モナドノックと考へられるが、夫れ等の平坦面は何れも明かに急斜した大地層を切斷したものであるから、他の事情をも考へて前記の推定は略々間違ひないであらう。而して此の山脈は決して單輪廻のものではなく、重輪廻の造山運動に仍つて生成せられたと見るのは、又誤ないと思はれる。

已に報告したるが如く（鹿野、台灣高山地域に於ける二三の地形學的觀察、地理學評論八卷、三、六、號）同山脈西北山

稜に於て、略々一万尺、一万一千尺、一万二千尺の各高距に於て認められる平坦面の遺物は、明かに階段を成して、夫れ等は山麓階(Piedmont-treppe)の關係にあるものと考へられ、各平坦面は夫れぞれ或る地質時代の山麓面を表すものと思はれる。此の様な事實は西北山稜に限らず、主稜より北に延びた二、三の支稜に於ても觀察する事が出來た。

此の山脈を構成する岩石は、多く粘板岩と砂岩の兩者に限られる。然し筆者は大水窟山の西南方に於て、閃綠岩の露出を觀察する事が出來た。而して深造岩なる同岩石の貫入が準平原化以前に行はれた事は、其の露頭が平坦面に仍つて切斷せられて居る事實に徴しても疑ふ余地がない。

筆者は前述せる登攀の間に於て、露出岩石の走向を可及的測つた。其傾斜度の多くは、東に四十度乃至八十度を測つたが、獨りマリガナン山頂の露頭が西に傾斜して居る事は、上述の見地から見て最も注目に値する事と思ふ。

ハイラロ溪の沿岸には、少からぬ河岸段丘が發達して居る。無双の如きも同じ段丘上に位するが、其の高距は六五〇〇尺であり、更に驚く可きは上流に於て、九〇〇〇尺を測る事である。之れ等は勿論近代に於ける大規模な地盤の隆起を立證するものであるが、段丘としての夫れ等の高距は、日本領土内に於て最高のものである事は注意す可きである。

同山脈中には水溜性の池が稀でない。長く日照りが續けば涸れる事もある様であるが、西北山稜の中途に位するトンタナーマンの池は決して涸れないと云ふ。其の水は採水するを失念したが、其の物理化學的性質は他の台灣高山の小池と著るしい差違なきものと考へられ、水素イオン濃度は其の場で測つたが、六・一であつた。

三、動植物の觀察

動植物に就ては此處に一々其の名を列擧するを避けたい。植物に於ても其の産するものは、カハカミウスユキサウ、コダマギク、ニヒタカクリン、フクトメキンバイ、ニヒタカキンポウゲ、ニヒタカハタザヲ等、殆んど新高山彙に産するものと大差なく、唯其の種數は稍々少きの觀がある。而して次高山彙等に比しては高山植物が、より高き位置に産するは台灣島内に於ても緯度の差によりて、氣象的に異るに原因するものである。

今の所此の山脈に特産と信ぜらるゝものに、大水窟山頂に得られ、正宗嚴敬理學士により記載せられたるノウコウチドリ白花の珍品シロバナノウカウチドリ *Orchis kiraishiensis form leucantha* MASAMUNE（臺灣熱帶農學雜誌八卷三號、一九三一年）がある。尙細かに採集すれば若干の珍種は之れを得られるであらう。現に筆者の採集品の中には未知のものを含んで居る。尙、植物分布上注意す可きは、タイリンアカバナ（*Epilobium nankotaizanense* YAMAMOTO）であつて、此の種は初めて南湖大山より記載せられ、其後次高山、中央尖山より知られ、從來台灣北部産と認められて居たが、今日マボラス山頂附近に於て之れを得た事である。同種は新高山に於ても未知の珍種であるが、相接近した此の山脈に得られたのは興味ある事と思はれる。又、筆者はニヒタカセキチク（*Dianthus pygmaeus* HAYATA）の白花の奇品を得た。産地は大水窟山山腹であつたが、之れは從來未見の種で、新に form albiflora とでも新名を與へる可きものであらう。

今度は動物に就て云へば、哺乳類に於て可なりの收獲があつた。タイワンイタチ（*Mustella taivanus* THOMAS）は從來阿里山（Thomas）、ピヤナン鞍部（鹿野、臺灣産哺乳類の分布及習性、動物學雜誌四八九號）より他知られなかつた

が、筆者は此の山脈の南山腹に當る南駐在所で得られた標本（毛皮で頭骨を欠く）を入手する事が出來た。夏期は姿を見せず冬期鷄を襲ひに來るとの事であるが、此の獸は尙、ツヽジ、秀姑巒、八通關、觀高、新高等の駐在所にも間々見られるとの事である。又、Swinhoe が報告して以來、邦人の手には其の標本が得られず、其の產否疑問とせられたブヌンヤマネコ（新稱）*Felis viverina* BENNETT の標本を得る事が出來たのは特筆に値する。尙紀文中に於て述べたるが如く、シマリスの未知種（*Tomiopus* SP.）を得たのは大きな收獲である。

其他に從來新高山（菊池）、卓社大山（鹿野）より知られ、其の中間に位する同山脈に當然產する事が豫想されたニヒタカネズミ *Rattus culturatus* THOMAS を、各露營地にて採集した事、カホジロムサヽビ（*Petaurista lena* THOMAS）の稀ならず產する事、又、タイワンザル（*Macacus cyclopis* SWINHOE）が他の山地に其の比を見ない程高所（一萬尺以上）に分布する事等を述べて筆を擱く事としたい。

尙蕃人に仍れば、此の地方に冬期のみに現はれる野兎があると云ふ。臺灣產の兎として知られる唯一種のタイワンノウサギ（*Lepus formosus* THOMAS）は平地の產であるから、之を事實とすれば明かに別種であらう。

得られた鳥類に就ては、其の名を全部擧げ得ないが、ミカドキジ、タカサゴマシコ、キンバネホイビイ、タカサゴカケス、ヤブドリ、タカサゴミソサヾイ、ニヒタカハシブトチメドリ、アヲチメドリ、タイワンオホアカゲラ、タイワンホシガラス、タカサゴウソ、ベニサンセウクヒ、アリサンチメドリ、ヒメイワツバメ等が少くなかつた事を報告する。

爬蟲兩棲類に於ては、從來能高山より他產地を得ないキクチハブ（*Trimeresurus kikuchii* OHSHIMA）を八通關にて得られた事を注意す可く、前記のタイワンイタチと其の產地を一にして、一種のサンセウウヲが產する事を知ら

せたい。此の種は標本は得られなかつたが、サンセウウヲに間違ひない事は信ず可く、恐らくは阿里山から記錄せられたアリサンサンセウウヲ *Hymobius arisanensis* MAKI であらう。

高山蝶に於ては、其の殆んど全部を產すると云ふ可く、就中ナガサハジャノメ (*Satyrus nagasawae* MATSUMURA) は最も多く、八月より九月に近づくに從ひ、漸次多く發生する樣である。

四、附近蕃人との關係

此の地方に於て先居した最古の住民は、現住ブヌン族の間に、サルーソーとして傳へらるゝ矮小人種である。此の種族はブヌン族の移住する前に占據し、ブヌンの傳說に據れば身長三尺、弓を射る事巧で、ブヌンの祖先は屢々惱まされたが、結局此の種族を追ひやつて現在の地を勝ち得る事が出來たと云ふのである。此の種族は如何なるものであるかは今尙明かでないが、要するにブヌンより低級な原始種族であつて且先住者であつた事は疑ひない。而して其の諸特徵を吟味するに、少からずニグリートー的色彩を親ふ事が出來る（鹿野、臺灣島に於ける小人居住の傳說、人類學雜誌第四七卷第三號）。

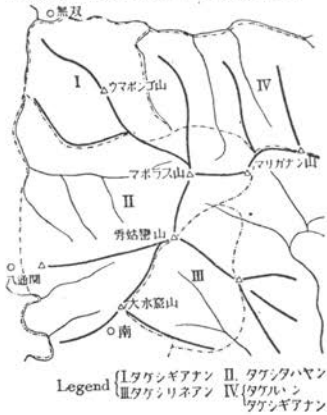
現住ブヌン族郡蕃 (Takebukun, 又は Bubukun) が此の地方に移住したのは、種々の事實を綜合すると、今を隔る事略四百年で、その移動は三回に分れて行はれた樣である。而して其の文化を見るに可なり興味ある事實を認める事が出來るのであつて、例へば比較的近世に於ても、自己の製作に成る打製石器を用ひたり、數年前までは土器を製造したりした事實である（之等の興味ある土俗考古學的事項は專門雜誌に書く機會があらうから此處に省く）。

現在に於けるブヌン族郡蕃の此の山脈に於ける狩獵區域の分布は、圖に示すが如くであるが、其の狩獵區域の

使用權は、タケシタハヤンとか、タケシギアナン等と云ふ一氏族(Clan である)の占有に係り、北部のタイヤル族の如く一蕃社によつて所有せらるゝものでない。而して各氏族は一蕃社に包含せらるゝとは限らず、二つ以上の蕃社に跨る事があると云ふ事は、已に紀文中に於て述べた。

同山脈中には縱横に狩獵路が通じて居る。然し其の最も重要にして注目す可きは、此の山脈を横斷して他蕃社に通ずる交通路でなければならない。之れは中央山脈を横斷して東海岸に分散したブヌンの祖先が移住に當つて取つた經路であり、其の後も親戚關係を有する蕃社同志の往復路であり、又鹽、火藥其他の必需品の供給路となるものである。此の様な意義を有するものは、此の山脈中に唯一つ認められる。夫れは筆者が第一回のマボラス行に於て取つたコースであつて、即ち無双よりサヽルベの尾根を辿つてマボラス南面の斷崖の中途をへつり秀姑巒山の頂上に出で、それより直下東南に路を求めて花蓮港玉里支廳のタルナス社に至るものである。此の交通路は

秀姑巒山脈に於けるハイラロ、ハタランイバタン、マシタルン四社氏族狩獵區域分布圖



古代より中央山脈を横斷して、其の東西のブヌンを繫いだ重要な幹線の一であつて、此の線は其の中でも最も中央に位し重要なものと信ぜられる。即ち此の線の北部に於ては、丹大社から中央山脈の大石公山、丹大山の間を越えて、花蓮港玉里支廳管内のマクシャイン社に拔ける蕃路があるが、秀姑巒山脈の交通路は北から算へて二番目の要路に當るわけである。

五、山　名

秀姑巒山と大水窟山。此の二つの漢名の出所に關しては、筆者は未だ調べる機會に接しない。大水窟と秀姑巒は、玉里横斷道路を初めて開いた清の吳光亮の命名に係るものである事は略々明かであるが、此の二山の稱呼は何人により唱へられたものであるか？此の二つの地名の附近に聳立すると云ふ故を以て命名せられたものとも思はれるが、其の命名者は今明かでない。或は此の地方を測量された野呂寧氏ではないかと思ふ。

以下此の山脈の主なる高峯の蕃名を記錄して置きたい。

1. ウマボンゴ山（一〇三一六尺）

ブヌンの傳說に由來するもので、昔一人の蕃人が、此の山の項上で雷の惡口を云つたところ、大いに怒つた雷が卽座に其の男の首を取つて終つたからだと云ふ。ボンゴはブヌン語の頭。ウマノンは取つて捨てるの意。將來此の山の山名として上名を使用したい。

2. マボラス山（一二五六〇尺）

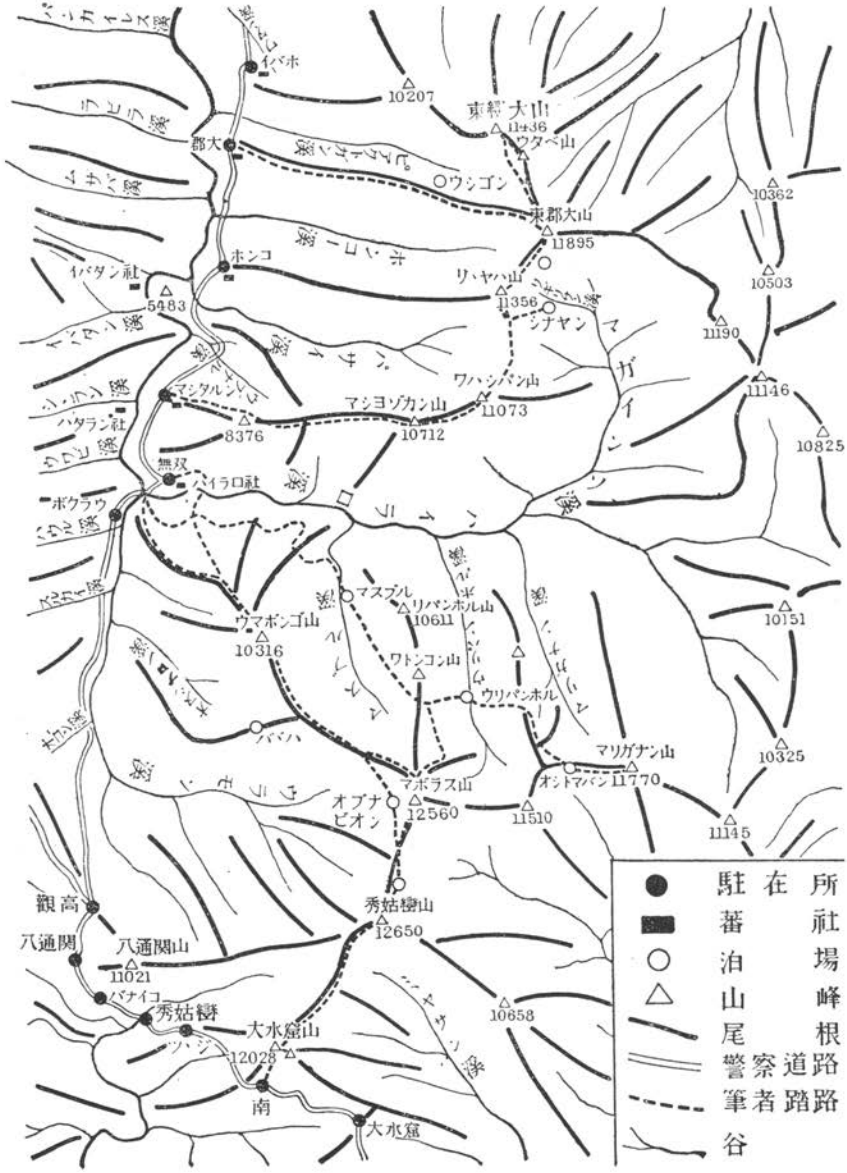
此の山の蕃名はウラモンと稱する事は已に述べた。而して其の意義は明かでない。此の山の正名としてはウラモンを取る可きものかも知れないが、從來マボラスの山名は相當廣く知られ、今更變更するのは容易でないと思はれるので、從來のまゝ前名を襲用したい。

3. 秀姑巒山（一二六五〇尺）

此の山の蕃名はマボラスと云ひ、老人の意である。新雪到れば其の項上白髮の如く白くなるため斯く云ふとの事である。前記の理由によりて山名を更へるのは不便であるから、此のまゝにして置きたいと思ふ。

4. 大水窟山（一二〇二八尺）

秀姑巒山脈　東郡大山塊憶測圖



蕃名をウシタイガンと云ふが、其の意味は不明である。

5. マリガナン山（一一七七〇尺）

此の山名（意味不明）は今回筆者の初めて記錄する處のものである。同じくブヌン族郡蕃の蕃名であるが、以後一般に此の山名を使用したい。他にウラカバン、ウスマリガナンとも云ふが、マリガナンの方が語呂が好いので前稱を採用したい。

挿入の「秀姑巒山脈、東郡大山塊憶測圖」は筆者の作製に係るものである。其の骨子となるものは五萬分之一蕃地地形圖であるが、筆者の注意に仍つて改めた箇所が二、三ある。例へば地圖に脱漏したマリガナン溪の如きものである。蕃地地形圖には各溪谷に名が與へられて居ないが、筆者は實地に當つて蕃人に問ひ質して、出來る丈記入して置いた。今後之等の名稱を採用されゝば幸ひである。

六、登　路

筆者が第一回マボラス行に於て取つたコース中、無双からマボラス鞍部まで、又第二回登行中、無双からマリガナンを經てマボラス山頂までのコースは、今回邦人として初めて踏まれた登路である。而して大水窟山から秀姑巒山を經てマボラス山までは已に伊藤太衛門氏一行に仍りて踏まれ、又秀姑巒山までは後の登行者中此の道を取つたもの少くない。而して此の他に從來知られたコースは、八通關から八通關山（一一〇二一尺）を經て秀姑巒山に取り付くもの位と思ふ（他に小さな登路はあるかも知れないが筆者は不幸にして知らない）。

此の山脈に關して參考になる記文は不幸にして殆んどない。僅かに、慶應山岳部「登高行」第八號（一九三一年）に發表せられた臺灣山行なる紀行文中、後藤宗七氏が大水窟山、秀姑巒山の二山に就き書かれたものがある。

（一九三二、八、二四）

八雲ヶ原水蘚濕原に就て

山崎次男

一

本邦に於ける水蘚濕原は本州中部に於ては山岳地帶に分布し、北海道には平原に出現し、更に樺太に於ては海岸に迄迫るものがある。玆に述べんとする八雲ヶ原は滋賀縣滋賀郡小松村に在り北緯三十五度附近の地點に位して水蘚濕原としては著しく南方に存するもので、單に位置的關係より見るも特筆に値するものである。然るに尙遠く九州の地に水蘚濕原のあることを聞けば、未だ其れを追究せずして八雲ヶ原を以て水蘚濕原の南限と云ふを得ざるも、北方濕原の一例として幌内(ポロナイ)河一帶を取り、本州中部濕原の一例として尾瀨ヶ原を、而して南方濕原の一例として八雲ヶ原を取るならば、其れ等三者の植物群落の分布並に生態學上の比較觀察は極めて興味ある問題である。

冒頭に於て八雲ヶ原と云ふ地名を揭げても之は餘りにも珍らしい地名であり寧ろ奇異の感を起す人があるかも知れない。仍て先づ稿を進める前に本地名の紹介を忘れてはなるまい。

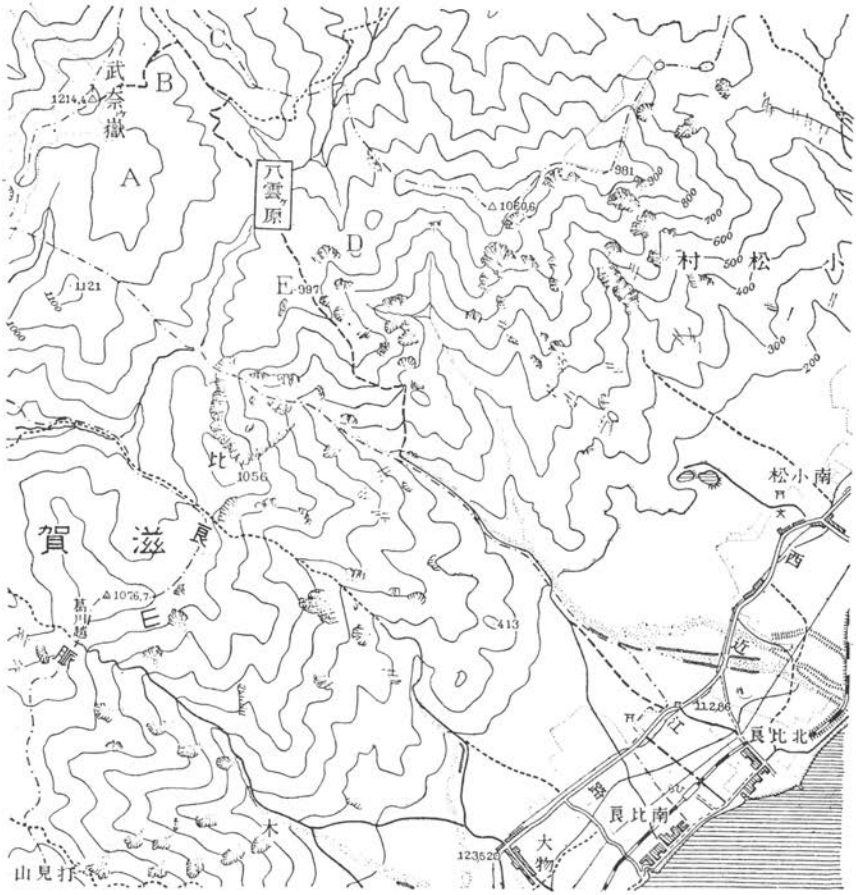
此の地域は比良山脈の最高峯武奈(ブナ)ヶ岳東面の登山道に沿ひ、湖岸の比良口より約十粁、武奈ヶ岳頂上へ約二粁餘の處に位置して、總面積約二ヘクタール前後を占むる谷間に介在する一つの濕原である。曾て『山岳』第十年

第一號に水上森太郎氏によつて紹介された武奈ヶ岳登山の紀行文中には僅かに其の片鱗を窺ふに過ぎないものであつて、今日まで餘り紹介されて居ない土地である。水上氏は同文中に於て（同上六十一頁）「左手に廣つばがあつて變に曲りくねつた木が奇怪な樣をなして茂つて所々水溜がある。下を流れる水もおつとりと淀んだ樣に見えるが夫で可成の速さで流れて行くと見えて、見てると空氣の波動が水面から生じる、魔女の黑髪とも見ゆる水草が水に搖らるるまゝ其の身を任せて其の先が動く度に眞白な花崗の砂の川床が露れる云々」と云ふ言葉を以て今云ふ八雲ヶ原を敍述して居る。

插圖一　花崗岩地に自生せるスギと山腹の一部の崩壞（著者）

八雲ヶ原への案内は武奈ヶ岳への登路と大した變りはない。上記の樣に武奈ヶ岳への登路は水上氏によつて既に詳細に紹介せられて居るから玆には省略することとする（『山岳』第十年第一號五十七―六十六頁）。只當時は汽車の利用が出來なかつたものか大津より雄松崎まで汽船を用ひることになつて居る。然し今日では江若鐵道の便があつて比良口に下車すれば最も便利である。其處より約一粁にして美しいアカマツ林にさし掛かる、其のアカマツ林を拔け

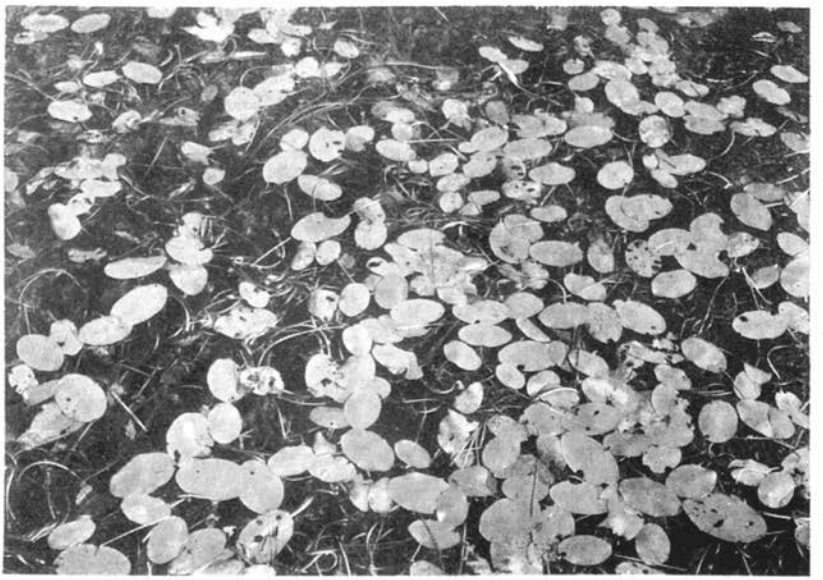
八雲ヶ原水蘚濕原



插圖二　A.B.C.D.E.は附近の小峯

第一圖　北部濕原中の池　　著　者

第二圖　濕原中を流れる小溪流とスギ　　著　者



第三圖　池のジュンサイ　　武田博士

第四圖　池のヲヒルムシロ　　著者

て比良川の左岸に沿うて登ること更に一粁餘にして石切場に出る。其れより右折して登る道は愈〻急峻となつて荷物はなくともかなりの苦痛を伴ふけれども時々得らるる琵琶湖の展望と花崗岩の崩壞によつて殘雪を思はせる景は總ての疲勞を忘れるに充分である。殊に途中灌木の中に抽出するスギの自生、或は花崗岩崩壞地に尙良く生育するスギは私達に取つては亦興味多い現象である(插圖一)。此の急坂を登ると、しばしなだらかな傾斜を辿る、然し花崗岩崩壞の狀態は益〻激しく、殊に右側の大崩壞地は長年月風雨に曝された風化作用の跡が偲ばれ、更に進む事半粁にして今云ふ八雲ヶ原に出るのである。其處より二粁餘を登れば武奈ヶ岳頂上に達する。武奈ヶ岳(一二一四米)は附近の最高峯にして南に蓬來山を望み、遠く西南方に當つて愛宕、其の他の波濤の如く連る諸山を一望に集め京都附近に於ては何と云つても稀に見る山らしい山である。

八雲ヶ原濕原は武奈ヶ岳を圍む小峯A、B(其の名が詳でないから符號を用ふ)と南方に連るD、E小峯との斜面に狹まれて、南西に流れる安曇川支流の水源と、其れとは正反對の北東に流走する鴨川上流との分水に位置して居る。此等の小峯より集る水は八雲ヶ原に合流して、南から西に流れて安曇川に入り比良山脈の西から北に迂回して終に琵琶湖に注いで居る。附近の一帶は花崗岩地帶で上層の部分は既に風化が進み諸所に崩壞地を生じ白砂の露出する個所が見られる。是等の風化せる花崗岩砂礫は往々出水の際などに運び出されて比較的平坦なる地形を有する八雲ヶ原に堆積して本濕原の成因に重要なる役割を演じて居るものである。

八雲ヶ原濕原が植物の種類分布並に生態學的方面より見て學術上最も價値ある區域なることは私の贅言を俟つまでもない。此の地域と其れに隣る一帶を大切に保存し將來の探査研究に資するの途を講ずるは目下の急務である。乃ち私が淺學を顧みずしてその大要を記述せんとする所以も、此の地を永久に學術上の參考資料としたい一

念に他ならない。

本濕原の研究に際して常に懇切なる御指導を賜つた恩師沼田教授と武田博士に深甚の謝意を捧げなければならない。又武田博士の貴重なる寫眞を拜借し得たことは此の上ない光榮である。尙岡本省吾氏並に本研究に就て種々の援助を賜つた方々に衷心より感謝する次第である。

二

八雲ヶ原濕原の植物に就いて語らんとすれば既に述べた樣に位置及地勢の關係より見るも八雲ヶ原のみを以て足れりとせず、其の登山道に沿ふ植物景觀の概略と本濕原と最も關係の深い武奈ヶ岳頂上の植物景觀を明かにして始めて全きに近づくことが出來ると思ふ。然し今は唯特に濕原內及其の周緣の植物景觀に就てのみの觀察を記述することとする。

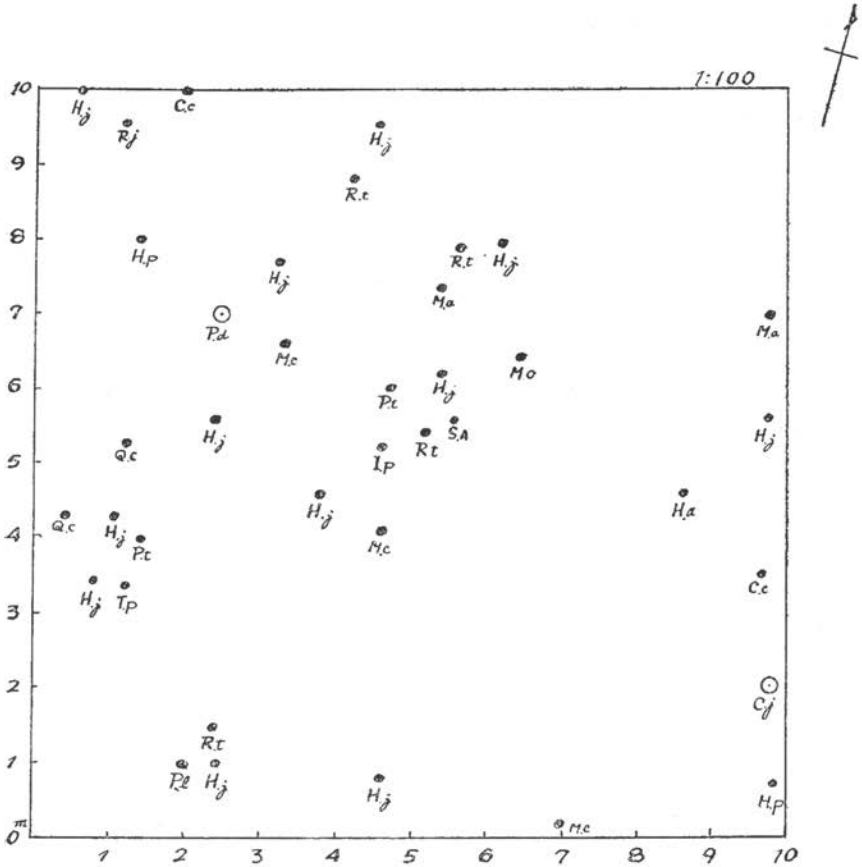
本濕原は南北に稍ゝ細長き面積を有し約十度の傾斜をなして南方に低く傾き武奈ヶ岳頂上への登山小徑によつて南北に區分されたるの觀がある。植生上より見れば兩者によつて特に差別の點は見られないが、私は說明の便宜上小徑より北方を「北部濕原」南を「南部濕原」として區別したい。

道より北は稍ゝ高く南部濕原に比して所謂小豪地の形を作り、且つ小なる池溏の形成せられて居るのが見られる(第一圖)。此の池溏は上流より來る花崗岩砂礫の押し出しの堰止によつて作られたるものと思考せられる。卽ち此の附近を形成する花崗岩は其の表層が長年月の間に漸次風化作用を受くるため豪雨の際は各所に崩壞を生じ屢ゝ押出の如くなつて本地域に流入せしことが推測せらる。是等の砂礫は前述の小徑附近にて一度び堰止められ

て現在の池溏を作つたものであらう。一般に北部濕原は比較的安定せる形が伺はれ最近に於ては著しき外界の影響を受けたる形跡は觀られないのである。

池の周圍にはミヅゴケが迫り、殊に其の東緣に沿ふ灌木林に平行しては恰もミヅゴケの緣取りを施せしが如く池の南邊に沿うてはスゲ類の發達著しく一種の浮島狀の半島となり、此れに乘ずれば浮動を感ずるも浮島狀の半島とは其の成因を異にするものゝ如く、スゲ類の發達著しく其の間をミヅゴケ或は泥土が塡充して現狀を維持するものゝ如くである。斯の如く池はミヅゴケ及スゲ類のために周圍より壓迫せられ漸次壓縮せらるゝの觀がある。池中には十數個の一見浮島の如きミヅゴケを以て蔽はれたる小島散在するも此れ等は浮島にはあらずして花崗岩砂礫の泥土に混じたるものゝ上をミヅゴケによつて占領せられたものである。池中にはジュンサイの大群落あり(第三圖)、又一部にヲヒルムシロも見られる(第四圖)。

本濕原の西緣は次第に高くなつて山腹に續くのであるが、ミヅゴケの生長旺盛にして其處に生育するスギは矮生の形をなして枝條の一部はミヅゴケによつて埋沒せられて伏條枝を形成して居る。南北兩濕原を通じてスギが周緣竝に濕原中に散點して矮生の狀態となるは特筆すべき現象である。元來スギは陰樹にして適潤の地を好むと雖も、本地域の如き水蘚濕原中に生育する例は稀にして殊に岩盤は花崗岩にて其の土壤も花崗岩の風化によつて形成されたるものなるは生態學上極めて興味ある現象である。アカマツは林緣は勿論濕原內各所に散點し、尙往々其の稚樹の生育せるものが發見される。一般にアカマツは乾燥瘠惡の立地に耐へ得るを以て其の特性とされて居るが、本地域の例によれば比較的泥炭層薄く直ちに花崗岩砂礫層の存在する如き立地にあつても尙良く生長する頑强なる樹種なることを知ることが出來る。此れ等の林緣に散在するアカマツは其の根元にはミヅゴケが堆く



C.c	くましで	M.a	あづきなし	P.t	しろもじ
H.j	まんさく	M.o	ほゝのき	Q.c	みづなら
H.p	のりうづき	M.c	べにどうだんつつじ	R.j	れんげつつじ
I.g	いぬつげ	P.d	あかまつ	R.t	やまうるし
I.p	そよご	P.l	うしころし	S.A	なゝかまど

插圖三　クッドラート調査　(X, 1932)

第五圖　ススキの根元を埋沒せるミヅゴケ　　著　者

第六圖　アカマツの根元を埋沒せるミヅゴケ　　著　者

第七圖　湿原の縁に近く生えた大きなスギ　　武田博士

第八圖　湿原の邊縁に於てミヅゴケによつて埋沒せられたるスギの伏條枝　　著者

盛り上り、且つ其の垂下枝が前述スギの場合と同じくミヅゴケ中に埋沒して恰も伏條枝の如き外觀を呈するものがある。

本濕原の北緣は次第に高さを增し、ヤマドリゼンマイの量を增加し更にイヌツゲの大群落となつて終に濕原形を沒して居る。此の灌木林への移行する途中に於てもスギ及アカマツ散點して、稀にモミの混在せるものが見られる。是等灌木林の狀態を明瞭ならしむるために調査した一例は插圖三の如くである。同圖に見る如く、アカマツ及びスギが散點して其の間にマンサク、ノリウツギ、イヌツゲ、ソヨゴ、アヅキナシ、ベニドウダンツツジ、ウシコロシ、シロモジ、レンゲツツジ、ヤマウルシ、ナナカマド等叢生し、其の間にホ、ノキ、ミヅナラ等が混生して居る。既述の如く池溏の東緣にはミヅゴケの生長旺盛にして池畔までアヅキナシ、ナツツバキ、アセビ、ヤマウルシ、レンゲツツジ、イヌツゲ、コハウチハカヘデ、サハフタギ、ソヨゴ、オホカメノキ、シロモジ、ドウダンツツジ、ウラジロノキ、マンサク等の大小の雜木が叢生して其の間に矮生形のスギ及アカマツが散點して居る。

是等灌木林に圍繞せられたる濕原は最近比較的安定せる狀態に置かれたるためか內部までミヅゴケの生長旺盛にして諸所に散生するスヽキの根株の周圍はミヅゴケによつて高き隆起を作ることあり(第五圖)、其の他ゼンマイワラビ、イヌツゲ等あれば其れを中心に大小の隆起が見られ、殊にアカマツを中心としてミヅゴケが堆く盛り上つて大なる隆起部を作り奇觀を呈して居る(第六圖)。是等隆起部の間には著しく低濕となつてミヅゴケの生長不可能にしてマウセンゴケ、ヤチスギラン、ヒメオトギリ、アリノタウグサの如きものが發生して極めて興味ある植物群落を作つて居る。尙此の外にハナゴケが一群團狀に發達せる個所が存し、又アカモノ、イハナシ、レンゲ

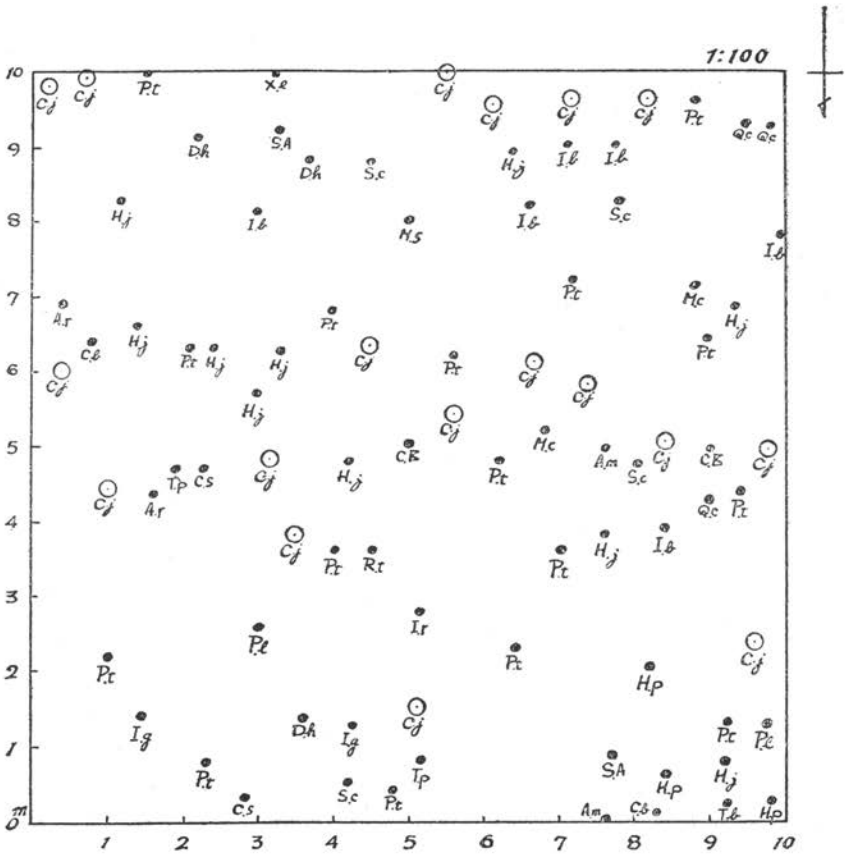
ツツジ等がミヅゴケの生長旺盛なるためか僅に其の先端を露出するに止り恰もミヅゴケによつて壓迫せられたる如き觀を呈し、其の他濕原内にはシシガシラ、ヒカゲノカヅラ、ワラビ、ヤブラン等の侵入を見る。

次に小徑によつて境されたる南方の濕原に目を轉ずれば之亦北部濕原と大同小異にして只北部濕原に存する如き池沼は南部濕原に於ては之を見ず、僅に小なる潴水の存するのみ、且つ北方が比較的安定形を維持せるに反して南部濕原の更に南半は特に上流より運ばれたる花崗岩砂礫のために局部的に著しき破壞を受け新しき植物群落によつて植民せられつつある途中相にある個所、或は最近の破壞に遭遇して未だ花崗岩砂礫の露出せる所、或は島の如く點々と比較的安定せる植物群落もあつて複雜を極めて居る。

本濕原の東緣は武奈ヶ岳頂上に至る小徑より漸次傾きスギの矮生形をなす老木の叢林となり遂に林緣に於てはミヅゴケの生長盛にして北部濕原の東緣と同樣なる狀態を呈して居る。第七圖は其の林緣に生へた大なるスギを示すものである。

插圖一に示した小峯D、Eの水を集める溪流は東南の方向より本濕原に流入するのであるが濕原に移る附近は漸次低位となつてイヌツゲの大群落を生じ其の中にアカマツ及矮生形をなすスギが散點して居る。其の南緣に沿うて育つヒバの匍匐形を呈せる一株の老木は異彩を放つて居る。

濕原の南緣に當つては矮生形を呈するスギが緣邊まで迫り、其の枝條が恰も伏條枝となつて漸次濕原に侵入せんとする如き姿態を取る外（第八圖）、尙濕原の附近一般に見られる灌木林が其の邊緣に迫り上記スギの場合と同じくミヅゴケ中に埋沒して恰も濕原に侵入せんとする如き形を取るものが見られる。叢林より濕原に移行する點に於てミヅゴケの生長旺盛なる帶狀の區域の存することは北部の林緣に於けると同樣である。次に是等の灌木林



A.m	こみねかへで	D.h	たにうづき	P.l	うしころし
A.r	うりはだかへで	I.g	いぬつげ	Q.c	みづなら
C.b	りやうぶ	I.b	あかつげ	R.t	やまうるし
C.k	やまばうし	I.r	しきみ	S.c	さはふたぎ
C.j	すぎ	X.l	ねじき	S.p	なつつばき
C.s	つのはしばみ	M.c	どうだんつつじ	S.A	なゝかまど
H.p	のりうつぎ	M.s	たむしば	T.p	ほつつじ
H.j	まんさく	P.t	しろもじ		

插圖四　クッドラート調査　(X, 1932)

の樹種分布の狀態を明かならしむるがために試みた調査を示せば插圖四の如くである。此れによつて見るに一般本地方に發見される灌木類のツノハシバミ、シロモジ、ホツヽジ、アカツゲ、シキミ、ベニドウダンツツジ、イヌツゲ等の外ヤマウルシ、マンサク、ナツツバキ、ネヂキ、タムシバ、ノリウツギ、リヤウブ、ナヽカマド、ウシコロシ等も灌木狀となつて發見し、尙稍〻濕地に見られるサハフタギ、タニウツギ、ヤマバウシを混入して更にミヅナラ、コミネカヘデ、ウリハダカヘデの小木を混じ其の中にスギの散生せるを見る。

西緣に於ても插圖三及插圖四と略〻同樣なる植生の狀態を示し、緣邊に沿うて矮生のスギの叢林或は灌木林より濕原に移行する點に於てミヅゴケの生長旺盛なることも略〻同樣である。

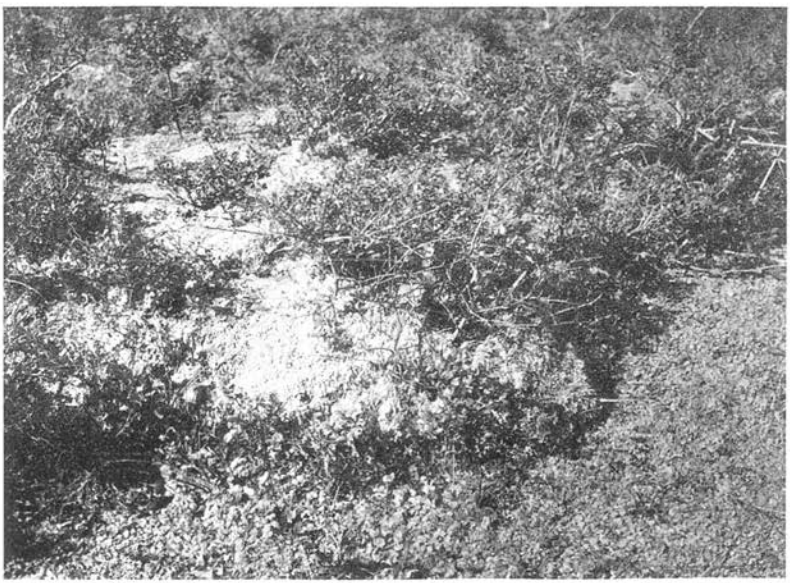
本濕原の周緣に生育する灌木類は前述せるものゝ外にタンナサハフタギ、アヅキナシ、ウラジロノキ、サラサドウダン、フウリンウメモドキ、キツネヤナギ、ソヨゴ、コマユミ、コバノトネリコ、クマシデ、ケアクシバ、コアヂサキ、ヤマツヽジ、サルトリイバラ、ミヤマシグレ、ナンキンナヽカマド、コハクウンボク、コバノガマズミ、ツルウメモドキ等が發見され尙屢〻コナラ、キンキマメザクラ、アカシデ、クリ等が混在して居る。

本濕原の內部にはミヅゴケの生長著しき個所あり或はミヅゴケの生長全く不可能なる極めて小なる潴水或は低濕地あり、時には花崗岩白砂を堆積して植物群落の破壞せられたる個所等あつて種々錯雜して居る。此れ等の中にスギ及アカマツの矮生形を呈せるものが散生し、或は匍匐の外觀を呈せるものもあつて其の枝條はミヅゴケによつて埋沒せられ僅かに其の先端を露出して伏條枝となつて生長を繼續して居るものがある。此れ等矮生形のスギの中には其の根元は生長盛なるミヅゴケのために埋沒せられ、イヌツゲと共にミヅゴケ丘上に置かれたる觀を呈するものあり、或は往々にして孤立木の如く立つものあるも生長不良なるか、半ば枯死せるものが多い。時に

第九圖　濕原に生育するスギ　　著者

第十圖　スギの根元に堆く盛り上つたミヅゴケ　　著者

第十一圖　濕原に生つたイヌツゲ　　武田博士
（ミヅゴケ中にヒカゲノカヅラやマウセンゴケのあるのが見ゆ。）



第十二圖　上圖を背面より見る　　武田博士

は孤立木の如き根元を有するも生長の途中何等かの障害を受けたるものゝ如く依然矮生形を呈せるものがある。（第九圖）此れ等のスギの中で根元は完全にミヅゴケによつて占領せられ、而も殆んど他の植物の生長を許して居ない美麗なるミヅゴケ丘となつて堆く盛り上つた個所も發見される（第十圖）。或は局部的には斯の如き矮生形のスギの周圍にミヅゴケの發育著しく其の間殆んど他の植物の侵入を許さず僅かにアカモノが其の先端を露出するに止りヒカゲノカヅラ、シヽガシラを混生するに過ぎない所がある。所謂南部濕原の北半にはイヌツゲの大群落あるも其の内部及周圍は殆んどミヅゴケによつて占領せられ往々ミヅゴケがイヌツゲに纏繞せる現象が見られる。又極めて小なる潴水が數個あつてヌマハリヰ、ホタルヰ、ヰ等を見る。其れ等の間に常時少量の停滯水を有する個所があつてアリノタウグサ、アギスミレ、ヤチスギラン、ヒメオトギリ、カウガヒゼキシャウ等が生育して居る。

一般に本濕原はミヅゴケの生長意外に旺盛なるものゝ如く安定せる立地は漸次ミヅゴケによつて占領せらるるの觀あり、卽ちイヌツゲ或はススキ等の根株にして稍〻安定せる個所あれば其れを中心にして直ちにミヅゴケの生長繁殖が始まり次第に其の占領面積を擴張する過程が明かに觀取される。第十一圖はミヅゴケが再び花崗岩砂礫の上に侵入を開始せるところである。第十二圖は其れを裏面より見たる景であつてイヌツゲの群落が生長旺盛なるミヅゴケによつて埋沒せられたる處である。斯の如く生長旺盛なるミヅゴケも上流より運ばれる砂礫のために埋沒せらるゝこと或は泥土の侵入によつて漸次枯死せんとする現象が見られる。上述の如く砂礫のために植物群落が一度破壞される時は其の上に植物の全く存せざる時代が生ずるも、かゝる狀態は永續するものではなくして直ちにヤチカハヅスゲ、アゼスゲ等のスゲ類の侵入が始まる。是等のスゲ類は長き根莖を有して其の始めは砂

礫の下に埋沒する泥炭層より出發するが常である。更に此れ等のミヅゴケの生長旺盛なる個所及砂礫の堆積せる個所の間に極めて低濕なる地が存し之をマウセンゴケ、ヤチスギラン、アリノタウグサ、ヒメオトギリ、カウガヒゼキシャウ、ホソバノカウガヒゼキシャウ等の濕地植物が占領して居る。其の他花崗岩砂礫を恐れず其の上に侵入するものにヒメシロネ、アイバサウ、ハタガヤ等がある。尙此れ等の外に濕原中にはレンゲツツジ、ノギラン、アヤメ、アギスミレ等が散生して極めて稀にはドクダミが發見せられる。

上述の如く濕原内は極めて變化に富むが更に内部を流れる水路の變化は其の植生狀態を益々複雜化させるの原因となり、且つ此れ等の水路は過去に於て屢々變遷の跡が窺はれ上述の如くにして生長旺盛なるミヅゴケ地域も、再生の途上にある植物群落も水路變遷の犧牲となつた跡が各所に認められる。卽ち過去の水路が砂礫のために殆んど埋沒して既に其の上にマウセンゴケ其の他の濕性植物の侵入を見、或は古川の如き形を呈して兩岸よりミヅゴケが迫り遂に其の上を蔽へる所も存して居る。又往々現在水路の中にスギの立枯木或は根株の殘存するは水路變遷の跡を物語る一例である。

屢々述べた如く濕原の周邊に於て矮生のスギの叢林及び灌木林より濕原に移行する境界に於て帶狀にミヅゴケの生長旺盛なる個所の存するは特に注意を要する點である。卽ち斯の如きミヅゴケの生長旺盛なる所は比較的安定せる個所で、内部に比すれば外界の影響を受けること少く、此れに反して内部は屢々起る土砂の流出等によつて變化を受けること多く、從つて比較的不安定な狀態に置かれたものと推測することが出來る。本濕原に於て散生するアカマツには其の稚樹を發見されるもスギには稚樹を殆んど見ないことは矮生形を呈するスギの生態研究上特に注意を要する點である。其の他詳細なる調査と觀察とを俟てば興味ある現象が發見されるであらう。（完）

北海道の山の動物

犬飼哲夫

吾が國の高山性動物と云へば先づ日本アルプスの雷鳥を第一に擧げ、羚羊（カモシカ）、猿、熊などもその中に加へられるであらう。然るに北海道は一般に動物の種類、その他分布狀態に於て本土と著しく異ることは周知の如くで、津輕海峽が本邦動物分布の重要境界線の一をなしこれを動物學上ブラキストン線と云つてゐるのである。これ文久二年から明治十七年迄廿二年間函館に在住し實業に從事してゐた英國の軍人ブラキストン氏が餘暇を利用して研究した結果に基き假定せられた線で、この境界から北にある北海道、樺太はアジア大陸に密接な關係を有してカムチャッカ、シベリヤ系統の動物を產し、寧ろ日本本土とは遠緣に當ることが事實上認められてゐるのである。そのため北海道には本土に居る樣な雷鳥も、猿も、羚羊も尙又野猪さへも發見出來ない。その代りに北海道の動物と云へば先づ日本熊（本土の月輪熊）に代る可き獰猛な羆（ヒグマ）がある等、この羆、鳴き兎、コエゾイタチ、シマリスエゾライテフ、シマフクロウなどの獨特なものが多々あるが、その中で北海道の山岳動物として最も特徵のあるものはヒグマ及びナキウサギと云ふべきであらう。その外敢て高山地方に限られてゐるわけでもないが、シマリスは北海道の山のハヒ松帶にいつも見られる動物の一つである。高山性昆虫類に於ても、鳥類中比較的高山に多いホシガラス、カヤクグリ等と共に北海道で山岳的特徵を有するものは少くない。又北海道は冬期間に積雪多く

嚴寒の地方として動物の生態的研究、特に山岳地方に於ける動物の雪の上の足跡の研究等北海道としての特徴はいくらもあるが、それ等に就いては他日機會を見て報告することとし次にヒグマとナキウサギの二者の山岳地方に於ける生態的觀察を述べて見よう。

ヒグマ

北海道に棲息する熊は唯一種で日本本土の熊と全く種類を異にする所謂羆（ヒグマ）と稱するもので大さもずつと大きく頭から尾迄二米乃至二米半にも達し、而も强力で猛きこと到底日本熊の比ではない。北海道熊でも頸に月輪を有するものがあり、毛色も俗稱金毛、銀毛等あるが元來區々なもので一定してゐない。北海道の山ではこのヒグマのことを親父と云つて非常に恐れてゐるのである。

偖ヒグマは歐洲北部、シベリヤ、沿海州、カムチャッカの森林を棲家とし、北海道に產するものは正確に云へばエゾヒグマ（*Ursus arctos yezoensis Lyd.*）で北海道本島及び千島の國後（クナシリ）島と擇捉（エトロフ）島に居り、北千島のシムシュ島、パラムシル島に棲むものがヒグマ（*U. arctos L.*）である。樺太の熊は目下自分の考へではこれ等兩者の中間型と思ふが要するに三者共その形態的特徴に於て又その習性に於て大同小異である。

北海道に棲息するヒグマは數に於ても日本熊より遙かに多く、毎年道内で捕獲されるものは最近十年間の統計から二百五十頭平均であるから相當な數で、從つてヒグマに依る被害は決して少くはない。ヒグマは元來雜食性で主として植物性食物を攝るものであるけれども機會さへあれば人畜を襲ひ過去に於て北海道開拓史上幾多の悲慘な事件が殘されてゐる。これも最近十年間の統計から一年に七人の死傷があり、馬はヒグマのため年々三百頭

も斃されてゐる。そのためにヒグマは北海道で獨り恐れられてゐる猛獸である。さてこの熊は勿論人家を遠く離れた山野を棲家とする動物で、土地の開墾と共に益ゝ山岳地方に密集して來る傾向があるから北海道の登山者にとつて一つの大きい威嚇者である。尤もヒグマは十一月下旬から翌年四月上旬迄は冬眠期で悉く冬穴に籠居し雪の下に蔽はれてゐるから冬期の登山には熊に依つて起る危險は何もない。又春の堅雪になつた頃は彼等のそろ〳〵活動を開始する時であるけれども長い間の斷食生活ですつかり疲勞してゐるから危險は少い。穴から出て來た奴は山間の雪の解けた場所を求め歩いて春最初に萠え出る蕗のトウやその根を食ひ又は水芭蕉の根莖を掘つて食ひ、多くは溪流に出て石を起してその下に潛むザリガニを食つて僅かに飢を凌いでゐる。春のスキー登山には斯くして歩いた熊の足跡を雪の上に發見することは稀でない(第一圖)。（冬期の羆の足跡については、『アミーバ』第三卷第一・二號所載武田博士「羆の足跡」を參照せられよ）この時分はまだヒグマは冬毛で又俗に熊の胃と稱する膽汁は質もよいからアイヌやその他の獵師にその跡をつけられて捕殺され易いのである。實

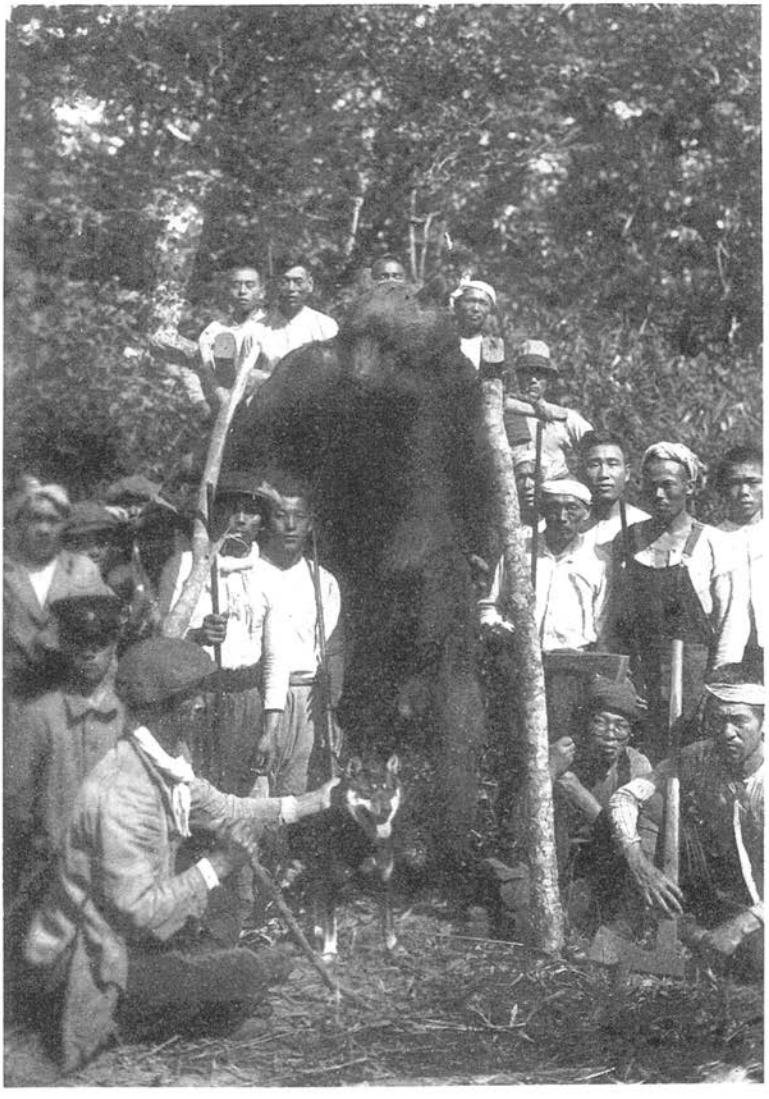
第一圖　雪の上に印された熊の足跡

際に春の熊狩りで捕獲される數は比較的多いが人間の死傷は春に最も少い。

夏期になり北海道の山で殊に多い蕗、イタドリなどが密生する樣になると、これからが彼等の天下で、蕗の莖根、エゾカンゾウの葉や根、或はウバユリ、黒百合などの球根を探し求めて食ひ、深い藪を自由に歩き一定した棲家を持たない。然し如何にヒグマと雖も熊笹、ハヒ松その他の藪の密生した中ではなる可く歩き易いところを撰び、そのため雪溪などがその通路となり、又一般に登山路の無い北海道の山では往々ヒグマの路が吾々に利用され又人間のつけたブッシュの刈り分けを頻繁に熊が利用して道の眞中に大きい熊の糞が堆積してゐることなどは普通のことである。北海道で高山と云つても僅々二千米内外であるが千五百米以上は既に灌木帶でその上には草本帶が現はれる。この山頂地方には夏になるとヒグマの出沒が激しくなり、草原は至る所五寸乃至一尺位も掘り返されて、熊の好きなチシマニンジン、ボウフウ等の根を食つた跡が殘され、著しいところになると畑を耕作した樣になつてゐる。山間の人は熊は夏は藪蚊やアブの襲撃を避けて山の上に登ると

第二圖　熊に掘り起された草原

捕獲された羆（春）



捕獲された熊（夏）

云つてゐるが必ずしもさうではない。同じ時季に山麓地方の虫の多い澤や深林中を頻繁に歩いてゐるから恐らく食物の關係で山の上に出るのであらう。

ヒグマは人跡稀な深山では日中も現はれてゐるが、主として夕方から夜がその活動時で中央高地の山頂に靜かな日見てゐると谷間の深い草原に夕方から現はれ遠くからも見える樣な太い物凄い線を後に畫き乍ら貪食して歩いてゐるものを發見し、又朝草原を通ると昨夜掘つたばかりの生々しい跡を見ることが屢々ある。八九月に山に樣々な果實が熟する頃は彼等の最も貪食する時季で、この時に充分營養をとり冬籠りの準備をするのである。頂上の草本帶に實るコケモモ、ガンコウランウラシマツ、ヂ、クロマメノキ等の實はヒグマの最も好み食ふところで、九月になつてからは下に來てナ、カマド山ブドウ、コクアの實を食ひ、又時々ハヒ松の實さへ食ひ、或は好んで楢、ブナの實を食ひ、よく木に攀ぢ上り又はブドウ、コクアの蔓を引き下し、これ等を余りに貪食するため大部分は不消化のまゝ排泄され、その頃の山にはよくその實の混つた糞がされてゐ

第三圖　ナナカマドの實を食つた熊の糞

る。そろ〳〵この頃から熊が狂暴性を發揮する時で山の中から夜な〳〵里に現はれて農作物を食害するのもこの時季で山間の農家は非常な恐惶を來すのである。既に八月に入るとある時は玉蜀黍畑に出て生の實を片端から食ひ歩いて一夜の中に一頭が一反歩も荒らし凡そ十俵の收穫を臺無しにし、その外喬麥、燕麥、豆類、南瓜を食ひ近來は水稻の害も多くなつて來た。この害は十月迄續く。この期間は又宛も家畜の襲はれる時で熊は放牧中の牛馬を攫つて行き、時には農家の厩舍を破つて襲撃し、豚、羊、雞、兎迄も獲つて行く。牛馬はこれを運び去つて草や土を掻き集めて隱匿し夜出て來ては食ひ一週間位で平げる。その外人間や家畜の屍を土葬すると熊に發掘されて食はれることは北海道の山間にはよくある事實である。ヒグマは又川に出て鮭鱒を巧みに捕食し、昆虫類をも食ひ、この頃の山林中には腐木を掻き散らして虫を求め又は赤蟻の巣、地蜂の巣を掻き出して食つた跡が見受けられ、蟻や蜂の混入した糞を見ることがある。斯くして晩秋迄にすつかり脂肪が乘つてくると多くは山を下りてなる可く麓近くの笹や森林の中に冬穴を作つて入る。この冬穴は自然の洞窟や立木の洞を利用することもあるが、多くは山の傾斜面に雪解水の入らない樣な位置に作り入口は狹いが中は廣く笹の葉、木の細枝や葉を敷藁とし實に清潔で且溫く、春になつても糞さへしてゐない。一つ穴に親仔共五匹も居ることがあるが母子以外に決して外の熊と同じ穴に入らない。（犬飼―ヒグマの冬穴の觀察、札幌博物學會報第十二卷二、三號昭和七年六月參照）

偖北海道の夏の山歩きでこれ程熊の多いのにこれを正面に見た人は極めて少い。今日迄所謂人喰ひ熊と稱し一度に五人も六人も食ひ殺して北海道を震駭せしめたヒグマは度々あつたが、概してヒグマは人を恐れる動物で、割合に危險な時季はやはり彼等の貪食期で大きい熊事件は八月以後に起つてゐる。次に仔連れの親熊が危險で、非常に恐れられるのは十一月後に冬穴に入らなかつた熊である。秋の熊や仔連熊でも道で不意に出會ふ樣なこと

さへなければ自ら人間を避けて逃げるのが普通で唯所謂穴持たず熊丈は例外で敢て人畜を襲ひ、日夜を選ばず手當り次第に狂亂するから屢〻大慘話を作るのである。この外の熊なら警戒さへすれば左程恐る可き動物ではない。

そこで山歩きの際は豫め熊に充分人間の接近したことを知らせることが肝要で、北海道の森林巡視は豆腐屋の吹くラッパを鳴らし乍ら熊を追ひ拂つて山林中を通つてゐる。大聲に放歌することや、煙草を吹かし又は焚火等でも熊を逃すには充分であるが、多人數で歩けばその話聲丈で遠くから逃げて了ふ。特に熊の出沒の盛んだと思はれる地方を歩く時に呼笛を吹き、大聲を上げる必要はこのためで、山間の農家では熊が出た時はバケツや戸を叩いてこれを追ふが、兎に角音響はこの動物の恐れるところであることは事實である。熊がいよ〳〵人を襲つて來た時は割合に細い木に登つて助かつた人もあり、又自分の持物を投げて熊がそれにかかつてゐる間に逃げ延びた話はよく聞くが、然し死を裝つて九死に一生を得たと云ふのはこちらに敵意のないことを示したためで、死んだ眞似をしてゐて熊に嚙まれ怪我をした人は澤山ある。一度人間を襲つた熊や擊たれて手負になつた熊は危險この上なく、アイヌでさへ非常に警戒するものである。熊は追跡されると逃げたと見せて所謂止め足と稱して一寸圓を畫いて逆戻りして待ち伏せする習性がある。然し北海道で登山者が熊に食はれた話は殆ど聞かない。

ナキウサギ

鳴き兎は中央アジアがその原産地と見られ非常に古い動物でその化石は歐洲からも出るが現在はチベット、蒙古地方に多くシベリヤ、カムチャッカ更に北アメリカ大陸に分布してゐる。吾が領土内では十年ばかり前に初めて朝鮮で發見せられて鼠兎と云ふ和名をつけられたことがある。外見は尾のない鼠と思へば大差ない。大いさは

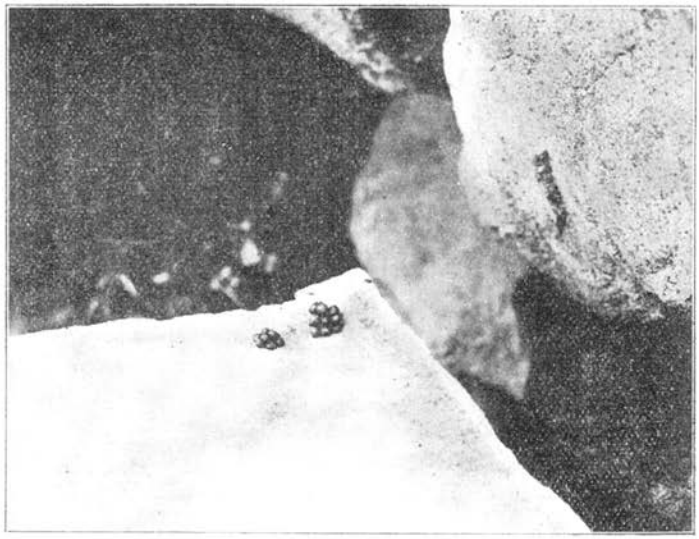
モルモットより稍〻小形で形態もこれに彷彿たるものがあるが、動物學上は明白な重齒亞目の兎の類でキリッ〳〵と高い聲で小鳥の樣に鳴くので外國でも piping hare などと云つて鳴く兎と呼ばれてゐる、和名に就いては多少異論もあるが要するに *Ochotona* なる學名を有する動物のことである。この動物が北海道に棲息することが發見せられたのは昭和三年と云ふ極めて新しいことで、最初は珍奇な動物と思はれたがその後の調査で北海道の中央高地の連山の山頂に一帶に分布し尙樺太のカシポ岳、知取地方、敷香地方幌登岳にも多數に居ることが判つて來た。

第四圖　ナキウサギ　1/5

ナキウサギは必ずしも高山に棲むとは限らない。北海道で初めて捕獲された北見の國置戸地方は海拔三百米の箇所であるし、又十勝の國の然別湖附近の千米のところにも多數に棲息してゐる。樺太では知取、敷香の平地にもゐるのである。然し概して高山の草本帶に棲み、北海道に特有の一つの高山動物と云へる。

ナキウサギの棲家は割合に乾燥した大きい岩石の間隙で四通八達した自然の墜道を利用し所謂高山の御花畑の

附近に群棲してゐる。これはこの動物の習性並に食物の關係からでハヒ松の中、笹の中又は密林中には棲息してゐない。然し森林中でも然別地方の樣に下草が多く且林間に岩石の多いところはその棲家となることは勿論である。北海道の中央高地の山頂で岩礫の多いところを通ると必ずナキウサギの聲を聞くがその姿を見ることは容易でない。この動物は極めて弱い動物で何等攻擊又は防禦の武器がないから專ら保護色でその身を護り且岩の間を自由に走り廻り一寸出て食物を攝り直ぐ引き込み、次の瞬間には二米も三米も離れた岩の間隙から現はれると云つた具合に出沒自在で、彼等の居ると思はれるところに一時間以上も靜かに待つてゐないとこれを實見することが出來ない。初め人間が近づくと二聲三聲鳴いて互に警戒して穴に入り、しばらくして又二三聲鳴いてから異つた穴から滑り出る樣にして出て來るが、案外視力は鈍く靜止してゐる吾々を識別することが出來ない。夕方が最も頻繁に出沒する時で夜間は出て來ない。夏の靜かな溫い日に山の上のナキウサギの群棲してゐる場所では彼方此方で互に鳴き交す聲は非常に懷しいもので、北海道の山ではその聲に依つてい



第五圖　ナキウサギの糞　1/3

つも高山らしい氣分になる。

ナキウサギの鳴き聲は聞き慣れない時はやはり山頂に多いシマリスの聲と混同され易いがシマリスは多くハヒ松のあるところに棲みナキウサギは岩石の多い所にゐるから大體は識別出來る。山を歩いてナキウサギの存在を知るには第一に前述の樣な地形とその鳴き聲からで、も一つその標識となるものは往々岩石の穴から外に出て糞をなすことがあるからその糞の堆積である。現在迄に私の調べたところでは北海道に於けるナキウサギの分布は大雪山系の諸連峯、忠別岳、トムラウシ山、オプタテシケ、美瑛岳、上ホロカメットク、富良野岳、夕張岳、芦別岳、石狩岳、ユニ石狩、ニペソツ、クマネシリ、音更岳、日高山脈の諸連峯、北見置戸、十勝然別湖附近等である。

第六圖　岩の間のナキウサギの食物貯藏所

高山に棲む關係上ナキウサギの活動期は極めて局限され、六月から十月迄の僅か五ケ月の間で殘り七ケ月は完全に氷雪に閉されてゐるのである。この動物はこの長い日月を冬眠するわけに行かないから五ケ月の活動期にすつかり食物を貯へて長い冬に備へる必要がある。ナキウサギは元より齧齒目の動物であるから主として植物性食物で、山ではハヒ松を除いた殆どすべての高山植物がその食物とされてゐる。夏の活動期に彼等は互に共同してその棲家の岩の隙

間に素晴しい食物貯藏所を作る。蒙古ではこの動物が集めた貯藏植物は冬期間の貴重なる馬糧とされる位である。北海道の山では八月に入るとナキウサギは各〻口に植物を啣へて一所懸命に運び岩の間をぎつしり塞いで了ふ。大雪山の白雲岳の東斜面で發見したナキウサギの食物貯藏所の中には次の十六種の植物の莖葉があつた。卽ちキバナノシャクナゲ、コケモヽ、ツガザクラ三種、ガンコウラン、ウサギギク、ミヤマヤナギ、マルバヤナギ、タルマヘサウ、イハヒゲ、トウヒレン、ウラシマツヽジ、ウルップサウ、ハナゴケ、依蘭苔等で、この外スゲ類、シモツケ、アザミ等も食用とされ北見置戸地方及樺太知取地方の比較的低地に棲むナキウサギの貯藏所中には澤山の落葉松の若い枝葉、キイチゴ等があつた。これ等植物の長いものはすべて三四寸に切斷して蓄へてある。大正十四年にはこのため北見置戸地方で落葉松の植林地にナキウサギの著しい食害を見たのである。

ナキウサギの繁殖期はその年の溫寒で多少の變化があるが六七月頃らしい。九月下旬になつても幼いナキウサギがウロ〳〵してゐることがある。夏毛は黑い錆色で岩の色と異らない。この夏毛は八月初めに頭部から段々に冬毛に變り九月一ぱいで完了し、背面は黑褐色で腹面は美麗な黃褐色を呈する樣になる。

ナキウサギは他の動物の余りに近寄れない高山に唯一の安住の地を求めて棲息してゐるのであるが、山の上の狐の糞の中には澤山にナキウサギの毛が交り、又慓悍なエゾイタチが絕えず彼等の棲家の岩石の間に出沒してゐるから、四季を通じてその好餌食とされてゐるのであらう。又山に多い猛禽類も弱いナキウサギの天敵である。

（完）

雜錄

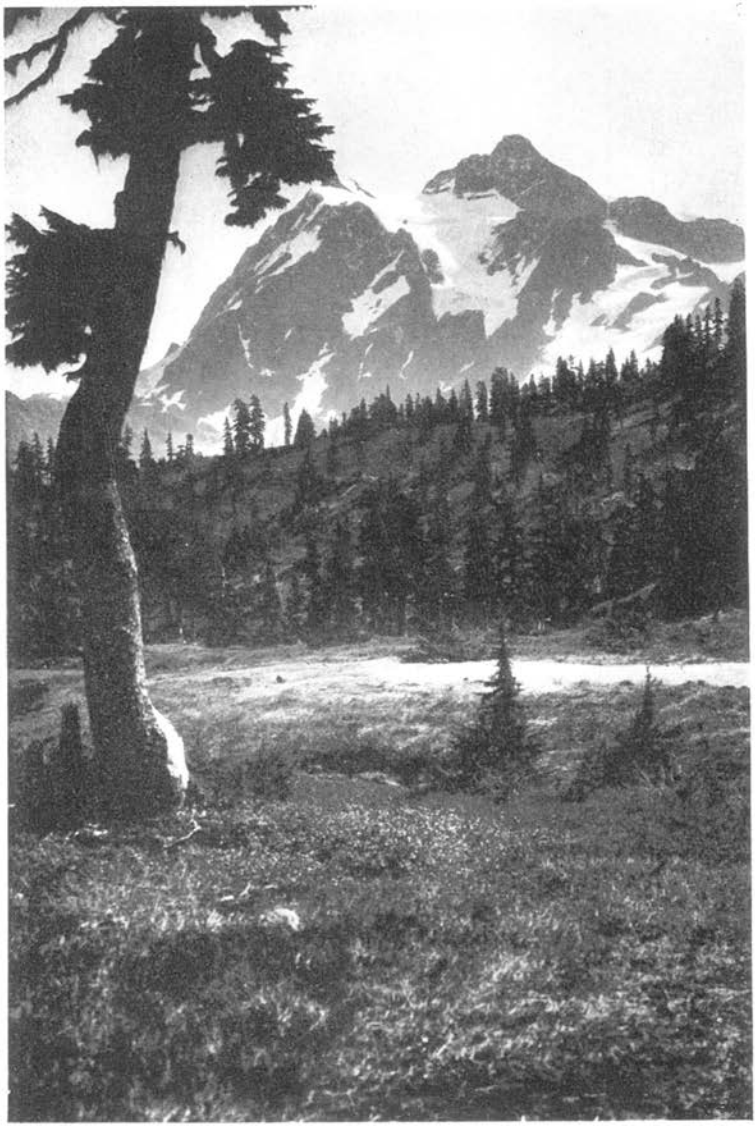
シュクサン峰に登る

東　良　三

所在＝アメリカの北太洋岸を縱貫するキャスケード山脈の最北端ベーカー國有森林(MT. BAKER NATIONAL FOREST)地帶の主峰の一としてベーカー山(一〇八二七呎)と對峙し、シアトル市より北に百七十哩、英領加奈陀との國境線へ僅かに五哩で、キャナディアン・ロッキーの沿岸支脈の山群を間近(まぢか)に呼びかけて居る。

概要＝シュクサンは亞米利加インディアンの言葉でSTORMY MOUNTAIN(荒るゝ峻嶺)といふ意味を持つておるだけに、標高僅かに九〇三八呎に過ぎないが、火山系圓錐峰の多いキャスケード山脈には珍らしい古生層の大岩塊を以つて形成され　其の異色ある峻峭たる山容は登攀の困難なるを思はしめて山岳愛好家の間には優に北米山岳の王座の一を占むる名峰とされて居るが、附近の連山に視野を遮ぎられて外界から展望出來ない爲に一般に廣く其の名を知られ初めたのは僅かに七八年前からの事である。山を繞る氷河は七流。高山植物は極めて豐富、山内で採集記錄されておる數は三百三十四種と算されて居る。

登山史＝一九〇六年、卽ち僅かに二十六年前にシアトル市のマウンテニアース倶樂部の重鎭で、寫眞の大家であるASAHEL GURTISとW. M. PRICEの兩氏が絕頂を極めたのを以つて第一登山と正式に認定されて居る。これより先一八九〇年、時のベーカー山のガイドであつたJOSEPH MOROWITSといふのが山嶺に達したといふ事が"THE TALES OF A WESTERN MOUNTAINEER"の著者C. E. RUSK氏によつて指摘されたが公認されてゐない。一九二九年に日本山岳會員古谷久三(フルヤ)氏がこの山頂めがけて登



シュクサン峰遠景　　Bert Huntoon

攀中突如として襲つた暴風雪の爲に、氷窟の中で凍死して、日本人として米國山岳の最初の犧牲者といふ悲しい記錄を作つたが、同氏の遭難事情は小島烏水先生の近著『氷河と萬年雪の山』の中に詳しく記述されて居る。

二十年にあまる永いアメリカ在住の間の私の登山は數へ切れないほどであるが、唯一つ殘されてゐて氣になつてならない山、それはマウント・シュクサンであつた。しかも四年前に、手輕に山行の出來るシアトルを去つて、山と云へば小さな砂丘一つすら見られないシカゴに轉じてからは、二年前にロッキー山脈の最高峰LONGS PEAK（一四二五五呎）の頂きに立つたゞけで山の姿は夢に通はす外無い私であつた。數へて見ると烏水先生が日本に歸つて仕舞はれてからは米國にたつた一人しかなかつた岳友、古谷久三君がシュクサン山上に仆れて丁度三年目である。彼の三周忌にあたつて親しく遭難の現場を訪ねて友の冥福を祈らう、と思ふと矢も楯もたまらず、シカゴの俗塵濛々たる雜沓を遁れ、二千五百哩を長驅してシアトルに着いたのは八月中葉であつた。

シアトルは私の前住の土地なので、私の登山の事が知れると、同行を望まれる人が十名ほどもあつたが、八月も半ばを過ぎると山上にいつ風雪が突發するかも知れないといふ懸念があるし、殊に、山頂に向ふ日はあたかも古谷氏遭難紀念日といふ妙な廻り合せでもあるので、みんな斷念して貰つたが、只一人、嘗ての私の山行に數度同伴された事のある矢野恕一といふ當年五十五歳にもなる老勇士から「俺は體力にも自信があるし、万一の事があつたとて、丸切り係累の無い獨り身だから、どうあつても連れて行け」と猛烈に迫られるのを振り切る事が出來ず、この矢野君が前以つて改作を加へて二人分の寢臺の仕掛けまでしておいた、フォード式貨物用自動車に、五六日分の食料を積み込んで、八月十六日の朝シアトルをあとにシュクサンへの第一歩を踏み出した。

シアトルから北に百〇四哩、日本行木材の積出し港として知られてゐるベーリングハム市に着いてマウント・ベーカー啓發會本部の門を叩くと、かねて打合せ

てあつた、この町の學務局體育部顧問である W. L. COCHRAN 氏が待つてゐて呉れた。この人はベーカー山林地帶の事情はAからZまで知らぬ事が無いといふ山通で、一九二六年の夏小島烏水先生が自分達とベーカー山の山頂登破に成功した時に案内役を承つた因緣があり、私とは十數年來の古馴染で、登山の伴侶としては絕對無二の人物である。

加奈陀から太平洋岸三州を貫いてメキシコまで、疊のやうにコンクリートで敷きつめた亞米利加自慢のパシフック・ハイウェーとはこの町で別れて自分達の車は愈々山行の間道に差しかゝる。先年村名が GLACIER といふので氷河狂の烏水先生を喜ばした最後の山村で食料品を買ひ足し、そこの山林局出張所（FOREST RANGERS STATION）で、登山者が山火事に對する責任上から是非共貰はねばならない『キャンプ・ファイヤ・パーミット』を得ると、こゝからは路は俄かに急勾配となつて安物のフォード車のスピードが鈍るが、山色がいよ〳〵迫つて千古の大森林の濃綠の香りが鼻に觸れて來ると、丸二年のあひだ山と離れ、シカゴの町の汚塵を浴びて押しひしがれてゐた自然愛着の心が、たまらなく一時に胸の奥底からこみあがつて來るのだ。

唯いまでこそ自動車で悠々と曲折迂回しながらこの山腹を縫ふ事が出來るが、僅か六年前までは密集林中に野獸が作つた薄暗い原始的な十哩のツレールの險を攀ぢるのに、丸一日を費やさねばならなかつた事を思ふと全く隔世の感がある。自動車が行き得る終點で、Mt. BAKER LODGEと稱するホテルの設備も出來て近年一般登山客のメッカとなつて居る、HEATHER MEADOWS の名にふさはしい丈の低い灌木草が一面に匂ひ繁つてゐる海拔四千二百呎の高原に着いたのは早や日沒後。見上ぐればベーカー山系北端の支脈ルース連嶺の峰越しに洩れた落日が弱い殘んの薄光を眼前直上に巨城の如く聳え立つシュクサンの氷河に投げかけ、アメリカの書畫屋の店頭によく見かける通俗向きの山岳繪そのまゝの神秘的な色彩が、凄いまでの壯嚴味を添へて山は黃昏の大空に夢の如く浮き出てゐる。二千五百哩の東から遙々と眼がけて來たあこがれのシュクサン山麓にいよ〳〵來たのだ。

まだ八月の末にならないのに、寒帶地圏の加奈陀に近いこの山上の空氣はもう冷え〴〵するのでホテルには滯在客が皆無である。私達は偃松帶の草原を選んで夜營のテントを張つた。キャンプ・ファイヤを圍むと話は死んだ岳友の上に落ちる。古谷君の遭難から死骸發見に至るまでの事情を、其時の搜索隊指揮者であつた、同伴のカクラン君から聽きながら、彼の指示するところに双眼鏡を向けると、暮れ行くシュクサンの絶巓岩塊の直下に肉眼にも明かにそれと見られる氷河の罅裂が眼に映る。このクレヴァスこそ吾等の友の最後の死の床なのだ。過去に十幾度もこゝに來て見慣れた山ではあるが、いまかうして、巖と氷河の黑白鮮かに男性的な强い線を劃して天を突くシュクサンに對して、友を懷い、そしてその友の追善の意味で山頂踏破に來つた事を考へると、一種悲愴なドラマチックな感激が胸腔にどよめくのを禁ずることが出來ないのであつた。

八月十七日。一頭の馬に食料寢具一切を擔がせて一行三人は SHUKSAN ARM の名でも想像されるやうに怪人シュクサンの主體が巨腕を伸して、優しい淸姿のベーカー雪山に戰ひを挑むやうに長く尾根を引く花崗岩塊の大岩壁の裾づたいに、もう半ば以上散り失せてはおるが、さま〴〵な高山植物が無盡藏な七哩のツレールを辿つて、午後早くシュクサン直下の無人境 LAKE ANN（レーキ・アン）の湖畔に着いた。

夜營の仕度を兩君に賴んで自分は獨りで古谷君が絶頂に向つた前日に、たつた一人でキャンプして寫生をしてゐた現場を訪うた。マウント・アンとシュクサン・アームの間に細長く續く、松の古木があたかも日本の田舍の鎭守の森のやうに立ち並ぶ海拔四千八百呎の一山稜。見渡す限り山また山。ベーカー國有林の大樹海は霞の中に廣重の浮世繪を見るやうに夢のやうに展開して、氷河が解けて瀧となつた CURTIS FALLS の水聲と、時々くずれ落ちる氷河のけたゝましい轟音が木靈（こだま）してあたりの靜けさを破る。シーンとした全くの閑寂境だ。

自分は古谷君がスリーピング・バッグをかぶつて寢たあたりに腰を下して、彼がコーヒーを沸かすためにレーキ・アンから水を運んだバケツを手にして見ると

故人の面影が頻りと思ひ出される。たつた獨りで、この淋しい山角で山を眺めてスケッチに耽つた彼の山羊髭が彷彿として眼の先にちらつく。こゝが異國の山の崇美に魅せられて、死の手の誘ふまゝに急いだ古谷久三君が、この世で過した最後の夜の假りの床だつたのだ……。

八月も中葉を過ぎると山上の夜は寒い。それに急に降り出した雨が激しく、私達の名計りの小さなテントを叩いて、三人共なか〳〵に寢るどころの騷ぎぢやない。傍らの松樹につないだパック・ホースが冷雨に惱まされてガサ〳〵と音を立てる。馬でさへ寢られぬらしい。

カクラン君は、この雨が霽れなきゃ山の上は雪だから危險だとしきりに心配するので、この山めがけて、はる〴〵とシカゴ三界から來た私が一層氣が氣でなく、テントの裾をあげては何十度と無く空を眺めるうちに朝の二時になると俄然として、雨が歇んで、空一杯の星屑だ!!。

私は、がばっと飛び起きて外に出た。麓は一面の深い雨後の霧だが、折柄の滿月の冴えた光りを受けてシュクサンは恐ろしいばかりの峻嶮な姿を見せておる。

八月十八日。滿二年前の本月本日、長い間の私の山行の伴侶であつた古谷君が、同じ絶頂を志して死の旅路についた思ひ出深い日だ。同行の矢野老勇士の心盡しの用意でこゝまで運んで來た食料品で手輕な朝食をすませ、シアトルを出る時知合ひの婦人から贈られた『すし』一箱とサンドウヰッチやレモンや數粒の梅干まで入れたリュックサックを背にわざ〴〵シカゴから携へて來た長年愛用のアイス・アックスを手にして、まだ明け切らぬ四時といふに、私達同行三人はシュクサン詣での第一歩を踏み出したのであつた。

古生層の山に特有な、自然の巨匠が鋸で切つて並べたやうな細長い材木型の堆石が、行つても〳〵まるで木曾山中の伐木場のやうな亂雜さでころがつて、釘を打つた靴ではとても歩行の困難な ARETE の中腹どころを二哩ばかり辿る頃には夜が明け渡つたが、どんよりとした空模樣になつた。これからは絶頂への最徑路として五年前にベーカー倶樂部長フッシャ君によつて

レーキ・アンに於ける吾等のキャンプ　　東　良三

發見されたので其名を採つて FISHER CHIMNEYS と稱する嶮を往かねばならぬ。火山系の多いキャスケード山脈には珍らしい『蟻の戸渡り』式のロック・クライミングだ。

時々脚下二千呎といふ深い谷底が覗いて見える岩角を這つて登る。本當にあぶない藝當を幾度となく演ぜねばならぬ。「こりや東さん、家族の係累のある人なんか來るところぢやないですな」と命も要らぬから連れて行けと同行をせがんだ老畸人矢野君が歎聲を洩らすのも無理が無いと思はれるほどの大難所だ。流石に『山岳家』と自ら許してゐる私でも、眼をつぶり虚勢を張つて同行者を勵ますに過ぎない位の危險だ。

丸切り水の枯渇したチムニー登りをやつとの思ひで過ぎると、廣濶たる CURTIS GLACIER の中間のあたりに出る。雪と氷が解けたばかりの清冽そのものゝ冷たい岩間水に舌と胃をしめらした時の爽快味!!。登山家のみが味ひ得る愉悦感だ。

これからは懸垂氷河と直立した氷壁を攀ぢるのでアイス・アックスで一歩一歩入念に足場を作らねばならない。時期がおそいので氷河の表面の雪が去つて氷の實體が露出しておるからだ。危險は依然として附纏ふのである。

左側を見ると第二のチムニーの群塊が針の如き峻嶮の相を見せて連立しておる。シュクサン第一登山のカーチス氏等は一九〇六年いまの MT. BAKER LODGE の方面から二日を費やしそこのチムニーを攀ぢ登つたのであるが、其後このルートを採つたものが無い。古谷君と共に凍死を遂げた女流山岳家マルチン嬢の最後の現場はこのチムニー連稜の最高の岩蔭であるといふので、吾等は脱帽して敬意を捧げたが、この位置から約半哩の萬年雪の傾斜原を登ると絶頂を形成しておる直立正に一千呎の大チムニー岩塊の麓につきあたる。この絶頂峰岩の直下に擴がる PRICE GLACIER（カーチス氏と共に第一登破に成功した人の名を採つたもの）の最高點が裂けた深さ十二呎幅十呎位の氷穴がある。このクレヴァスの中で、吾等の古谷君が永遠の眠りに陷つて、北米大陸に於ける最初の、そして唯一の山の犠牲者となつたので、八月十八日に遭難落命して、二十

四日の早朝吾等といま同行しておるカクラン君達によつて、亡骸が發見されるまで、實に一週間のあいだ彼はこゝに横つてゐたのだ。

彼は山上の吹きまくり荒れ狂ふ暴風雪と戰つて、あへなく劇的な死を遂げたその現場に、二年後の月も日も同じき第三周忌に期せずして立つ私と彼との因緣の奇しきが思はれ、彼がサンドウヰッチを手に、セロリの一片を口にして、疲勞と空腹と酷寒との戰ひに敗れて眠るが如く徐々と生氣を失つていつた姿が、私の心の眼にあり〳〵と傷しく映るのだ。

レーキ・アンの野營地からこゝまでに私達が要した時間は四時間半であつたが、古谷君一行が朝六時に同地點を發足して午後八時になつてこのあたりに達したといふから、實に十四時間を要した事になるのを見て彼等一行がリーダーと頼んだ人が、嘗つてこの山に登つた經驗が無く、この山の地理的知識が更に無かつたといふ事を明かに認める事が出來る。それがために登攀路に迷つて徒らに時間を費やし、折柄襲來せる風雪に抗する力無きまでに一行を疲勞の極に達せしめて避け得べき災禍を招くに至つた事は、登山隊の指揮者として非常なる失態であつて、其後この人は所屬してゐたシアトルの MOUNTAINEERS CLUB から除名處分を受けたと聞いたが、米國に於いて最も歷史の若い困難なこの山に、かゝる人と行を共にする事となつた偶然の成行を吾が友のはかなき宿命として悲しく思ふ。

このあたりから絕頂に達するにはカーチス氷河の上端を約千五呎も降下して更に一哩半と迂回した大雪田の凍つた急斜面を攀ぢねばならない。主峰を形成するチムニーの巨大なる錐針狀の岩稜と岩稜の間に、底知れぬクレヴァスが物凄い青味を見せて大きな口を開けて居るので、それを乘り切る事が絕對不可能であるからだ。私達一行は麓で摘んだもろ〳〵の高山植物の花束を氷穴に投げ込んで亡友の靈に心からの弔意を寄せ、折柄降り出した雨を恐れて再び山巔を指して急いだが絕頂岩塊の裏側の直下に達した頃には雨はまた歇んで、晩夏の日光は力强よく雪田に照りつけ、昨夜一睡もせなかつた結果による眠む氣と疲勞の爲に吾等の歩行は大分なやみ勝ちになつた。

でも、もう絶頂まではほんの一息である。あますところ僅かに六百呎に過ぎないが、可なりに困難なロック・クライミングの最後の突撃に荷物が邪魔になるので、日の射さぬ岩蔭で辨當を開いた。水が得られないので、サンドウヰッチが喉を通らずカクラン君まで私が擔いで來た『すし』に舌鼓を打つた。シュクサン山上で『すし』辨當が開かれた前例は勿論無く、將來とても當分は恐らくあるまいと私達は笑つて賞味した。

かくて、三十分の後に吾々一行三人はマウント・シュクサンの主體、針の如く天に向つてそゝり立つピナクルの絶頂に立つた。打ち見るところ雷電のために打割られた岩片が僅に長さ十二呎幅六呎しかない狹い頂上を殘して、疾風一たび來らば忽ち脚下千五百呎の氷原上に吹き落されさうな物凄い危險さである。時正に十一時。野營地を出てから七時間を要した譯で、私達は互に成功を喜び合つて、岩蔭に鎖を附けて隱されてある鐵筥に納めた山岳會備付け、署名簿に私達の名を列ねた。私は當年五十五歳の矢野君の意氣と健脚に敬服に堪へず、特にその旨を記名の下に錄しておいた。

山巔からの眺めは平凡ながら『ワンダフル』の一字で盡きる。たゞ見るところ下界は一面の廣い〳〵雲の海である。その奔騰跳躍する雲波のあひ間〳〵にキャスケードからオリムピック連峰、更に北方加奈陀のセルカータ山脈の高峰の一つ〳〵が、それは丁度日本からの船が英領ビクトリア附近で見るヤンデ・フーカ海峽に散在する小島の群のやうに頭だけ見せて浮び出て居る姉妹峰、マウント・ベーカーは白雪の銀冠をキラキラと旭光に輝かして眞にまばゆきばかり、空計僅か五哩の眼前手に取る如く巍然として碧空に聳えておる。實に崇美の極だ!!

一九二六年の夏、小島烏水先生や古谷君達とお向ひのベーカー山頂に立つた時に、私達は『來年は是非ともシュクサンへ』と約したことであつた。それが小島先生の歸朝と私の東部移住とで果す事が出來ず、西沿岸のポートランド市に獨り殘つた古谷君には、それが殘念でならなかつたのだが、私がシアトルに居さへしたならば、彼も無論私と共に手を握つていまこの山頂踏破を喜び合つておるに違いないのだ。かく思ひなが

ら私は最高點の尖角岩にすがつて、眞下に見える思ひ出悲しき氷窟をもう一度見降した。そしてまた矢張り當然この絶巓に立つべき筈だつた、母國にゐます先輩小島先生に遠く敬意を送つた。

晴嶚定まり無く、雲の徂徠出沒急に、山上の天候は猫の眼玉のやうに變化激しく、いまゝで下界を閉ぢこめてゐた濃霧が徐々として昇上、シュクサン本體の半ばを包むやうになるのを見て、急いで下山の途についたのは丁度正午であつた。登りよりは一層危險の程度の多い氷河を降る頃には霧は全く吾等の身邊を濛々と取卷いて、私達の下山の困難は實に一方ならず、到頭、カーチス氷河の中腹部あたりで往路と全く違つた方向に進んでおることが判つたが、沈着老練なカクラン君のガイドがあつたゝめに、ちつとも狼狽へさわぐ事なく私達三人は五十呎のロープを手に手につないで、日暮れにつれて暗くなる行く手の嶮路を一歩々々注意深く踏みしめ、默々としてチムネー尖塔を下り、氷蝕堆石のごろ〳〵ころがる岩原を渡つて、夜營地のあたりと推斷出來る草原地帶に辿りついたのは實にすでに午後七時であつた。

深み往く濃霧で一寸先きも分らぬ、墨のやうな暗い圖路を手探りに探つておる私達の耳に、松樹の根につないで殘しておいたパック・ホースが一聲二聲低く淋しく嘶くのを程近いところに聞いた時の私達の喜びはどうであつたらう!!。無難にキャンプに歸りつくと、私達はランターンの細い光りを頼りに匆々と形ばかりのランチをこさへ武者振りつくやうに空腹を滿たして、初めてホット安心と滿足の太い息をついた。

古い地方の人でさへシュクサンといふ山名さへも知らなかつた一九一八年の夏、初めてこの雄偉な山の姿を眺めて登高の志を唆られて以來、シュクサンは私の切なる久戀の山であつた。この憧憬れの山を探つて、再びこの大俗惡の大都シカゴの人と還つても、自分の心眼にはいつも、二千五百哩かなたの西の空に聳え立つ清高なる『肅山』の姿が映るのである。

（後記）

古谷久三氏は昭和四年、卽ち遭難した年の春に小島先生の推擧によつて日本山岳會々員となつた人である。畫家として

ヘーザー・メドウより眺めたるシュクサン峰　　Ben Thompson
（……登　路
×　古谷氏の墜落せるクレバスの位置）

山岳愛好家として、新聞通信員として、西北部各地の日米人の間に廣く知られてゐたので、遭難當時は各新聞紙は爭つて日々其の模樣を報導、ポートランド市で葬儀の際には會葬者五百人と算し、特に同市テレグラフ紙は社説欄の第一コラムに "KYUZO FURUYA—A MARTYR OF ART" と題した追悼文を掲げて、藝術と自然美に殉じた彼の純情を賞讃した如きは、彼も死して餘榮があつたと言はればならぬ。

それに、ベーカー國有林地帶の幽邃を天下に紹介の目的で出來ておるベーカー山啓發會の部長 B. W. HUNTOON 氏が古谷氏の死骸發見に非常な努力を拂はれた厚意に酬ゆるために、故人の友人達からポー市駐在帝國領事を通じて米金五百弗に謝狀を添へて同會に贈つたが、其れに感激したハンツーン氏の談が電報となつて各地の新聞に掲載され、廣く米國人の頭に、日本人の友情厚く禮儀深い美德を知らせる事となつたのは、同氏の死が齎した尊き副產物であつた。現に筆者が友人達の依頼を受けて、同君の紀念碑を作るに適當な花崗岩の、可なり大きい自然石を、シュクサン直下の古谷氏が夜營してゐた地點で撰んだのを、啓發會ではそれを全く無料で運び出して箱に詰め、遙る〳〵ポートランドまで送り届けて呉れたのを見ても、如何に自然を愛する人と人との純情の交錯が、全く國境と人種を超越しておるかといふことをはつきりと知る事が出來る。

かくの如く、シュクサンといふ山を中心として、多くの人々の美しい友情によつて立派に出來上つた古谷氏紀念碑は、次に記すやうな碑文鮮やかに、いまポートランド市の郊外ローズ・シチーの墓地に、故人が愛憬おかなかつたマウント・フッドに向つて建つておる。

故人神奈川縣產獨親彩管最愛山嶽偶登肅山奇禍殞命
時千九百二十九年八月十八日壽四十二交友追惜擇其
地之石玆永保

萬里の異境に奮闘しつゝも山岳を熱愛して、遂に命を捧げた在外會員の事蹟を報告するも、無用ならじと思ひ以上附記す。

（あづま生）

冬の笠ヶ岳

島田武時

一九三二年一月、笠谷岩小舍より小鍋尾根を往復し、笠ヶ岳（二八九七・五米）に至りし記錄。

三一年、私は山友高橋君の同行を得て冬の笠ヶ岳を

計劃した。登路はかつて先輩田中菅雄氏一行が二八年春、笠谷の岩小屋を根據地として笠谷を往復せられたものと同一路をとることゝし、其年九月栃尾の大倉辨次郎に依頼して笠谷の岩小屋に米を上げ、薪を貯へて貰つた。

同年の暮、三十日富山で落合つた私達は積雪に妨げらるゝこともなく、自動車を飛ばして其日のうちに栃尾に着いてしまつた。先年田中氏一行が神通河岸を三日も歩いて栃尾に行つたのを思ひ合すと案外だつた。栃尾の宿から乘鞍岳方面の尾根の樹氷を望見して秘かに胸をときめかした。

三十一日、辨次を加へた一行三人で山の神峠を越へて笠谷に入つた。

峠から雲間に隱見する笠ヶ岳を見た。笠谷の積雪は案外に多く、又ブッシュも多くラッセルに苦しんだ。ブッシュのためにスキーを着けず、全部輪鏍を使用したのである。

その爲に豫定の笠谷の岩小舍に着くを得ず、途中左岸の横平伐採小舍に一泊するを余儀なくされた。夕方遲く辨次の弟、吉次が山鳥一羽土産に提げて追付いた。四人は屋根もない小舍に火を焚いて眠についた。

翌三二年一月一日は快晴に明けた。左岸の伐採用軌道に沿うてスキーを着けて歩いた。軌道は笠谷と小鍋谷との出合で終つて居る。そしてそこには立派な營林署の小舍がある。私達は更に小鍋尾根――笠ヶ谷、錫杖岳の鞍部二四四七米より發する小鍋谷、笠谷の中間に有る巨大な尾根、大倉辨次郎の呼稱そのまゝをとる。この方面の地形に關しては山想第二號、田中氏の「笠谷及びコクラ谷より笠ヶ岳」の記事に詳細が記載して有る。――を約三十分登つた笠谷の岩小舍を根據地として重いリュックサックをおろした。嘗つて田中氏一行の使用せられた岩小舍は取壞はされて同所より少し離れたところに伐採用の假小舍が作られて有る。笠谷、小鍋谷出合の營林署小舍との區別のため、又以前よりの呼稱のまゝ名實相伴はないが之を笠谷の岩小舍とよぶ。

横平の小舍より三時間。十一時半に着いた。午後、輪鏍を着けスキーを持つて小鍋尾根を登り笠谷の登路の偵察に行く。

田中氏等の登降された笠谷の左俣、右俣共に積雪少なく、所々に流れが現れて居るので最初の豫定を變更して小鍋尾根を往復することにし、そのまゝ輪縲で道を踏んだ。尾根の下部の大森林の中を歩く。膝まで埋る。約二千米突の等高線まで登つて六時半小舍に歸つた。夕方谷底の限られた空に星が輝いた。

期待した二日は終日雪が降つた。小舍附近で約二尺の新雪を見た。辨次、吉次の二人は終日驅廻つたが兎一匹獲ずして歸つた。笠谷に伐採が始まつたゝめに獲物は皆穴毛谷、金木戸の方面に移住したのだと云ふ。

三日、素晴しい日光を浴びて小舍を出た。(四時、溫度零下九度)前日の經驗からしてスキーを止めて輪縲のみを携帶する。一昨日の踏跡は殆ど消へて居るが先日の到達點迄には約三十分を短縮し得た。

笠谷の頭はモルゲン・ロートに輝いて吾々を迎へる。天候を豫約する樣に笠谷からは快い朝嵐が襲ひ、粉雪をとばして汗ばんだ頰を撫した。

こゝから錫杖岳、笠ヶ岳の尾根の鞍部に至る間はこの行程中一番勞力を要した。

降り積つた新雪は尾根上の小樹木を覆ひ隱したに過ぎない狀態だつた。

ラッセルの先頭は屢々胸迄落込んで人手を借りねば這ひ上ることが出來なかつた。三人のラッセルは頻繁に交代した。

時々尾根の兩斜面が音を立てゝ落込み、上部の雪面に龜裂を生じた。雪崩を引き起すまでには至らなかつたが良い氣持はしない。

小舍より六時間を費して十時標高二四四七米の鞍部に着いた。物凄い迄の穗高連峯の壯觀。のびやかな乘鞍岳、御岳のスロープが豁然として眼前に展開する。又足下の薄田川の日陰に未だ朝日も受けず靜かに眠つて居るかの樣に見へる中尾の部落を見たときは懷しい思ひがした。

この尾根の積雪狀態は最惡のものと考へられた。積雪の締つた春期に於てもこの尾根のスキー使用は、かゝる尨大な尾根にもかゝはらず、甚だ範圍の狹いものと考へられる。上半部は所々に突出した岩石のために、下半部は繁茂した大樹の密林であるからである。

春期は矢張り笠谷の右俣、左俣を登降するのが得策である。

この頃より強風を伴つたガスが金木戸側より上昇して來た。そして忽ち目指す笠ヶ岳の頂きも、拔戸のピラミッドも、今まで大觀をほしいまゝにして居た穗高連峯をも吾等の眼前より奪つてしまつた。物凄い天候の激變である。總ての防寒具を身に着けた。

併し私達には自信が有つた。この地點より頂上に至る山稜は雪庇の墜落を避けて多く笠谷側を歩いた爲に必然强風の矢面に立たなければならなかつた。

この山稜は全部粉雪で覆はれて居た、輪鏍は能率を上げて進むが時折强ひらるゝ部分的の岩登りにはひどく不安定で困つた。

十二時半、吹雪の中を笠谷の頭に着いた。眼も開けて居られない。少量の中食の後、輪鏍をクランポンに代へた。

頂上までの斜面は多くマーブルクラストして居た。クランポンの使用は左程必要としなかつたが輪鏍の不安定なことからは大分救はれた。

一時半、久しい間、周圍の山から望み憧れた純白の頂に遂に立つことが出來たのである(溫度零下十一度)。

頂上のケールンに附着した蒼氷は素晴しい。風と粉雪の舞ひ立つ中に三人相寄つて晴間を待つたが遂に何時はれるとも思はれず下山する。クランポンのまゝ降る。笠谷の頭を過ぎた頃、漸く風も次第に止みガスもはれ上つて來る。穗高岳が亂雲の中に物凄く隱見しはじめた。鞍部に着いたときは風も止み、ガスはまたゝく間に消滅した。白山方面は見渡す限りの雲海である。

岩に腰をおろし今朝から始めての落付いた休息を取り次の計劃の奥穗高の白出谷を觀察する。積雪の僅少のためか荷繼場の瀧は全部露出して居る。ジャンダルムに至る谷も案外である。今朝(十時)と午後(三時半)の現在の場合を合せて考ふる時、白出谷はこの時期に於ては太陽の光線の影響を受けることは殆んどない樣に思へた。遺憾ながら日中はガスのために觀察出來なかつたが地勢上陽光に照されることは有つたとしても極く短時間に限られるだらう。

再び輪鏍に換へて今朝のシュプールをたどつて降る。

陽光は尾根一杯を眞赤に染めて居る。白山は壮大な山脈の様に逆光に輝く、笠の頂上は又、あの强風も吹雪も忘れた様になごやかなパイプ𝅘𝅥𝅮をあげて居る。

森林帶に入る頃は、既に足もとも判然としなくなつた。今朝、ラテルネを頼りに登つた道を又その光を頼りにして下つた。

六時、吉次の犬の吠聲に迎へられて小舍に入つた。

四日は雪が降つた。私達の眼覺めた頃は既に吉次は歸途についたあとだつた。辨次は鐵砲を持つて何處かに出掛けた。私達はなにをすることもなく終日を暮した。夕方漸く雪が止んだ。

五日は又快晴だつた。早朝小舍を片附けて久振りにスキーを着けて軌道に沿うて笠谷を下り笹島に出た。

（後記）

私達は笠谷の登路として最初から笠谷方面を選んだ。先年角田吉夫氏一行、最近關西の某校の人達が三月穴毛谷を上下して居られるが天候不順の冬期としてはより可能性ある登路として之をとつたのである。

そして第二の計劃の穗高行の遂行に便なる樣に天候の順調なる場合には毛穴谷を降り、又良好ならざる場合には小鍋谷を登り更にクリヤ谷に入つて（クリヤ谷の名稱に就いては山想第二號を參照）錫杖越へをする豫定だつたが前者は三日の笠ヶ岳頂上に往復した日の惡天候、後者は積雪僅少なため、ブッシュに恐れを抱いて共に放棄してしまつた。

小舍については、横平小舍、笠谷の岩小舍共に伐採用の假小舍で屋根もない。冬期使用には降雪前に修繕する必要がある。軌道終點の營林署小舍は使用の內諾を得たが色々面倒なことが起りさうなので使用しなかつた。伐採終了後は登山小舍として開放すると後で聞いた。この小舍を使用すれば防寒具は可成り節約出來る。

積雪少なき時の笠谷は笹島迄至らず笠谷村（笠谷の出合附近に有る數戸の部落）より直接軌道に沿うて登つた方が大分迂回することになるがブッシュと、雪崩の危險より脫せられる。スキーの使用も可能である。この行に於て自分達のスキー使用は僅か最後の笹島に出た日一日であつた。

三日の登高者三人。時間記錄、小舍（四・〇〇）—二四四七米鞍部（一〇・〇〇）—笠谷の頭（一二・四〇）—頂上（一・三〇）—二・〇〇）—鞍部（三・三〇）—小舍（六・一〇）

北海道の熊の話

伊藤秀五郎

北海道の熊の話は、昔から色々と面白く言ひ傳へられてゐるが、御多分に洩れずそれからそれへと尾鰭がつけられて、何處まで眞實なのか、かなり疑はしい話もある。長年北海道の山を歩いてゐれば、たいてい一度や二度は熊に會つた人が多いが、私も二三度見たことがあるし、山仲間ではかなり面白い經驗をしてゐるものもあるから、私の實際に見たり聞いたりした話を、誇張無しに書いてみよう。

明治の初年、開拓使時代には、札幌近郊にも盛んに熊が出沒したさうだが、土地がひらけるのとは丁度反對に、熊の方は次第にその領分を山地へと狹められて、時には人畜に危害を加へることもあるとはいへ、今では平地に出ることは稀になつた。しかし山岳地方にはまだかなり澤山棲息してゐるのである。鹿とか狼などの野獸が、現在殆んど絶滅してしまつたのに、熊だけは不思議によく繁殖してゐて、毎年二三百頭づつ獲られてゐる。尤も今のところ北海道では、まだ內地の山のやうに隅から隅まで遺憾なく登山路が出來上つてはゐないし、大雪山を除く高山地方には登山者の數もずつと少いから、熊にしたつて安全な棲息地をかなり廣くもつてゐる譯で、むしろ澤山ゐるのが當り前の事かもしれない。道廳の調査によると、昨年も全道で三百餘頭の熊が殺されてゐるし、北大の動物學教室では昨年一年間に百餘個の熊の頭骨を蒐集したさうである。そんな譯だから、現在でも十日も山にはいつてゐれば、たいてい一匹位は見る。直接姿は見なくとも、生々しい熊の糞や、草根を掘り返した跡などはしば〳〵見つける。澤を歩いてゐる時に、河原の砂の上にまだ濕氣のある熊の足跡があつたり、たつた今熊が通つたばかしで、まだ水が濁つてゐたりすることなどもある。そんな時には、必ず熊の臭がぷーんと匂つて、いちばん氣味が惡い。殊更に大聲を上げて歌を唄つたり、笛などを吹いたりする。

私が始めて北海道に行つた大正十一二年頃は、スキ

ー登山はすでに早くから比較的盛んであつたにも拘らず、夏の山登りはまだ餘り行はれない探檢氣分のかなり濃かつた時代で、熊を恐れることも甚しかつた。ルックに大きな鈴をつけたり、少し熊の出さうな澤にはいると、豆腐屋のラッパを鳴して警戒したりした。熊が聞いたらさぞ可笑しかつたらうと思ふが、こつちは本氣で、先頭の者が熊の足跡でも見付けたとなると、忽ちこの熊除けラッパを吹き鳴して、一行は極度に緊張して了ふのが常であつた。しかし山の熊はさう危險なものではないらしい。熊にしてみれば、人間がいちばんおそろしい敵なんで、人間を見れば逃げてしまふからだ。獵師の話では、熊の風上から行くと熊は捕れないといふ。人間の臭をかいで、逃げてしまつて姿を見せないといふのだ。たゞ仔を連れた親熊などに、不意に出會ひ頭に會つたりして、熊の方で危險を感じるやうな場合には、どうかすると向つて來て危害を加へることがあるといふ。しかし實際は熊の方が人が熊を恐がる以上に人間を恐がつてゐるんだから、こつちで手出しさへしなければ決して危險は無いといふ。尤も獵師はそれが商賣だから、恐いどころか、熊が出てくれなければ困る譯だが、私は三四人の獵師から何時もそのやうな事をきかされたし、實際にも獵師を案内にして山を歩いたりしたせいか、熊に對して今ではさほど恐ろしい感じをもつてはゐない。カナダの國立公園では熊が馴れて、ホテルの近くまで食物を求めに來るさうだが、北海道でも、そんな風に自然のまゝに保存される事になるといゝんだが。尤も日高山脈の札内岳や幌尻岳附近は熊の巣窟で、行けばたいてい間違ひなく見ることが出來る。私もかつてその附近で一日に三頭の熊を見たことがある。

その時私達の仲間は小森五作、和辻廣樹二君と私の三人で、何十頭も熊を擊つた經驗のある山に精しい十勝芽室村の水木文太郎といふ老アイヌを案内として、それにあまり山には馴れてゐない中山といふ中年のアイヌを伴つた。はじめて日高山脈にはいつた大正十四年の夏で、美生川を遡つて美生岳から幌尻岳へ行つた時だが、最後の急な雪溪を登りきつて漸く美生岳の肩に出て休息しながら、始めてみる日高山脈の雄大な姿

に見とれてゐると、水本が「オヤヂ」がゐるといふ（熊のことを彼らは山の「オヤヂ」と呼んでゐる）。それは私達にはからうじて、見出せるほどの大きさであつたが、水本の馴れた眼は容易にそれを見つけたのであつた。成程はるか遠方の青々とした尾根の上に、眞黑いものが二つ上に下に動いてゐる。しばらく休息してからその方へ尾根を傳つて、或る小さな凸起の上に出ると、その向う四五十間のところに、三才位の兄弟らしい熊が二匹、草原の上にごろ〳〵轉り戯れてゐるのであつた。默つてしばらく見てゐるうちに、熊の方でもこつちに氣づいて、見馴れない人間の姿を不思議さうに見つめてゐたが、やがて振りかへり〳〵しながら偃松の中の彼らのつけた小徑に消えて行つた。それから三十分程行つたやはり尾根の上で、こんどは前のよりは少し大柄な銀光のするのが一匹、草の根でも掘つてゐたらしいが、私達を見ると何と思つたか二十間位の近くまで殘雪の上を勢よく走つて來た。水本は銃を持つてゐなかつたことをしきりと殘念がつてゐたが、中山は氣の弱いアイヌで、靜かに〳〵と制しながら少し震へ氣味であつた。尤も中山は、美生岳の登りで、抱へた岩がぐらつと拔けて、岩もろ共に二三間下の雪溪に落ちて命は幸ひ無事だつたが、額や手足に負傷してすつかり參つてゐた時であつた。勿論私たちとても、熊がこつちへ走つて來た時には余りいゝ氣持——どころではなく、一瞬間ひやつとしたが、やがて熊は來た方へ引返して、やはり偃松の中へ消えて了つた。のどかな山上の草原で、餘念なく二匹の小熊が遊び戯れてゐるといふ圖は、正直に言つて恐ろしいといふよりは寧ろ可愛らしいといふ感じが多かつたし、彼らの敵意をもたない自然のまゝの姿を、そんなによく觀察出來た機會は、私は此の時以外にもつてゐないが、しかしそれ以前に私はすでに一度山で熊を見たことがあつた。北海道に始めて行つた年の五月、この時も小森君が一緒だつたが、一行七人、支笏湖畔の惠庭岳の登り路、頂上近く、それまでがや〳〵話しながら登つてゐた一行が、ふと話を切らして靜かになつた瞬間、路の近く澤寄りに、ガサガサッと藪がゆすぶれたのである。ハッとした私も、外の者も、無意識に四五間馳け上つて

から、異口同音に熊だと口走つて、澤の方を見た。二三十間下の、根曲笹やナナカマドなどの籔が動いて、やがて十坪程の殘雪の上に、大きな褐色の熊が一匹姿を現はした。こつちを見上げて、じつとしてゐたが、私達が聲を上げたり、石を投げたりしたので、オコタンペ湖の方へ一散に馳け去つていつた。惠庭岳と漁岳(イサリ)の間のオコタンペ湖附近も有名な熊の棲家で、千歳(チトセ)村のアイヌが熊狩をやるところだといふことであつた。これが私の見た山の熊の最初である。

三度目は、數年前の夏、人夫二人を入れて七人の一行で、音更川、石狩川、十勝川上流地方を十日余り歩いた時のことである。たしか石狩川の水上であつたと思ふが、ざぶざぶと露の多い澤を歩いてゐる時に、多分蕗の叢に畫寢でもしてゐたらしいかなり大きな黑い奴を、先頭の誰かゞ、知らずに二三間のところまで近づいて追ひ出したのである。たいてい前に一度位は熊に會つてゐる連中だつたが、何しろ不意に直ぐ目の前から大きな奴がのこのこ起き上つたんだから、先頭の二三人はひどく驚いたらしい。私は十間位後から行つたが、熊だといふので前を見ると、澤岸の急な斜面を登つて行くところだつた。畫寢の邪魔をするうるさい人間どもとでも言つた樣な、如何にも不平らしい態度で、二三度こつちを振り返つたりしながら悠々とブッシュの中を登つて行く。ブッシュもひどく傾斜も非常に急な斜面を、苦もなく馳け上つて行く姿を、稍〻羨望に似た感情で眺めてゐたが、忽ち見えなくなつて了つた。熊の山を歩く速さにも驚かされるが、彼らの四肢の力もまた非常なものであるらしい。馬などは一擊のもとにたほされるさうだが、人間には到底通過の出來ないやうな繁茂した偃松帶でも、波を切るやうにして易々と(少くとも人間にはさう見える)押し進んで行くのをみれば、さもあるべしと思はれる。話は違ふが路のない高い山の尾根すぢや、澤で瀧を絡むところなどでは、熊の路と人間の通る路とが完全に一致するのも面白いことだと思ふ。

私が實際に山で熊を見たのは以上の三回だが、この外に私は熊で非常に氣味の惡かつた經驗をしたことがある。それは或る年の夏も晩く、日高を一人で十日余

り歩いた山旅の終りに、南力の樂古(ラッコ)岳を十勝側から日高側へと越してパンケ川本流に出るまでの、瀧の四つある急な澤を下つて來た時のことである。もちろん路のあるやうな處ではなく、氣まぐれにでさへ魚釣も來る處ではないのに、瀧のところにかゝると必ず左右何れかに、それもまだ歩いて間もない人間のらしい踏跡がついてゐて、時には路やおにしもつけなどを根元近く折つたりしてあつた。その年の七月に樂古岳の十勝側には測量隊がはいつてゐたさうたが、日高側には越さなかつたといふ事だし、不思議に思ひながらも、はじめはその踏跡を有難くさへ感じて下りて來たが、ふと山のオヤヂかもしれないといふ考へが浮び上つた。といふのはその山歩きにはそれまでに、一度も熊を見なかつたので、その踏跡を見つけた時には、直覺的に熊だと思ひつかなかつたからである。しかしひとたび熊の跡だと解つてみると、まつたく思ひがけなかつただけに有難いどころか少々薄氣味惡く思はれ出した。更に驚いたことには、瀧が終つてほつとする間もなく、その下の平な岩の上に、ぬれてまだ乾ききらない熊の蹠形が、指紋でもとつたやうに、はつきりと殘つてゐるのである。雲一つない天氣のいゝ日で、晩夏の午後の陽にかなり熱くなつてゐる岩なんだから、ぬれてゐるところを見れば、今しがた通つたばかりのことは確かだ。それも一つ二つの跡ならともかく、右に左にと徒渉して岩なり砂礫なりの上に出ると、必ずそこにペタリと大きな水跡がついてゐるのである。何のことはない、熊の跡をつけてゐるやうなものだ。兩岸はたつてゐるし、先の見透しはつかず、オヤヂさんまだそこいらにうろついてやしないかと、曲角に來るたびにびく〳〵させられた。だが遂に水跡ばかしで、本流の合流點まで來た。本流へ出ると、ずつと河幅もひらけて、そこからはどつちへ行つたか足跡も解らなくなつて了つた。澤へ下りても、熊と人間の歩くところは、完全に一致することを、その時はじめて知つた譯だが、この時ばかりはさすがにいゝ氣持はしなかつた。

×

尾根や澤で、熊の歩くところと人のそれとが一致す

ることは、前に書いた通りだが、山で熊に道を教へられたといふ面白い話がある。山案内高橋淺一の實驗談である。高橋淺一といへば、金山の稲垣春太郎、旭川の成田嘉助の二人がすでに老境に入り、十勝芽室村の舊土人水本文太郎亡き今日、北海道の山をほんとうに精しく知る唯一の案内人(少くとも私の知る限りでは)である。元來北海道の山を案内出來る定住者といふものは極めて少い。以上の四人は、永年測量隊に從つて、かなり廣範圍に亙つて北海道の高山地方を歩いたことのある經驗者である。殊に稲垣老の如きは、山を愛することに於て決して私達に劣らない優れた登山家でもあり、水本は若い時から熊擊をやつてゐて日高山脈に精しかつたし、成田、高橋の二人は、北海道大雪山地方の草分小泉秀雄氏のお伴を何時もしてゐたので、中央高地に明るく、大島亮吉、田中三晴兩君が大正九年に石狩岳から石狩川を下つた時にも、この兩名を伴つたのであつた。「山日記」に載つてゐる案内人組合などは、何れもこの數年來の速製で、今では比較的中央高地に明るい金山の長田福松などでも、大正十一年の夏、北大の佐々木政吉、田口鎭雄、故藤江永次三君が、はじめて音更川から石狩岳へ登つた時に同行したのが、登山の最初であつたといふ。そんな譯で、淺一の北海道の山案内としての存在は、私達にしてみれば大いに輝かしいものなのである。もちろん當の淺一は、そんなことを聞かされたからとて別に名譽だと思ふ人間でもなし、今も北見の片田舍に貧しい耕作を營んでゐる農夫だが、その淺一が若い頃のこと、忠別岳方面の測量隊を案内して、忠別川を下つて來た時の話である。現在忠別川の「函」はまづ通過不可能とされてゐる有名なものだが、その時は行けば行けるだらうとたかをくゝつて、かなりの惡場を越して下つて來たが、次第に澤は惡くなるばかりで、遂に一行は進退窮つて仕舞つた。それまでにも無理をしてゐるので、後戻りも困難で、どうにもならなくなつてしまつたらしい。さすがの高橋淺一もこの時ばかりは斷念めたといふ事だ。いつたい淺一は、どつちかといへば大ざつぱの方で、なか〳〵困つたとか出來ないとかいふ事は言はない男なのだが、その困らない筈の彼が、すつかり參つ

たといふのであるから、余程のことであつたには相違ない。ところがその時幸運にも上の方から一匹の熊が現はれて、一行のゐたところから見ては到底通過不可能と思はれた崖を絡みながら「函」の岸の高い絶壁の上に出て行つたさうである。熊が通れるんだからと、勇を鼓して行つてみると、危險ではあつたがとにかく無事に通過が出來て、崖の上に拔けられたといふことである。

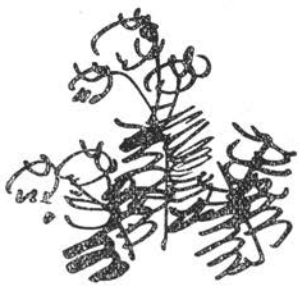
さうかと思ふと熊に飜弄されたといふ話もある。これも小森君の遭難談で、何か熊と因緣があるのではないかと思はれるほど小森君はしば〳〵熊に會つてゐるが、大雪山黑岳の登山小屋が出來た大正十三年の七月長田福松を連れた一行四人が、大雪から石狩岳へ行く途中、熊に追ひかけられた時の事である。白雲岳の附近の偃松の刈分を步いてゐる時に、ひよつこり一行の後に現れたが、妙な熊で、飛びつく氣配も見せず、のこ〳〵とどこまでも後をつけてくるのである。冗談もいゝ加減にしろといひたい處だが、まともに振り返るには恐ろしさが先に立ち、急ぐには余りにルックは重過ぎるし、それでも路が下りとなると、熊を引離さうと馳け出すんだが、熊はまた砂煙をたてゝ追ひついてくる仕末に、ほとほと策の施し樣もなくなつて、一行四人どかりとルックサックを拋り出してそこに腰を下して了つた。その物音に熊は驚いたらしく、二三間飛びのいたが、やがて斷念めたやうに振り返り〳〵再び來た方へ歸つて行つた。怪我の功名で救はれた一行は、しかしその夜は大きな焚火を燃しつゞけて、おち〳〵寢られなかつたといふことだ。熊に後をつけられた時、一行四人が血の氣を失つたのは言ふまでもないが、豫科にはいつて間もないS君の、その時上げた悲鳴を福松が覺えてゐて、今でも笑話になつてゐる。

そんなことがあつたとは知らずに、今仙臺にゐる松川篤治君が、それから一週間ほど後に、まだ番人もゐない新設の黑岳の小屋に一人で泊りに行つたことがある。幸ひ他に泊り合せの人もなく、すつかりいゝ氣持になつて思ふまゝ山の氣分を味つてゐたが、そこへひよつこり熊が現れたものである。米を洗ひに出て歸つてくると、何を思つたか一匹の熊が向ふからのこ〳〵

やつて來たといふ。さすが颯逸な松川君も、何しろたつた一人なので、かなり度膽を抜かれたらしい。小屋の中に飛び込むや否や、嚴重に戸口を閉めて、音も立てずに神妙にしてゐたが、熊の方は心得たもので、窓から覗いたり屋根に上つたりして盛に親密さを示したが、中のお客はこそりとも答へないので、それでも二時間の餘もそこらをうろついてたさうだが、しまひに何處かへ行つて了つた。ほつとした松川君は、もうヒュッテンレーベンどころではなく、手早く荷物をまとめると、這々の體で夜道をかけて溫泉に下つて了つた。味噌を入れたまゝ小屋の外に置いてあつた飯盒の中ごを、熊のやつ御馳走とばかりなめたらしく、なめたと言つてもさすがは熊で、齒の跡がぷつ〳〵と厚いアルミに穴を開けてゐるのである。紀念に松川君が持ち歸つたその中ごは、それから何年かの間、「山とスキーの會」で灰皿の役を努めてゐた。この熊は一週間前小森君達を悩したそれであらうと思はれるが、それから間もなく溫泉に下りて來て、納屋の乾岩魚を喰つたのが運の盡で、遂に擊たれて皮に伸ばされて了つた。その年の冬溫泉に行つた時に、圍爐裡のそばに敷かれてあつた熊の皮がそれであるといふことであつた。

この樣な熊の話は、書けば限りがないが、つい最近出た『蝦夷往來』第八號の柴原氏の文に依ると、同氏が今まで遭遇した野性の熊は、遠近大小合計七十三頭ださうである。それでも「昨年は僅か二回、此分では百頭祝は出來さうもない」さうだが、同氏の例をみても北海道に熊の多いことだけは間違ひのない事實である。

（七、九、三〇）



谷川岳東南山腹に於ける岩面削痕に就て

額田　敏

参照地圖　陸測五萬分一、湯澤四萬

一、緒　言

昭和四年七月、谷川岳（耳二つ）への登路として、西黒澤を溯り、標高約一〇〇〇米に於て向つて右に、マヂカ澤とを境する尾根にまで出で、登頂の途中に於て、其の尾根登路の附近、標高約一五〇〇乃至一六〇〇米間に散在露出する處の岩石の表面が、如何にも鋭利なる刄物を以て削除されたる外觀を呈し、且つ其處に方向一定にして、深淺、細太幾多の整然たる條痕あることを認めたのであつた。而し其際、此の附近に於て雷雨の襲來に遇ひ、觀測の餘裕なく急遽谷川溫泉に降るの已む無き狀態であつた。

爾來之が再び視察の機會あることを希ひつゝも三ケ年の年月は過ぎ、漸く今年九月廿五日に至り、該登路を再登して右の岩面削痕を觀測する機會を得た。

二、觀　測

登路は西黒澤に於て、標高一〇〇〇米附近に、マヂカ澤と分水し谷川岳より東走する尾根より略南に流下する處の平時は溪水なき一小凹澤を、行くものであるが、澤中に疊積轉落してゐる大小無數の岩石は殆んど閃綠岩である。其の幾多大小岩石中に上方尾根近き山腹より轉々落下せりと推察せらるゝが中に、岩面上比較的規則整然たる條痕を認むるものがある。而し之等の轉落岩石は遙か上方に在りしものなるが如く、其の條痕も、轉落の狀態に依りて、種々萬樣の方向を採りて止まるが爲めに、本來の位置に關し何等無關係なるの理由により、之等に就きては實測を行はない事としたのであつた。

標高約一二二〇米に於て、其の凹澤中に、前述の如き群小轉落岩石と趣を異にするも岩質は等しく閃綠岩にして、其の根を深く山腹中に埋沒する處の岩面上部が、一樣の傾斜を爲して、平滑に削除せられ且つ整然

たる條痕を印するものを認め初めたのであつた。

之に就ての觀測値を次に示す。

岩面最大傾斜　三二度
條痕傾斜　三二度
條痕方向　N·W一·二度

此の岩面並びに之に印する條痕の方向は、涸澤流下方向と、殆んど一致することを認むる。

標高一三二〇米附近に於ては澤は大いに淺く爲り、山腹に於ける多少の凹所なるが如き觀を呈するに至る。こゝに稍々著しき條痕ある岩石を認めた。之れが觀測の結果は次の如きものである。

條痕方向　N·W五〇度

條痕傾斜は岩面曲線を爲し居る爲めに測定を畧した。

茲より尾根標高一四〇〇米の間には、其の登路附近に於て著しき痕跡ある岩石は認むることが出來なかつた。

尾根に沿ひ標高一六〇〇米附近に於て、登路の向つて左方約一〇米の處に最も著明なる條痕を印する一大岩石を認むることが出來る。

此の岩石は他に一つの岩石に共の上表面V形を爲して接するものであつて、二岩共に表面は滑らかに削除され、登山靴にては共上表面の歩行困難である。これが爲めに、最も著明部分に接近し難かりし爲め、附近より寫眞を撮影し、以て共の外觀を窺ふに便せんとした。卽ち圖版に示さるゝ如き狀態を爲して居る。

登路は最も著明なる條痕を印する岩石にV形に共の表面を隣接する一岩を向つて右廻し、その側を登るのであるが、路に接する部分の實測値は次の如きものである。

岩面最大傾斜（Nに向ふ）　二四度
條痕傾斜　一四度
條痕方向　S·E八七度

尙ほ此の二岩の附近に於て尙他に一つの岩面實測値を示せば次の如し。

岩面最大傾斜（Nに向ふ）　二四度
條痕傾斜　二〇度
條痕方向　S·E五四度

之等の二測定値中の條痕の方向は大體に於て此の附

近に於ける尾根の走る方向に向ふものである。

標高一六五〇米附近に於て、登路より約一〇米下り、尾根登路に向つて右方、マヂカ澤に面する所に、前記岩石に類似する岩面露出せるを認むることが出來る。

これより頂上間は、登路兩側附近に於ては、斯かる痕跡ある岩石は認むることが出來ない。

山頂より南に、天神峠に續く尾根山路中に標高約一六〇〇米附近に於て、條痕ある岩石を只一ケ所認むることが出來たのみであつた。

觀察は、登山路の極めて附近のみのものであるが故に、此の全山に亙りて實測するならば尙多數の實例を發見することが出來るであろう。

三、考　察

谷川岳山腹に露出する岩質は前述の如く、閃綠岩であつて、火山岩に屬し、其の硬度の硬き割合に風化作用に對しては水成岩に比し抵抗力弱きが如しと雖も、只一般的比較の問題にして、風雨雪に對する抵抗力は尙相當に大なりと看做して宜しからん。

若し雨雪の浸蝕に基きて、前述の如き岩面を形成するものとするならば、岩質等しきが爲めに、其の附近一帶の岩面浸蝕も略ぼ均等に現はるべきであらう。比較的下方に在る岩石に就て觀るに、其條痕の方向は水の流るゝ方向に一致することを知る。然るに類似現象を呈する岩石はまことに少數なることを思へば、水浸のみに主原因を與ふる事は不隱當なるが如し。

標高一五〇〇乃至一六五〇米附近の尾根に存するものに就て考ふるに、澤中に在るものと稍々趣を異にし、水の浸蝕の影響は甚だ少く、又岩面最大傾斜方向と條痕傾斜の方向とは何れも異るを視れば、降雨の際發生する短期間的水浸作用とも看做し得ず。

又一ケ年中約その三分の一の期間を占むる積雪期に於て、重き雪層の岩面上を滑降する際に、下積の小石と共に、岩面を擦り降る結果なりと考ふるも、最大傾斜面と條痕傾斜とは方向異る事より、及び尾根の背稜上なる考へより又多少の疑問を生ずるものである。卽ち背稜部分に於ける積雪は、更に山上より雪崩の落下疊積するが如きことは極めて稀なるべく、從つて非常

谷川岳耳二つへの西黒澤よりの登路に於ける岩面削痕（標高1600m附近）　　額田　敏

なる厚層積雪の爲め發生する强大なる重力による岩面擦削は發生せざるものゝ如し。

又單に、風雨の浸蝕と看做すには余りに他の多くの岩面と趣を異にして少數であると共に、整然過ぎる觀がある。

原因を斷層的に觀る時には、崩壞滑落の土塊は岩石を交へて非常に强大なる重力により其の界面岩石を擦削し過ぎて、其の附近は一帶に類似の痕跡を殘すものなるべく、又崩壞落下の方向は山腹の最大傾斜面に沿ふものなるべきを考ふるに、又玆にも一致せざる點の存することを觀るものである。

又氷河期の痕跡なりと考ふるに、西黑澤の谷形、谷川岳（耳二〇）より天神峠に至る山形により推察するに之れ又、大なる疑問の點があるであらう。

之を要するに、雨水の浸蝕と觀るも、積雪層の移動に由ると考ふるも、斷層發生に基因するとするも、氷河の痕跡と看做すも、皆其の結果たる現狀に對して多々疑問の點あるを知るものである。

觀測範圍の狹きこと、觀測方法の不完全なることは結論に於て斷定不可能の一大原因たるべきものであらう。それが爲めに專門學者の研究を俟つものである。

此の稿を草するに當り、商工省地質調査所木下理學博士並びに文藝春秋社立上理學士よりの御助言を深謝するものである。

（七、九、二八）

北米大陸の高峰

最近ニューヨーク地理學協會の調査によると北亞米利加大陸内に海拔壹萬四千呎以上の標高を持つ高山は左の如く總計八十七座を算す。

コロラド州	四十七
カリフォルニア州	十三
ワシントン州	一
アラスカ	十四
キャナダ	六
メキシコ	六

尤も右の内コロラド州とカリフォルニア州内にある高山の内後者のシャスタ山を除いて氷河らしい氷河のある山は殆んど無く、これに反してキャナダとアラスカの殆んど全山岳は豐富なるグレーシアル・システムをなして居る。合衆國内ではカレゴン州とワシントン州内にある山は標高こそ低いが、悉く氷河を

包含して居ることは世人の熟知するところである。

CORORADO

Mount Elbert	14,420
Mount Massive	14,404
Mount Harvard	14,399
Blanca Peak	14,363
Grays Peak	14,341
Torreys Peak	14,336
La Plata Peak	14,332
Creston Peak	14,291
Uncompahgre Peak	14,286
Mount Lincoln	14,276
Castle Peak	14,259
Mount Evans	14,259
Quandary Peak	14,256
Longs Peak	14,255
Mount Wilson	14,250
Mount Antero	14,245
Shavano Peak	14,179
Mount Princeton	14,177
Mount Yale	14,172
Mount Bross	14,163
San Louis Peak	14,146
Mount Sneffels	14,143
Crestone Needle	14,130
Maroon Peak	14,126
Old Baldy Peak	14,125
Pikes Peak	14,110
Kit Carson Peak	14,100
Windom Mountain	14,091
Mount Eolus	14,086
Mount Columbia	14,070
Culebra Peak	14,069
Sunlight Peak	14,060
Redcloud Peak	14,047
Mount Bierstadt	14,045
Humboldt Peak	14,044
Mount Sherman	14,038
Stewart Peak	14,032
Wilson Peak	14,026
Grizzly Mountain	14,020
Wetterhorn Peak	14,017
Sunshine Peak	14,015
Handies Peak	14,013
North Maroon Peak	14,010
Mount Democrat	14,000
Pyramid Peak	14,000
Capitol Peak	14,000
Snowmass Peak	14,000

CALIFORNIA

Mount Whitney	14,501
Mount Williamson	14,384
North Palisade	14,254
White Mountain	14,242
Mount Russell	14,190
Mount Shasta	14,162
Mount Sill	14,100

Split Mountain ·····14,051
Middle Palisade ·····14,049
Mount Langley ·····14,042
Mount Muir ·····14,025
Mount Tyndall ·····14,025
Mount Barnard ·····14,003

WASHINGTON

Mount Rainier ·····14,408

ALASKA

McKinley ·····20,300
St Elias ·····18,008
Foraker ·····17,000
Mount Bona ·····16,420
Sanford ·····16,208
Blackburn ·····16,140
Vancouver ·····15,676
Fairweather ·····15,399
Hunter ·····14,960
Hubbard ·····14,950
Mount Bear ·····14,850
Alverstone ·····14,493
Mount Augusta ·····14,070
Wrangell ·····14,055

CANADA

Mount Logan ·····19,850
Mount Lucania ·····11,750
Mount King ·····17,130
Mount Wood ·····17,885
Mount Walsh ·····14,500

Mount McArthur ·····14,253

MEXICO

Orizaba ·····18,564
Popocatepeti ·····17,540
Iztaccihuati ·····16,960
Nevada de Toluca ·····14,950
Malinche ·····14,630
Nevada de Colima ·····14,100

（北米シカゴ市　東良三報告）

一九三二年「山日記」編輯報告

角田吉夫

主なる内容と筆者

一、暦七曜表　日記欄（昭和七年六月一八年五月末日）
一、登山經歴欄（昨年同様、皆貞）
一、自由日記（月日の支孚廢止）
一、住所欄（復活）方眼紙欄（昨年同様）
一、登山の注意（松方三郎、四頁に縮少）
一、遭難信號（昨年同様）
一、冬期登山に就て（松方三郎、右同）
一、服装と用具及食料（松方三郎、右同）

一、登山用品表（松方三郎、增補）

一、高山植物規定（昨年同樣）

一、應急手當及登山衞生（渡邊漸、改訂增補）

一、本邦主要山岳高度表（木暮理太郎、昨年の發音順を廢し北海道本州四國九州朝鮮臺灣に地方別の上、高度順に改訂）

一、峠高度表（角田吉夫、改訂增補、別に臺灣朝鮮を增加、木暮理太郎）

一、外國の高山百座、峠二十座（木暮理太郎、改訂）

一、山小屋（角田吉夫、左の表參照、大體新設の傾向あると共に、調査區域擴大）

	1930	1931	1932
道北部	25	24	28
父岳	20	27	40
塊ス	5	34	49
駒ス	24	28	31
山山	5	12	12
山方	3	5	6
國州	56	73	83
海	8	15	25
北	23	25	25
東ヶ山	細別セズ	51	51
城ル木	1	2	2
岳ア士	0	1	1
賀耆畿	8	8	7
北東關	—	2	7
秩八頸	3	6	12
北御南	—	0	7
富加伯	181	313	386
近四九			
臺			

一、山案內（角田吉夫、本年は一一二個所あり、六年度九三、五年度七三に對し非常なる增加を示す。本年は昨年中止せる冬期案內の能力ある者に×印を附し、報告者の責任を以て薦選せる者に限る。）

一、帝室林野局、營林署所在地（田中菅雄、新設）

一、日程表（藤島、神谷、田中、角田、本州中部の山以外に、本年は東京を中心とする一、二日の山及上越國境を增加、全般に訂正加筆）

一、山岳語彙（藤島敏男、增補）

一、山岳文獻抄（神谷恭、增補）

一、全國登山團體（角田吉夫、新設、二三一團體、昭和六年十月より七年三月に至る調査を示す。回答成績不良なり、調査票はこの二倍以上に對し發送せり。

一、世界主要山岳會一覽（松方三郎、新設、二二團體を選出す）

一、日本山岳會々則（新設）

一、寒暖計及尺度比較表、メートル法換算早見表、郵便規定（昨年同樣）

一、五万分一地形圖區域一覽表（千島及臺灣を增加）

一、旅館、溫泉、商店廣告欄（別に一二頁）

一、山岳寫眞（武田久吉撮影、八葉）

一、總頁四二八（日記一三六、記事二九二）
一、定價壹圓、會員豫約二割引

編輯委員　伊藤秀五郎　浦松佐美太郎　神谷　恭
田中　菅雄　藤島　敏男　槇　有恒
松方　三郎　渡邊　漸　角田　吉夫
以上九名

瑞西山岳會のために毎年發行される Tachen Kalendar は山小屋と山案内の記事が大部分を占め、毎年殆ど改版の必要もなく版が重ねられ、動きはカレンダーの部分だけと云つていゝ。日本山岳會の「山日記」は今年丁度三周年目を迎へてゐる。三冊を列べて見れば判然とする如く、年毎に内容の充實して行く事は明瞭であるけれども、今年の「山日記」は大して編輯事務の苦勞はないものと思つてゐたのに、手をつけて見れば、矢張り不滿な點が次から次と現れ、結局は殆ど前號と同程度の人手と時間を要してしまつた。

前述の内容一覽に書いた如く、各項の内容が增加した上に、新設した項目も少くない。山で用ゆる日記である以上、無制限の增頁も出來ず、内容充實を計らうといふ所に無理もあつた。削減したのは登山の注意を四頁にした事と、氣象表を廢止した程度である。

寫眞を新たに加へた事は贊否相半ばしてゐる。本年の裝訂はエビ茶レザークロースにし、周圍と表紙裏のポケットにミシンをかけた事は明るい感じと、堅牢なる二點より大體評判はよい（尤も少數ではあるが女學生好み也との注意もある）。全體が昨年度より厚くなつた事は頁數の增加にも原因するが、編輯委員の方で注文する紙が手に入らなかつた爲で、第一の失敗である。

編輯は昭和六年の秋より調査を必要とする項目より着手し、原稿は七年三月末日にメ切、四月より印刷屋の手にかゝり初めた。五月中旬發行の豫定が材料不足の關係其他の事情から六月初めにまで延びた事は、最も大きな失敗となり、誠に遺憾に思つてゐる。

例年の如く問合せのハガキに依つて、讀者の山日記に對する感想と註文を尋ねた結果によると大別して二となる。即ち

1　携行の便のよい、より小さなものとする說。
2　日記欄を擴大し、机上用の大きさとなし、記事を增大

して山岳年鑑とせよとする説。

記事の充實を希望する點に於ては兩者は一致してゐる。就中多數にのぼる項目は、山の略圖、日程表の時間、里程、高山植物の圖解、山岳寫眞術、氣象、地質及び定價値下げ等である。編輯委員としても、今日の山日記を以て滿足するものではない。この意味に於ても一般より寄せられたる希望、意見は非常に有力なる忠告者として感謝してゐる。將來はより以上に案を練り研究を重ねて、優れたものを作り上げたいと念じてゐる。

一九三二年度「山日記」編輯に際して、執筆者を初め、直接間接に多大なる御援助を賜つた諸氏に、深く感謝する次第である。

遭難顚末概報

常念岳遭難報告

一行　成定喜代治　金光隼人　案内人塚田清治

三月十二日神戸出發、十三日松本にて塚田と會し一ノ俣小屋へ着、其頃から天候は餘り芳しからず、十四日槍登頂を志したが午後から猛烈な吹雪となり、殺生小舍へ籠城。好天の見込なき爲一ノ俣に下山、天候の恢復を待つて、次ぎに穗高へ向つたが、漸く穗高小舍へ入り得たのみにて、吹雪と酷寒は登頂の機を與へず翌日亦一ノ俣へ引返した。

旬日に亙る闘志も空しく、一つの頂きをも極め得なかつた爲に、歸途、常念の銀嶺を求める事は三人の等しく望む處であつた。

三月二十日午前三時頃起床、昨夜からの雪は風こそ和いでゐたが、未だ雪は降りしきつてゐた。今日も亦斷念かと、空を仰いで歎いたが、六時過ぎより漸次恢復し、七時には全く霽れた。一同元氣付き、五六時間もあれば樂々と常念小舍へ到達し得ると言ふので、八時小舍を出發した。新雪約卅糎あり、薄陽を受く、二ノ俣口の附近には相當のデブリを認めたが別に危險を感ずる事もなかつた。例年に比し積雪量少なく、爲に渡渉數回、漸く十時に中山の登りにかゝる。此頃より少量の降雪あり。塚田はシールを持たなかつたので、スキーを輪鏍に代へたが歩行捗らず遲れ勝となる。正午頃晝食を攝り、峠を越したのが二時、中山を降つたのが三時であつた。此の附近新雪量最も多く、スキーの二人が腰迄もぐつた位ゐだから、塚田の困難は想像出來る。中山の降りを眞直に降り切つた爲、何處で間違つたのか、一行は常念岳西尾根に取付いて居たのに氣付いたがそのまゝ尾根筋を行くことにきめて登行を續けた。その邊で少量の食物を攝る。登るに隨つて積雪量は少くなつたが、其頃から風を交へたかなりの降雪あり、視野を遮ぎる。ガラ場に達して成定、金光の兩名はスキーをクランポンに代へたが、金光は獨りで穿き兼ねる樣に手の自由を失つてゐた。已に夜の帳は

山々を包む。頂上の手前では暫時風雪靜まり、雲の切れ目に月さへ出て、遙かに松本平の町の灯を望み、一同思はず歡喜したが、それも束の間、頂上に出た頃、吹雲を交へた突風は再び一行を襲ひ來り、足並亂れる。殊に金光は二人から遲れ勝ちであつた。頂上から相當降つたと思ふ邊で、小舍も眞近いと想像して、猛烈な風を避ける爲に荷物を卸して、塚田先づ降り、成定は金光の來るのを認めて、後に續いたが、金光の遲いのを案じて、塚田を呼び止めて待つたが、程もなく金光の電燈の明滅するのを認めて、又降りかけた。依然として金光遲く、暫時の後、二人は地に伏して猛烈な風を避けつゝ待つ內、疲勞の極にあつた二人は、其儘睡魔に襲はれてしまつた。

翌朝、成定は夢遊病者の如き狀態で小舍に辿り着き、亦暫時は眠りに落ちたが、氣付き二人を尋ねて小舍を出る。暫く自分の小舍へ入つた足跡を登つたが、手足の凍傷に堪へ兼ね引返す。翌日又、小舍を出で登りかけたが、向ひ風と步行の不自由の爲登れず、再び小舍に引返し、數日後救はれたのである。

尙、成定が睡魔に襲はれ眠つて、翌日氣が付き小舍へ入つたまでは、本人は隨分に朦朧狀態にあつた爲、正確な記憶を持つてゐない。そして自分の傍にゐる筈の塚田の存在をも、二通りにも三通りにも感じてゐて明瞭りしたことは覺えてゐない。之は二人で地に伏した場所の正しい位置に就ても同樣である。然し自分が自身で小舍へ辿り着いたことは、すつかり覺醒した後で、小舍を出たとき、クランポンを穿いた自分の足跡のみがあつて、輪カンヂキの跡がなかつた事から見ても、一人で小舍へ入つたのだらうと思ふと言つてゐる。服裝は成定が一番良く、塚田の服は防寒にはかなり事をかいてゐた。

以上は成定君の報告、特に彼の常念小屋に於てものした手記なるものに就て、色々のデマが各方面に飛んでゐる模樣のため、一夕特に同君を煩はして仲間のもので聞いた所を書き記したものである。（津田周二）

（本稿は、前號所載「常念一ノ澤遭難に就て」の前に入るべきものなりしを、編輯者の不注意にて逸脫せり、卽ち本號に揭ぐる次第なり。—編輯者記）

會津朝日岳遭難報告

理化學研究所長岡研究室町田敏男君は、昭和七年八月の休暇に、會津朝日岳の單獨登山を企て第一回失敗後、直に再擧、小幽澤を經て、朝日、丸山岳縱走に成功、只見川支流袖ヶ澤に下り銀山平に入りつゝも、只見川渡渉にて流され、惜しくも二十九歲の若い運命を山に捧げて了つた。以下その顚末を報告する。

一、搜索隊派遣までの概況

町田君から、次の葉書が母堂のところに到着後、歸京の豫定日を越しても、何の便りもなかつた。

町田君の最後の葉書

十八日、白澤——小幽澤の小屋。十九日、朝日——丸山岳へ。二十日、北澤を下る。二十一日、銀山平。二十二日、栃尾岐溫泉。二十三日、上越線乘車の豫定。

この葉書に十五日入山したが尾根で雷雨にあつた爲に白澤へ出て舟木氏方に厄介になつてゐることが書かれてあつた。

八月二十七日　母堂は心配の餘り、同研究室の櫻井定三君に相談に來られた。直に會津の南會津郡朝日村白澤、越後國の銀山平拓殖事務所及栃尾又溫泉に問合の電報を打つた。

二十八日　白澤、栃尾又より、消息不明の返電あつたが、銀山平よりは返事なし。電話で、角田吉夫氏とも相談し、櫻井又衞門氏を紹介された。

町田氏の豫定が少し短かすぎるからもう一兩日待つても思はれたが、櫻井氏は石井千尋氏と共に銀山平に向つて急行した。

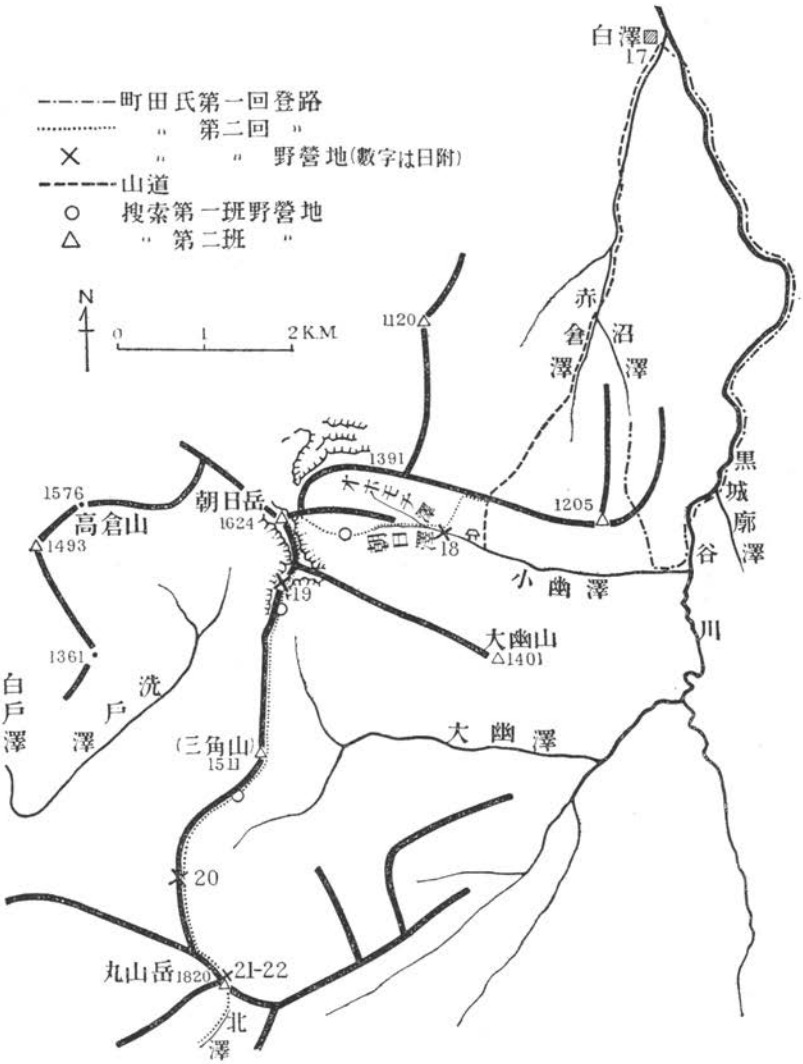
二十九日　銀山平よりも、消息不明の電報が入つた。いよいよ遭難の疑が濃くなつた。理研の了解を得て、搜索にとりかゝる。角田吉夫君にもわざ〳〵理研に來て戴き皆で相談の上次の結論を得た。

遭難の疑ひを抱き得る地點

一、第一日の失敗の如く、朝日岳にとつつくまでの澤又は尾根の中。

二、朝日、丸山縱走の疲による疲勞困憊。

三、袖澤に下りそこなつて、白戸川にはいり、白戸川の長い澤での遭難。



町田氏並捜索隊通過路畧圖

四、北澤乃至袖澤での濕か何かでの遭難。

五、只見川徒渉での遭難。

葉書にある通り、袖澤を下つて直に只見川を徒渉、八崎池に攀りついて、只見川沿ひの道に出るつもりなら、あの曲淵邊の徒渉は殆ど不可能だから、こいつでやられる恐れ多分にある。

越後側は既に出發後であるが、只見川及び袖澤、北澤から丸山頂上まではそちらにまかし、一、二、三の疑を以つて會津側から一隊はいることにした。その一隊を二班に分ち、一班は町田君の豫定通り小幽澤から朝日、丸山縱走をなし、二班は大幽澤から、丸山岳に向つてその頂上で一班に落ち合ふことにした。同じ研究室の杉浦義勝君、三島忠雄君と自分とでゆくことにして仕度にかゝる。ところが自分はこの頃體具合甚だ悪く、いかにもがいてもついてゆけさうになく代理をたのむだところ、白石襄治君と杉浦正君とがいつてくれることになつたので、甚だ心苦しくはあつたが、病には勝てず兩君に依頼した。

九月一日　越後側より、一名應援に寄せとの電報あり菅義夫君がいつてくれることになつた。

かくして越後側と、會津側とより、二隊に分かれて物理學者のみの手によつて捜索が開始された。その模様は各々その分擔者に執筆の勞をお願ひした。

（黑田正夫）

二、會津側捜索概要

八月二十九日　午後十時二十五分、上野發、磐越線廻り新潟行夜行で、會津へ出發。

一行四名、杉浦義勝、三島忠雄、杉浦正、白石襄治

帝大病院看護婦小場茂子氏も一行に加はることを申出でられたが、好意を謝しつゝも、見合して戴いた。赤羽迄送られて車中、醫療器具の使用法や人工呼吸その他、應急手當法を敎へられた。之が役にたつことを祈りつゝ、夜行の寢苦しさの中にも、睡眠を取ることにつとめた。

三十日　午前六時頃會津若松驛着、此處より黑谷までは乘り換へをすれば約一日がゝりで乘合自動車が行く筈であるが先を急ぐために貸切りを傭ふ。積算哩計を零にして一行が發したのが七時過ぎであつた。只見川

を上る事六拾數哩黑谷住吉旅館に着いたのは正午少し前であつた。こゝで町田君の最初に山の事等を詳しく聞いた管家(カンゲ)氏と白澤の舟木一(ハジメ)氏にお會ひし我々のとるべき手續き及び計畫について御意見を求めた。此處で一行は町田君が二回山を試みた事を知つた、山に對する町田君の知識の凡てが黑谷と白澤で得たもので、特に丸山嶽以北卽ち北澤、袖澤、只見川に關するものは管家氏による處が多かつた樣で兩氏のお話は一行の計畫上の大なる資料となつた。搜索隊に加はつて下さる人々が白澤で殆んど揃ふとの事で二時過ぎに白澤へ向つた。

白澤では舟木一氏のお宅に、御厄介になる事になつた。

町田君の一番關係の深かつたのが舟木一氏の弟さんの舟木秀夫氏であつたので舟木方では兄弟五人が一行に加はつて下さる事になつた。この夜立てられた計畫は我々一行の東京に於て立てたものと殆んど同一なものであつた。唯町田君と同一の研究室の杉浦義勝、三島忠雄兩氏が朝日嶽まで行く事になつた。杉浦正君が大幽澤(オホユウ)より丸山嶽へ、筆者が小幽澤より朝日嶽を通つて丸山嶽へ行く事に決つた。

大幽澤から丸山へ向ふ班は道の條件が比較的好いので、充分な食料と大型の天幕を持つて行き小幽澤へ向ふ隊は朝日嶽から丸山嶽へ行く尾根が惡いので輕裝する事にした。

舟木秀夫氏の話によると町田君が第一回を試みたのが十五日の朝であつた。勿論この日は黑谷で管家氏に充分山の事は聞いて研究してあつたので、白澤に寄る必要は無く單に白澤を通過したのであつた。そして白澤より直ちに黑谷川に別れ、支流を沼澤、赤倉澤の分岐點に向つて遡り沼澤の二岐を左には入つたために方向を誤り、尾根の山毛欅(ブナ)原(此邊を土地の人は「クックボ」といつてをる)に迷ひ、小幽澤、黑谷川落合ひに出て折からの豪雨に會ひ、十五、十六の二夜をこの近くに明かし、十七日の朝黑谷川沿ひの桑畑にて舟木秀夫氏に會ひ共に白澤村へ歸り、同氏の家に一泊したさうである。その翌日第二回を試みるべく再び山には入つたのである。卽ち十八日に小幽澤に入つた事になる。

二回目は小幽澤の上までは入つた事は舟木一氏の弟さんが、魚釣りの歸途薪火の跡を見て來たさうで捜索隊出發前既に明かになつて居た。

町田君が山へは入つてからの天氣の大略は色々の話を綜合して次の如く推定される。

十八日　晴天　　二十三日　晴天
十九日　同　　二十四日　同
二十日　晴夕刻より雷雨　　二十五日　この日より天氣惡い
二十一日　晴晝より雷雨　　二十六日　同
二十二日　午前十一時頃雷雨後は晴　　二十七日　同

三十一日　昨夜の豫定が次の人員で決行された。大幽澤を溯る組は杉浦正君と村からの三人（舟木清美、同平、鈴木定吉）。

朝日嶽方面の組は杉浦、三島の兩氏と舟木一氏と白澤村からの二人（舟木秀夫、舟木武）と黒谷の管家氏と筆者、初めの三人は朝日嶽より翌日直に白澤へ下る豫定であつた。

朝日嶽組が沼澤を上つて、第一の尾根に取付いたのが十時半頃であつた。この邊に町田君のものらしい足跡を頻りに發見したので先づ、足跡をつける事にした。この尾根は巾が廣く山毛欅の多い密林なので方向を誤り勝ちであつた。尾根を小幽澤に向つて下り出す頃より朝日嶽の頂が雄大に見え出して來た。小幽澤が餘りにも低いので、澤まで下つてしまうのが惜い樣な氣がする。この傾面を斜めに三四十分程下ると小幽澤に出た。この邊より足跡を失つてしまつた。例の舟木氏の見た薪火の跡のある地點が近いので急いだ。途中小幽小舍に寄つたが泊つたらしい跡は無かつた。小舍の少し上の分岐點附近にあつた筈の焚火の跡は其の後の雨で流されたか無かつた。しかしその跡のあつた地點の朝日嶽に向つて右側の急斜面に、かなり明かに人の登つたらしい跡があつたので、この上にでも天幕を張つたのではないかと思つて上つて見たが、その踏分けは尾根を絡んで、小幽小舍のかなり上を我々が乗越して來た方向に付いてゐたので町田君は之を通つて來たのであると推定され、之によつて小幽小舍が町田君には發見出來なかつた理由が分つた。一行は此處で晝食をす

ませた。町田君の十八日の出發が九時近くであつた事や其他の事より十八日の夜は此處で野營したと考へられた。分岐點少し前を一行が發したのは一時頃であつた。それより十分位で分岐點に着いた。朝日に向つて右がオホモチ澤、左が朝日澤である。

朝日澤に足跡があつたので元氣付いて一同は之を上つた。再び分岐點があつたので左に上ると途中戻つた樣子があり途中で跡を失つた。而し之は何れを行くもよいとの事であつたので引き返さずに登る事にした。之を眞一文字に上ると山は一枚岩の壁となり傾斜もかなり強く四界は開け木は全く無くなつた。岩を登りつめると草の斜面となり毛蘚苔等が見られた。又小粒水晶の結晶群等もあつた。こゝより西北に只見川の曲り曲つた白い川面が僅かに見られた。この斜面を上りつめると朝日嶽から大幽山に續く尾根の頂に出る。地圖で一五八一米と記してある地點であらう。尾根は一面の石楠花、偃松、犬黃楊(イヌツゲ)等の灌木で蓋はれ極めて歩行困難であつた。明日の朝日、丸山縱走が思ひやられた。此處でも町田君の靴の跡が僅かながら見られた。靴のために灌木の枝が二三糎皮を剝がれてあつた。尾根を登りつめると、灌木は丈を減じ丸山嶽が頂きを見せた。この峯から丸山嶽に續く尾根は發してゐる。こゝが朝日の頂でない事が分つたがこの頂で野營する事に決す。日の沈むまでに少し時間があつたので、近くの樣子を調べる事にした。調査の結果丸山嶽に向ふ直ぐ下手の尾根の僅かばかりの平地に町田君の野營の跡を發見す。例によりほんの小さな焚火ではあつたがシートをかぶり眠つたと思はれる。前記の天氣表によれば十九日は晴天であつたので、町田君は朝日嶽を中心として充分遊び、寫眞等を撮つた事であらう。若し惡尾根を朝日嶽の頂まで遊んだとすると、十九日の朝が小幽小舍附近發で而も途中引返へしたらしい跡を發見した等より、十九日の夜はこの場所で降る樣な星の下で充分な休養が出來たと推定された。

一日　朝方豪雨に見舞はれ、ルックをかなりひどく濡らされた。白澤へ歸る一行が下山したのが九時過ぎであつた。丸山へ縱走する者達は十時過ぎ尾根歩きを始めた。峯下の町田君の野營地點附近の徑十糎ばかりの

栂に「一九三二、八、一九マチダ」と刻んだ文字を見つけた。この邊から灌木は丈を増し殆んど四方の山々を見る事が出來なくなつた。木を踏み渡ると云はんか木を泳ぐと云はうかまるで例へ樣もなき惡場であつた。一行中夏この尾根を通つたものは勿論なく、冬期狩場の者が雪に蓋はれた時に僅かに通る位の處である。一時間一粁位の速さで進む事がやつとであつた。我々を最も困らせたのは赤蔓と根曲りであつた。歩行が困難な場所だけに、町田君の通過の跡はかなり方々に見られた。町田君のこゝを通つた日は朝早くから晴れてゐた筈であるので、今日中に我々が第三の野營地を發見するのは困難であらうと考へつゝ進む。一五一一米の三角點のある三角山を通過したのは午後三時頃であつたが、この頃より天候惡く、雨さへ降つて來た。三角山の少し手前の大幽側の谷へ下り、山毛欅原の中に水を求めて二升程の飯を炊く。

五時頃三角山と丸山嶽の鞍部との中間邊の尾根に野營する事にす。この頃より天氣次第に良く雷も遠のいた。大幽澤を上つた班の呼ぶ聲が聞え出したので、町田君が丸山嶽を通過したか否かを示すための合圖の旗を望遠鏡で搜したが、遂に見る事が出來なかつた。この日の夕方から町田君は雨に降られた筈である。

二日　早朝より町田君の足跡を追ふ事二時間餘、丸山續きの高尾根の取付きの根曲の藪の中に町田君野營の跡を發見す。之が二十日の野營地とすると此處で雷雨に會つたわけである。行程は極めて順調にいつてゐる處からして身體の調子も良かつたと考へられる。之を一時間も進むと、藪の中に三つばかり池が順次に現はれた。池の周圍は纖細な名も知らぬ草が密生して濕地帶を作つてゐる。その周圍を遠卷きに身丈を沒する灌木の密林が迫つてゐる。この邊から尾根は巾を增し上りが緩漫になる。丸山嶽は眼の前に迫つて來る。頂で奴鳴る聲が益々明かに聞えて來る。町田君は丸山嶽を通過したとの事である。

正午頃一行四名は丸山の頂に大幽澤を上つた組に合す。丸山の頂にも町田君のコッフェルを置いた跡と乾板の包紙を發見し、少くともこの地點までは來た事が確められた。二十一日は午前中は晴れてゐた筈である

からこゝまでは充分樂に來た筈である。町田君がこの地點より澤に下る前に若し四方の山々を見る天候に惠れてあつたならば、北澤入りを誤る事は地形の上から先づ万一あるまじき事である。而も大幽澤にその頃魚釣りには入つて居た舟木清美氏の話によれば、二十二日の朝は四方の山々を充分見る事の出來た筈の上天氣であつたさうである。而し十時半頃から雷雨があつたさうで、夕刻は又晴れたさうである。

晝食後全員足跡を尋ね廻つた結果、町田君は所謂丸山嶽の頂上から東の頭に行つた事が確められたので、北澤を誤つて白戸川へは入つたのではないかと云ふ心配は殆んど消えた。

午後三時第一段の捜索を打切つて下山に決した。大幽澤を三時間程下つて澤に野營す。此處は丸山嶽に直接登つた班の野營した地點である。夕食に鰍を食べさせられ久し振りに北海道の澤歩きを思ひ起す。

三日　白澤まで五里と云ふ。澤を一氣に下る。一時頃村外れに至り電報により町田君の死を知る。丸山嶽まで君の跡を追つた者には信じ切れない知らせであつた。

一行は四日朝舟木一氏の一族の方々及び管家德十氏其他村の方々の心からなる御骨折りに深く感謝しつゝ白澤村を去つた。

（白石襄治）

三、越後側捜索概要

八月二十九日　午前六時二十分、櫻井定三、石井千尋兩名小出着。直に銀山拓殖株式會社本社を訪問。角田吉夫氏よりの紹介による社長櫻井又衛門氏に事情を話して意見を求め、且今後の捜索につき助力を請ふ。また同町の日本山岳會員小杉源吉氏の意見も承はり、大體の方針を決定した。十時半小出出發自動車にて大湯に向ひ、十一時半到着、大湯東榮館主櫻井太郎氏に來意をつげ今後の後方連絡を依頼し銀山平須原口への案内人（櫻井文太郎）をたのんでもらふ。零時半出發、枝折峠を越えて兩櫻井、石井の三名須原口に向ふ。

午後九時須原口銀山拓殖會社事務所到着。直ちに來意を事務所の星喜七郎氏につげ、明日の捜索計畫を左の如く決定す。

平野八郎、上重樂治の兩君（兩君は北澤白戸澤丸山嶽方面の地理に最も明るい者である）をして明早朝丸山嶽に向

はしめ、町田君が丸山嶽まで來たか否かを確かめしめる。若し來た形跡あらばその後を追ふべく次の計畫を進める。

三十日　天氣良好

午前六時計畫通り平野上重兩君出發。十一時半に兩君飛來、曰く「南澤袖澤合流點の一寸上の砂原に『朝日丸山岳』と書いてあつて二十五日の水で半分流れた樣子がある。この地の者は朝日丸山岳と云ふ地名を知らぬ故多分町田君の字だらう」と。も無駄だつた。

櫻井(定)、石井兩名砂文字の筆跡を檢すべく上重君を案内として現場に急行、三時頃到着、字は町田君らしいと推定する。

六時頃須原口に歸着。途中にも靴跡らしいものがあつたが後日これは別のものと判明す。この日銀山平一帶を問合せてもらつたが否として跡なし。

町田君は袖澤までは來た事を電報に書き明日下山する人に賴んで東京に報告し、二十四日か五日頃袖澤にまで來たのならば未だ樂觀する余地あるものと考へ、明日こそ良い知らせの電報でも來るかと心待ちに待つたがそれも無駄だつた。

三十一日　天氣良し

早朝川向ふの平野四郎治老人事務所に來り曰く「二十四日只見川下流田子倉(タゴクラ)の男が魚取りに袖澤に入つて町田君らしい人に會つた話をした事を聞き込んだ。これによつて考ふると町田君は只見川本流までは到達したらしい。然るときは本流で遭難したと考ふるべきである」と。よつて青年會長佐藤善太郎君他十二名に出動してもらつて只見川を蛇淵(ジャブチ)附近から深澤(フカツサワ)口まで水中兩岸を捜索、櫻井同行す。夕方歸着、得る處なし。夜、袖澤で町田君に會つた田子倉の大束(オホツカクバン)方事務所に來る。以下大束の話す所を記す。

二十四日午前十時頃南澤袖澤合流點近く砂文字の一寸下手で突然出合つた。この時彼(町田君)は次の如く經過を話した。「小幽澤の小屋は發見出來なかつたので澤の上に露營し、丸山嶽で三泊した。その間大夕立に會つて恐ろしかつた。それから北澤を澤について下つて來て北澤袖澤の合流點附近で露營して來た」。空腹かと問ふたら「朝食をして來たばかりで空腹でない米も未だある」と答へた。袖澤を本流まで出ると通過困難の所があるからと云うて、峠道を敎へてやつた。これ

て行つてやらうかと云うたら彼は「それには及ばぬ」と答へた。未だ相當元氣相だつたが靴は破れて居た。

等の事で、服裝等を聞いて見るに町田君に相違なし。こゝに於て町田君は確實に袖澤南澤合流點附近まで來た事は明らかになり、從つて明日の捜索を次の如く計畫した。

一部は只見川本流について本日の捜索を續ける。

他を以て袖澤の南澤口附近以後迷込む恐れある所を捜索する。

九月一日　大雨後小降りとなる。

昨日の豫定の川の捜索は増水のため危險につき中止。十時頃石井他五名袖澤方面の迷込む恐れある場所を捜索し夕方須原口に歸る。

九月二日　天氣良し

櫻井(定)他五名袖澤方面の捜索を續け、一部(五名)にて只見川下流方面の捜索を續ける。

川下の捜索隊一時頃ルックサック發見、二時四十五分傳令一名飛來す、直ちに大湯に向け飛脚を立て「カツシモニルックアガル」の電報を發す。

三時半頃死體を發見(大鳥澤口の一寸下流で須原口から約三里川下の水邊に完全に着物をつけたまゝで)。

二名を大鳥澤營林署の小屋に殘留せしめ、二名が傳令として須原口に飛來す。時に午後八時、直ちに急飛脚二名を出し小出に下り報告せしむ。

三日　櫻井定三他三名死體の見張りに出發、後方連絡のために石井殘留、東京より菅義夫應援のため須原口に來る。

この日、夕方小出警察署長坂井耕三郎氏、拓殖會社々長櫻井又衛門氏、縣衛生技師(醫師)荒木氏等、この事件とは無關係に銀山平に來る。明日早速檢死する樣に依頼せるも都合つかず五日檢死と決まる。

四日　青年會長外四名現場に向ひ茶毘に附する用意をなし尙且つ見張人員の交代をなす。櫻井定三大烏小屋の現場に殘る。

石井菅兩名小出警察署長、櫻井又衛門氏等と今後の相談をなす。

五日天氣良し

檢死の警官署長以下三名醫師一名、石井櫻井(又)、銀山寺僧野村良宗氏、人夫六名、新聞記者等一行十四名にて須原口を六時半に出て現場に向ふ。

十一時半頃大烏小屋到着。檢死の結果身體に何等負傷なく溺死と決る。

午後二時我々の手にて茶毘に附しこゝに町田君は一片の煙と化し去りぬ。夕方に到り骨を拾ひ大島小屋に通夜をなす。涙雨と云ふか四時頃から時々雨が降る。

六日　小雨

遺骨を守つて銀山平に歸り銀山寺泊り。

七日　小雨

銀山平の習慣で、遺骸を枝折峠、大津岐峠、未丈越等舊來の峠越することを許さないので、只見川溯行燧岳の裏をまわつて尾瀨ヶ原に出る新道を通つて歸京せねばならない。友の遺骸を背負袋に入れて、小雨の中を赤田平溫泉に向ふ。遠い林道に初秋の雨にぬれて、知らぬ道を進む。

八日　天氣良し、夕方小雨

尾瀨もやるせない氣持と、早く歸るせはしさとで、飛び去り、長藏小屋よりは、遺骸を馬脊に安置して下る。三平峠を下つて沼田までのす。

九日　曇

午後一時上野歸着。

尙この度搜索第四日に於て死體を發見する事を得たのは實に、銀山拓殖株式會社長櫻井又衛門氏、大湯東榮館主櫻井太郎氏の至れり盡せりの御配慮、及び須原口事務所の星喜七郎氏の御盡力によるは勿論の事なれ

ど、當時銀山平一帶（須原口から只見川に沿うて上流に三里にわたる地を銀山平と總稱する）では主要產業の蠶の上簇期で非常な多忙中にかゝわらず、青年會員をはじめとして、各種各方面にその盡力を惜しまれなかつた事によるものである。

町田君遭難時日と地點の推定次の如し。

二十四日午前十時に圖B點附近にて田子倉の魚取り大束に會つてCの峠道を敎へられて居る。

またその後の搜索によつてCの道以外に迷込んだ跡がないから、D點までは出て來たであらう。しかるときは當然E附近までは來る筈である。

E附近は右岸絕壁只見川に迫り足場惡き場所二三個處あり、DE間に於て左岸に涉るべき適當の地點なし。

Eより須原口方面にわたつては全然足跡なく、何等の手掛りもなし。

Eを安全に通過すれば當然F附近で徒涉して右岸に出る樣な地形なるも、徒涉地に到る前に當然通過すべき樣な砂原に跡なく我々はE點の岩壁（地方名にてヘッリと云ふ、固有名をブットウベッリ）にて轉落溺死せるものと判斷す。

Cの峠道は約二時間行程にてDに出る故、B點にて午前十時頃なればE附近は午後の一時頃以後なるべく、CDE附近を午後の四時頃通過せしものあるにつき、遭難は午後四時以前なるべし。

事務所の水力電氣用の記錄に依ると、二十四日には只見川は搜索當時に比し一尺近くも增水して居たからその附近で徒涉しても相當の危險はある。

要するに昭和七年八月二十四日午後一二三時頃EF附近にて只見川に流されたものと判斷する。

（石井千尋）

新刊圖書紹介

山岳形に關する二三の問題

（岡山俊雄著　岩波講座・地理學）

言ふまでもなくこれは專門的な論述であり、この紹介の執筆者は地理學に對しては素人であるから、この一文も批評ではなく單なる紹介に過ぎないのであるが、こゝにこの著書を紹介する理由は、唯單に筆者が地理學に對して尠からぬ興味をもち、特にこの著書を非常に面白く讀んだ爲ばかりではなく、山岳人の一般的常識としても、かゝる問題に關心をもつことは必要であると考へるからである。山登りの本質が、主觀的なものであることは言ふまでもないが、山に關する他のあらゆる自然科學的及び文化科學的知識が、山登りの實際的な問題のみならず、廣い意味に於ける山乃至は自然の理解と享受とに於て、如何に役立つものであるかは、少しく山登りを解する者の誰しも認めるところであらう。殊に本書の如き山岳そのものゝ形態に關する問題は、直接吾人を稗益するところ決して尠くないのである。もとより本書の如き限られたる頁中に、多くの問題に就て述べることは不可能であるが、著者の本書に於て取扱つた問題は、また吾人にとつても甚だ興味ある問題であり、而もそれらは「山岳形に關するかなり根本的な問題」であり、又それらは「多くの教科書には、既に明かなこととして或は未だよくわからないこととして、一般に極めて簡單にしか記されてゐない」ことであり、「しかもそのうちの、夙に論じ古され既に確定したと思はれてゐる如き問題すら、實は必しも決定的な解決は與へられてゐない」のである。

卽ち本書に於て著書の解說を試みた問題とは、「山頂の定高性」「侵蝕の基準面」「起伏」の三項目である。

第一「山頂の定高性」の章に於ては、本邦及び諸外國の實際的な例を擧げてその定高性を說明し、それの原因に關する學說中代表的と云はれるデーリー及びペンクの二學說並びにそれに對するデーヴィスの批評を解說して、この問題を明かにしてゐる。

第二の「侵蝕の基準面」も、前項に劣らぬ興味ある問題である。何となれば、基準面とは、山地が、長期間に亘る削剝作用に依つて到達する終極の狀態を示す地表面であつて、「削剝の下方限界たる基準面は、云ふ迄もなく山の存在し得る下方限界である。一方山の存在する上限が切峰面であることは切峰

面そのものゝ性質に依て明かである。山が基準面の下方に如何にしても存在し得ぬことは恰もそれが切峰面の上方に抽んで得ざるに等しい。卽ちあらゆる山の形態は之等二つの面の中間に生ずる。この意味に於て、基準面の本質の解明は山岳形に關する一問題となるのである」からである。著者は本項に於ては、基準面に關する諸學說の精細なる解說を試み、基準面に對する見解の發達史に三階程のあることを、それぞれを代表するパウエル、デーヴィス及びチェンバーリンの三學說に依て明かにしてゐる。

第三は「起伏」である。起伏は山の一要素であり、從つて起伏量(Reliefenergie)の大小は、山の性質に密接に關係する。起伏量による高山・中山或は高原・開析河成面等の分類は、夙にペンクの試みたところであり、又南獨逸及び東アルプスの起伏圖を作つたクレーブスは、傾斜角と起伏量とを地形分類の確固たる基礎と解釋し、ペンクと同じく起伏量によつて種々の地形を分類し得ることを示してゐる。これらは何れも起伏量が、地形分類に對して重要な意義を有することを示すものである。かくの如き性質を有する起伏に就いて、著者はこゝに次の如き數項にわたつて明細な說明を試みてゐる。卽ち「起伏量の定義及び種類」「起伏量計測上の問題」「起伏量と面積との關係」「起伏量と傾斜との關係」「起伏量と谷底及び山頂の海拔高距との關係」「切峰面、切谷面、起伏量」「可能起伏」等である。殊に起伏量の測定に關しては、著者自身の考案になる改良されたる方法を以て實例を示してゐる。しかし之等は、前二項の問題よりは直接吾人に關係するところは尠い事柄である。

最後に本書とは關係のない事ではあるが、筆者の著者に對する希望を一つ附加へたい。それは本書に於て取扱はれたやうな專門的な事項の、一般的な平易な解說を、何れかの機會に於て試みて頂きたい事である。かくの如き試みは、或は比較的困難な仕事かとも思はれるが、われ〳〵山岳人を稗益することは頗る大なるものあるは疑ふべくもない。殊にかゝる試みが著者の如き眞摯なる學究に依てなされた場合に、その價値の益々高きことを信ずるからである。

（伊藤秀五郎）

アルプス傳說集

山上雷鳥氏譯著
昭和七年六月・大阪・黑百合社發行
四六判一四七頁・一圓廿錢

多才な藤木九三氏が山上雷鳥なる筆名を以て公けにされた

譯著である。

北方の龍。ヴェニスの奇術師。蟇の怪異。梟の魔法。

ワッツ山上の鬼。ツルシュタインの妖魔。

右の六篇中卷頭の一篇の外は全部チロール山地の傳說である。どれを讀んでもとりどりに面白い。そして洋の東西を問はず傳說口碑といふものには相似な點が見出されるといふことを感ずる。山上だの山中に住む巨人、大蛇、怪物、怪獸などを題材とした傳說は日本にも少くない。たゞこの本を讀んで、日本のやうに山そのものを人格視した傳說のないのはどういふ譯かと不思議に思つた。

逐字譯でないと言ふものの譯文頗る流麗、嘗てフランス語で書かれたアルプス傳說集の一二を手にしてその難解なのに——これは語學力の不足が最大の原因であらうが、彼我の人情風俗の著しく異ることもこの種の書を讀むに當つて、當惑するひとつの原因である——弱つた經驗をもつだけに、譯者の勞を察する。

讀過に際し氣付いたことは、傳說そのものが古めかしい風味をもつてゐるのだから、之を譯出する用語も余り近代的な言葉の交らない方がいゝやうに思ふ。或は言葉そのものはふるくからあるにしても、その語から受ける感じがごく近代的なものである場合には、之を避けた方がよいのではあるまいか。例へば本書九二頁「お前はスポーツが上手だ……」は「勝負事」とか「賭事」と譯した方がいゝやうだし、又一三五頁「砥石を敷き詰めたやうなドライヴ・ウェイは」「坦々たる大道」とでも言つた方がいいやうに思はれる。こんな細かい用語の問題は暫く惜いて、本書によつて「人々山を恐れ崇めた」時代の傳說のいくつかを面白く讀み得たことを附記して妄評の筆を擱く。

（藤島）

會報

會務報告

七月七日定例理事會

出席　小島、高野、高頭、冠、鳥山、伊藤、角田、茨木、藤島神谷、田中、松方、（委任）槇。

一、本年度山日記賣行頗る良好、初刊以來三ケ年にして先づ讀者層の確立を見たるものゝ如しとの報告あり。

一、山小屋借地願に對する營林署の回答未だ來らず、角田理事を煩はして東京營林局、松本營林署の意嚮を確かむる事に決せり。

一、本年八月、所藏圖書の整理を圖書係に於て斷行する旨報告あり。

一、八月中圖書室開室を毎週月水金の夜間（午後五時より）のみとするに決せり。八月中理事當番廢止。

一、寫眞集「高山深谷」編輯方針につき報告あり。

一、山岳第廿七年第二號は目下初校出でつゝあり、八月中旬には刊行の筈。

一、財團法人申請は六月末現在の財産目錄により手續を執る筈。

一、會員名簿は今後毎年「山岳」第一號に添付することゝす尙末尾に會則を附す。

一、本會創立より明治卅九年末迄に入會したる會員を「創期會員」として退會後も名簿上別に錄する事に決定せり。

一、理事改選に付、議する所ありたり。

一、八月定例理事會は休會。　以上

臨時理事會（山小屋の件）

昭和七年八月廿二日午後七時　於集會室

出席、小島、冠、槇、茨木、松方、浦松、角田、伊藤、田中

一、角田理事八月十日松本に赴き營林署當局と談合の上、十一日同署庶務課長同行實地調査を了す。許可は確定的のものと見るを得。

一、小屋の設計に就ては松方理事の知人瓜生氏を煩はす事となり、大體の設計圖を作成せり。尙詳細なる設計圖並に仕樣書は瓜生氏現地調査後作成の筈。

一、設計を瓜生氏に依頼するに就ては同氏を理事諸氏に紹介し、併せて種々の意見の交換をなす爲近く理事一同同氏と會見する事。

一、瓜生氏との會談後詳細なる打合會は九月理事會に於て協議す。

山小屋協議會

昭和七年八月廿四日午後六時　於三信ビル

出席　瓜生氏、小島、高頭、槇、冠、茨木、松方、神谷、伊藤、角田、浦松、田中。

一、冬期に於ける入口の件。

一、積雪量、雪崩等の調査を今年中になす事。

一、雪崩の危險を免る爲小屋の上方にカール狀のない場所を選定する事。

一、小屋に至る途中の雪崩危險地も調査する事。

一、便所の位置に特に注意する事、出來れば夏用冬用と分ける事。

一、現地調査には角田浦松兩理事瓜生氏同行九月中旬出發の筈。

九月八日定例理事會

出席　小島、高野、高頭、武田、冠、茨木、松方、松本、角田、神谷、伊藤、田中。

一、山小屋の件　松本營林署より未だ許可來らず、東京營林局に對し促進方を計る事。小屋建設に際しては將來增築の場合を考慮する事。雪崩、雪量、風力等の調査にはなるべく多くの人の意見を徵する事。

一、山岳第廿七年第二號は原稿の關係上遲れしも、中旬には發行の筈。

一、圖書整理の件　八月に單行本の整理を終る。和洋書合せて五〇四册。貸出制度については目下研究中。

一、新任理事候補者に付て議する處あり。

一、幻燈板の整理　角田理事主となり目下整理中。

一、財團法人の件　願書東京府を通じて文部省に廻付せらる。

役員總會

昭和七年十月六日午後六時　於赤坂三會堂

出席　小島、高野、武田、三枝、木暮、冠、槇、鳥山、高頭、松本、神谷、伊藤、角田、茨木、松方、田中。

委任　中村、田部、藤島、中原、加納、渡邊。

一、理事改選の件　理事改選に際し役員總會は左の五氏を理事候補者に推薦する事に決定す。

黑田孝雄氏、松井幹雄氏、額田敏氏、福島昌夫氏、高橋健治氏、尙退任者は藤島敘男、松方三郎、鳥山悌成、渡邊漸、加納一郎の五氏、

一、財團法人の件　曩に願出せる財團法人組織につき、鳥山

理事種々文部當局と折衝せる結果願書を取下ぐる事とす。

評議員會

昭和七年十月六日　於三會堂

出席　小島、高野、高頭、武田、三枝、木暮、冠。

一、評議員推薦の件　滿場一致を以て今年度限り理事を退任せらるべき鳥山悌成氏を評議員に推薦す。

十月六日定例理事會

出席　小島、高野、武田、高頭、三枝、冠、木暮、槇、鳥山、松本、神谷、伊藤、茨木、角田、松方、田中。

一、伊藤理事關西出張報告　關西理事改選並に山小屋の件に就き西下せる伊藤理事より詳細なる報告あり。

一、「山岳」第廿七年第三號報告、大體十一月下旬發行し得る見込。

一、有志晩餐會の件　十月下旬開催、冠氏より世話人へ交渉の事とす。

一、小集會開催通知の件　小集會通知は端書を廢し、會報に發表の旨を會報及「山岳」に載せる事。

一、山小屋の件　營林署よりの請求に基き小屋建設出願書に評議員の委任書を附す。尙本月中旬角田理事　瓜生氏同行現地調査に赴く。

一、新入會員詮衡　申込者五名全部承認。

一、明年後より會費徵集に集金郵便制をとる事。

十一月十日定例理事會

出席　小島、高野、槇、高頭、武田、木暮、冠、鳥山、松本、渡邊、松方、角田、神谷、伊藤、田中。

一、十月下旬上京せる加納理事を中心に主として山小屋並に會報につき協議せる結果の報告あり。

一、山小屋の報告　十月七日營林署より許可來り、中旬角田理事瓜生氏と現地調査をなす。尙設計は松方瓜生兩氏に委囑。詳細は山小屋委員會に附議。

一、年次大會は十二月十日開催と決定。

一、登山經歷表　田中理事之が形式を考案する事。

一、豫算の件　鳥山田中兩理事各係と折衝し、本月中に草案作成の事。

一、事務所移轉の件　明年度より事務所を虎ノ門圖書室に移す事に決定。

一、會員名簿の件　十二月中に發行の筈。

理事改選

本會々則第十二條に基く理事改選に關し昭和七年十

月六日赤坂三會堂に於て役員總會を開催し（出席者氏名本誌會務報告參照）五名の理事候補者を推薦、十月下旬全會員に通知し會員よりの推薦を待ちたるも締切日たる十一月十二日に至るも推薦なく、役員總會推薦の左記五氏は會則第十二條及細則二の（ト）に據り投票を行はずして理事と決定、明年一月より就任せらるる事となれり。

黒田孝雄氏（大正七年十一月入會）
松井幹雄氏（大正八年十一月入會）
額田敏氏（大正十五年六月入會）
福島昌夫氏（昭和三年六月入會）
高橋健治氏（昭和四年九月入會）（關西）

尙鳥山悌成、藤島敏男、松方三郎、渡邊漸、加納一郎の五理事は本年限り退任せらるゝ事となれり。

第五十六回小集會記事

九月二十八日午後六時半より赤坂三會堂階上にて茨木司會の許に開催す。

「山と星の話」　野尻抱影氏

高山で見る星が平地のものに比べて著しく美しく鮮かで、又その數も遙かに多いことは言ふ迄もない。隨つて辻村、槇、冠、藤木其他の諸氏の紀行中屢〻、星の描寫を見るのも當然のことだが、アルピニストがより意識的に山上の星に注意を向けるなら登山の樂しみと意義とは一段と加はりはしまいかと思ふ。それには何も專門的知識を必要としない。一般人が高山植物の名を知る程度で代表的な星座や、星の名を覺えれば用は足りる。山で見る星も、大きなものは同時刻に平地で見るものと同じだが、そこに異境で親友に逢つたやうな微妙な愉快さがある。又夜明け前に起きる機會が多い爲、殆ど一年中の星座を見得る清新な喜びもある。及び大氣の清澄と、展望の廣濶との爲に、各星座の地平擴大現象を十分に樂しみ得る。特にオリオン初め雄麗な星座の多い冬の登山に於て然りである。其他星座に多い幾何學的の直線美が出沒の際に、孤立した峯やなだらかな尾根などに交錯する印象なども山上の星の一景觀だらう。大體かういふ意味で演者自身の南北ア

ルプスで見た星の思ひ出、諸家の山岳紀行等をいろいろ引用して、卅分で終つた。

「山の畫を描くに就いて」　　茨木猪之吉

二十數年來の貧弱な經驗なれど初期の頃は主として高原、裾野、山麓、古驛等をモチブとして表現し二期頃に至り登山を中心として山小屋或はキャンプの生活多く種々な點で弊害を生じ、充分な製作も不可能に終る事多かつた。三期現在では繪を主とし單獨登山に限り豫定を計り途中の風物を描寫して行く、かなり好成績を得られる。現畫壇は餘りに佛蘭西系の繪畫多く、もつと惠まれた日本山水美を表現し新しい思想と技術を持つた、山岳畫家のどん〳〵進出する事を希望します。

當夜は雨天なれど、左の來會者を迎へ喜ばしき次第だつた。

（司會者茨木記）

飯田末喜、安田登茂次、神谷恭、鳥山悌成、武田久吉、田中菅雄、星野光之助、槇有恒、木村鑛吉、鹿野忠雄、交野武一、茨木猪之吉、島田巽、角田吉夫、吉田永二、黑田孝雄、磯貝藤太郎、山根雅男、高野鷹藏、飛川維之、中村貞治、木村久太郎、井上良則、大熊保夫、戸塚武彦、松方三郎、高頭仁兵衛、吉田竹志、黑田鎭夫、冠松次郎、木暮理太郎、野口未延、外に會員外十三名。

圖書基金報告

前號所報八月以後に於ける昭和七年度圖書基金申込會員氏名は左の如く、累計三十九名、四十九口となれり。

東京　澤　智　子（一口）　秋田　藤島　敏男（追加一口）

某　氏（一口）　臺灣　伊藤　彦一（一口）

日本山岳會々則

第一條　本會ヲ日本山岳會(Japanese Alpine Club)ト名ツク

第二條　本會ハ山岳ニ關スル科學、文學、藝術其他一切ヲ研究シ以テ健全ナル登山氣風ノ振興ヲ期シ且ツ會員相互ノ連絡親睦ヲ圖ルヲ目的トス

第三條　本會ハ前條ニ掲ケタル目的ヲ達スルタメ左ノ事業ヲ爲ス

(1)　機關雜誌「山岳」ノ發行、又時宜ニ依リ臨時又ハ定時ノ出版物刊行

(2)　其他登山者ノ爲メ適宜ノ事業

第四條　本會ハ毎年大會及小集會ヲ開ク

第五條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長一名、副會長若干名、評議員十五名以内、理事十五名、監事二名以内

第六條　會長ハ本會ヲ代表ス　但シ會長ニ事故アル場合ハ副會長之ニ代ル

第七條　會長及副會長ハ役員總會ニ於テ役員ノ内ヨリ之ヲ推薦ス、會長及副會長ノ任期ハ三ケ年トス　但シ役員トシテ任期滿了シタル場合ハ會長副會長トシテノ任期滿了前ト雖モ交替スルコトアルヘシ

第八條　評議員ハ本會ノ重要會務ヲ審議ス

第九條　評議員ハ本會發起人ノ總テト元役員タリシ會員中ヨリ評議員會ノ推薦セル者ヲ以テ之ニ任ス　發起人以外ノ評議員ノ任期ハ三年トス　但シ重任ヲ妨ケス

第十條　評議員ハ互選ヲ以テ常任評議員若干名ヲ選任ス

第十一條　常任評議員ハ評議員會ヲ代表シテ會務ニ參與ス其任期ハ三年トス

第十二條　理事ハ別ニ定ムル細則ニ依リ候補者中ヨリ會員ノ投票ヲ以テ之ヲ選任ス其任期ハ三年トシ、理事定員數ノ三分ノ一ヲ毎年改選スルモノトス

但シ引續キ重任スルコトヲ得ス

第十三條　監事ハ評議員會ニ於テ會員中ヨリ之ヲ推薦ス其任期ハ三年トス　但シ重任ヲ妨ケス

第十四條　役員總會ハ評議員、理事ヲ以テ組織ス

第十五條　役員總會、評議員會及理事會ノ議長ハ會長之ニ當ル　但會長ニ差支アルトキハ副會長之ニ代ル

第十六條　役員ハ任期滿了後ト雖モ後任者ノ就任スル迄ハ其

任務ヲ行フモノトス

役員ニ缺員ヲ生シタルトキハ前各條ニ依リ夫々之ヲ補充ス補缺役員ノ任期ハ前任者ノ殘任期トス

前項ノ場合ニ於テ特ニ補缺ヲ必要トセサルトキハ次ノ改選期迄之ヲ行ハサルコトヲ得

第十七條　役員總會、評議員會及理事會ハ會長之ヲ招集ス

第十八條　役員總會ハ役員二分ノ一以上評議員會ハ評議員二分ノ一以上理事會ハ理事二分ノ一以上出席スルニ非レハ議決ヲナスコトヲ得ス

第十九條　役員總會、評議員會及理事會ノ議決ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第二十條　役員ハ總テ無報酬トス　但シ其職務ノタメ必要ナル實費及旅費ヲ給與スルコトアル可シ

第二十一條　本會ハ會員ヲ分チ左ノ三種トス

一、通常會員　會費年額六圓ヲ納ムル者

二、終身會員　一時金百圓以上ヲ納メタル者

三、名譽會員　役員會ニ於テ推薦シタル者

右ノ二、三ニ該當スル會員ハ爾後會員籍ヲ有スル間ハ會費納付ノ義務ナキモノトス

第二十二條　本會々員タラントスル者ハ會員二名ノ紹介ヲ以テ申込ムモノトス、入會許可ノ通知アリタルトキハ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込ムモノトス　入會許可ノ通知アリタル後一ケ月以内ニ右ノ手續ヲナササル者ハ入會ノ許可ヲ取消サル可シ

第二十三條　入會ノ許否ハ理事會ノ決議ニ依ルモノトス

第二十四條　本會會則ノ變更ハ役員總會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

第二十五條　前條ノ決議ハ役員三分ノ二以上出席シ其出席者三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

第二十六條　本會ハ適當ト認ムル地方ニ支部ヲ設クルコトヲ得支部規則ハ役員總會ニ於テ之ヲ定ム

細則

一、會費其他ニ關スルモノ

（イ）會費ハ毎年二月末日迄ニ納付スヘキモノトス

（ロ）毎年一月一日ヨリ八月三十一日迄ノ入會者ニ限リ其年度ノ會費ヲ二ケ月間延納スルコトヲ得　但シ此適用ヲ受ケントスル者ハ其旨入會申込ト同時ニ申出ス可シ

（ハ）毎年九月一日以後ノ入會者ニ對シテハ其年度ノ會費ヲ免除ス

（ニ）本會ハ會員ニ會員章ヲ交付ス會員章ヲ紛失シタルモノ

ハ實費ヲ以テ再交付ヲ受クルコトヲ得

（ホ）本會ハ機關雜誌「山岳」ヲ毎年發行シ毎號一部ヲ本會會員ニ頒布ス　但シ毎年九月一日以後ノ入會者ニハ頒布セス

（ヘ）毎年九月一日以後ノ入會者カ其年度ノ雜誌「山岳」ノ頒布ヲ希望スルトキハ更ニ一ケ年分ノ雜誌代ヲ納ムルコトヲ要ス

（ト）本會會員ハ別ニ定ムル所ニ依リ本會所藏ノ圖書ヲ閲覽スルコトヲ得

（チ）會員ニシテ退會ヲ欲スルトキハ其旨事務所ニ必ス書面ヲ以テ申出ツヘシ

（リ）會員ニシテ本會ノ體面ヲ毀損シ又ハ會費納付ノ義務ヲ怠リタル者ハ理事會ノ決議ニ依リ除名ス

（ヌ）本會ハ既納ノ金品ヲ一切返付セス

（ル）團體加入者ノ代表者交付シタル場合ニハ新舊兩代表者ノ連署ヲ以テ代表者變更届ヲ提出スヘシ

（ヲ）本會集會室及圖書室ヲ東京市芝區琴平町一番地不二屋ビル三階三〇七號室ニ置ク

（ワ）海外旅行其他ノ理由ニヨリ十二ケ月以上、三十六ケ月以下ノ間不在トナル場合ハ、會員ハ其ノ理由、不在期間等ヲ詳記シ、取扱手數料金貳圓ヲ添ヘ事務所ニ届出ツル事ニヨリテ、不在會員ノ取扱ヲ受クル事ヲ得、此場合ニハ不在期間ハ會員章ヲ返納スルニ及ハス、會費納付ノ義務ナキモ本會ノ出版物ノ頒布ヲ受クル事ヲ得ス

二、理事選擧ニ關スルモノ

（イ）理事定員十五名ノ内三名ハ之ヲ關西在住ノ會員中ヨリ選任ス

（ロ）役員總會ハ理事改選又ハ缺員補充ノ際ニ會員中ヨリ候補者ヲ推薦スヘキモノトス

（ハ）會員中十名以上ノ推薦ニヨリ會員中ヨリ一名ノ候補者ヲ擧クルコトヲ得　但シ一候補者ヲ推薦シタルモノハ他ノ候補者ヲ推薦スルコトヲ得ス

（ニ）理事候補者タルヘキモノハ入會後滿三ケ年ヲ經タルコトヲ要ス

（ホ）團體ノ代表者タル資格ニ於テ會員タルモノハ候補者タルコトヲ得ス

（ヘ）候補者ノ氏名ハ豫メ本會ヨリ全會員ニ通知シ投票ヲ求ムルモノトス

（ト）候補者ノ數カ改選又ハ補充セラルヘキ定員ノ數ヲ超過セサルトキハ投票ヲ要セサルモノトス

（チ）改選ノ際五名ノ内一名ハ關西在住ノ理事トス

（リ）投票ハ記名連記投票トス

第二十七年　第二號　正誤表

頁	行	誤	正
目次 3	2	日本地理、	日本地圖、
3	附圖	2000米以下	1000米以下
5	18	橋の、	橋が、
6	13	1302	1902
12	14	西方に、	西方の、
13	5	コトソルメギ	コットウルメギ
14	8	北へ二つの	北の二つ目の
16	4	行程約三五粁	行程約十七粁
16	5	二二粁	一〇粁
16	9	五七粁	二七粁
18	17	置けば	置けば
23	2	南西より	北西より
24	2	(一)後漢三國史	(一)後漢書
24	2	(二)契丹國志	(二)三國志
24	2	(五)大韓彊域考	(五)大韓疆域考
24	2	(六)盛京誌、	(六)盛京通志、
24	2	(七)清統一志	(七)大清統一志
24	2	(八)全史世紀	(八)契丹國志
24	3	大明一統史、	大明一統志
24	3	金誌世紀	金史世紀
24	4	宣祖實錄、	宣祖實錄、
30	7	河床熔岩を、	河床は熔岩が、
31	7	臺地の上へ	臺地の上を、
31	12	建立して、	建立した、
36	17	此壁は	火口壁は
37	7	あらが	あらうが
42		岳林、	密林
45	12	ブヌン	ブヌン
46	4	陽氣に	湯氣に
46	15	長い、	甚い、
47	1	岳林	密林
47	12	戰ひ乍ら	戰き乍ら
48	10	尖山の誘惑、	尖山の誘惑、
49	6	重ぬれば	重れれば
49	7	屋根	尾根
49	10	何かと	何かに、
50	17	容易な	安易な
51	12	鼻尖、	鼻先、
52	8	此等の新稱	氏等の新稱
53	15	巡査の手	踏査の手
54	1	其の燭光	其の陽光
54	1	紅土の樣な山脈、	紅土の樣な山肌、
54	2	放散して	放散させて

第二十七年第二號正誤表

55	8	暴れるのか	荒れるのか	
106	11	小意氣	小氣味	
146	6	南天	南方	
147	10	宇置	安置	
147	15	御所浦岳	御所浦島	
150	6	中部に南	中部以南	
189	15	大鳥、末大から	大鳥、末丈から	
200	4	……ゐたことを	……ゐたことも	
200	13	閉氷期	間氷期	
202	15	車山談山	車上談山	
205	13	散失しやすい	散佚しやすい	
207	10	增すかもしれない	增すかしれない	
214	5	出來たのでしだ	出來たのでした	
214	14	光背とても	光背とでも	
217	3	託してゐた	托してゐた	
231	15	或々の深く	吾々の深く	
240	6	菊刊縱書	菊判縱書	
243	11	金字文入	金文字入	
245	14	Himaraya	Himalaya	
271	末行	御紹介ありたし	御照會ありたし	

本會役員（和昭七年度）

會長　小島久太
副會長　高野鷹藏
評議員　小島久太　冠松次郎　田部重治　武田久吉　茨木猪之吉　神谷恭　松方三郎　田中菅雄　角田吉夫　槇有恒　近藤茂吉　中村清太郎　高野鷹藏　山川默　伊藤秀五郎　加納一郎　松本善二　鳥山悌成　浦松佐美太郎　木暮理太郎　三枝守博　高頭仁兵衞　藤島敏男　槇有恒　中原繁之助　津田周二　渡邊漸

本會役員（昭和八年度）

會長　小島久太
副會長　高野鷹藏
評議員　小島久太　冠松次郎　田部重治　武田久吉　福島昌夫　神谷恭　松井幹雄　槇有恒　近藤茂吉　中村清太郎　高野鷹藏　鳥山悌成　茨木猪之吉　黑田孝雄　松本善二　木暮理太郎　三枝守博　高頭仁兵衞　山川默　伊藤秀五郎　槇有恒　中原繁之助

理事

額田　敏　高橋　健治、　田中　菅雄
津田　周二　角田　吉夫　浦松佐美太郎

日本山岳會事務所
東京市芝區高輪南町參拾番地
振替貯金口座東京四八二九番
電話　高輪　二四五番

日本山岳會圖書室及『山岳』編輯所
東京市芝區琴平町一番地
不二屋ビル三〇七號室

日本山岳會事務所移轉

東京市芝區琴平町一番地不二屋ビル三〇七號室（振替　東京　四八二九番）

昭和八年一月一日より移轉致しますから會宛一切の通信は右に御願ひします

會宛の送金は間違ひを防ぐ爲是非振替を御利用下さい

「山岳」投稿規定

一、投稿は何人も自由とす。日本山岳會員たると然らざるとを問はず。
一、原稿の採否は理事會に於て決定す。
一、原稿は返却せざるものとす。
一、別刷所要の向はその旨原稿に朱記せられたし、その費用は筆者の負擔とす。
一、原稿にはその梗概を付せられたし。
一、紀行には概念圖を添付せられたし。
一、寫眞は光澤印畫紙に熱付けられ度、裏面或ひは別紙に說明記入を乞ふ。
一、校正は編輯者に一任せられたし。
一、地名及び外國語は特に明確に書かれ度、地名には振假名を附せられ度し。

原稿蒐集所
東京市芝區琴平町一、不二屋ビル、三〇七號室
日本山岳會編輯所

原稿用紙所要の向は前記編輯所宛て申込みあり度し。

昭和七年十二月廿五日印刷
昭和七年十二月三十日發行

【定價金貳圓】

編輯兼發行者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

發行所　東京市芝區高輪南町三十番地　日本山岳會
振替口座東京四八二九番

印刷者　東京市神田區表猿樂町二番地　中村修二

印刷所　東京市神田區表猿樂町二番地　株式會社　開明堂東京支店
扉及寫眞製版　高見澤木版製作所
繪及印刷製版　東京プロセス社

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

著作權所有

山岳

第二十七年

山岳第二十七年總目次（昭和七年）

本欄

		號	頁	通頁
清水峠及び三國峠に關する歴史的考察	小島一祐	一	一	1
朝日岳と北又谷	塚本繁松	一	三〇	30
新高東山の登攀	鹿野忠雄	一	五九	59
小槍の登路に就て	高橋榮一郎	一	七四	74
朝鮮咸北の山々	渡邊武男	二	一	170
尖山單獨行	長澤佳熊	二	四二	211
北千島紀行、特に山岳に就て	鹿野忠雄	二	四二	211
秩父の山村と山路と山小屋と	岡田喜一	二	五六	225
秀姑巒山脈	大島亮吉	三	一	441
八雲ヶ原水蘚濕原に就て	鹿野忠雄	三	四五	485
北海道の山の動物	山崎次男	三	一三六	566
	犬飼哲夫	三	一三九	579

雜錄

ダーヂリン小景	三田幸夫	一	八三	83
バルートへの旅	田口一郎	一	八九	89
九重山彙雜記	竹内亮	一	九八	98
九州山地の地形を現はす言葉二三	竹内亮	一	一一〇	110
岩宮山と苗場山	細野重雄	一	一一五	115
木曾駒岳の二つの澤	黒田正夫	一	一二五	125
高山の登攀と酸素吸入	八代準	一	一三四	134
ノールウェーの秋の山水	田中薫	二	二九六	295
天草の山々	竹内亮	二	三一四	314
北海道の夏の川	伊藤秀五郎	二	三二一	321
富士大澤口冬季登山	遠山富太郎	二	三二七	327
冬の白山	國原正夫	二	三三八	338
春の白山	中山豪一	二	三四六	346
春の大笠山と笈岳	中山豪一	二	三五一	351
荒澤岳より魚沼駒ヶ岳	中島治一郎	二	三五五	355
白馬岳正面の尾根登攀	冠松次郎	二	三六一	361
『氷河と萬年雪の山』	辻村太郎	二	三六七	367
机上談山	不盡生	二	三七一	371
シュクサン峰に登る	東良三	二	三九〇	590
冬の笠ヶ岳	島田武時	三	五九九	599
北海道の熊の話	伊藤秀五郎	三	六〇四	604
谷川岳東南山腹に於ける岩面削痕に就て	額田敏	三	七二一	612
北米大陸の高峰	東良三	三	七三五	615
一九三二年「山日記」編輯報告	角田吉夫	三	七四七	617

追憶

白井光太郎博士を憶ふ	小島烏水	二	三一〇	379
後醍院さん・追憶	藤木九三	二	三二三	382

遭難顚末概報

木曾駒ヶ岳の遭難……385
會員石戸宏氏穗高遭難詳報……387
秩父兩神社の遭難……392
常念一の澤遭難に就て……396
常念岳遭難報告……621
會津朝日岳遭難報告……623

山岳圖書紹介

北海道の山岳（井田、坂本、澤本、須藤、飯脇、田中、山縣共著）……加納　一郎　150
慶應山岳部々報　登高行　第八年……伊藤秀五郎　151
北大山岳部々報　第三號……伊藤秀五郎　153
關西學生登山聯盟報告　第二號……森田　勝彦　154
關西學生登山聯盟報告　第三號……森田　勝彦　154
五高山岳部報告　第一輯……田中　菅雄　155
明治大學山岳部々報　爐邊……田中　菅雄　156
Himalaya, Unsere Expedition (O. Dyhrenfurth)……伊藤　愿　402
日本地圖測量小史（高木菊三郎）……渡邊　漸　404
地形圖の讀方と共利用（鈴木猶吉）……佐々　保雄　406
吾妻・磐梯ー五色・沼尻（福島山岳スキー倶樂部）……佐々　保雄　409
Himalaya, Karakoram and Eastern Turkestan (Filippo de Filippi)……神谷　恭　412
關西學生山岳聯盟報告　第三號……渡邊　漸　413
Himalaya, Karakoram and Eastern Turkestan (Filippo de Filippi)……藤島　敏男　414
登山者の天文學（山本一清）……松方　三郎　416
The Record of the Royal Geographical Society (H. R. Mill)……松方　三郎　418
The Art of Mountain Tramping (R. W. Hall)……松方　三郎　419
The Alpine Journal, Vol XLIV, No. 244……松方　三郎　419
The Himalayan Journal Vol. IV.……松方　三郎　420
山岳形に關する二三の問題（岡山俊雄）……伊藤秀五郎　635
アルプス傳說集（山上雷鳥譯）……藤島　敏男　636

新設山小屋紹介

神の田圃小舍（422）　クロフ小舍（424）　毛度澤小舍（425）　苗場ヒュッテ（426）　諏訪峠ヒュッテ（427）

集會の記事

會員大會……159
第五十二回小集會記事……160
第五十三回小集會記事……162
第五十四回小集會記事……431
第五十五回小集會記事……431
第三回關西小集會記事……432
第四回關西小集會記事……433

第五十六回小集會記事……641

會　報

會務報告……158, 430, 638
理事改選……159, 640
新入會員紹介……163, 434, 642
會員訃報……165, 466, 642
退會者……165, 466, 643
圖書基金報告……435, 643
日本山岳會々則……166, 437, 644
『山岳』投稿規定……169, 440, 648
前號正誤……169, 440, 647

圖　版

對頁
北又谷表定倉谷落口……44
大池より見たる朝日岳と八兵衞平……54
新高東山……62
小槍西面……78
小槍東面及北面・同南面……79
九重山彙の坊がつるのムタ……106
苗場山頂の南望……120
冠帽峰……185
白頭山天池……205
松花江の源達門と白頭山宗德寺……207
松花江の源……208
パラムシロ島北方の山々……225
後鍬嶽頂上より東にアライト島とパラムシロ島南方の諸峯の遠望……225
占守島の全容とパラムシロ島の一部……225
日本最北の山アライト（東南面）二三三九米……241
アライト山頂上附近（約一八〇〇米）……242
千倉嶽（東北面）……265
千倉嶽の西北面……266
後鍬嶽の東北面……271
後鍬嶽頂上（噴火口と火口壁との一部）……272
北千島の夕暮……275
幌筵荒川よりの後鍬嶽（右）と千倉嶽（左）の連峰……276
フィエランド……299
ルンダスカール南方ヨステダールスブレ中の巨人の池……307
魚沼駒ヶ岳（中岳より）……357
故白井光太郎博士……381
故後醍院正六氏……382
大水窟より見たる新高山彙……524
マボラスと秀姑巒山……544
秀姑巒山脈東郡大山塊憶測圖……564
八雲ヶ原北部濕原中の池の景……568
濕原中を流れる小溪流とスギ……568
池のジュンサイ……569

池のチヒルムシロ……569
スゝキの根元を埋沒せるミヅゴケ……572
アカマツの根元を埋沒せるミヅゴケ……572
濕原の緣に近く生へた大きなスギ……573
濕原の邊緣に於てミヅゴケによつて
　埋沒せられたるスギの伏條枝……573
濕原に生育するスギ……576
スギの根元に堆く盛り上つたミヅゴケ……576
濕原に生へたイヌツゲ……577
同……577
捕獲された羆（春）……582
同　（夏）……583
シュクサン峰遠景……590
レーキ・アンに於ける吾等のキャンプ……594
ヘーザー・メドウより眺めたるシュクサン峰……593
谷川岳耳二ツへの西黑澤よりの登路に於ける
　岩面削痕……614

插圖

頁
上越國境略圖……4
黑雁川北又谷概略圖……32
新高東山附近概念圖……61
ダーヂリンより見たるカンチェンヂャンガ……83
滑川略圖……127
越百川略圖……130
冠帽峰・机山峯・兜峯概念圖……172
白頭山東南部概念圖……198
定界碑南方草地よりの南望……203
白頭山頂上附近概念圖……204
白頭山宗德寺略圖……206
尖山附近概念圖……212
北千島概念圖……228
アライト島概念圖……239
アライト山中腹より山頂を望む……244
アライト山頂附近雪溪……245
村上灣漁場裏からの一文字嶽硫黃嶽等の山々……254
千倉嶽及後鍬嶽概念圖……259
占守島中央部草原地の一例……282
東　崎……283
占守島沼尻漁場……285
パラムシロ島東海岸の一例……286
フィエランド附近概念圖……300
アーモット・ブリクスダール見取圖……307
次郎岳・鋸嶽・白嶽・念珠岳及龍ヶ岳スケッチ……314
矢筈山・柱嶽・天竺・角山スケッチ……317
大笠山・笈岳概念圖……352
一ノ澤遺雛現場見取圖……398
神ノ田圃小舍……422

神ノ田圃小舍附近概念圖……422
クロフ小舍……424
クロフ小舍附近概念圖……424
毛度澤小舍……425
毛度澤小舍附近概念圖……426
苗場ヒュッテ……426
苗場ヒュッテ附近概念圖……427
諏訪峠ヒュッテ……428
諏訪峠ヒュッテ概念圖……428
秀姑巒山脈に於ける四社氏族狩獵區域分布圖……563
花崗岩地に自生せるスギと崩壞せる山腹の一部……567
八雲ヶ原水蘚濕原の位置……568
クッドラート調査一……572
同　二……575
雪の上に印された熊の足跡……581
熊に掘り起された草原……582
ナナカマドの實を食つた熊の糞……583
ナキウサギ……586
ナキウサギの糞……587
岩の間のナキウサギの食物貯藏所……588
町田氏並捜索隊通過路略圖……624
町田君遭難地附近略圖……632

附錄

『山岳』第二十六年總目次……第一號卷尾
『山岳』總索引……同
東北地方の山岳に關する文獻索引……第二號卷尾
『山岳』第二十七年總目次……第三號卷尾
千島列島關係文獻表……同

扉　石崎光瑤

キヌガササウ……第一號卷頭
チシマギキョウ……第二號卷頭
クロユリ……第三號卷頭

カット　坂本直行

	拾遺日本北地全圖	(文化年間)
藤田　良	蝦夷國境輿地全圖	(壽永 6, 1853)
小野寺謙	蝦夷海陸路程全圖	(安政 2, 1855)
	蝦夷全圖	(安政—萬延?1855－1860?)
松浦武四郎	東西蝦夷山川地理取調圖	(萬延 1, 1860)
吉田　普	北海道沿海圖	(明 16, 1883)
田中古吉	北海道分國圖	(明 25, 1892)
栗田之次	日本古帖地同集成	(昭 6, 1932)
小川琢治	日本地圖帖	(昭 2, 1927)
三藤東平	大日本沿海要濫全圖	

又外國のものでは有名な航海探檢記, 例へば de Vries, Krusenstern, Pallas, Cook, King, La Pérouse 等に付いて居る Atlas が重要である。又 A. Arrowwich の Map of Island of Japan, Kurile etc. 1811, Bronghton の A charts of the NE Coast of Asia and Japanese Isles や Sarytscheff の海圖も見逃せない。外に露國及び英國の海軍による古い海圖もある筈である。

知床岬號　（昭　4）
標津號　（同　上）

百萬分之一東亞輿地圖

占守島　（明　42）
溫禰古丹島　（同　上）
新知島　（同　上）
擇捉島　（同　上）
根室　（同　上）

海軍水路部 番號	海圖名
3	北州
4	北州及千島列島
1019	擇捉海峽至占守海峽
7	占守島
1012	幌筵島及近海
1011	幌筵島諸港泊地
35	幌筵島附近諸島分圖第一
1018	捨子古丹島至磨勘留島
1016	松輪島及羅處和島近海
1015	新知島近海
1013	新知灣
1017	得撫島近海
45	擇捉島
42	國後島及近海
38	色丹島附近
15	國後島及色丹島諸港泊地
12	擇捉島諸分目第一
13	同　第二
20	同　第三
1014	千島列島諸碇泊地

2）歷史的な地圖，殊に千島地理の次第に明かになつた經路や，地名の變遷を見るためには本表（A）歷史に關するもの，並びにその資料の項に於ける諸文獻の附圖，挿入地圖が重要で，其の外地圖として發行された次の如きものがある。（年代順）

松前藩	蝦夷地圖	（元祿 13, 1700）
林子平	蝦夷圖全圖	（天明 5, 1785）
	三國通覽輿地路程全圖	（天明 6, 1786）
松前	蝦夷地之圖	（寬政 4, 1792）

白瀨疏	千島探檢錄	(明 30, 1897)
Snow, H, J.,	B——1, 2.	(1879)
水交社(譯)	ケヒテンクーク世界三周航實記	(明 26, 1893)
高野勝	北千島水產調查復命書(手記)	
高頭式	日本山岳志	(明 39, 1906)
同	千島群島の山岳研究に就いて	(山岳 **1**, 明 39, 1906)
多羅尾忠郎	千島探檢實記	(明 26, 1893)
館脇操	千島列島	(日地大 **14**, 昭 5, 1930)
德川義親	熊狩之旅	(大 10, 1924)
栃內曾次郎	A	(昭 4, 1929)
內田瀞	得撫島探見復命書	(明 24, 1891)
山崎	東蝦夷地紀行	(文化 3, 1807)
若宮史郎	北千島を訪れて	(海の旅 **2**, 昭 5, 1930)
橫山壯次郎	C——2.	
同	千島巡航記事	(蒐林 **10**, 明 27, 1894)
橫川	千島紀行	(明 27, 1894)

H. 地圖並びに海圖について

(Maps and Charts.)

1) 現在, 旅行, 航海に役に立つ樣な地形圖は陸軍陸地測量部發行の五萬分之一地形圖, 同二十萬分之一帝國圖等と海軍水路部の海圖あるのみである。その內前者は所謂北千島(占守島, 阿賴度島, 幌筵島及び志林規島)と南千島(擇提島, 國後島及び色丹列島)は發賣禁止區域になつて居て一寸入手し難いのは遺憾である。海圖は地形が充分に現されて居らぬが上述地域を知るには之に據る外ない樣である。

陸地測量部	二十萬分之一帝國圖	(五萬分之一地形圖)	
	溫禰古丹號	(右區分內 5 枚)	(大6−7)
	捨子古丹號	(同 6)	(同 上)
	知林古丹號	(同 2)	(大 7)
	松輪島號	(同 3)	(大7−9)
	羅處和島號	(同 3)	(大8−9)
	新知島東部	(同 3)	(大 8)
	新知島西部	(同 2)	(同 上)
	知理保以島	(同 9)	(大 6)
	得撫島號	(同 7)	(大6−7)
	安渡移矢岬號		(昭 5)
	色丹島號		(同 上)

Lowe, C. R.,	Maritime Discovery.	(1881)
松下兼清	千島國占守郡巡回復命書(手記)	(明 15, 1882)
松浦武四郎	A——2, 3.	
	C	
Miln, J.,	Notes on the Journey in northeast Yeso and across the Islands. (Geogr. Journ. **3**.)	(1893)
三浦愛吾	擇提島近況	(北林報 **18**−**19**, 大 9−10, 1920−21)
Muller, G. P.,	Voyages et d'ecouvertes faites par les Russes le long des côtes de la mer glaciale et sur l'océan oriental, tant vers le Japon que vers l'Amerique.	(1766)
西田	占守郡巡回復命書(手記)	(明 18, 1882)
岡本監輔	千島見聞錄	(明 25, 1889)
陸地測量部地形科班員	千島及北海道地形測量余談	(地球 **4**, 大 14, 1928)
折田平内	千島諸島巡回復命書(手記)	(明 12, 1879)
岡田喜一	チャチャヌプリの旅	(山岳 **26**, 昭 5, 1930)
Okada, K.,	Chachanupuri.	(同 上)
同	北千島紀行　特に山岳に就いて	(山岳 **27**, 昭 7, 1932)
永山盛四郎	千島巡航日誌	
Pallas, P. S.,	Neue nordische Beiträge zur physikalischen und geographischen Erdund Völkerbeschreibung, Naturgeschichte und Oekonomie.	(1783)
	Voyages du Professeur Pallas dan plusieurs provinces de l'Empire de Russie et dans l'Asie septentionale, traduit de l'allemand par le C. Gauthier de la Peyronie.	
	Pallas Reise	(1872)
Polonsky, A.,	B	
ポロンスキー	B	
Roberts, C. G. D.,	A	
笹森儀助	千島探檢	(明 26, 1893)
佐藤秀顯	千島紀行	(明 8, 1875)
Sauer, M.,	An Account of a Geographical and Astronomical Expedition to the Northern Part of Russia etc., under comm. J. Billings in 1785−94.	(1802)
關熊太郎	千島探檢誌	(明 26, 1883)
同	千島探檢錄	(同 上)
島村光太郎	國後島遊記	(北大山報 **2**, 昭 4. 1929)

北海道廳　B——2.

細井一六　世界地理發見史　(昭 4, 1930)

井田清, 外五名共著　北海道の山岳　(昭 6, 1931)

井深基　得撫外二郡巡視復命書　(明 11, 1878)

伊藤秀五郎　北千島の印象　(北大山報 1, 昭 2, 1979)

同　北海道, 千島列島, 樺太の山岳 (日地大, 山岳編)　(昭 5, 1930)

同　北千島の旅　(科學畫報 15. 昭 5, 1930)

石川貞治　C——1－4.

岩根保重　近代地理探檢　(岩波地理 昭 6, 1931)

岩佐定一　爺々岳及羅臼岳を見る　(山岳 5, 明 44, 1911)

勝田主計　千島視察紀要　(明 33, 1900)

川上瀧哉　千島紀行　(博物學雜誌 2, 明 33, 1900)

清野謙次　明治初年　北海紀聞　(昭 6, 1931)

木場一夫, 岡田喜一　呼び掛る我等が千島　(科學畫報 17, 昭 7, 1931)

河野巖男　樺太千島並露領亞細亞視察復命書(手記)　(明 43, 1910)

河野常吉　北千島調査報文　北千島探見　(北敎雜 91)

Krusenstern, A. J. v., Reise um die Welt 1803, 1804, 1805 und 1806 auf Befehl Seiner Keiserl. Majestät Alexander des Ersten auf der Schiffen Nadeshda und Newa unter dem Commendo des Capitäns der Keiserl. Marine A. J. von Krusenstern. (1810－12)

——— Voyages round the World, in the Years 1803, 1804, 1805 and 1806 on board the ships Nadeshda and Newa. (1813)

Langsdorff, G. H. O., Bemerkungen auf einer Reise um die Wolt in den Jahren 1803 bis 1807. (1812)

——— Voyages and Travels in Various Parts of the World, during the Year 1803, 1804, 1805, 1806 and 1807. (1813—14)

La Perouse. The Voyage of la Pelouse. (1798)

——— Entdeckungsreise in der Jahren 1785, 1786, 1787 und 1788. (1800)

Leupe. Reize van Maaten Gerritsz Vries in 1643 naar het Nooden en Oosten van Japan. (1858)

Lisiansky. A Voyagé round the World in the Years 1803, 4, 5, and 6, etc. (1814)

Lord Commissioners of the Admiralty. Japan Pilot, or Sailing Directions for Ogasawara (Bonin) and other Islands southward of Japan, the Japanese Island and the Kurile Islands. (1914)

坪井正五郎　石器時代人民論　(東洋學雜 261, 263, 265)

G. 航海，探檢，旅行，登山に關するもの

(Literatures on Explorations, Voyages, Travels and Mountaineerings of the Tisima.)

秋岡武次郎	1. クックの第三次探檢船の日本通過	(地評 5, 昭 4, 1929)
同	2. 外國人の命名せる日本の地名若干	(地評 6, 昭 6, 1931)
安藤恒左衞門	北千島出張復命書綴 (手記)	
青地盈,高橋景保(譯)	奉使日本紀行	(文政年間)
青木貞治	北千島視察復命書(手記)	(大 2, 1913)
Berg, L. S.,	A——1.	
Bergman, S.,	Tausen Oerna.	(1931)
Broughton, W. R.,	Voyage de découvertes dans la partié septentrionale de l'océan pacifique, pendant les années 1795, 1796, 1797 et 1798. (Traduit par l'ordre de S. E. le ministre de la maine et des colonies par J. B. B. E.)	(1807)
Burney.	1. Voyage to South Sea.	(1803—17)
————	2. Chro nologic history of Northeast Voyage.	(1819)
Cook & King.	Voyage to the Racific Ocean for making Discoveries in the Northern Hemisphere, in the Resolution and Discovery.	(1776—80)
Coxe.	Account of the Russian Discoveries between Asia and America.	(1780)
Cochrane.	Narrative of a Pedestrian Journey through Russia and Siberian Tartary from the Fronties of China to the Frozen Sea and Kamtchatka.	(1824)
英國政府	1822年及1893年英國白令海調査報告	
Golder, F. A.,	Russian Expansion on the Pacific 1641—1850.	(1914)
Guillemard, F. H. H.,	Cruise of the "Marchesa" to Kamtchatka and New Guinea, Formosa, Liu-Kiu, Malay Archipel ago, etc.	(1889)
原田三夫，松山思水	日本探檢(探檢全集 3)	(昭 5, 1930)
羽仁五郎(譯)	クルウゼンシンテルン日本紀行	(昭 6, 1931)
長谷部辰連,時任愛基	千島巡航概記	(東地協報 14—15, 明 7, 1874)
Heawood, E.,	A	
平光吾一	色丹島茶談	(九大醫報 4, 昭 5, 1930)
北海道協會	千島と北洋	(昭 6, 1931)

Pallas, P. S.,	G
Polonsky, A.,	B
ポロンスキー	B
Ratham.	Elements of Comparative Philology.
————	Descriptive Ethnology.
Schlegel, G.,	Nasenringe auf den Kurilen. (Intern. Arch. f. Ethnogr. **5**.) (1892)
Siebold, ph. F. v.,	Geographical and Ethnographical Eludications to the Discovery of Maerten Gerritz Vries. (1857)
————	Etnographische Studien über die Aino auf der Insel Yesso. (Zeitsch. f. Ethnol. Supplm.) (1881)
————	Nippon, Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben-und Schultzländern, Jezo, mit den südlichen Kurilen, Sachalin, Korea und den Liukiu Inseln. (1897)
清水元太郎	島井君の石器時代論に就いて　(人類雜 **17**, 明 34, 1901)
Snow, H. J.,	B——2.
鈴木善太郎	シヤコタン土人は天主教徒にあらず　(人類雜 **6**, 明 23, 1890)
谷　敬一	北海道石器時代遺物發見地名表　(史前學雜誌 **3**, 昭 6, 1931)
東大人類學教室	日本石器時代地名表　(昭 3, 1928)
Torii, R.,	Etudes Archeologique et Ethnologique les Ainou des Illes Kouriles, (Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo. **42**.) (1921)
鳥居龍藏	コロボクグルに就て坪井, 小金井兩博士の意見を讀む (大陽 **9**, 明 30, 1897)
同	千島に關する人類學上の參考書　(人類雜 **14**, 明 11, 1898)
同	千島の土人に就いて　(地學雜 **11**, 明 37, 1909)
同	千島の石器時代に就いて　(人類雜 **16**, 明 33, 1900)
同	北千島に存在せる石器時代遺跡遺物はそも何種族の殘せしもの歟　(同 **17**, 明 34, 1901)
同	同　上　(地學雜 **13**, 明 34, 1901)
同	北千島以外に內耳土器の種類は存在するや (人類雜 **17**, 明 34, 1901)
同	千島アイヌ　(明 36, 19.3)
同	千島アイヌに就いて　(地學雜 **16**, 明 37, 1904)
同	唐太島と千島との石器時代遺跡に就いて　(同 **17**, 明 38, 1905)
同	有史以前の日本　(大 14, 1925)
坪井正五郎	占守島と石器時代問題　(人類雜 **14**, 明 31, 1898)

磯部精一　北海道地名解　(大 7, 1918)

Kanda, T., Notes on ancient stone implements of Japan. (1889)

Kindaichi, K., The Ainu, considered from the Linguistic Standpoint. (Proc. 3rd Pan Pac. Congr.) (1926)

喜田貞吉　千島土人と日本の蝦夷 (讀史百話)　(明 45, 1912)

清野謙次　北千島の遺物　(人類誌 41, 大 12, 1927)

Koganei, Y., Beiträge zur physischen Anthropologie der Aino. (Mem. Med. Coll. Imp. Univ. Tokyo. 2.) (1894)

———— Ueber die Urbewohner von Japan. (Mitt. d. Deutsch. Gesel. f. Natur. u. Völkerkunde Ostasiens. 9.) (1903)

———— 〃 (Globus. 84, 1903)

小金井良精　日本石器時代の住民　(東洋學雜 259—60, 明 36, 1903)

同　同　(人類學研究)　(大 14, 1925)

Kohn, A., Die jetzige Lage der Bewohner der Kurilen. (Globus. 32, 1877)

河野常吉　北海道先史時代の遺跡，遺物並びに人種　(北敎雜 明 32, 1899)

同　千島の人類學的視察　(明 33, 1900)

同　チャシ則ち蝦夷の砦　(札幌博物報 1, 明 38, 1905)

同　非コロボクグル論　(同 2, 明 41, 1908)

同　コロボクグル說の誤謬を論ず　(歷史地理 12, 明 41, 1908)

同　國後擇捉の建標に關する余說　(同 19, 明 45, 1912)

同　國後擇捉の建標に關する斷案　(札幌博物報 4, 大 6, 1917)

回　アイヌ自製の衣服　(北海道人類學雜誌 1, 大 8, 1918)

Landor, S., Alone with the Hairly Ainu. (1893)

松村瞭,中谷治宇次郎　日本石器時代文獻目錄　(昭 5, 1930)

Milne, J., Notes on the Stone Implements from Otaru and Hakodate, with a few general Remarks on the Prehistoric Remains of Japan. (Trans. Asiatic Soc. Jap. 8.) (1880)

———— Notes on the Koropok-guru or Pit-dweller of Yezo and the Kurile Islands. 10.) (1882)

水科七三郎　色丹アイヌの單語表　(氣象集誌 11, 明 25, 1892)

Montadon, G., Au pays des Ainou. (1928)

永田方正　北海道蝦夷語地名解　(明 24, 1891)

Nakanome, A., Grammatik der Orokko Sprache (Reserch Rev. Osaka Asiatic Soc. 8) (1928)

中澤澄男,八木奘三郎　北千島及樺太の遺物　(日本考古學雜誌 167, 明 39, 1906)

大野雲外　土中の日本　(大 13, 1924)

Uchida, T., Zweiter Beitrag zur Ichneumoniden-Fauna Japans. (Journ. Coll. Agr. Hokkaido Imp. Univ. **21**.) (1928)

——— Dritter Beitrag zur Ichneumoniden-Fauna Japans. (Do. **25**.) (1928)

横山又次郎　エトロフ島の介　(地學雜 **3**, 明 24, 1891)

F. 千島アイヌに關するもの

(Literatures on Tisima-Ainu.)

淺野正　色丹島土人調査 (謄寫版)　(大 12, 1923)

Batchelor, J., The Ainu of Japan.

——— The Ainu and their Folklore. (1901)

——— The Koropok-guru, or Pit dweller of North Japan. And a Critical Examination of the Nomenclature of Yezo. (1904)

——— Ainu Life and Lore. Echoes of a departing Race. (1926)

——— An Ainu-English-Japanese Dictionary and Grammmer.(1905)

バチラー, ジョン　コロボクグル卽エゾの竪穴の住民 (札幌博物報 **2**. 明 42, 1907)

Chamberlin, B. H., The Language, Mythology and Geographical Nomenclature of Japan, viewed in the light of Ainu Studies. (Mem. Lit. Coll. Imp. Univ. Japan, **1**.) (1887)

Grimm. Beitrag zur Kenntniss der Koropokguru auf Yezou und Bemerkungen über die Shikotan Aino. (Mitt. d. Deutsch, Gesel Natur. u. Völkerkunde Ostasiens. **5**.) (1872)

Gubler, A., Die Kurilen (Mitt. d. Geogr. -Ethnogr. Gesell Zürich. **32**. (1932)

平光吾一　所謂千島アイヌ族の現狀と同種類血球凝集反應に就いて (人類雜 **43**, 昭 3, 1928)

同　アイヌに關する知見　(日本學協報 **5**, 昭 4, 1929)

同　アイヌの同種血球反應と海馬注口土器の價値 (人類雜 **44**, 昭 4, 1929)

同　千島及び辨天島出土土器破片に就いて　(同 上)

Hitchkock R., The Ainu or the Ancient, Pit-Dweller of Yesso, Japan. (Rep. Smithonian Inst.) (1891)

北海道廳　舊土人に關する調査　(大 11, 1924)

同　北海道舊土人概況　(大 15, 1927)

同　社會課　色丹人ハリスト互助組合(謄寫版)　(昭 3, 1928)

石川貞治　千島國エトロフ島竪穴古器物發見地　(人類雜 **6**, 明 23, 1890)

(1928)

Matsumura, S., On the five species of Dendrolimus injurious to conifers in Japan, with their parasitic and predaceous insects. (Journ Coll. Agr. Hokkaido Imp. Univ. **18**.) (1926)

——— New Moths from Kuriles. (Ins. Mats. **3**.) (1929)

三輪勇四郎 樺太及千島產叩頭虫科の種類の研究 (動雜 **41**, 昭 4, 1929)

Miwa, Y., Description of New Species of Japanese Elateridae. (Ins.Mat. **2**.) (1929)

Ohta, Y., Beitrag zur Coccinelliden Fauna aus Sachalin und Kurilen. (Ins. Mat. **3**.) (1929)

D

岡田喜一 同 チシマライテフに就ての二三の觀察 (アメーバ **3**, 昭 7, 1932)

岡田彌一郎 北千島の動物調査 (科學 **2**, 昭 7, 1932)

岡田彌一郎,木場一夫 カハシンジュガヒの分布に就きて (同 上)

同 同 上 (ヴィナス **3**, 昭 7, 1932)

同 本邦に於けるカハシンジュガヒ Margaritifera margaritifera (L.) と其分布 (動雜 **43**, 昭 7, 1932)

Peele, M. L., Notes on the Hokkaido bear *Ursus arctus yessoensis* Lyd. leaving hibernation as reported in Etorofu Island of the Kurile Group. (Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc.) (1932)

Sharp, D., The Rhynchophorous Coleoptera of Japan. Pt. IV. Otiorhynchidae and Sitonides, and a genus of doubrtful position from the Kurile Islands. (Trans. Ent. Soc. London.) (1896)

Strand, E., Vorläufige Diagnosen süd- und ostasiatischen Clutioniden, A geleniden, Pisauriden, Lycossiden, Oxyopiden und Salticiden (Zool. Anz. **31**.) (1907)

Saito, S., Descriptions of two new species of Araneiade from the northern Kurile Islands. (Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. **12**.) (1932)

B——2.

Snow, H. J., Takeuchi, K., Some sawflies from the island of Shikotan in the southern Kuriles. (Trans, Kansai Ent. Soc. **2**.) (1931)

Teranfshi, C., Ants collected by Mr. K. Kobayashi on the island of Shikotan in the southern Kuriles. (Trans, Kansai Ento. Soc. **2**.) (1931)

内田清之助 千島產鳥類目錄 (動雜 **24**, 明 44, 1911)

Sibiriae maxime orientalis, etc. (Do.) (1840)
Turczaninow, N., Flora Baicalensis Dahurica.
矢部吉禎　概說植物地理　(岩波生物 昭 5, 1930)
同　占守島の植物　(東植雜 **18**, 大 2, 1913.
Yendo, K., Notes on Algae New to Japan.(Bot Mag. Tokyo. **23**, **28**—**32**.) (1909, 1914—1918)
———— A Monograph of the Genus Alaria. (Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo, **33**.) (1919)

E. 動物に關するもの

(Literatures on Fauna of the Tisima.)

Aoki, B., A Hand-List of Japanese and Formosan Mammmals. (Anno. Zool. Japonensis. **8**.) (1913)
Blakiston, T. R., Japan in Yezo.
Bösenberg, W. & Strand, E., Japanische Spinnen. (1906)
米國政府　米國北太平洋臘納獸及臘納獸島調査報告
Hatta, S., Zur Tiergeographie von Hokkaido. (Zool. Anzeig. **43**.) (1913)
北海道廳林業課造林係　千島に於ける松毛虫調査　(北林報 **20**, 大 11, 1922)
Inukai, T. & Okada, Y., Salamandrelle Keyserlingii from Paramushir and Shimushir Islands of the Kurile Group. (Proc. Imp. Acad. 7.)(1932)
鏑木外岐雄　動物地理學　(岩波生物 昭 6. 1931)
神尾秀二　千島列島に於ける霜,雪,候島の季節調べ(氣象集誌 **9**, 昭 6, 1931)
小林賢三　千島國色丹島の採集品に就いて (關西昆蟲學會々報 **2**, 昭 6, 1931)
小寺甲子二　千島鳥類調 (多羅尾忠郎 G) (明 26, 1893)
Kôno, H., Eine neue Gattung und 2 neue Arten von Curculioniden (Ins. Mats. **2**.) (1927)
———— Die Pyrochroiden Japans. (Do. **3**.) (1929)
———— Die Mordelliden Japans. (Do. **3**.) (1929)
———— Beitrag zur Silphiden-Fauna Japans. (Do. **3**.) (1929)
———— Langrüssler aus dem japanischen Reich. (Do. **4**.) (1929)
———— Die Cleoninen Japans. (Do. **4**.) (1929)
———— Kurzrüssler aus dem Japanischen Reich. (Journ. Fac. Agr. Hokkaido Imp. Univ. **24**.) (1930)
———— Die Nacerdinen Japans. (Ins. Mats. **4**.) (1932)
Matsumura, S., New Butterflies especially from the Kuriles. (Ins. Mats. **2**.)

Oceanogr. Works in Japan. **4**.) (1932)
Pallas, P. S., Flora Russica. III.
——— Neue Beschreibung der Kurilischen Inseln. (Neue Nordische Beiträge, **4**.) (1783)
Regel. E. & Tilling, H., Florula Ajanensis. (1859)
Regel, E., Uebersicht der Arten der Gattung Thalictrum, welche im russischen Reiche und der Angränzenden Ländern wachsen. (1861)
——— Plantae Raddeanae. **1**. (1861—62)
Ruprecht, F. J., Distributio Cryptogamarum Vascularium in Imperio Rossico (Beitr. Pflanzenk. d. Russ. Reiches **3**.) (1845)
Siebold, Ph. F. v. & Zuccarini., Flora Japonica. (1835—70)
Schmidt, Fr., Flora Sachalinensis, in Reisen im Amurlande und auf der. Insel Sachalin. (Mém. l'Acad. imp. St. Pétersb. 7e Sér. **12**.) (1868)
Snow, H. J., B——2.
島村繼夫 絕北の森林 (大山林報 198, 明 32, 1829)
諏訪正種 北千島の森林概要 (北林報 **25**, 昭 2, 1927)
Takeda, H., The Flora of the Island of Shikotan. (Journ. Linn. Soc London Bot. **42**.) (1924)
Tatewaki, M., On the Plants collected in the Island of Alaid. (Trans. Sapporo Nat. His Hist. Soc. **9**.) (1927)
——— On the Plant Communities of the Island of Matua. (Do. **11**.) (1927)
——— On the Plant-Communities in the Middle Part of the Island of Urup in the Kuriles. (Bot. Mag. Tokyo. **42**.) (1928)
——— The Primary Survey of the Vegetition of the Middles Kurilles (Journ. Fac. Agr. Hokkaido Imp. Univ. **29**.) (1931)
館脇操 千島列島に於ける森林群落生態と樹種の分布に就きて (札農林報 **23**, 昭 6, 1931)
Turczaninow, N., Observations sur quelques genres et espéces de la familie de Borrag Borraginees. (Bull d. l. Soc. des Natur. d. Mosc.) (1840)
——— Description de deux nouveaux genres de la familie des Gentianes. (Do.) (1840)
——— Decades quatuor plantarum hucusque non descriptarum

Kasai, M., On the Japanese Species of Phragmidium. (Trans. Sapporo Natural Hist. Soc. **3**.) (1910)

川上瀧哉 G

同 擇捉島の森林樹種及び其分布 (東植雜 **15-16**, 明 34-5, 1901-2)

Kudo, Y., Flora of the Island of Paramushir. (Jour. Coll. Agr. Hokkaido Imp. Univ. **11**.) (1922)

草野俊助 遠藤理學士千島占守島採集菌類 (東植雜 **18**, 明 37, 1904)

Ledebour. Flora Rossica. Tom. 1. pars 1—2. (1784—1788)

Maximowich, C. J., Rhododendreae Asiae Orientalis. (Mem. d. l'Acad. imp. St. Pétersb. 7e sér. **41**.) (1780)

——— Primitiae plantarum novarum Japoneae et Mandschuriae. Mel biol. tirés d. Bill. d. l'Acad. imp. d. Sci. d. St. Petersb. **8—9**.) (1872, 1876)

——— Diagnosis plantarum novarum Asiaticum. (Do. **9—12**.) (1876—88)

Maximowich. Adnotationes de Spiraeaceis. (Acta H. Petrop. **6**.) (1879)

Matsudaira, H., List of Plants collected in Kurile Isl. by T. Kitahara. (Bot. Mag. Tokyo **9**.) (1898)

Miyabe, K., The Flora of the Kurile Islands. (Mem. Boston Soc. Nat. Hist. **4**.) (1890)

宮部金吾, 川上瀧哉 北千島植物 (高岡直吉 B) (明 24, 1891)

宮部金吾 千島占守島, 波羅茂知島, ブラットチェポエフ島植物調査 (多羅尾忠郎 G) (明 26, 1893)

Miyabe, K. & Kudo, Y., The Flora of Hokkaido and Sakhaline. (1930—31)

Miyabe, K. & Nagai, M., Pleuropterum paradiseum, a New Genus and Species of Alarieae from the Northern Kuriles. (Proc. Imp. Acad. **7**.) (1932)

——— Cymathaere crassifolia (P. et R.) de Toni from the Southern Kuriles. (Do.**8**.) (1932)

永井政次 千島の海藻 (北海道廳 B—2) (昭 6, 1931)

中井猛之進 東亞植物區景 (岩波生物 昭 6, 1931)

大野笑三 千島色丹島植物目錄 (昭 7, 1932)

Ohwi, J., Florula Shikotanensis. (Acta Phytotax. et Geobot. **1**. 1932)

岡田喜一 1. 國後島の採集品目錄に就いて (山岳 **26**, 昭 5, 1931)

同 2. 千島植物瑣談 (山と溪谷 **14**, 昭 7, 1932)

Okamura, K., The Distribution of Marine Algaes in Pacific Waters. (Rec.

渡邊萬次郎　地形圖並びに文献より見たる千島の火山　(岩礦 **6**, 昭 6, 1931)
Wolff, F. v., Der Vulkanismus. **1.** u. **2.** (1929)
横堀治三郎　千島の鑛物資源踏査(北海道協會刊　千島と北洋)　(昭 6, 1931)
横山壯次郎　1. 千島國色丹島　(地學雜 **3**, 明 24, 1891)
同　2. 千島巡檢記　(同 **4**, 明 25, 1892)
溫禰古丹島ネモ火山噴火　(同 **18**, 明 39, 1906)
千島列島中の新知岳の噴出　(東洋學雜 **31**, 大 3, 1914)
千島エトロフ島の噴火山　(同 **37**, 大 9, 1920)

D. 植物に關するもの

(Literatures on Flora of the Tisima.)

Akiyama, S., Conspectus Caricum Japonicum. (Journ. Fac. Sci. Hokkaido Imp. Univ. Ser. V. **2**.) (1932)
Boott, F., Illustrations of the Genus Carex. (1858-1867)
Chamisso, Ad. de, & Schlechtendal, D. d., De plantis in expeditione speculatoria Roma zuffiana obdservatis. (Linnaea. **3**, 1828 & **5**, **6**. 1831)
Colley, R. H. & Taylor, M. W., Peridermium Kurilense Diet. on Pinus pumila Pull and Peridermium indicum n. sp. or Pinus excellsa Wall. (Journ. Agr. Res. **34**.) (1927)
Dietel, P., Uredineae japonicae IV. (Engl. Bot. Jahrb. **37**.) (1905)
Gmelin., Historia Fucorum. (1768)
Herder, F. von., Plantae Raddeanae. III & V. (1864—88)
Hiratsuka, N., Studies on the Melamporaceae of Japan. I—V. (Journ. Fac. Agr. Hokkaido Imp. Univ. **21**.) (1927)
——— Beiträge zur einer Monographie der Gattung Puccinasrum Otth. (Do.) (1927)
——— Thekopsora of Japan. (Bot. Mag. Tokyo, **43**.) (1929)
平塚直秀　千島列島メラムプリラ科　(札農林報 **19**, 昭 3, 1928)
同　千島列島產銹菌類について　(同 **21**, 昭 4, 1929)
北海道廳殖民部水產課　北海道水產調査報告　卷三　昆布採集業　(明 35, 1896)
Hultén. Flora of the Kamtchatka and the adjacent Islands, I.(1927)
Ito, S., On the Uredineae parasitic of the Japanese Gramineae. (Journ. Col. Agr. Tohoku Imp. Univ. **3**.) (1909)
——— Uromyces of Japan. (Journ. Coll. Agr. Hokkaido Imp. Univ. **11**.) (1922)

佐々保雄	北千島に於ける地質學的豫察	(火山 **1**, 昭 7, 1932)
同	南千島色丹島の地質に就いて	(地質 **39**, 昭 7, 1932)
同	北千島幌筵島荒川岳附近の鳴動	(火山 **2**, 昭 7, 1932)
Sasa, Y.,	Geological Recconnaissance in the Northern Tisima (Kuriles). (In prep. for Proc. 5th Pan-Pac. Sci. Congr.)	(1933)
————	A Preliminary Notes on the Geology of the Island of Sikotan, Southern Tisima Islands (Kuriles).	(Do.)
佐藤傳藏, 山崎直方	B	
Schneider, K.,	Die Vulkanischen Erscheinungen der Erde.	(1911)
Selsky, M.,	Le Vulkan de l'ile Chiachkotan (Bull. d. l. Soc. d. Nat. d. l. Moscou.)	(1858)
志賀重昂	日本風景論	(明 27, 1894)
Snow, H. J.,	B——2, 3.	
スノー	B	
Suess, E.,	Das Antlitz der Erde.	(1904—9)
鈴木醇, 佐々保雄	北千島諸島の火山岩に就きて(豫報)	(火山 **1**, 昭 7, 1932)
Suzuki, J. & Sasa, Y.,	On the Volcanic Rocks of Northern Tisima Islands. (In prep. for Proc. 5th Pan-Pac. Sci. Congr.)	(1933)
多羅尾忠郎	北海道鑛山畧記	(明 22, 1889)
德田貞一	弓狀山脈及弓狀列島の形式	(地質 **24—25**, 大 6—7 1917—18)
同	オコツク海岸より	(同 **25**, 大 7, 1918)
同	火山帶及前列地帶	(同 上)
同	千島雁行火山脈の成因	(同 上)
同	雁行山脈, 雁行火山脈及雁行列島	(同 上)
同	日本群島の雁行的構造に就いて	(同 **27**, 大 9, 1920)
Tokuda, T.,	Onthe Ècheion Structure of the Japanese Archipelago. (Jap. Journ. Geol. Geogr. **5**.)	(1926)
德田貞一	千島灣南西部に於ける雁行火山列の漸移的變化	(地學雜 **39**, 大 2, 1913)
同	北海道樺太地體構造	(日地大 **10**, 昭 5, 1930)
同	日本の地體構造	(同 **1**, 昭 6, 1931)
東京天文臺	理科年表	(昭 8, 1932)
辻村太郎	火山島嶼の蝕磨輪廻	(地質 **24**, 大 6, 1917)
鵜澤榮司	松輪火山島噴火に關する調査報文	(岩礦 **4**, 昭 5, 1930)
渡邊光, 今泉政吉	日本群島に於ける火山の分布並びに地形學的火山群の設定	(地評 **3**, 昭 2, 1927)

神保小虎	ウルップ島小誌	(地學雜 **3**, 明 24, 1891)
同	北海道の火山	(同 上)
同	ウルップ島とエトロフ島の差違	(同 **4**, 明 25, 1892)
同	千島國最近四島	(同 上)
同	北海道地勢總論	(同 上)
同	北海道地質調査報文(下)	(明 25, 1892)
Jimbo, K.,	General Geologic Sketch of Hokkaido with special reference to the Petrography.	(1892)
神保小虎	千島の地勢に關する圖書	(地質 **11**, 明 37, 1904)
神尾秀二	大正九年六月新知島武魯頓灣に於ける地震と大正十二年一月松輪島に於ける噴火に就いて	(同 **38**, 昭 6, 1931)
同	最近の中部千島に於ける火山活動狀況	(火山 **1**, 昭 7, 1932)
金原信泰	千島國國後島羅臼火山の鳴動に就いて	(地質 **7**, 明 33, 1900)
同	羅臼火山	(震豫調 **35**, 明 34, 1901)
Kienapfel, P.,	B	(1931)
小林房太郎	B	(昭 5, 1930)
河野廣道	A—2.	
河野常吉	北海道の津波に就いて	(札博物報 4, 大 2, 1913)
Koto, B.,	The Rocky Mountain Arcs in Eastern Asia. (Journ. Fac. Sci. Imp. Univ. Tokyo. Ser. II. **3**.)	(1931)
Miln, J.,	A Cruise among the Volcanoes of Kurile Islands. (Gel. Mag. Dec. 11. **6**.)	(1879)
———	The Kurile Islands.	(Do. **7**, 1880)
———	The Volcanoes of Japan. (Trans. Seism. Soc. Japan. **9**.)	(1886)
Nemoto, T.,	Preliminary Notes on the Geology of the Island of Urup, the Tisima, (Kurile) Islands. (In prep for Proc. 5th Pan-Pac. Sci. Congr.)	(1933)
小倉伸吉	B	
大森房吉	日本噴火誌	(震豫調 86—87, 大 7, 1918)
Pallas, P. S.,	G	
Perrey, M. A.,	Documents sur les tremblements de Terre et les phénomène volcanique dans l'Archipel de Kouriles et au Kamtschatka. (Ann. d. l. Soc. Imp. d'agr, d'histoire nat. et des arts utiles de Lyon.)	(1863)
Richthofen, F. v.,	Geomorphologische Studien aus Ostasiens. IV. (Sitz. Ber. Kgl. Preuss. Akad. Wien. phisk. -mat. Kl. **40**.)	(1903)

	the Kurils.	(1910)
水路部	北海道樺太南部沿岸水路誌 第二卷	(昭 3, 1928)
Sveceny.	Die Inselgruppe der Kurilen. (Mitt. d. Kaiserl. Königl. geogra. Ges. i. Wien. **15**. N. S. **5**.)	
高岡直吉	北千島調査報文	(明 24, 1891)
山田順太郎	擇捉島の濃霧に就いて	(氣象集誌 **23**, 明 37, 1904)
渡邊光, 今泉政吉	C	
渡邊萬次郎	C	
Yokoyama, M.,	Klimatische Verhälatnisse auf den Kurilen. (Deuts. Runds. f. Geogr. u. Stat. 18.)	(1896)
吉田東伍	大日本地名辭書 續編	(明 42, 1909)
	クリル諸島海線見取圖	(明 8, 1875)
	千島諸島寫生圖	(明 11, 1878)

C. 地質, 地形, 火山及び地震に關するもの

(Literatures on Geology, Geotectonics, Geomorphology, Volcanology and Seismology of the Tisima.)

遠藤誠道	色丹島に就いて	(地學雜 **37**. 大 14, 1925)
藤原咲平	火山脈と山體裂線とに就て	(地評 **1**. 大 14, 1925)
同	地渦, 地裂及地震	(昭 7, 1931)
原田準平	北海道產礦物記事(二)	(岩礦 **8**. 昭 7, 1932)
Harada, T.,	Japanische Inseln.	(1890)
原田豐吉	日本群島	(地學雜 **2—3**, 明 23—4, 1890—91)
Imamura, A.,	On the Kurile Earthquake of January 13th 1929. (Proc. Imp. Acad. Japan. **5**.)	(1929)
石川貞治	1. 千島國エトロフ島火山の話	(地學雜 **3**, 明 24, 1891)
同	2. 千島群島極北の地質	(同 **5**, 明 26, 1893)
同	3. 千島巡見雜記	(同 **7**, 明 28, 1895)
同	4. チャチャ岳	(同 **8**, 明 29, 1896)
石川貞治,横山壯次郎	北海道地質鑛物調査報文	(明 27, 1894)
同	北海道鑛物調査第二報文	(明 29, 1896)
Jimbo, K.,	Explanatory Text to the Geological Map of Hokkaido.	(1890)
神保小虎	北海道地質略論	(明 23, 1890)
同	北海道地質調査報文(上)	(明 24, 1891)
同	千島は如何	(地學雜 **3**, 明 24, 1891)

石黒林太郎	産業の根室千島	(大 5, 1917)
石野敬之	千島に於ける毛皮産業	(地學雜 **37**, 大 14, 1926)
岩波常景	千島列島の流氷	(氣象集誌 **23**, 明 37, 1905)
改造社	日本地理大系 10 (北海道樺太篇)	(昭 5, 1930)
同	同　1——2. (總論篇)	(昭 6, 1931)
神谷秀二	E	
木場一夫	北千島の人文	(地學雜 **44**, 昭 7, 1931)
小林房太郎	火山	(昭 5, 1930)
Kienapfel, G.,	Die Vulkanlandschaften der ostasiatischen Randbögen. (Veröff. d. geogr. Inst. d. Albertus Univ. z. Königsberg. N. F., R. Geogr. 3.)	(1931)
Madinier, P.,	Description geographique et hydrographique des isles au Nord du Japan. Pt. I. Les isles Kouriles proprement dites. (Nouv. Ann. d. l. Marine et des Co lonies.)	(1856)
Miln, J.,	C	
根室支廳	根室支廳管內概況	(昭 6, 1931)
農商務省水産局	千島及海豹島	(大 2, 1913)
小倉伸吉	日本近海の深さに就いて	(水路要報)
太田代十郎	千島實業地誌	
大槻文彦	北海道風土記	(明 3, 1871)
Pallas, P. S.,	G	
Polonski, A.,	The Kurils.	(1871)
ポロンスキー	千島誌	
Salwey, Ch. M.,	Japanese Monographs. No. 18. The Kurile Islands, called by the Japanese Chishima. (Asiatic Quat. Rev. 3rd Ser. **34**.)	(1912)
笹森儀助	G	
佐藤傳藏, 山崎直方	大日本地誌　第九卷	(大 2, 1913)
關熊太郎	千島拓殖論	(明 26, 1893)
Siebold, Pf. F. v.,	Japan.	(1832)
新光社	日本地理風俗大系 14 (北海道樺太篇)	(昭 5, 1930)
同	同　1 (總論)	(昭 6, 1931)
スノー	千島列島篇(高岡直吉) 北千島調査報文附錄	(明 18, 1885)
Snow, H. J.,	1. Notes on the Kurile Islands. (Nature. **32**.)	(1885)
————	2. Notes on the Kurile Islands.	(1897)
————	3. In Forbidden Seas. Recollections of Sea-Otter Hunting in	

吉田東伍	B	
山本隣	北警小誌	
善波功	露西亞人の千島南下	(歷史地理 6, 明 37, 1904)
	惠等侶府風土記	(萬延年間？)
	惠登呂府島新規開發	(享和年間)
	惠登呂府志	(同 1, 1801)
	千島警備の議に付稟請	(明 18, 1885)
	蝦夷島記	
	蝦夷紀聞	
	蝦夷異事	
	元祿松前島鄕帳	
	北海異談	
	觀火錄 (附錄)	
	東夷聞書	
	寬政開發擇捉島之記	
	擇捉島地理人別巨細書	(文政年間)
	安政八年魯西亞人應接書	
	ウルップ島之儀に付書拔	
	ユルリ島一件御請書	
	ランヲ島蝦夷人渡來一件書	

B. 地理並びに一般概念に關するもの

(Literatures on Geography and Generals of the Tisima.)

ブラウン, エ, アール	日本諸島の潮流　第二卷	
榎本武揚	A	
Georgi, E. J.,	Geographisch-physikalische und naturhistorische Beschreibung des Rissischen Reiches.	(1800)
Gubler, A.,	F	
長谷部辰連, 時任爲基	A——2.	
同	千島國三郡取調書 (手記)	(明 9, 1877)
廣田千秋	千島群島地畧誌 (手記)	(明 19, 1887)
北海道廳	1. 北千島調査書 (手記)	
同	2. 北千島調査報文	(昭 6, 1931)
同	3. 北千島資源調査　附北洋漁業概況	(昭 7, 1932)
北海道廳內務部	占守幌筵島の水產	(大 5, 1917)

Miln, J.,	C	
村田某	蝦夷地理取計伺書	(安政 2, 1855)
最上常矩	蝦夷草紙	(寛政 2, 1791)
同	續蝦夷草紙	(文化 1, 1804)
百足登	我千島	(明 25, 1892)
同	林子平北海道策	(同 上)
中島峻藏	北方文明史話	(昭 4, 1929)
中村善太郎	千島樺太侵略史	(明 37, 1904)
根室郡長	千島國狀況	(明 20, 1887)
同	千島國開拓見込書	(同 前)
根室支廳	報効義會關係書 (手記)	
岡本柳之助	日露交涉北海道史稿	(明 31, 1898)
大槻共資	環海異聞	(文化 4, 1808)
大內桐齊	東蝦夷夜話	(文久 1, 1861)
Pallas, P. S.,	G	
Polonsky, A.,	B	
ポロンスキー	B	
Roberts, C. G. D.,	Discoveries and Explorations in the Nineteenth Century.	(1906)
齊藤藏太	衞刀魯府志	(文化 3, 1807)
佐々保雄	千島列島探檢開發年表 (手記)	
Sauer, M.,	G	
Siebold, Ph. F. v.,	B	
白瀨蹠	G	
Snow, H. J.,	B——2, 3.	
末松保和	近世に於ける北方問題の進展	(昭 3, 1928)
高倉新一郎	編纂された北海道史料	(蝦夷往來 1—5, 昭 6, 1931)
高岡直吉	B	(明 24, 1891)
田保橋潔	近代日本外國關係史	(昭 5, 1930)
田中東	北航艇隊　千島探討	(明 26, 1893)
Tikmeniev, P.,	Historical Survey on the Russian Activity.	(1918)
千島有志	航路開通　千島策	(明 29, 1896)
栃內曾次郎	洋人日本探檢年表	(昭 4, 1929)
豐田亮	北島志	(明 3, 1871)
豐田松岡	蝦夷千島考	
聊睡庵	蝦夷錄話	(正德 2, 1712)

今宮丸船頭安五郎	蝦夷物語	(寶暦 11, 1761)
	G	
開拓使	北海道志	(明 17, 1884)
キリルロフ	千島及其沿革	(明 27, 1894)
清野謙治	G	
貴田惟邦	熱田羅拂談	(文化 3, 1806)
近藤重藏	邊要分界圖考	(文化 1, 1804)
河野廣道	1. 蝦夷亂年表	(蝦夷往來 7, 昭 7, 1932)
同	2. 維新前北海道變災年表	(同 8, 昭 7, 1932)
河野常吉	1. C	
同	2. 千島雜錄 (手記)	
同	3. 千島列島雜纂 (手記)	
Krascheninnkof, S. P.,	The History of Kamtschatka and the Kurile Islands.	(1764)
————	Histoire de Kamtschatka, des isles Kurilki, et des Contrées voisines.	(1767)
Krusenstern, A. J. V.,	G	
————	G	
工藤平助	赤夷風說考	(天明年間)
久保田見達	二叟譚奇 (一名 蝦夷騷動記)	
栗本秀二郎	匏庵遺稿	(明 33, 1900)
藏田老人	北狄事畧	
草野徵忠	蝦亂事畧	
Langsdorff, G. H. O.,	G	
La Perouse.	G	
Leupe.	G	
Lisiansky.	G	
Lowe, C. R.,	G	
前田健助	蝦夷志料	(安政 1—万延 1, 1854—1860)
同	蝦夷東西考證	(嘉永 7, 1855)
前田健次郎	千島志料	(慶應 1, 1865)
前野良澤	東薩加志	(寛政 3, 1781)
松前志摩守	蝦夷島物語	(正德 5, 1715)
松永聽劔	樺太及勘察加	(明 38, 1905)
松浦武四郎	1. 東蝦夷日記	(文久 3—明 1, 1861—1879)
同	2. 千島一覽圖	(明 2, 1870)
同	3. 蝦夷年代記	(明 3, 1871)

福井知夫	東夷江寛	
同	蝦夷島踏	(享和 1, 1801)
藤田元春	江戸時代に於ける我國地理學の發達	(岩波地理, 昭 6, 1932)
藤井直喜	千島拓殖事業	
福士成豐	東察加記事畧	(明 8, 1877)
Golder, F. A.,	G	
Golownin.	Memoirs of a Captivity in Japan, during the Years 1811 1812 and 1814, with observation of the Country and the People.	(1824)
――――	Japan and the Japanese : comprising the Narrative of Captivity in Japan and an Account of British Commercial Intercourse with that Country.	(1852)
Gubler, A.,	F	
Guillemard, F. H. H.,	G	
郡司成忠	千島占守島調査報告	(地學雜 8, 明 29, 1896)
同	占守島に於ける報効義會の事業	(同 10, 明 31, 1898)
羽太正養	休明光記	(寛政11―文化4, 1789―1804)
同	同 遺稿	(嘉永 6, 1854)
原田三男, 松山思水	G	
羽仁五郎(譯)	クルウセンスユテルン日本紀行	(昭 6, 1932)
長谷部辰連, 時任爲基	1. 樺太島クリル諸島交換始末書理由上申(手記)	(明 8, 1875)
同	2. 千島州關係書(手記)	(明 9, 1870)
同	3. G	
林子平	三國通覽圖說	(天明 6, 1787)
林顯三	北海誌料	(明 35, 1902)
林大學頭	通航一覽(魯西亞之部)	
林衡太郎	千島拓殖論	
橋本堯尙	北海道史年譜	(昭 5, 1931)
Heawood, E.,	A History of Geographical Discovery in the Seventeenth and Eighteenth Centuries.	(1912)
平田篤胤	千島白浪	(文化 5, 1809)
北海道廳	北海道史	(大 7, 1918)
同	B――1, 2.	
堀竹雄(譯)	十九世紀初年日本に於けるロシア使節(史學雜誌 19, 明 41, 1908)	
細井一六(譯)	ヘーウッド世界地理發見史	(昭 5, 1930)
庵原薗齊	狄艦事畧	

H　北海道敎育雜誌——北敎雜　北海道林業會報——北林報　北大山岳部々報——北大山報

I　岩波講座地理學——岩波地理　同　生物學——岩波生物

J　人類學雜誌——人類雜

N　日本地理大系——日地大　日本學術協會報告——日學協報

S　札幌博物學會報——札博物報　札幌農林學會報——札農林報　震災豫防調査會報告——震豫調報

T　地學雜誌——地學雜　地質學雜誌——地質　地理學評論——地評　東京地學協會年報——東地協報　東京植物學雜誌——東植雜　東洋學藝雜誌——東洋學藝

A. 歷史に關するもの並びにその資料

(Literatures and Materials on History of the Tisima.)

阿都正己	ゼームス・スノー臘虎密獵事件	(歷史地理 **35**, 大 9. 1920)
秋岡武次郎	G —1, 2.	
青地盈,高橋景保(譯)	G	
青島俊藏	蝦夷拾遺	(天明 6, 1787)
新井君美	蝦夷志	(享保 5, 1721)
Aston, W. G.,	Russian Descents in Saghaline and Itorup in the years 1806 and 1807.	(Trans. Asiatic Soc. Jap. **1**. 1872)
Baker, J. N. L.,	A History of Geographical Discovery and Exploration.	(1931)
Berg. L. S.,	Discovery of Kamchatka and the Kamchatka expedition of Bering. (in Russian)	(1924)
————	Russian Discovery in the Pacific. (The Pacific Russian Scientific Investigations)	(1926)
馬場貞由	東北韃靼野作雜記譯說	(文化 5, 1805)
Barthold, W.,	Die geographische und historische Erforschung des Orients mit besonderer Berücksichtigung der russisc hen Arbeiten. (Quell. u. Forsch. z. Erd-und Kulturkunde. **8**.)	(1913)
Broughton, W. R.,	G	
Burney.	G — 1,2.	
烏有山人	千島異聞	(文政 7, 1792)
Cook & King.,	G	
Coxe.	G	
Cochrane.	G	
榎本武揚	千島疆界考	(東地協報 14—15, 明 7, 1876)

千島列島關係文獻表

佐々保雄編

1. 本文獻表では昭和7年10月末迄に知られた千島列島に關する文獻を可及的集錄せんと試みられてゐる。只その撰擇は編者不學の爲に適當でない事を恐れてゐるが如斯ものも將來の千島研究者乃至旅行者に多少なりと便宜を與へ得れば幸である。

2. 本表は便宜上，大約下記の如く項目別にし，著者名のアルファベット順に並べてある。同著者のものは年代順に，著者の不明だつたものは項末に置いてある。

3. 項　目　別

A. 歷史に關するもの，並びにその資料 . . . . . 2 頁
B. 地理，並びに一般概念に關するもの . . . . . 6 頁
C. 地質，地形，火山及に地震に關するもの . . . . . 8 頁
D. 植物に關するもの . . . . . 11 頁
E. 動物に關するもの . . . . . 14 頁
F. 千島アイヌに關するもの . . . . . 16 頁
G. 航海，探檢，旅行及び登山に關するもの . . . . . 19 頁
H. 地圖並びに海圖について . . . . . 22 頁

4. 同一著書が二項目以上に關係する時は，その主たる項目の所に，著者名，書名を入れ，他の項には著者名のみを擧げ A−2 の如くにしてある。之はAの項の著者の第二文獻を見よとの意である。

5. ゴチック數字は，卷，年，輯，Band, Volume を表はし，他の數字（年號以外の）は號，册，を示す。

6. 邦文圖書は年號，並びに西歷年代にて，歐文刊行物は西歷年代で示した。

年號略號，昭和——昭，大正——大，明治——明.

7. 各書籍，雜誌中，關係文獻の頁數は之を記するを割愛した。又單行書の合卷數も示してない。

8. 希覯に屬するものは，個人，官廳，（特に北海道廳）圖書館に藏せられて居るものが多いが，充分調べ切れなかつたので遺憾ながら特に其旨斷つてない。

9. 本表を試みるに當つては，犬飼哲夫，柴田定吉，A. Gubler，館脇操，高倉新一郎，河野廣道，永井政治の諸氏に蒙る處少しとしない。此處に記して深謝の意を表したいと思ふ。

10. 文 獻 略 稱

D　大日本山林會々報——大山林報　動物學雜誌——動雜

G　岩石礦物礦床學——岩礦

千島列島關係文献表

佐々保雄

編

昭和七年

LIST OF LITERATURES ON THE TISIMA (KURILE) ISLANDS.

Compiled by

Yasuo Sasa

1932

〔山　岳〕

第二十七年

第三號

附錄